
The different world

カルピスオレンジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The different world

【Nコード】

N9284L

【作者名】

カルピスオレンジ

【あらすじ】

科学の代わりに魔法文明が栄えた世界、デリロジー。人々は魔法を使い生活しながら、魔物の脅威に脅えていた。そんな世界に一人の少年がやってきた。

プロローグ（前書き）

異世界ハーレムものに仕上げていく予定です。

ブローグ

眼の前で突然、強烈な光が弾けた。

鋭い光に眼を貫かれ、眼の奥に激痛が走り、涙が溢れ出てきた。

あわてて目を瞑り、光がこれ以上入ってこないようにした。

眼を瞑り、回復に努めていると、一瞬辺りが暗くなったような気がした。

やがて、眼の痛みも治まり、もう光がやってこないことを確認すると、ゆっくりと眼を開いた。

車のエンジン音が鳴り響き、人々がとめどなく流れる交差点にいたはずだが、どういふ訳か眼の前には、

深い深い漆黒の森が広がっていた。

プロローグ（後書き）

次は主人公の日常を描きます。
この続きは2話からです。

第1話 何気ない日常（前書き）

拙い文章ですがよろしくお願いします

第1話 何気ない日常

7月といえども夏。太陽が燦々と照りつける中、三人組の男女が会話をしながら歩いていった。

「今日はいつもより早く終わるんだっけか？」

「YES！三時間は普通に授業して四時間目に終業式、そしてそれが終わったなら念願の夏休みだ！！」

「アンタもうちよつとテンション下げなさいよ。暑苦しい」

上から順にたかむら 智哉、ありよし 有吉、はすむ 弾、ことひら 琴片、かえて 楓である。智哉は真っ黒

い髪をボサボサにし、平均よりやや高い身長。弾は髪を五分刈りにしており、智哉より身長が高い。楓は黒髪を肩まで伸ばし、銀縁めがねをかけている。身長は弾の肩ぐらいまでしかない。三人は中学校からの付き合いです。高校でも同じクラスである。

「バカヤロウ！！高校生になってはじめての夏休みだぞ！きつとあんなことやこんなことがたくさん…」

「ありえねーよ、バカ」

妄想の世界にトリップしていった弾に、智哉と楓の拳がクリーンヒットする。

「ぐほう」

当たり前と倒れた弾を無視して二人は歩き出した。

「ねえ、智哉」

「んあ、何ですかい？」

「智哉も、弾みたいに、その…あんなことやそんなことか…あったりしてほしいって思ったりするの？」

頬を赤く染めて聞く楓の姿をみれば、鋭い人なら楓が智哉のことをどう想っているのか気付くだろう。

しかし、鋭いどころか有り得ないくらい鈍感な智哉は

「む、何ですかアナタは。俺をあんな変態バカと同じような奴だとお考えですか。てゆうか、人のこと気にする前に前に自分のことを

気にしなさい。中学時代から浮ついた噂のひとつも聞きませんよ。おまえはただでさえ色気が無いんだから、もう少しそういうことに気を配らないと彼氏なんて出来ねーぞ」

「悪かったわね!」

「ごはっ!」

楓の鋭い蹴りが智哉の腹に直撃した。

「もういいわよ!」

楓はそういう残すとさっさと行ってしまった。

地面と熱いキスをしている智哉に復活した弾がそつと近付くと

「智哉、生きていたら午後、駅前の本屋に来てくれ」

智哉は震える指で地面に「OK」と書き、そこで力尽きた。

何とか予鈴前に復活し、遅刻せずに過んだ智哉は不機嫌な楓にどうにかして許してもらい、いつもどおり面倒くさい授業と話の長い終業式を終え、家に帰り普段着に着替え、再び家を出発した。

自転車に乗り駅まで向かっていた智哉は、駅目の交差点の信号に捉まっていた。信号が緑に変わり渡ろうと身構えた瞬間、身の前が突然、光に包まれた。

しばらくして、硬く閉じていた目をゆっくり開けるとそこは、深い森になっていた。

第1話 何気ない日常（後書き）

やっと本筋に入れます。おそらくもう楓も弾も登場することは無いでしょう（笑）これからドンドン女の子を出していきます。

第2話 深い森の中（前書き）

今回は智哉視点です。

第2話 深い森の中

おかしい。

確かに俺は駅前の交差点にいたはずだ。なのにどうしてこんな森の中にいる。

いや待て、落ち着け俺。現状をよく確認するんだ。まずここはどうやら本当に森の中らしい。真っ暗だと思っていたが、違うようで、頭上の木の葉が幾重にも重なり日光を遮っているようだ。

服装は、下は青めのジーンズ、上は白地になんか紋様が描かれている半袖Tシャツ、そして、腰に白と黒のチェック柄のジャケットを結んでいる。持ち物は財布や小物が数点合ったはずなんだが、どうも綺麗さっぱり無くなっている。

「つか寒っ！」

どうも日光が遮られているせいで、気温が低い。腰のシャツを羽織ると幾分マシになった。

「とりあえず、適当に歩くか。自転車も消えてるし」

歩くこと数分、周囲の風景はほとんど変わらず、生き物の姿も見当たらない。

「いや、虫すら居ないなんて。このまま餓死するんじゃない俺」

歩いてても歩いてても森に変化は無く、おまけに足元では木の根が複雑に絡み合っており、歩き難いことこの上ない。

「もうこの際何でもいいから何か生き物現れろ！」

寂しさに押しつぶされそうになり、心から叫んだ瞬間、すぐそばの草むらから、

巨大な猪が現れた。

「前言撤回。今すぐ俺の周囲半径1kmから居なくなってください」
猪の姿は○ンハンのド○ファンゴにかなり近かった。

だが、その大きさはゲーム画面で見るとなようなものではなく、軽自動車大きさよりもやや大きいという冗談にしてもデカすぎるものだった。

そんなことを考えていると、猪はこちらを向きあしで地面をひっかき出した。

（まさか、突進でもしてくんのか？）

そう思った瞬間、猪は弾かれたように走り出した。

「チクシヨウ！やっぱりか！」

そう叫ぶと、一目散に真横に走り出した。

猪のスピードは車並だったが、何とか回避できた。だが、猪は避けられたと察すると素早く方向転換をし、再び突っ込んできた。

「うそだろ！」

泣きそうな声で叫ぶと同時に全力で横にからだを投げ出した。

猪が走っていった先に、周りの木より一回り太い木があった。

（そのままぶつかって目を回してくれ！）

猪はそのまま木にぶつかった。が、ぶつかった木が根元から折られたのだ。

「はは、ありえないだろ」

木を根元から折った猪はゆっくりとこちらを向き、また足で地面をひっかき出した。

（もうだめか。）

心の中で思うと、それに合わせたように猪は走り出した。

直後、猪の側面から火の柱が立った。

比喻ではなく本当に棒状の火が猪に突き刺さったのだ。猪はそのまま横に倒れ、しばらく悶えていたが、やがて動かなくなった。

「おい、だいじょうぶですかー。」

火の柱が飛んできたと思われの方から声が聞こえてきた。
声のしたほうを向くとそこには、

紅い髪の少女が立っていた。

第2話 深い森の中（後書き）

第2話目はいかがでしたか。

投稿は不定期です。書けるときになるべく出せるようにします。

第3話 遭遇（前書き）

少しずつ本筋に入っていきます。

第3話 遭遇

「おい。大丈夫かって聞いてんのよ。」

目の前の紅髪の少女が再び聞いてきたが、答えることが出来なかった。先程目の前にした光景で頭がいつぱいだった。

「ってゆーか、何あんな猪如きにやられてんのよ。少しは反撃とかしなさいよ。」

「い、いや、反撃って言われても」

あんなバケモノ、丸腰でどここうでできる訳が無い。

「何言ってるのよ。あんな雑魚、魔法で一発でしょう」

……………は？

「…え、えっと、魔法って、あの魔法？」

「あの魔法ってどの魔法よ？」

質問に質問で返すのはどうかと思う、何てこと考えてると、少女は小さく嘆息した。

「はあ…。とりあえずここで話すのもあれだから家まで来てくれる

？……………それとも、腰が抜けて立てない？」

少女は小馬鹿にするような目で見ってきた。

俺はそれにむっとすると、

「んなわけねーだろ」

と喋って立ち上がった。

少女は、立ち上がった俺を一瞥すると、

「それじゃ、あたしに着いてきて」

そう言うと、さっさと歩き出してしまった。

「しゃーない、行くか」

俺は小走りで少女に追いつくと、隣に並んで歩き出した。

しばらく並んで歩いていると少女が突然言ってきた。

「それにしても、アンタ、変なかつこうしてるわね。」

「は？別に普通だろ？それを言うならお前の方こそ……」

そういつて俺は少女の姿を改めて見た。布製の質素な服とスカート、革のベストを羽織っている。森が暗いせいで気づかなかったがこうして近くで見ると、少女はかなりキレイだった。

整った顔立ちをしていて、目はややツリ目、紅髪はポニーテールにしておりそれがまた良く似合っている。

じっと少女の顔を見ていると、少女が

「何、人の顔じつと見てんのよ」

と、頬を赤らめながら睨んできた。

「やばい、怒らせたか、と考え、

「いや、カワイイ顔をしているなー、と思ひまして正直な思いを伝えた。すると少女は、

「……ッ！な、何言つてんのよ！馬鹿！」

顔を真っ赤にして怒鳴ってきた。

（あれ？褒めたつもりだったんだけど）

「ま、まあいいわ。それよりアンタ名前は？」

まだ頬を赤らめたまま、少女が聞いてきた。

「そういえば自己紹介がまだだったな。俺は篁 智哉だ」

「タカムラトモヤ？へんな名前ね。あたしはエルナ、エルナ・コーレインよ」

「エルナ、か。よろしくな。俺はトモヤでいいぞ」

「うん。よろしくねトモヤ」

そういつて微笑む少女「エルナの顔に不覚にもドキッとしてしまった。」

そんなこんなで森を歩いているといつのまにか周りに木の数も減り、明るくなっていた。

「なあ、エルナの家まで後どれくらいなんだ？」

「もうすぐよ」

歩いている場所もいつの間にかちゃんとした道になっていた。この分だともうすぐだというのも本当だろう。

歩き続けること数分、道の先に木で出来た結構大きい家が見えてきた。

「ほら、あれがあたしの家」

そう言うのとエルナは家に向かって走り出していった。

「ちょっと、待てよ」

走っていったエルナをあわてて追いかける。

「ただいまっ！」

大声で言い、思いっきり扉を開いたエルナの額に、

高速で飛んできたおたまがヒットした。

「いったあ！」

額を押さえてうずくまるエルナ。

「扉はもっと静かに開けなさいって何度も言ってるでしょう！」

家の中からでてきたのは、恰幅のいいやさしそうなおばさんだった。どうやらさっきのおたまは彼女が投げたものらしい。

「うう、ごめんなさい」

よほど痛かったのか涙目になっているエルナ。

「全く、落ち着きを持ちなさいってあれほど……エルナ、あそこにいる男の子は知り合いかい？」

叱っている途中で俺の姿を見つけたおばさんがエルナに聞いている。

「うん、森の中で出会ったの。名前はトモヤだった」

「そうかい……。トモヤくん、ちょっとこっちに来ておくれ」

「は、はい！」

呼ばれて近づいていった俺の頭を彼女は両手でガシッと掴んだ。

「え、ちょ、何を」

「黒い髪に黒い瞳……。間違いないね」

俺の顔を覗き込んだおばさんは何かを確信したように言った。

「な、なに？ どういうこと？」

訳が分からないという顔をしているエルナが、おばさんに聞く。

「この子はね、『渡り人』だよ」

「本当！？ 本当にトモヤは『渡り人』なの！」

分からん。話が見えん。

「あの…、『渡り人』っていうのは何ですか」

尋ねた俺に、深刻そうな顔をしたおばさんが答えてくれる。

「そうだね、色々説明があるけどまず最初にひとつ言っておくことがある」

そう言っておばさんが俺の目を見ながら、言った。

「ここは、アンタがいた世界とは違う、別の世界だ」

へ？

第3話 遭遇（後書き）

次はこの世界のことや魔法について書きます。

第4話 魔法選定（前書き）

今回は文が長いです。

第4話 魔法選定

聞いた話をまとめると、『渡り人』というのは、俺がいた世界からこちらの世界へ何らかの理由でやって来てしまった人の俗称らしい。今まで公式に確認されただけでも何百人という人がこちらの世界に来たらしい。だが、その中の誰一人もといた世界に戻ることは出来なかったらしい。ま、良くあるお約束だな。

「しかし異世界か、未だに信じ難いな」

「あつさり順応できる方が変よ。…で、どうなの？」

不機嫌そうな顔でエルナが聞いてきた。

「どうって、何が？」

「だから、トモヤももといた世界に帰りたいたいと思うのかって聞いてんの」

「む、そうだな…」

腕を組み、目をつぶって考えること数秒、

「ま、どうでもいいや」

ガタンッ！

エルナが座っていた椅子から落ちた。落ち着きの無い奴だ。

「それよりさ…」

「ちよ、ちよっと待った！どうでもいいって何？どういうこと？」

椅子に座り直しながらエルナがあわただしく聞いてくる。せわしない奴だ。

「どうでもいいって、文字通りだけど」

「だから！もといた世界に帰るか帰らないかがどうでもいいってどういうことよ！」

「いやだって、俺の前の『渡り人』たちは帰れなかったんだろ？だったら俺は帰ろうなんて思わねーよ面倒くさい」

「面倒って、アンタね…」

あきれたようにエルナが呟く。

「あははは！面倒くさいか！わかりやすいねアンタ！」

色々説明をしてくれたお婆さん「メイラと言うらしい、が豪快に笑う。

「……アンタって変な奴よね」

エルナがあきれたように言う。

「変って、楓みたいなのを言うな。失礼な奴だ」

俺が苦笑交じりに言うのと、

「カエデ？カエデって誰？」

なぜか知らんがエルナがやや睨みながら聞いてくる。

「ああ、楓つつうのはな、俺がもといた世界で仲良かった奴でな。

黙ってたら結構美人なのに、かなり暴力的で台無しな奴だ」

「何？付き合ってたの？」

冷たい声音で聞いてくるエルナ。ちよつと怖い。

「そんな夢みたいなことあるわけ無いだろ。俺がそんなモテるわけないしさ。精々、たまに弁当作ってきてくれたぐらいだぞ。結構やさしいところもあるんだよなアイツ」

（でも俺以外の奴にあげてんのみたことがないんだよな、何でだろ？）

そんなことを考えていると、エルナが可哀想なものを見る目で俺を見てきて、

「アンタ、馬鹿だったのね」

とあきれたようにいい、

「あつはつは！こりや天然だね！」

とお婆さんが大笑いしている。…何故だ？

「まあいいわ。それよりアンタさつき何聞こうとしてたの？」

ああ、すっかり忘れていた。

「この世界のことについて教えて欲しいんだ」

そうお婆さんにお願する。

「かまわないよ。まずあたしたちがいる世界の名は、デリロジー。ここはクロウド大陸のレイヴィアンって国さ。クロウド大陸は全部で五つの国に別れていて、レイヴィアンの他にはレパーラ、メルタ、トルクア、オータムという国がある。南西にレイヴィアン、北西にレパーラ、北東はメルタ、南東にトルクア、そして中央にオータムっていう配置だ」

「なるほど、他には？」

「そうだね…、後重要な事と言ったら魔法ぐらいかね」「魔法？」

そういえば森でエルナもそんなこと言っていた気がする。

「そう、魔法だ。アンタがいた世界とはちがってここは魔法なんてのを使うことが出来る。原理についての詳しい説明は…、しても無駄か」

「助かります」

理解できるわけがない。

「じゃ、最低限のことを説明するよ。まず魔法には四つの属性がある。火・水・風・土だ。そして魔法にはいくつか種類がある。大まかに分けると攻撃と特殊だ。攻撃もさらに二つに分けられる。放出系と装身系だ。放出系は文字通り魔法で放つ、装身系は魔法を自分の体や武器に纏わせることが出来る。特殊系の魔法は回復やら読心やら色々種類があるんだ。この世界にいる人のすべてが一応は魔法を使えるんだよ。ま、得手不得手はあるけどね。分かったかい？」

「要は、魔法はスゴイよ、ってことですね」

「全然理解してないね」

正直、「放出系は」の辺りから聞き流してました。

「ちなみにアタシは火の放出系、おばさんは風の放出系よ」

エルナが補足説明してくれる。それより、

「いーなー、俺も魔法使ってみてーなー」

叶わないと思いつつもいついつい言ってしまうのは、仕方の無いことだろう。

「そうね、こっちにいる以上、使えないとなにかと不便よね。…じや、練習しましょうか」

「……………はい？」

「エ、エルナさんや？」

「何よ？変な呼び方して」

「今のセリフだと、俺も魔法つかえるっばかったんだけど？」

「使えるに決まってんでしょ。バカじゃないの」

「この世界でなら、アンタでも魔法が使えるんだよ」

おばさんの親切な説明。

「え？マ、マジ？マジで使える？」

「出来るってさっきか「いよっしゃー！！魔法じゃー！！ウィザードになれるー！！！！！！！！！！」人類の永遠の夢ー！！！！空だって飛べるー！！！！！！！！！！」うるっさい！！！！」

立ち上がって叫んだ俺のボディにエルナの右ストレートがめり込む。

「ゴパッ！」

そのままテーブルにつつぷす俺。

「いやー、若い子は元気なのが一番だね。それじゃあたしは夕食の準備をするから。エルナ、ちゃんと選定の手伝いをしてあげるんだよ」

キッチンに向かっていったおばさん。

「しょーがないわね」

渋々といった感じのエルナ。

そこまで認識して、俺の意識は途切れた。

「ハッ！」

ここは？確か、エルナから良い一発をもらってそのまま、

「やっ」と起きた。あれぐらいで気失わないでよ」

やや苛立ちを含んだ様子のエルナが悪気もなさげに言ってきた。

「……………殴っちゃダメだよな？」

「ほら、しゃきつとしなさい。これから選定やるんだから
「選定？」

またきたよ意味不明ワード。

「トモヤがどんな魔法を使えるのか調べることよ」

エルナからの説明。………この世界の人って結構親切だよな。

「んで？どんな事すんの？」

「まず、これ」

そう言って差し出されたのは真っ白い紙。

「これに、アンタの血をつけて、その変化で種類が分かるの。これ
つかって」

続いて差し出されたのは刃渡り五センチほどのナイフ。…ああ、
なるほど。

ナイフを受け取った俺は、そのままナイフで自分の手のひらを切
った。痛みに顔を歪めると傷口から予想より多くの血が出てきた。

「で、この紙に血をつければいいんだよな」

「え、ええ」

やや顔を引きつらせながらエルナが答える。

すでに血で真っ赤な手を紙に押し付ける。すると、血の色や形状
が変わっていった。

「なるほど、トモヤは水・風属性の装身系か…」

紙は蒼と翠のマーブルで円が描かれている。

「えーと、これはどうやって判断するの？」

「属性は色で表されて、火は紅、水は蒼、風は翠、土は橙で、放出
系は三角形、装身系はこんな風に丸くなるの」

いや、分かり易すぎない？ま、いいんだけども。

「おーい！夕飯の準備が出来たよー！」

キッチンの方からおばさんの声が聞こえてくる。

「じゅあ、いこうか」

立ち上がり、キッチンへ向かおうとすると、エルナに腕をつかま
れた。

「ん？何？」

「アンタ、手そのままでいくつもり？」

「そういわれて手を見て見ると、」

「うわぁ」

結構な量の血液が流れていた。気づけよ俺！

「ったく、しょうがないわね。手出して」

言われるがままに手を差し出すと、慣れた手つきで包帯を巻いていくしてくれた。

「上手いもんだな」

「まーね。…これでよし」

解放された手には、しっかりと包帯が巻いてあった。

「ありがとう。オマエ、頼りになるな」

治療の上手さに感動して笑顔で言つと

「うっ…。い、いいから早く行きなさいよ」

頬を赤くして言つて来た。

そんなこんなで異世界最初の夜は更けていった。

第4話 魔法選定（後書き）

サブタイの魔法選定のシーンが短いです。すみません。
やっぱり投稿は不定期になります。あしからず。

第5話 初めてののおつかい(前書き)

投稿遅れました。これからはもう少し早く出せると思います。

第5話 初めてのおつかい

閉じているまぶたの隙間から朝日がいってきて、無理やり意識を覚醒させられる。重たいまぶたをどうにかして開けようとしながら、昨日のことを振り返る。昨日の記憶は、夕食の後、用意してもらったベッドにダイブしたところで途切れている。そして、異世界に来たのだと改めて思い、これからどうしようかと考えながら、ゆっくりと眼を開くと、

目の前には、穏やかな寝息を立てて眠っているエルナがいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・大丈夫だ。衝動的な欲求に支配された覚えはない。

だとしたらなぜだ？こんなおいしいイベントが起こるようなフラグを立てた覚えはない。じゃあどうして？

思考を重ねていると、エルナがわずかに動いた。起きたのかと思いい、反射的にエルナの顔を見る。どうやら杞憂だったようだ。いくら考えても答えが見つからないので、何となくエルナの顔を観察してみる。眠っているときに髪を結んでいるはず無く、今は髪を下ろしていた。その姿がとてもきれいで思わず見惚れてしまっていた。

不意に、エルナの両目が半分ほど開かれた。バッチリ眼が合った。合ってしまった。

エルナはゆっくりとした動作で眼をこすると、今度ははつきりとした眼でこちらを見てきた。……………これはあれだな。キヤアアアアアアッ！とか悲鳴を上げながら殴られるな。

エルナはというと、こちらを確認し、一度ギョツと眼を瞑ると再び俺のことを確認した。そして、間違いではないことに気づくと、

全員の食事が終わるのを見計らい、おばさんが言い出した。

「エルナ、今日はトモヤと一緒に街まで買い物に行つて来てくれよ」
「え…、な、なんでトモヤも一緒なのよ？」

確かにそうだ。昨日こつち世界に着たばかりの俺がついて行くよりも、慣れているエルナが一人で行つたほうが効率が良い筈だ。

「今回はちよつと量が多いからね。……それに、トモヤの武器を見繕つてやらないといけないからね」

「そりゃそうだけど」

「……おかしい。今、変な単語が聞こえた気がする。」

「あの…、ひとついいですか？」

「なんだい」

「えっと、俺の武器って何ですか」

「あれ？言つてなかったかい？装身系の魔法使いは武器の携帯を許可されているんだよ。魔物に襲われても平気なようにね」

「そうなんですか」

「んじゃ、これからすぐに行つて来てくれ。……ああ、そう
だ、武器屋の主人にコレを渡しといてくれ」

そう言つておばさんが渡してきたのは一通の手紙だった。

「あの、これは？」

「いいから渡しといてくれよ。それじゃ」

言つが早いがおばさんは裏口から出て行つてしまった。

「あつ！ちよ、待つて！」

椅子から立ち上がりエルナが呼び止めるが、おばさんは戻つて来なかつた。

「」

「」

「…とにかく行くこうか」

「しょうがないわね」

やや脱力した感じでつぶやくと、エルナは身支度を整えに行った。

「スツゲエ……」

思わずそう漏らしてしまいうくらい街は凄かった。なにがスゴイかっていうと、大きさだ。ぱつと見ただけで俺がいた街の2倍はあるなつて分かる位だ。

「なにボケつと突つ立ってんのよ。早くしなさい」

気づくとエルナは先に進んでいた。

「酷っ！ちよつと待てよ」

あわてて追いかける俺のことをエルナはちゃんと待っていてくれた。

「つたく、何してんのよ」

「ゴメンゴメン。でまずはどこへ行くの？」

「まずは、アンタの武器を買いに行くから。ついてきて」

……武器が。

「なあ、エルナ、武器ってどんなのにすればいいんだ？」

「知らないわよそんなの」

「知らないって、おまえ……」

「うるさいわね。いいのよ、あたしは放出系なんだから。武器のことなんて知らなくても問題ないのよ」

「そっぴやそうだったな」

ふと、周りを見してみる。買い物をしている人、知り合いと話している人、何をするわけでもなくただ歩いている人。元いた世界と大差ないように思える。が、そのうちの半分ぐらいの人がナイフや弓矢、変わったものでは棍棒、斧を持っている。おそらく、あれ全員が装身系の人なのだろう。

「着いたわ。ここが武器屋よ」

目の前には、いかにもといった様子の古めかしい店があった。

「いや、ボロくね？」

「文句言わない。ここが一番安いんだから」

値段で決めんのかよ。…まあ、確かに女の二人暮らしとはいえ、

家計はお世辞にも潤っているとはいえないのだろう。

「ほら、さつさと入る。・・・ごめんくださいーい」

エルナが先に店に入っっていつてしまった。

「じゃ、俺も行きますか。失礼しまーす」

店に入っって最初に感じたのは、強烈な鉄臭さだった。あまりの臭いに鼻をつまむと、

「こら、失礼でしょ！・・・えーと、アレフさん、いますかー？」

「はいはいはい、ただいまー」

エルナが呼びかけるとカウンターの奥から声がした。しばらくすると、カウンターの奥からつなぎ姿で埃まみれの若い男が飛び出てきた。

「いやー、ゴメンゴメン。物置の中を整理してたら色々面白そうな物が出てきてね、つついっついで調べてみちゃったんだよ」

「相変わらずですね。アレフさん」

「返す言葉も無いよ。・・・ん？そちらの彼はどちらさまだい？」

「彼は・・・ほら！自己紹介する！」

エルナに睨まれた俺はあわてて自己紹介をする。

「はじめまして。篁 智哉です」

「はい、はじめまして。ボクはアレフ・リノールといいます。・・・その名前と容姿から察するに君は『渡り人』かい？」

「！..！」

名前と外見だけで分かるなんて、実はすごい人なのか？

俺の考えていることが分かったのか、アレフさんは苦笑する。

「そんなにすごいことでもないよ。黒髪もそうだけど名前を聞けば大体の人は分かるはずだよ」

「へえー、そうなんですか」

俺は横にいるエルナをチラッと見てみる。・・・気まずそうに眼をそらしましたよ。

「それはさておき、今日は何の用ですか？」

「ああ、俺の武器を買いに来たんだ」

「武器…ということはおトモヤくんは装身系か。…属性は？」

「確か…風と…水だったっけ？」

「自分の事位ちゃんと覚えておきなさいよ。ったく、それで正解よ。うるさいな。こっちに来て色々有り過ぎたんだよ。」

「そうか…。だったら武器は刃物がいいね」

うん。理由が全く分からんが、ここはその筋の人に任せた方がいいな。…あ、

「そういえば、メイラおばさんからこの手紙を渡しておくように言われてました。」

「ん、なにになに？…。げっ」

「げっ？」

ハモツた。結構恥ずかしいな、これ。

「いやー、トモヤくんが買う武器を出来るだけ安くしろってさ。昔メイラさんにはお世話になったから断れないんだよな」

そう言っただアレフさんは苦笑する。世話って何したんだ？

「よし！じゃあトモヤくん、エルナちゃん、ちょっと一緒に物置まで来てくれないかい？」

「なんでですか？」

「蔵の中のものにね、どうもこの世界のものではないと思うものがあつたんだよ。良かったら見て欲しい」

「俺が分かる程度のことならいいですよ。エルナはどうする？」

エルナは俺の問いに少しだけ考えると

「あたしはパス。二人が見てる間、買い物済ませてきちやうわ」

「いいの？量が多いって言ってたけど」

「大丈夫よ。それじゃあ行ってくる」

そういつてエルナは、店を出て行った。

「じゃ、アレフさん、行きましようか」

アレフさんは頷くとカウンターを開けて奥へ入っていき、俺もそれに続くことにした。

「え〜と、これじゃないし、これでもないな」

そういいながらアレフさんは物置からドンドン武器を出してくる。ナイフ、ムチ、剣、ボウガン、馬鹿でかい鎌。危険極まりないな。なんでも物置を整理してたら、いきなりエルナの声が聞こえてきて、あわてて出したものを物置にねじ込んだらしい。

「あつた！これだ！これだよ！」

声が聞こえたのでそちらを見てみると物置に上半身を突っ込んでいたアレフさんがゆっくりと立ち上がったところだった。

「これなんだけど、なにか分かるかい？」

アレフさんが手を差し出してくる。その手に握られていたのは、以前の俺には縁遠く、今の俺にとって懐かしく感じられるものだった。

「これは・・・刀です」

「カタナ？」

「はい。俺がもっていた世界の、もっていた国で、昔使われていたものです」

「ふむ。やっぱりか」

「やっぱり？」

「うん。この…カタナはね、どうも『渡り人』が造ったようなんだよ」

『渡り人』が・・・。ということはその人も日本人なのか？

「ちよつといいですか」

「もちろん」

アルフさんから刀を受け取る。写真などで見た事はあつたが、実際に持つのは初めてだ・・・当たり前か。それは予想してたより重たかった。俺はその刀を鞘から一気に抜き放つてみる。刀の長さは1.5 m程で、刃は鈍く光っている。

「どんな感じだい？」

「どんなって言われても…。手にするのは初めてだしよく分かりません」

「そうか」

「……でも」

「でも？」

「なんとなくなんですけど……なんかしつくりします」

「なぜだろう？初めて持ったはずなのに、手に馴染む感じがする。」

「なるほど。……よし！トモヤくん！」

「は、はい！」

俺の返事を聞いたアレフさんが勢いよく呼んでくる。

「このカタナは君にあげよう」

「え？いいんですか？……でも俺、金持ってなくて」

「そんなものはいいんだよ。もともと売り物じゃないし。それに、

そのカタナも君にもたれてる方が喜ぶだろうしね」

そういつてウインクしてくるアレフさん。ここまで言われるとな

・

「分かりました。ありがたく頂きます」

刀を鞘に戻す

「うん。遠慮なくもっていってくれ。……あ、ちょっと待って」

「はい？」

「飛鳥あすか」

「へ？」

「そのカタナの銘、というものらしいよ」

「飛鳥、か」

「その子、大事にしてやってくれよ」

「もちろんです。じゃ、俺はこれで」

カウンターを抜け、ドアを開ける。

「トモヤくん」

店を出ようとした瞬間、呼び止められる。

「何ですか？」

「メイラさんに、近々、国の偉い人がここらに来るって伝えといて
くれないかな」

「わかりました」

「それじゃあ、二人によろしく」

「はい、さようなら」

俺はドアをくぐって外に出る。そして

「エルナ、どこだろう」

迷った。

第5話 初めてののおつかい（後書き）

感想などがあつたらぜひ教えてください。
楽しみにしています。

第6話 どうでも変わらない事(前書き)

これからはドンドンいきます。

第6話 どこでも変わらない事

「エルナ、どこにいるんだ」

アレフさんの店から歩いて数分、エルナをさがして歩きまわるも見つからない。はじめてきた街で歩き回るのが無謀だったと思う。じっとしてた方が早く逢えたかもな。

そして何より……目立つ！

黒髪に黒い瞳ってだけでも注目されるのに、おまけにこっちは見慣れない刀を持って歩いている。好奇の目に曝されるのも仕方の無い気もする。…しかし、指差されてこそこそ話されるのは、あまり気分のいいモンでもないな。

「エルナを見つけてとっと帰るか」

そして、エルナがいないかと辺りを見渡す。……………いた。

だが、正直あまり関わりたくない状況だ。なんでアイツ……

「王道っぽい不良に絡まれてんだよ！」

確かにアイツは見た目だけならかなりの美人だろう。そう、見た目だけなら。

中身を知らない二人組の不良は口々に言っていく。

「キミ、カワイイね」

「俺達と一緒にお茶でもしない？」

(いや、ベタ過ぎんだろ)

不良の方々の言動にそう思い、同時にやや同情の念を覚える。エルナならあんな奴ら殴り飛ばすか、魔法で追い払うか、どちらかだろう。

なんて達観していた俺の耳に信じられない言葉が飛び込んできた。

「あ、あの、困ります。連れがいるので」

「……はい？」

俺は我が耳を疑った。あのエルナが、あんな殊勝なセリフを言うなんて……

俺が啞然としている間に、不良達は言葉を重ねる。

「またまた、さつきから見ただけどそんな奴いなかったじゃん」

「悪いようにはしないから、お願い、少しだけでいいんだけど」

「え、あの、ですから……」

さらに困ったような声を出すエルナ。

「おっと、ポケットと見てる場合じゃないな」

気を取り直すと、エルナの元へと歩き出した。

「ちよいとお兄さんがた」

なるべくフランクに不良の方に話しかけてみる。

「あん？んだよガキ」

「こつちは今立て込んでんだよ」

手のひらを返したような態度。分かりやすいつつ、単純っていうか。

改めて、不良達をしてみる。いかにも悪ですって言ってるような

服装。二人でお揃いの短剣のようなものを首からぶら下げている。

「……どこの世界でもこんな奴らはいらんだな。」

「それ、うちの連れなんで。お世話になりました」

言いながらエルナの手をつかむ。

「あ、ちょ、ちよっと」

エルナが何か言っているが、無視してその場から逃げ出そうとする。

「待てよ」

「あー、やっぱダメか。」

「何いきなり来てほざいてんだよ」

「俺たちはこれからその娘とお茶しに行くんだよ。とっとと失せろ」

不良は凄みながら脅してくる。正直、これっぽっちも怖くは無い。

面倒くさいが仕方ない、……ちよっと遊ぶか。

「分かりました。ではこれで」
そのまま俺は帰ろうとする。エルナの手を掴んだまままで、
「待てや」
「何ですか？失せろって言ったじゃないですか」
「いや、その娘は置いてお前だけで消えろって意味だろ」
「なんだ。そういうことは先に言ってくださいよ」
「普通わかるだろ」
「見ず知らずの女の子をお茶に誘うような人に普通なんて言われたくないです」
「んだとコラア！」
「じゃ、これで。お疲れ様でした」
再び帰ろうとする。もちろん手を掴んだまま
「おう！・・・ってコラア！」
「その娘は置いてけよ！」
「イヤですけど？」
「てめえ！」
「俺らのこと馬鹿にしてんだろ！」
「あ、ばれました？」
「やっぱりか！」
「もう少しはいけると思ったんですけどね。アンタらバカっぽいし」
「ケンカ売ってんのか！」
「ただいま3割引です」
「おちよくってんのか！」
「ツッコミうまいなこの人たち。芸人にでもなればいいのに。」
「すいません。そろそろ飽き・・・時間が無いので失礼していいですか」
「今、飽きたって言おうとしたよな！」
「言ってますよ。言いがかりはやめてください、クス野朗」
「誰がクス野朗だ！」
「申し訳ございません。ゴミクス様」

「丁寧に言い直したところで意味ねえよ！てかちよつと悪化してる！」

「おい、ちよつと声落とせ。周りの奴らが見てきてる」

横目で周りを見てみると、確かに通行人がこつちを見ている。・
・そろそろだな。俺はこの二人を撃退するためのトドメの一言を
大声で言い放った。

「僕の体ならどうしてもいいので、お願いです！この娘だけは見逃
してください！！」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・沈黙。

騒がしかった街中が沈黙に支配される。

永遠とも思える数秒間。耳が痛くなるような沈黙を破ったのは、
ジャリツという後ずさりするような靴の音だった。

その音を皮切りに周りの人たち（おもに男）の後ずさりする音が
連続した。

その音に不良達は正気に戻ったようで、

「ちよつとオオオオオオオ！なに言ってるんのオオオオオ！」

「おまつ、馬つ鹿じゃねえのオオオオオ！」

と元気に叫んでくる。そして、俺はさらに追い討ちをかける。

「あの、僕初めてなので、やさしくしてください」

『・・・・・・・・・・』

「もうやめろオオオオオオ！周りが俺らを見る目が人を見る目じゃな
くなってるから！ゴミを見る目より酷くなってきたから！」

「おい、逃げるぞ！このままだと警備兵が来るかもしれねえ！とい
うより一秒でもこの場に居たくない！」

「ち、畜生！俺ら、そんなに悪い事したか！？」

「どうでもいいから走れ！」

「お、覚えてやがれ！」

不良二人は元気に走っていきましたとき。めでたしめでたし。

「じゃ、帰ろうか」

振り向いて後ろにいるエルナに言つと、

「アンタ、悪魔？」

なんて言われてしまった。ちょっとショックです。

帰り道、俺たちは街の人から「大変だったねえ」、「元気出せよ」などのお言葉とともに、たくさんのお食べ物を頂くことになりました。

第6話 どこでも変わらない事（後書き）

いかがでしたか。

トモヤと不良のやり取りはすこし不自然でしたね（笑）

もっといい文章を書けるよう、精進していきます。

第7話 夜襲（前書き）

一気に進んでいきます。

第7話 夜襲

ブンツ、ブンツ、ブンツ

刃が空を切る音が連続する。

「995…996…997…」

買い物から帰ってきた俺は、夕食が出来るまでの時間、家の庭で素振りをしていた。素振りなど少しかじっていた剣道をやめて以来である。しかも竹刀だったあの頃とは違い、今は真剣。腕に溜まる疲労はかなりのものだった。ちなみに、ノルマは1000回。

「998…999…1000！だー！疲れたー！」

久しぶりなのに無茶すぎた。てゆうかこれ重い。普通の日本刀よが大分長いけど、それでも重過ぎると思う。多分、刃の材質が鉄ではないのだろう。振るのが辛い。

「なんにしても、なんとかするか」

こうして毎日鍛えてればなんとかかなると思う。

「そっいや、魔法ってどうやるんだ？」

「しまった。やり方を全く聞いていない。

「やっぱり詠唱とかすんのか？それとも魔法陣？」

「考えていると、後ろから声を掛けられた。

「いつまでやってんの。もうご飯の準備できたわよ」

「エルナだった。手伝いをしていたのかエプロン姿だった。

「おお、エルナか。丁度いい、ひとつ聞いてもいいか」

「？なによ」

「魔法ってどうやるんだ？」

「どうやるって…」

エルナは俺の質問にあごに手をやって考えると、庭に生えている木に手を向け、

「フレイルランス」

手のひらから以前森で見たような棒状の火を出した。棒状の火」

よく見ると先端部分が鋭くなっていて槍のよう見える―は木にぶつかり、そのまま爆発した。

「……」

呆然としている俺にエルナが一言。

「こんな感じ」

「分かりません」

正直な気持ちだ。今ので分かるほど俺は頭脳明晰ではない。

「そりゃそうか。ん〜、あえて言うならイメージね」

「イメージ？」

「そう、イメージ。魔法の形をイメージするの。そしたら勝手に具現化するから」

「そんなのでいいの？」

「うん。……あ、でも、ちゃんと自分の属性に合ったのじゃなきゃダメだから」

イメージか……。うまく出来るか心配だ。

あれ？そういえば、

「なあ」

「なによ？」

「オマエ、街で不良に絡まれたとき、なんで魔法とか使って追い払わなかったんだ？」

「それは…、その…」

悲しい顔。俺の質問にエルナはそんな顔をしている。……まずい、タブーだったか。

「いや…、言いたくないな「ダメなの」…へ？」

「昔ね、魔法で友達を怪我させちゃったの。傷はあんまり酷くなかったんだけど、その子が痛がってる姿が頭から離れなくて。それ以来、どうしてもひとには魔法が撃てないの」

「そうか……」

きつと偶然なのだろう。その友達とやらも、もう許しているはずだ。それなのにエルナはずっと気にしている。

「バカだな」

「そうよね。自分でも分かってはいるんだけどね」

エルナもどうにかしたいと思っている。でも、あと一押し足りないのだ。

「さ、早くご飯いこ。早くしないと、おばさん怒っちゃうよ」

「ああ、そうだな」

走っていくエルナ。どうしてやればいいのか分からない俺はただ追いかける事しか出来なかった。

「で、それがアンタの武器かい？」

食事中、おばさんが壁に立てかけている《飛鳥》を見ながら言うてきた。

「はい。俺がいた世界で昔使われていた物です」

「ほう、そんなものが……。ちよつと見せてくれ」

「あ、どうぞ」

俺は《飛鳥》を取って差し出す。受け取ったおばさんはゆっくりと刃を抜き放った。

「ずいぶんと長いね……。！なるほどね」

なんだ？一瞬驚いた顔をしたと思ったら、急に真面目な顔になった。

「あの、どうかしたんですか？」

「いや。大したことじゃないよ」

おばさんは不適に笑った。ごまかされた気がするが、いいか。・・・あ、やべ、忘れてた。

「おばさんにアレフさんから伝えてくれって言われたことがあるんですけど」

「なんだい」

「確か、近々国の偉い人が来るって言ってました」

「！・・・そうか。ありがとね」

おばさんの目つきが鋭くなったような気がする。

「ねえ、どうかしたの？」

エルナがおばさんに聞く。勘違いじゃなかったか。

「なんでもない。気にしないでくれ」

そう言われても気になるに決まっている。だが、その後、いくら質問しても、おばさんは答えてはくれなかった。

夜。風呂から上がった俺は、再び庭にいた。魔法の練習をするためである。

「イメージ…か」

装身系の俺は自分の体や武器に魔法を纏わせることが出来るらしい。俺は飛鳥を鞘から抜くと正面に構える。

（魔法を纏わせる・・・って）

「どんな感じだ？」

刀に魔法「俺の場合は水」を纏わせるっていうと、・・・○EB ORNの○本みたいにか？とりあえずやってみるか。

（考える…。雨の○を纏ったような感じだ…）

しばらく集中するが、刀身に変化なし。もしかして俺、才能無い？
落胆していると、また声を掛けられる。

「アンタ、こんな時間に何してんだい？」

振り返ってみると、それは寝巻き姿のおばさんだった。

「魔法の練習です。といつても全然出来ないんですけどね」

苦笑交じりに言ってみる。

「やり方は知ってるのかい？」

「はい。エルナに教えてもらいました。形をイメージするだけいいんですよね」

「それは…、まったく、あの子は…」

おばさんが呆れたような声を出している。

「なんか違ってるんですか」

「いや、間違っちゃいない。でも、それじゃ足りないんだよ」
「足りない？」

「ああ、形だけでなく役割も考えなくちゃならないんだ」
「役割…ですか」

「そう。あの子の魔法は見たかい？」

「はい。あの木に向かって撃つてるのを」

エルナの魔法の被害に逢った木を指差す。

「あれは…多分フレイムランスを使ったね。この魔法の役割は爆発、だよ。」

そういや確かにあの魔法は木にぶつかると爆発していた。

「あれはね、爆発はするけど燃えはしないんだよ。役割は爆発だけだからね」

「役割はひとつしか付けられないんですか？」

「いんや、理論上は限界はない。でも実際は違つてね、記録上の最高はたった六つなんだよ。しかも、威力はガタ落ち。たくさん付け過ぎるのはお勧めできないね」

「じゃあ、俺はどんな役割にすればいいんでしょう？」

「そうだね…、やっぱり、切断とかじゃないのかい」

「切断、ですか」

眼を閉じて意識を集中する。刃の周りに水がある・切断する、この二つをイメージする。

「ほお、たいしたもんだ」

おばさんの感心するような声に眼を開く。飛鳥の刃が水で覆われていて、一回り大きくなったようにみえる。

「よっしゃ！成功！」

喜んで気を抜いた途端、水が消えてしまう。

「あー」

「はじめてにしては上出来の方だよ」

「はい。アドバイスありがとうございます」

「いいからさっさと寝な。子供は寝る時間だよ」

子供扱いはイヤだったけど、ここはおとなしく従って寝ることにする。

「じゃ、おやすみなさい」

おばさんと別れた俺はベットに横になりながら、右手に意識を集中させていた。右手に魔法を纏わせようとしているのだ。イメージは、水で出来た籠手・防御、だ。眼を瞑り、明確にイメージする。

イメージが固まると、右手が不思議な感触に包まれる。眼をひらくと、右手が半透明な籠手に包まれていた。なかなかのできればえにニヤリとした。

瞬間、

バリイイイインツ！！

ガラスを割ったような音が響き渡った。

反射的にベットから飛び降り、飛鳥を引っ掴んで、部屋の扉を開けた。ワントンポ遅れて、隣のへやからエルナが顔を出す。

家の外から拡声器で増大したかのような声が聞こえてくる。

「メイラ・ベルティ！貴女を殺人罪の容疑でレパーラ中枢都市ミナレットまで連行する！無駄な抵抗はやめたほうがいい！この程度の障壁では我等第一魔兵隊は防げぬ！時間稼ぎにしかならぬぞ！」

メイラ・ベルティ！？確かおばさんのフルネームだったはず。殺人？レパーラ？どういうことだ！？ダメだ、混乱してきた！

「時間稼ぎが目的だったことに気づかんのかね青二才ども」

「ダイニングにつながる扉からおばさんが出てくる。」

「おばさん！殺人って、それにレパーラって、どういうことなの！？」

「エルナが勢いよく問いたです。おばさんは悲しげな表情をして、
「すまないねエルナ。時間が無いんだ」

エルナに右手を向けた。

すると、エルナの体が一瞬で消えた。

「エルナッ!? おばさん! エルナをどうしたんだっ!」

おばさんは右手を今度は俺に向けてくる。

「大丈夫。エルナは無事だよ。これからアンタも同じところに転移させる」

「転移!?!」

バリイイインツ!!

再び、先ほどと同じような音が響いてきた。

「エルナに、アンタとの生活、退屈はしなかったよって伝えといてくれ」

「ちよつと待ってくれ! 今の音は一体・・・」

俺の言葉を無視し、おばさんはさらに告げる。

「それからトモヤ、エルナのこと、守ってやってくれ」

その言葉が聞こえた瞬間、俺の視界は暗転した。

第7話 夜襲（後書き）

どうでしたでしょうか。

魔法の描写がうまく描けなかったと自負しています。

ここからはサクサクいきます。

第8話 おまじない(前書き)

早く出せるといっておきながら、逆に遅れてしまいました。

第8話 おまじない

得体の知れない奴らの声を聞いてから、約一時間後、俺は街外れの丘に来ていた。空を見上げると、眩いばかりの星がきらめいていた。

夜空を見上げながら、さっきまでのことを思い出してみる。

おばさんと話してから、視界が暗くなった。気がつく俺はアレフさんの店の中にいた。隣には呆然としているエルナもいた。店の中からアレフさんが出てくる。アレフさんは突然聞いてくる。

「エルナちゃん。キミは自分のご両親について知っているかい？」

突飛過ぎる質問。エルナは答える。

「…おばさんは、時が来たら話すって…」

悲しそうな表情。ずっとそう言われてきたのだろう。

「そうか…それなら、今がその時だと思う。僕から説明するよ」

「えっ…」

驚いた表情。何故、アレフさんがエルナの両親のことを知っているのか？

「まず、エルナちゃんのお父さんとお母さん、僕とメイラさんはレパーラ出身なんだよ」

レパーラ。確か、レイヴィアン王国のすぐ上の国だったはず。

「僕たちはそこで、国を守護するための魔法部隊に所属していた。といっても、僕はまだひよっ子だったから、活躍していたのはメイラさんとキミのご両親だったんだけどね。特にキミのご両親のコンビネーションは素晴らしかった。倒せないものなどいないとまで言われたぐらいだからね」

エルナの表情がほころぶ。両親の話聞いてうれしいのだろう。

「だが、ある日、二人が死んだ。いや、殺されたと言った方が正しい」

エルナの表情が固まる。殺された・・・？

「ちよつと待ってください。さつき家に来た奴ら、おばさんが殺人罪に問われてるって…」

「浮かんだ考え。正解であつて欲しくない。ハズレであつて欲しいと願つた。」

「そう。現在、エルナちゃんのご両親を殺したのはメイラさんという事になつている」

「そんな…、うそ…」

口元を覆うエルナ。だが、俺は今の言葉に疑問を覚えた。

「アレフさん、【なつている】ってどういうことですか？」

俺の問いにアレフさんは苦笑する。

「トモヤくんは案外鋭いんだね、意外だよ。…本当はメイラさんは人殺しなどしていない。それは僕が保証するよ」

「じゃ、じゃあなんで、おばさんが犯人になつてるんですか？」

アレフさんは目つきを鋭くする。

「メイラさんは犯人に仕立て上げられたんだよ。犯人はおそらく国の上層部の人間だと思う。エルナちゃんのご両親は上層部の汚職について調べていた。動機はそのことだろう」

「そんなことつて…」

「犯人の手がエルナちゃんにまで届くのを恐れたメイラさんと僕は赤ん坊だったキミを連れて、レパーラから逃げ出した。ま、いつかこんな日が来るのは分かつてたけどね」

「それじゃあ、今頃おばさんは…」

「キミたちがここに来たのと同じように転移魔法を使われて、すでにレパーラの中だろうね。裁判が行われるだろうが、国の上層部が相手だ。圧力を掛けられて、最悪死罪になるだろう」

「酷い…」

エルナがそう呟くと、アレフさんはゆっくりと立ち上がった。

「さて、僕が教えてあげられることはこれで全部だ。これからキミたちが何をしようとしても僕は止める気はない」

そう言っただけでアレフさんは店の奥へ消えてしまった。

しばらくのあいだ俺たちは無言で座っていた。すると、

「ちょっと出てくる」

そう言っただけでエルナは店から出て行ってしまった。

一人きりで座り続けることさらに数分、

「俺も、少し出るか」

俺は立ち上がると、店を出るべく、扉へと向かった。

「これから、どうするかねえ」

一人呟いてみる。

草原に寝転がりながら考える。エルナのこと、おばさんのこと、そして、この世界のこと。

ゆっくりと立ち上がり、横に置いてある《飛鳥》を手に取る。

歩き出す。特に当ても無く、なんとなく歩き続ける。

歩いていると、視界の端に紅色が映る。そっちを向くとエルナがポツンと座っていた。

背中に哀愁が漂っていて、声を掛けづらいような雰囲気がある。そこにあった。

「どうしたい、エルナさんや」

雰囲気を無視して話しかけた。

ぶすつとした顔で振り返られた。

「アンタ、こういふときはそっとしておくもんでしょ」

「ごめんなさい。俺、空気が読めないんです」

エルナの隣に寝転がる。

「…邪魔なんだけど」

「そう硬いこと言わずに」

しばらく俺を非難するような眼で見えてきたが、やがて諦めたように、視線をそらした。

「……………」

「……………」

無言の時間が過ぎる。一筋の風が草を、髪を揺らしていく。

「ねえ」

最初に切り出したのはエルナだった。

「なんだ？」

「アタシ、これからどうすればいいんだろ？」

思いつめたような口ぶり。確かに迷うところだな。このままここに居続けるもよし、別のところに行くもよし、おばさんのところに行くもよし、ってところか。

「知らねーよ、そんなこと。オマエのやりたいようにすればいい」

「そうなんだけどね。自分は、おばさんを助けに行きたいって思ってるんだけど…、そしたら、きつと、人と戦わなくちゃならなくなると思う。そのとき、アタシはちゃんとできるのか不安になって」

「……………」

小さい頃に来た心の傷。誰が悪いわけでもない。エルナが責任を感じる必要なんか無いのに、この子は背負う。とても優しいから、何とかしてあげたい。きつと誰かが背中を押してやれば、前に進めるんだ。だから…

やるべきことを決めた俺は勢いをつけて、一気に起き上がる。そして、座り込んでいるエルナの前にしゃがみこんだ。

「…何よ」

「うじうじ悩んでいるお前に、とっておきのおまじないをかけてやるうと思っただろ」

そう言って優しくエルナの両頬を手で包み込んだ。

「っ！な、何すんのよっ！」

「だからおまじない。これは我が家に代々伝わる由緒正しい呪いなんだぜ」

ニヤリと笑い、そのまま両手を動かす。ぐにぐにと顔が歪み、なんと面白い表情になっていく。

「……いい加減にしろーっ！」

とうとうエルナが咆えたので慌てて手を離す。だが、顔の笑みは崩さない。

「どうだ？」

「なにが？お陰でこっちは余計にイライラして」

「モヤモヤしてたものとか、頭の中でごちゃごちゃしてたものが全部消えたる」

「え…？」

「そうだったら、後は自然に浮かんでくる気持ちに従えばいい」

意表を突かれたような顔をしていたエルナだったが、徐々に表情が変わっていく。もう一押し、俺はしてやることにした。

「あ、そうそう、おばさんから伝言」

「何？」

「アンタとの生活、退屈はしなかったって」

「そっか」

それつきり喋らなくなるエルナ。俺も喋ろうとは思わない。

しばらくして、黙っていたエルナはぱっと立ち上がった。

「よし！決めたっ！」

勢いよく立ち上がるエルナ。

「何をだい？」

答えなんかわかりつきっている。でも、聞いてやる。

「アタシは、おばさんを助けに行く！」

大きな声で答えるエルナ。

「OK。なら、俺も一緒に行く。俺もおばさんには世話になったし。それに、オマエ一人で行かせる訳にもいかないしな」

「うん！ありがとうっ！」

満面の笑みをするエルナ。やっぱり、笑ってる方がいいな。

「そうと決まったら急ぐわよ！家に戻って準備しなくちゃ！」

言っが早い走り去っていくエルナ。俺は苦笑しながらその背中を追いかけた。

第8話 おまじない（後書き）

いかがでしたでしょうか。

文章の中で、おかしな箇所を見つけたら、遠慮なく教えてください。

第9話 二人目（前書き）

遅れまして、申し訳ございません。
内容は、サブタイトルのまんまですね。
ま、読んでやってください。

第9話 二人目

窓の外の風景は、最初の頃とは違ってきていた。最初は、畑や田んぼが多かったが、今は建物の方が多い。都市部に近付いてきているのだろう。

・・・お！牧場だ。何あれ？馬と牛を足して2で割ったような姿だ。うまいのかな？

・・・うわ、なんかデカイ鳥っぽいのが飛びながら戦ってるよ。縄張り争いかオイ。

うん。ダメだ。頑張って気を逸らそうとしてもダメだ。現状は変わらんし、周りからの視線も別に移ってくれない。

なんで！？おばさんを助けに行こう！って決めてさ、準備整えてさ、アレフさんに説明に行ったらさ、『そうなると思いました。コレ使ってください』って書いてる手紙と一緒に結構な量のお金が置いてあって、アレフさんカッケエー！と思いつながら国境近くまで行くためのデカイ馬車みたいのに意気揚々と乗り込んだじゃん！なのになんで！？

なんで俺・・・

エルナに膝枕してんだよ！！！！

俺がしてもらおうならまだしも、なんで俺がしてんの！いや、こんなところでしてもらってんのもあれだけど。

乗り込んでしばらく経ったら眠たくなって、気づいたら眠ってたふと起きたら、膝の上にエルナが寝転んでたんです。決して俺がするよつに言ったんじゃないやありません。

だから乗客のみなさん。こつちをみてヒソヒソ話さないてください。お願いします。

「うん...」

エルナが呻く。

エルナの顔を見ると、悲しそうな表情をしていた。

一気に心が冷める。

当然だろう。実の両親が殺されていると言われ、育ての親がその犯人に仕立てあげられているとまで言われた。たった一晩の間にこの少女はどれほどのショックを受けたのだろうか。

俺はエルナの頭をなでた。少しでも安心出来るように、せめて夢の中でくらは楽しくいられるようにと、出来るだけ優しく手を動かした。

エルナの表情はいつのまにか穏やかなものになっていた。

「国境都市ボーデルに到着致しました。忘れ物のごきいませんようご確認ください」

乗員の人の声が聞こえる。周りの人たちは下車の準備を始めている。

「おい、エルナ、起きろ。着いたぞ」

膝の上で気持ちよさそうに眠っているエルナに声を掛ける。

「ん〜」

エルナが薄目を開ける。

「もう着いたぞ。さっさと行くぞ」

声を掛け続けると、次第に眼の焦点がはっきりしてきた。

「分かったわよ」

手で眼をこする。すると、不意にエルナの動きが止まる。

俺の顔を見つめ、周りを確認し、自分の体の向きを確かめるといった動作を何度か繰り返すと、顔を真っ赤にして、すさまじい勢いで体を起こした。

「え、あ、その、な…なんで？」

顔を耳まで赤くしながら聞いてくる。

「いや、なんでって言われても、気づいたらお前が膝の上にいたん

だよ」

ボンッ！

そんな効果音がピッタリな勢いでさらに顔を赤くしたエルナは、そのまま走って行ってしまった。

残されたのはポケットとしている俺と、二人分の荷物（ほとんどエルナの物）。そして、冷めた眼で俺を見る数人の乗客達。

思わずため息が出た。

「あ、ご苦労さん」

馬車（？）から荷物をもってでると、エルナがいつものように話しかけてくる。どうやら、さっきのことはなかったことにしたらしい。ま、蒸し返しても何一つ得をしないので、それに合わせることにした。

「つたく、自分の荷物くらい自分……で……」

俺は言葉を失った。

目の前の光景に心を奪われたのだ。

「デッケエ……」

そう、とてつもなく大きかった。街の奥に見える、砦といっても差し支えの無い建造物。

「あれは検問所。不法に国境を越えるのを防ぐためのものよ」

「へー」

町並みを見ると、しっかりした建物のほかに、結構な数の露店があった

どんなものなのか観に行こうと、俺は走り出した。

ガッ！

バタン！

「痛いっ！」

なんかにつまづいて勢いよく転んだ。

鼻に激痛が走る！

「ううう、何だよ一体」

足元を見ると、人一人分はあるであろうでかい布の塊。

「なにコレ？」

好奇心に駆られて、恐る恐る触れてみる。

ぐにゅ

・・・・・・はい？

「なにしてんのよ？」

エルナが寄ってくるが、ひとまず置いておく。今はこの手のひらに感じる感触が最優先だ。

これは…もしか…

手を放し、布ををめくる。

眼を惹いたのは鮮やかな銀色の髪。白いワンピースのようなを着ている。うつ伏せで前は見えなが、それは間違いなく女の子だった。

「・・・」

「・・・」

思考がフリーズする。頭の中には大量の疑問符。

「あの…、大丈夫ですか？」

一足先に正気にもどったのであろうエルナが話しかける。

が、返答は無い。

これはいよいよ死んでるんじゃないかという考えが脳裏をよぎった。

が、

ぐぎゅるるるる

突然鳴り響くなぞの音。というか俗に言う腹の音。

俺ではないのでエルナを見る。が、首を横に振られる。

そして、視線は目の前の少女へ。

少女はうつ伏せのまま一言。

「おなか、すいた」

俺とエルナは思わず顔を見合わせた。

がつつがつつが　かちやかちやかちや

食べ物を食べる音と、皿を重ねる音が響く。普段は喧騒に包まれているであろうこの食堂もいまは不気味なほどに静かである。

原因は現在俺の隣に座っている少女である。

先程の空腹発言を聞いた俺たちは、そのまま放置することも出来ず、近くにあつた食堂に連れて行った。まあ、俺たち自身も飯はまだったたのでそのついでだった。

道に倒れていた少女はとても綺麗だった。

透き通るような碧眼は見ていると吸い込まれそうになる。スタイルは結構いい方だと思う。エルナよりも出るところは出ている。

「ねえ、なんか今失礼なこと考えなかった？」

ジト目でエルナが睨んでくる。凶星だったが平静装って首を横に振る。こういうのを考えるのはよそう。

そして、無表情だ。全くと言っていいほど感情を窺わせない表情は、その細い体のどこに入るんだと言うほどの量の食べ物食べている間、微塵も動かなかつた。

なんて事を考えていたら、いつのまにか少女は食べるのをやめ、コーヒーを啜っていた。

「ねえ、あなた、名前は？」

エルナが尋ねる。

「…フィナ」

「フィナ？」

「（コクン）」

「そう。アタシはエルナ。よろしくね」

「俺は智哉だ。よろしく」

「よろしく」

無表情で関わりにくいかと思ったけど。存外コミュニケーションがとり易いな。

「さて、自己紹介が済んだところで、本題に入るわ」

エルナが真剣な面持ちで切り出す。そう、今一番気になるのは

「この支払い、どうする？」

フィナが食べた飯の代金だ。

「フィナ、あなたお金持つてる？」

「(フルフル)」

エルナの質問に首を振るフィナ。やっぱりか。

「今の手持ちで代金が払えないこともないわ。でも、そうすると、ほとんど一文無しになっちゃうのよ」

金。金が無ければ、宿にも泊まれないし、食べ物も買えない。どうしたもんか。

「お金、ないの？」

ここにきて初めてフィナが自分から口を開いた。

「そう、この支払いでほとんど消えるだろうから」

エルナの言葉に自分が食べた皿を見ると、フィナは申し訳なさそうに俯いた。すっごくいたたまれない。

俺がとても居心地が悪い思いをしていると、フィナが突然立ち上がった。

「着いて来て」

「どこに行くんだよ？」

「お金、稼げるところ」

そう言っつて、フィナは歩いていく。俺とエルナは慌てて立ち上がり、後を追った。もちろん、懐が大分寒くなった状態で。

フィナがやって来たのは、まるで酒場のような建物だった。

「何ここ？」

「ギルド」

「ギルド…って、あの依頼を受けてそれを達成して報酬をもらってという奴？」

「（コクン）」

首肯するフィナ。ん〜、モンオン？

「ギルドか…。そうね、入っておけば後々楽かもね」

エルナも賛成のようなので、木製のドアを開ける。

「酒くさ…」

思わずそう呟いてしまうほど、建物の中は酒気に満ちていた。

「うっ…」

「くさい」

後から入って来た二人もあまりの臭いに顔をしかめている。といつてもフィナは相変わらず無表情だが。

入り口の近くのテーブルに座っていた男達がこちらを見ている。ほとんどがエルナとフィナを見ているようだ。そりゃそうだろう。二人とも美少女なのだから。

残りの何人かは物珍しそうに俺が持っている《飛鳥》を見ている。こっちの世界では刀なんて珍しいからな。

ぐるっと中を見回す。男が多いようだが、中には女性も何人かいる。たくさんのテーブルの先に、カウンターらしきものが見えた。カウンターの中では、給仕服の女の人が書類の束をまとめている。

「フィナ、あそこか？」

カウンターを指差しながら、尋ねる。フィナは首を縦に振る。

「じゃ、行くか」

二人に声を掛けて、歩き出す。テーブルの間を通ると、周りからジロジロと見られる。少し腹立たしかったが、ひとまず無視する。

カウンターに近付くと、中の女性は手を止めてこちらを見る。

「こんにちは。本日はどんなご用件でしょうか」

貼りついたような笑顔、いわゆる営業スマイルを浮かべた受付嬢はどことなく事務的な口調で聞いてくる。

「登録をお願い」

勝手が分からない俺とエルナが変わって、フィナが応答してくれる。

「かしこまりました。では、こちらの紙に、お名前、性別、魔法の系統をお書きください」

差し出される3枚の紙とペン。適当にウソでも書こうかな、なんて魔が差したが、押し留めて、無難に『篁 智哉、男、装身系水・風』と書く。書き上げて、前に差し出す。同じようなタイミングで隣の二人も差し出した。

紙を受け取った受付嬢はカウンターの奥へ消えると、数十秒後に戻ってくる。

「こちらが登録証となります」

渡されたのは免許証くらいの大きさのカード。

「こちらがあれば、どの国のギルドでも依頼を受けることが出来ます。他にないかご用件はございますか」

「依頼を受けたいんだけど」

登録証を見ていた俺の横でさらに話が進んでいく。

「どういった依頼がよろしいですか」

「討伐系で」

「かしこまりました。では、こちらが一覧になります」

そう言って受付嬢がカウンターの上においたのは紙の束。受け取ったエルナとフィナは目を通していく。どの依頼を受けるかは二人に任せて俺は受付嬢にいくつか質問をすることにした。

「依頼って、討伐以外にどんなのがあるの？」

「討伐系のほかには、捕獲や採取、変わったところでは人探しのよなものがございます」

「ギルドにランクとかってある？」

「はい。ランクは十段階に分かれていて、ランクが高いほど難しい依頼を受けることが出来ます」

「どうやったらランクを上げれんの？」

「一概に基準はありません。その方の力量が十分だとギルドが判断すれば、ランクは自動的に上がります」

ふん、と感心しているうちにどうやら依頼が決まったようで、一枚の紙をカウンターの上に置かれた。

「え、クロウウルフ10匹討伐ですね、承りました。馬車は3番のをお使いください。では、お気をつけて」

何か知らんけど、依頼も決まったようだ。

「行きましよう」

そう言っただけで再び歩いていってしまうフィナを、俺とエルナはさっきと同じように、慌てて追いかけた。

第9話 二人目（後書き）

どうでしたか。

更新が遅いですね。他の人たちはなんであんなに早く投稿できるんでしょうか？

コツがあるなら是非とも教えていただきたいところです。

次回、智哉たちが狩りに出ます。

第10話 狩る物と狩られる者（前書き）

あーはっはっはっはっ！ごめんなさい
すいませんかなり遅れました。

今回は狩猟風景です。

飽きたりせず読んでくれると嬉しいです。

第10話 狩る物と狩られる者

ギルドの馬車に揺られること約半日、俺たちは目的地の狩場に到着した。

馬車から降り、固まった体をほぐすため、背筋を伸ばす。背筋からパキパキと音が鳴るのを感じながら目の前の光景に目をやる。

そこは、広大な森。だが、最初にいた森とは違った。木と木の間に空間があり、日が差し込んでいる。そして、生き物がたくさんいる。木の上では鳥たちが盛んに飛び交っていた。

「トモヤー。作戦会議するわよー」

馬車の方からエルナが呼びかけてくる。気づくと俺は馬車から少し離れていた。無意識で足が動いていたらしい。

駆け足で馬車まで戻ると、エルナとフィナが二人で話していた。

俺が来たことに気づいたエルナは、

「遅いッ！」

と怒鳴ってきた。いや、少しだけだろと思いつつも、待たせたのは事実なので、

「ごめんなさい」

素直に謝ることにする。

「…ま、いいわよ。で、作戦だけねど」

エルナがフィナに視線を送る。フィナはそれを受け、うなずく。

「クロウウルフはそんなに強くはない。それを補うため、3〜5匹の群れで生活している。だから、個々を集中して倒すのが定石。この中で二人が囷になって注意を惹いて、残った一人が一匹ずつ倒していく作戦」

「なるほど」

効率的でいい作戦だとは思いつけど、ひとつ疑問がある。

「囷役はだれがやるんだ？」

相手の注意を惹くなんて危険なこと女の子にやらせるなんて…

「アタシとフィナよ」

…出来ないと思っただけだ。…

「え」と、理由は？」

「クロウウルフは近距離で攻めてくるから、同じように近距離で戦うトモヤをぶつけるのがいいの。だから、必然的に囿はアタシ達になるわけ」

「そういう訳か」

ま、俺がさっさと倒せばいいか。

「んじゃ、作戦を伝えたとこで行くわよ」

エルナが立ち上がる。それに続いてフィナも立ち上がる。

「おっけ。行きますか」

俺も立ち上がると、森へ歩き出す。その後をエルナとフィナが着いてくる。

そして俺達は、狩場に足を踏み入れた。

「いた」

森に入って歩くこと数十分。草むらを覗き込んだフィナが小声で伝えてくる。フィナの後ろから見ると、群青色の犬に近い動物が4匹いた。どうやら、食事をしている様子だ。

「あれが？」

「(コク)」

俺の問いに小さく頷くフィナ。

「それじゃあ、行きましようか」

後ろから熱を感じる。ゆっくりとうしろを振り返ると、火の槍を手をしているエルナがいた。

「え！？ちよ、ちよと待…」

俺の制止も聞かず、火の槍を投擲するエルナ。放たれた火の槍は、食事をしているクロウウルフ達の後ろの草むらに落ち、爆発した。

「ほら、いくわよ」

走りながら俺の肩を叩くエルナ。見ると、クロウウルフ達は火の槍が投げ込まれた草むらを見ている。なるほど。コレはチャンスだな。

「よし、まかせろ」

言いが早い、俺は草むらを飛び出し、抜刀。一番近くにいた一匹を斬りつける。

斬りつけた胴からふたつになるクロウウルフ。その断面から血と内臓と、あとなんだかよく分からないものが溢れ出す。溢れ出した血は緑の草を赤く染め、内臓は落ちると、やわらかく弾む。

「ッ!？」

その光景を認識した瞬間、のどの奥から吐瀉物がこみ上げてきて、慌てて口を手で押さえる。くそっ! 気持ち悪い!

「ヴオオオッ!！」

はっと眼を上げると同時に、クロウウルフが飛び掛ってくる。

「くそッ!」

飛び掛ってくるクロウウルフに向かって、《飛鳥》を横なぎに払う。《飛鳥》の刃は目の前の獣の腹に食い込み鮮血を撒き散らす。出来るだけその状況を視界に入れないようにしながら、そのままクロウウルフの体を横に飛ばす。

腹を切り裂かれたクロウウルフは、短く悲鳴を上げて、動かなくなる。

「ヴオウッ!」

「ガウッ!」

残った二匹が右と左に分かれて走ってくる。

どうするかと考えていると、突然左側のクロウウルフが爆発して吹き飛んでいく。エルナの援護だ。

一匹だけになったクロウウルフの方を向き、跳躍してくるその体を、斜めに切り裂く。

「ギャウッ!」

断末魔の声を上げ、クロウウルフだったモノは地面に落ちる。

「はあ、はあ、はあ」

荒くなつた息を吐きながら、思わずへたり込む。嘔吐感はもう無い。

「お疲れ」

「大丈夫？」

エルナとフィナが走り寄ってくる。

「ん、大丈夫。問題なし。それよかエルナ、さっきは援護ありがとう
まったく、危なっかしくて見てらんなかったわよ」

《飛鳥》を鞘に収め、それを支えに立ち上がる。

「はー、しんどかった。あと何匹だっけ？」

「6匹」

まだそんなにやんなきゃいけないのか…。

「ひとついい？」

意気消沈する俺に、フィナが声を掛けてくる。

「なに？」

「さっき、なんで魔法使わなかったの？」

「あ、アタシも気になってた」

「ああ、忘れてた」

ホントに。聞かれるまですっぱり忘れていた。

「バカね」

「いいだろ別に」

「使った方が良い」

「なんで？」

「切れ味や威力が上がる。それに錆びたり、欠けたりしなくなる」

ほう、そんなオプシオンが。

「分かった。次は、やってみるよ」

「ほら、さつさと次探しにいくわよ」

いつのまにか先に進んでいるエルナが呼んでくる。

「待てよ！ほら、フィナ、いくぞ」

フィナに声を掛け、先にいるエルナの元へ駆け出した。

「痛ッ！」

先刻の戦闘から数十分経った頃、森の中を歩いていると、突然、頬に痛みが走った。頬に手を当てると生ぬるい感触。見ると、手に血がついていた。横を見ると、鋭く上がった木の枝。どうやらこれで切ったようだ。

「どうしたのよ？」

先頭を歩いていたエルナが振り返って聞いてくる。前を歩いていたフィナも振り返っていた。

「いや、ちよつと切っちゃいました」

血のついた手と頬を見せながら答える。

「ちよつと、大丈夫なの？」

エルナが心配そうに尋ねてくる。

「大丈夫。あんま深くないし」

嘘だ。感覚で分かる。結構深い。だが、無用な心配をかけることも無いだろう。

そう判断した俺に無言でフィナが近付いてくる。

「ん？どした、フィナ」

フィナは何も言わず、傷がある頬に手を当ててくる。

「…嘘。深い」

事実を言い当てられる。何このコ、人の心読めんの？

「い、いや…。そんな事は…」

「いいから。じつとして」

珍しく強い口調で言ってくるフィナ。思わず身を硬くすると、不意に傷をした頬に暖かい光が当たっていた。

光はゆつくりと消えていく。と、同時にフィナの手も離れていく。ふと気づくと頬の痛みが消えていた。手をやると、傷は痕も無く消えていた。

「これって…」

フィナの顔を見る。フィナは小さく頷く。

「私は治癒魔法が使える」

やっぱり。フィナの魔法が作戦の中で出ないのは気になっていたけど、こういうことか。

「これならいくら怪我しても平気だな」

「（フルフル）」

軽い調子で言う俺に、フィナは首を横に振る。

「私の魔法はあまり深い傷は治せない。だからあまり無茶しないで」
「おっけ。気をつけるよ」

不安そうに言うフィナに、笑顔で答えてやる。

「ほらっ！喋ってないでさっさと行くわよ！」

前にいるエルナが苛立った様子で怒鳴ってくる。

「行こう」

さつきとは逆でフィナが声を掛けてくる。

俺はそれに軽く答え、エルナを追った。

あれから何回か休憩をはさんで歩くこと数時間、やっと次の群れを見つけた。

だが、問題がひとつ。

「多すぎだろ」

見つけたのは13匹の群れ、今度の奴らも食事中だった。

「ちよっと多いわね…」

緊張したような声音でエルナが呟く。

「どうするよ？」

俺の問いにフィナが答える。

「まず、囷役が出て行って注意を惹く。攻撃役はその隙に死角から攻める。最初の予定通りに進める」

「分かったわ」

「おいおい、それでいいのかよ」

緊張した様子から一転、簡単に了解するエルナに、口を挟む。

「いいのよ。案ずるより産むが易しって言うでしょ」

それ、俺がいたの世界のことわざだろ。何故知っている。

言われても、一ミリも安心できないセリフを残し、エルナは別の場所へ移動していった。

「トモヤ」

エルナの背中を見ていた俺をフィナが呼ぶ。そういや、はじめて名前で呼ばれたな。

「頼りにしてるから」

そういつてフィナはエルナの後を追っていった。

まったく そんな事言われたら、頑張るしかないじゃないか。

俺は出来るだけ静かに《飛鳥》を抜き、水の刃を纏わせる。

直後、正面の草むらから火の槍が飛来し、一匹の狼を直撃。周囲には焦げた肉の臭いが漂った。

十二匹になった群れは、そのすべてが草むらに向き直った。

それを確認した俺は草むらから飛び出す。群れに向かって、《飛

鳥》を横なぎに振るう。刃の長さにモノを言わせ、間合いにいた二

匹をまとめて斬り捨てる。あと十匹。

「ガアアアアツ！」

同族を殺されたことに気づいた一匹が、怒りの声を上げる。

「でえいッ！」

声をあげたクロウウルフを上段から斬り裂く。あと九匹。

そこで他のクロウウルフも俺の存在に気づく。そして足元の死体を見ると、敵意を剥き出しにし、襲い掛かってくる。

が。そのうちの二匹が突然爆発。辺りには再び焦げた肉の臭い。

同時に草むらからエルナとフィナが飛び出してくる。あと八匹。

クロウウルフは俺に襲い掛かるのをやめ、辺りを警戒し出す。

フィナが右に走り出す。当然、奴らの注意はそちらに向いた。その隙を衝き、一匹を斬る。同じようにエルナも一匹を焼く。これで六匹。

「ッ！」

押し殺したような悲鳴が聞こえる。反射的に見るとフィナが転んでいた。くそッ、遠い。

クロウウルフの反応は早かった。六匹のうち、二匹はエルナの前に、二匹は俺の前に、そして残りの二匹は、フィナに襲い掛かる。

「フィナッ！」

フィナの元へ行こうとする俺の前に二匹のクロウウルフが立ち塞がる。横目でエルナを見る。近距離で来られているせいで、魔法が撃てていないようだ。幸い、攻撃は食らってはいない。だが、倒すことも難しい。俺が行くしかない。

二匹目掛けて刃を振るう。しかし、かわされる。その間も、フィナにクロウウルフは近付く。

「くそッ！どけえッ！！！」

刃を振るい続ける。それを軽やかにかわしていく獣。焦燥だけが積もっていく。

とうとうフィナにクロウウルフたちが接触した。

それを見た瞬間、妙に頭が冴えた。ほとんど反射的に柄頭で一匹に叩く。

「ヴオアウ！？」

ひるんだ隙に斬る。動揺したのか、もう一匹のクロウウルフも足を止めた。それを見逃さず、叩き斬る。

「フィナッ！待ってる！」

すでにクロウウルフはフィナに飛び掛っている。

ここからじゃ間に合わない。そう判断した俺は、飛び掛っているクロウウルフ達が重なる点へ、《飛鳥》を投擲する。

自分でも信じられないような勢いで跳んだ《飛鳥》は、見事二匹を貫く。だが、その勢いは殺せず、クロウウルフの体はフィナへと落ちていく。

それをフィナは体を捻ってかわした。

「はぁ、終わった」

おもわず、独り呟く。さっきのような嘔吐感などは湧いてこなかった。でも、なんとなく嫌な感じは残っていた。

「大丈夫!？」

エルナがフィナに駆け寄ってくる。見るとクロウウルフが二匹、黒焦げになって転がっていた。

「フィナ、大丈夫?立てる?」

心配するエルナが手を貸している。フィナは手を取り、立ち上がる。が、いきなり、顔を歪ませて、しゃがみ、足首を押さえる。

「おいおい、大丈夫かよ」

小走りで駆け寄り、フィナの足首を見る。そこは青く腫れていた。「うわあ、痛そ。転んだ時に捻ったのか」

幸い、そこまで酷いものではなかったが、しばらくは歩けないだろう。

「フィナ、治癒魔法で治せないのか」

俺は手っ取り早い解決法を言う。だが、フィナは首を横に振る。

「私の治癒魔法は自分は治せない。でも、平気。問題なッ!」

立ち上がるうとするフィナだが、やはり足が痛むように座り込む。「あんま無理すんな。しょうがない。すこしここで休もう」

提案。再びフィナは首を横に振る。

「血の臭いに嗅ぎ付けて、他の魔物がやってくる。この森には、クロウウルフより恐ろしい魔物がいる」

確かに。ここにはあいつ等しかないという訳ではない。当然だけ。

ならどうする?なにか良い方法が……ある。

立ち上がり、《飛鳥》の鞘と刀身を回収。そしてフィナの前にしゃがむ。

「なに?」

「決まってるだろ。おんぶだよ、お・ん・ぶ。ほら」

「なッ!??なに考えてるのよこんな時に!」

今までフィナの足の手当をしていたエルナがいきなり噛み付いて

くる。

「なにつて、しょうがないだろ。フィナは動けない、でも、ここから早く動かなきゃならない。だったらこうするしかないだろ」

「それは…そうだけど…」

エルナが引き下がる。まったく何だったんだよ。

「という訳で、ほら」

再度、フィナに催促。

「でも、迷惑に」

「このまま動けないままでいられるほうが迷惑だ。いいから早くフィナはさらになにか言おうとするが、やがて観念したようでおとなしく俺の背中におぶさり、体重を預けてくる。

「OK。じゃ、いくぞ」

怪我に響かないよう出来るだけゆっくり立ち上がる。

「ん、ずいぶん軽いな。フィナ、体重いくつだよ 痛いッ！」

頭を殴られた。加害者の方を向くと、

「女の子にそんなこと聞かないっ！バカじゃないの！」

すごい剣幕で怒られました。だよな、ちよつとデリカシーに欠けたな。

「ごめんなフィナ」

「…別にいい」

ちよつと間があつた。やっぱ怒ってるかな。

「ひとつ聞いていい？」

背中いるフィナが声を掛けてくる。おんぶを始めてからすでに数時間、そろそろ腕が疲れてきた。それに加えて、前に行くエルナが時折睨んでくるから精神的にも疲労が溜まってきている。

「ああ、いいよ」

疲労と一緒にやや退屈も感じてきたので丁度良かった。

「トモヤは『渡り人』だよな」

「あ、やっぱり気づいてたか」

分かる人は分かるのか。分からなかった奴が目の前にいるけど。

「元の世界に帰りたいと思ったりしないの？」

ふむ。前にエルナにも聞かれたっけな。

「率直な答えは思わない、だな」

「懐かしく思ったりはしないの？」

「ん〜、懐かしくないと言えば嘘になるな」

「じゃあ、どうして？」

「こつちの世界が面白そうだったからだ。俺は、なるべく面白いことをして、退屈しないように生きていくって決めてんだよ」

「そんな理由で…」

「俺にとっては充分過ぎる理由だ。知ってるか？俺って変な奴らしいぞ」

自分では全くそうは思わないが、周りの奴らは大体そう判断してくる。本当に失礼な奴らだ。

「……うらやましい」

「えっ？」

「私もそんな風になれたらいいのに…」

小さな、それでも重さのある眩き。俺にはその中の真意を汲み取ることが出来ない。それでも、一つだけ言える事が俺にはあった。

「多分なれるさ」

「えっ？」

「人の可能性は無限だ、とか無責任なことは言わない。でも、努力すれば大概のものにはなれるんじゃないかと俺は思う」

「…」

フィナは何も言わない。俺も更に何かを言う気は無かった。しばらくすると、フィナは小さく息を吐いた。首筋にかかってこそばゆかった。フィナは言葉を紡ぐ。

「ダメ。トモヤみたいにはなれそうにない。でも、ちょっと元気出た。ありがとう」

そう言っつて、フィナは俺の首に絡めた腕に力を込めてきた。

…うん、あのね、なんかキレイにまとまった感じがするんだけどね。現在俺は由々しき事態に直面している訳でして。俺は現在進行形でフィナをおんぶしていて、その状況下で腕に力を込められると、背中に極上にやわらかいものが押し付けられる訳でして。この雰囲気ですごいことを発言するのはありえないし、かといってこのままだと俺の理性がどうにかなくなっちゃいそうだし。ああもう、どうすりゃいいんだよこんチクシヨウ！

こんな感じで悶々としながら、俺の人生初めての狩りは終わりに向かって行った。

第10話 狩る物と狩られる者（後書き）

戦闘の描写に若干納得のいってない作者です。

今回の話はいかがでしたか？

もし、どこかでイラッとしたのでしたら謝罪します。

次の話は、まあ、色々あります。

第11話 事後と始まり（前書き）

今回は早めに更新できました。
ま、読んでみてください。

第11話 事後と始まり

扉を開けると、濃厚な酒の臭いが鼻を突く。おそらくこの臭いに慣れることは絶対に無いだろう。というか慣れたくない。

狩場から戻った俺たちは、そのままの足でギルドに來た。依頼の結果の報告の為である。初めての時よりは、しっかりした足取りでカウンターへ向かう。またジロジロ見られる。本当に殴りたくなつたが、何とか我慢する。

カウンターの前まで来ると、フィナが一步前に出る。

「依頼を達成した」

そう言つてカウンターの上に登録証を置いた。受付嬢はそれを受け取ると、

「確認いたしますので、少々お待ちください」

と言い残して、カウンターの奥へ消えていった。

少し経つと、戻ってきて、

「確認が終わりました。こちらが達成金になります」

カウンターの上にフィナの登録証と布袋を置く。

それを受け取つたフィナが、

「どこかに座ろう」

と提案する。特に反対する理由も無かつたので、空いたテーブルを探す。

お。丁度近くに空いてんじやん。俺は指を指して二人に知らせ、そこに向かつて歩き出す。

「オイガキ」

いきなり目の前に筋骨隆々の男が現れる。見るととても友好的とは見えない表情をしている。ちなみにスキンヘッド。

「えーと、何か御用ですか？」

頭を掻きながら尋ねる。

「ここはガキの來る場所じゃねえんだよ。とつとと失せる」

ああ、なるほど。俺がここにいるのが気に食わないということらしい。

正直迷惑だ。どこにいようと俺の勝手だろ、と思う。だが、個人的には、こうやって自分の思っていることをそのままぶつけてくる性格は非常に好ましく思える。こそそこそこち見て、腹の中でゴチャゴチャ考える奴よか数万倍マシに思える。なので、

「あー、とりあえずもう少ししたら出て行くんで勘弁してもらえないですか」

物腰丁寧に話してみる。

「うるせえんだよ。いいからさっさと出て行かないと…」

いいながら男は、近くのテーブルから水の入ったコップを取ると、「こうなっちまうぞ！」

中の水を俺の顔にぶちまけてきた。周りのテーブルの奴らの嘲笑が聞こえる。

水をかけてきた男はニタニタ笑いながら

「ほら、早く出て行かねえともっと酷いことになるかもしれねえぞ」と告げてくる。

俺は前髪から雫を垂らしながら一言。

「気が済んだんならどいてくれないですか」

と何事もなかったように言う。男は一瞬呆気にとられるが、すぐに先程よりも憤慨した表情になる。

「テメエ！調子に乗ってんじゃねえ！」

怒声を発しながら拳を振るってくる。が、横合いから止められる。

「もう止める」

止めたのは髭を生やした男。

「で、でもよう…」

「いいから止める」

大きくは無いが凄みのある声。男は渋々ながら拳を下ろした。どうやら仲間のようだ。

「…チツ！」

男はわざとらしく舌打ちしながら近くの席に座る。髭を生やした男はこちらに向き直ると、

「すまない。連れが失礼をした」

と言って、頭を下げてきた。

「いいですよ。気にしてないですから」

こちらが問題ないという旨を伝えると男は顔を上げ、

「そうか。そう言ってもらえるとこちらも助かる。では」

もう一度頭を下げると、さっきの男と同じテーブルに座った。

「ちよつと大丈夫なの？」

慌てた様子でエルナとフィナが駆け寄ってくる。

「ん、問題なし。はやく座る」

そう言っただけ何か言いたそうにしている二人を席に着かせる。

「…じゃあ分配する」

フィナはなにかを言いたそうにしたが、本来の目的を切り出してくれた。

「えっと、三等分よね」

エルナが達成金を分けようとする、フィナがそれを手で制する。

「フィナ？」

「もともと私のせいだから、私の分はいい」

確かに元はフィナの飯の代金で所持金のほとんどを使ったから、ここに来ただけだ…

「ダメよ。フィナも一緒に戦ってくれた。だから、キッチリ三等分」

そう言つと、エルナはいつの間に分けたのか、いくらかのお金をフィナに押し付ける。同時に俺にも同じくらいのお金を渡してくる。

「でも…」

「いいから受け取る」

遠慮するフィナをエルナが押し切る。それを受けたフィナは諦めたよう、受け取ったお金を服のポケットにしまう。俺も同じようにしまう。

それを見たエルナは満足そうな表情になる。

「よし。じゃあ、達成祝いに乾杯しましょう。すいませーん！」

近くにいたウェイトレスを呼ぶ。

「はい。ご注文は何になさいますか」

テーブルにやってきたウェイトレスは営業スマイルを浮かべて尋ねてくる。つてメニューとか無いんだけど…

「コーヒー」

「アタシ紅茶。トモヤは？」

あ、なるほど飲み物な訳ね。

「じゃあ、オレンジジュースで」

「はい、かしこまりました。少々お待ち下さい」

ウェイトレスはカウンターへ向かっていく。

「アーハッハッハッハ！」

いきなり笑い声が聞こえる。声の主は、先程絡んできた男だった。

男は笑いながら続ける。

「オレンジジュース！ガキの飲むもんだな！下らねえ！」

ドゴツ！ と言う鈍い音がギルドに響く。

なんてことはない。ただ俺がさっきのハゲを《飛鳥》で思いつきりぶん殴っただけだ。

周囲の人間が唾然としてこっちを見てくる。その視線を無視して、吹っ飛んだ男に向けて、吼える。

「さっきからごちゃごちゃうっさいんだよハゲ！」

ハゲからの返答は無い。どうやら気を失ったようだ。

周囲の人間がさらに呆気にとられている。

「お、おい」

先程の髭の男が話しかけてくる。

「はい。なんですか」

素に戻して対応する。

「い、いや。なんでもない」

座っているテーブルに視線をやる男。こういう態度は大嫌いだ。

「そうですか。じゃ、これで失礼します」

「あ、ああ」

俺が元の席に戻ると、エルナとフィナが俺に向けて、非難の眼を向けてくる。

「な、なんだよ」

「悪い意味で目立つっちゃったじゃない」

「風評が悪くなる」

二人から攻められ、俺、ダメージ大。

その後頂いたオレンジジュースは大変美味しゅうございました。

「ん〜、空気がうまい」

酒気に満ちているギルドから出ると、外の空気がとても旨く感じた。

「で、これからどうする？」

一足先に出ていたエルナが聞いてくる。

「って言われても、この街あんま詳しくないしな…。フィナ、どこか行きたいところあるか？」

後ろにいるフィナに尋ねる。

「……………」

フィナは顔を僅かに伏せ、何かを考えるような仕草をした。数秒後、

「あそこ」

そう言っつて、どこかを指差す。指差した先にあったのは、

「屋台…か？」

そこはクレープでも売っつていそうな屋台。丁度、男女の二人組が注文しているところだった。

「いいわね。丁度小腹もすいてるし」

エルナが賛成の意を示す。俺としても嫌がる気も無いので、

「じゃあ行こうか」

と言って、屋台に足を向ける。

屋台の前に着くと、前の男女が注文を受け取ったところだった。

が、受け取っているものが予想とは違った。クレープとかのスィーツ系かと思っていたが、目の前で受け渡されているのは、パツと見肉だった。

「エルナ、アレ何よ？」

隣にいるエルナに聞いてみる。

「何って、ドネルケバブよ」

「ドネルケバブ!？」

確か、スライスした肉を固まりにして、それを回転させながら焼いたものを削ぎ切りしたものだったはず。

前にいた男女が抜けて行き、エルナが前に出る。

「三つください」

「あいよ。三つだね。少し待ってくれよ」

屋台の中のおじさんは愛想よく応え、肉を焼き始める。肉の焼けるいい匂いが鼻を刺激する。あまり感じていなかった空腹感が、一気に増幅する。

しばらくして、おじさんが、紙でくるんだドネルケバブを差し出してくる。三人がそれぞれ受け取り、代表で俺が支払う。それから、近くのベンチに座って食べ始める。

「ナニコレ、うまっ!」

噛むと、肉汁が染み出てきてパサつかず、やや脂っこいが、薄い味付けで丁度いい感じになっている。あっという間に食べ終わってしまう。

満腹状態で横の二人が食べ終わるのを待っていると、すぐ近くに馬車が停まるのが見えた。中から黒い服の上に白衣を羽織っているという、なんとも妙な服装の男達が降りてくる。一体なんだろうと思ひ、眺めていると、その男たちは、素早い動きで俺たちが座って

いるベンチを囲んでいくではないか。

「な、なんなんだ、アンタら！」

黒服の男たちに叫ぶ。が、彼らは顔色一つ変えない。

ふと、男たちの一部が割れ、一人の男が出てくる。茶髪をオールバックにし、フォーマルな服装に身を包んでいる。顔立ちはお世辞にも整っているとは言えず、頬もやや扱けていて、顔色も悪い。

男はゆっくりとした動作で、俺たちの正面に立つと、

「フィナ、探したぞ」

と言った。口ぶりからして、かなり近い間柄らしい。

フィナは男から顔を背ける。男はそんなフィナの様子に特に気を悪くした様子もなく、今度は、

「うちのフィナがご迷惑おかけしました」

と言い、俺とエルナに一礼する。そして、再度フィナの方を向き、

「帰るぞ」

と言うと、フィナの手を掴み、強引に立たせる。そのせいで食べかけのドネルケバブが地面に落ちるが、男は気にも留めず、そのまま、フィナを引っ張っていく。俺は慌ててフィナの反対の手を握る。

「何だね？」

男が足を止め、こちらに振り返る。言葉は丁寧だが、若干苛立っているようにみえた。

「何だはこのうちのセリフです。アナタは誰なんですか？」

俺の問いに、男はわざとらしく申し訳ないという顔をつくる。

「おっと、自己紹介が遅れましたね。私はヘレイ・クリミナル。街の外れにある研究所の所長を務めています。このフィナ・レノウドは研究所の重要な研究に欠かせない人材なのですが、数日前、忽然と姿を消してしまい、我々もずっと探していました。そして、今しがた姿を見かけたので、急いで連れて帰ろうと言っわけです」

男は饒舌に語る。でも俺は男の話は聞いていなかった。フィナの顔を見ていた。知られなくなかった。フィナの悲痛な表情はそう語っていた。

「少々、お喋りが過ぎましたね。時間がない。ではこれで失礼します。フィナ、急ぐぞ」

そう言って男は再びフィナを強引に引っ張っていく。

「待って…」

「ですから」

俺の言葉を遮るように、男が口を開く。男の目が細まる。

「時間がないと言っているでしょう」

瞬間、後頭部に鈍い痛みが走る。後ろを見ると、周りの男の一人が血のついた石を待っていた。あれで殴られたようだ。

手足の力が抜けていく。意識が暗闇に落ちていく。

最後に聞こえたのは、エルナの悲痛な叫び。

最後に視たのは、悲しそうな表情で馬車に乗り込むフィナ。

最後に考えたのは、フィナを助けたいということだった。

第11話 事後と始まり（後書き）

どうでしたか。

ドネルケバブの味の感想テキストです。信じないでください。
次は、まあ、ネタバレすると智哉がフィナを助けに行きます。
お楽しみに〜

第12話 侵入者（前書き）

今回はちよつと短いです

そして勢いで書いたので微妙です

作者は戦闘の描写が苦手です

あしからず

第12話 侵入者

雨粒が窓を打つ音で目が覚める。まず視界に映ったのは見知らぬ天井。体が柔らかい布団に横になっていることを感じ、そこで、さっきの出来事を思い出す。

「あの野郎 ツ!？」

勢いよく上体を上げると、頭に痛みが走る。手を当てると真新しい包帯が巻かれていた。

周りを見渡すと、見たことの無い部屋だった。宿屋かどこかの部屋だと適当に予想をつける。

ふと気付くと、ベッドの脇に置いた椅子に座りながらエルナが眠っていた。俺が気絶している間、ずっとそばにいてくれたのだろう。とても嬉しく感じた。

すつと、頭が切り替わる。思い出されるのは、先刻、気絶する寸前に見たフィナの表情。記憶の中のいくつかの表情と比べる。

さて、やる事は決まった。ゆっくり音を立てないようにベッドから下り、かけていた毛布を、そつとエルナにかける。窓の外を見ると、外は激しい雨が降っていた。傘は無い。でも気にならない。雨は嫌いじゃない。むしろ好きだ。いつもならこんな土砂降り気分が高揚して仕方が無いのだが、今はそんなことは無かった。

壁にたてかけてあった《飛鳥》を掴み、部屋を後にする。

宿屋から出て数十分後、研究所の前に到着する。研究所は異常なまでの白色。ここまでくると、清潔よりも潔癖のような印象を抱く。この場所を教えてくれた宿屋のおばさんが、気になる噂を教えてください。なんでも、この研究所に定期的に魔物が届けられているという。おそらくあのヘレイが言っていた研究に関係あるのだろう。

正面の玄関から入ってもいいが、警戒されても面倒に思う。グル

ツと周りを歩くと、関係者用と書かれた扉があった。鍵がかかっていたので、扉を斬って中に入る。

中の壁や床まで白一色。長くいると気分が悪くなりそうだ。

足音を立てないように歩く。廊下は入り組んでいて、道がいくつにも分かれている。案内板などあるはずも無いので、適当に進むことにする。

右。左。直進。左。左。直進。右。直進。左。右。左。左。左。直進。右。左。直進。直進。

そこまで進むと、大きな扉の前に辿り着く。鍵がかかっていたので、さつきと同じように。

中の部屋は、かなり広かったが、薄暗く、中を全部見ることが出来ない。さらに気になったのは

、部屋にこもった獣臭。横の壁を探ると、スイッチと思しきものに指が触れる。試しにつけてみると、部屋が一気に明るくなる。明確に分かるようになった部屋を見て、俺は息を呑んだ。

見渡す限りの檻、檻、檻。その部屋の半分が檻で埋め尽くされていた。

檻の中を覗く。その中にいたのは、

「魔物：か？」

中にいたのはネズミ。大きさが犬ほどはあろうかというネズミ。足が六本あるネズミ。

他の檻も見る。人の手が生えたような蛇。頭と尾が二つある鳥。

腕と足の関節が二つある熊。

他にも冗談みたいなカタチの魔物達がいた。これが運ばれてきたという魔物たちなのだろう。

「可哀想だ…」

無意識に呟く。彼らを見た率直な感想だ。人の命を脅かす存在だと知りつつも、同情せずにはいらなかった。

ふと、一つのアイデアが浮かぶ。それを頭の中で何度か反芻。そして、口元を歪める。

しょうがない。俺は迎え撃つために《飛鳥》をかまえる。人殺しはしたくないので、鞘に収めたまま。

まず左側の男が攻めてくる。その体格に似合わぬ素早い動きで左拳を繰り出してくる。それを冷静に見切つて、しゃがむようにしてかわす。が、かわした先にもう一人の男の蹴り。慌てて転がるようにして避ける。

男達は再び連撃して攻撃してくる。片方に対応すればもう片方がもう片方を狙えばまた片方が。そいつを狙うともう一人が……
「つて、うつとうしいんだよおおッ！」

うざい。すぐうざい。攻撃当たらなくてイライラする。

片方の男が襲い掛かってくる。俺が一步踏み出すと、距離をとろうと急ブレーキをかけ、男は体勢を崩す。そこで鳩尾に思いっきり鞘を叩きこむ。苦しそうな息を漏らし、男は倒れる。

仲間がやられたにも関わらず、もう一人の男は果敢に攻め入ってくる。拳と蹴りが縦横無尽に繰り出される。その攻撃を出来る限りかわし、無理なものは《飛鳥》で受ける。

攻防は続く。直撃はしないものの、じりじりと後退させられる。とそこで踵に何かが当たり、そのまま倒れかける。足元を見ると、先程両断した扉。――まずい。

思った通り、男は勢いよく飛び掛ってくる。

(なにか、なにか逆転のチャンスは……)

そう思い、必死で頭を回転させる。倒れこむまでの数秒間、信じられないような速度で考えがまとまっていく。

背中が床に当たる。と同時に身を捻つて横に転がる。飛び掛ってきた男は、誰もいない場所に渾身の一撃を繰り出す。全力の一撃はそう何度も撃てない。体を戻すのに数秒いる。体が大きければなおさらだ。その一瞬を最大限活かす。

勢いよく上体だけ起こし、その体勢から出せる限りの力を込め、男の顎を殴りつける。男はぐったりとした感じで倒れこむ。

俺は立ち上がったって、ゆっくりと深呼吸する。そして、廊下の先に

ある扉に歩き出す。

第12話 侵入者（後書き）

どうでしたか

最後の方の戦闘シーンは正直適当です

次の話は長くなる予定なので、更新が遅れるかもしれませんが
ご了承ください

第13話 少女のための戦い（前書き）

いやー、案外早く出来てしまいましたね。夏休みだからでしょうかね。

まあいいや、どござ読んでください。

第13話 少女のための戦い

両親がいた頃の記憶は少ない。その中で一番鮮明に覚えているのは、父親におぶられていたときの記憶だ。

物心ついた頃には両親はすでに死んでいて、引き取られた先ではたくさんの先生にたくさんのお話を教えられた。

先生たちは口々に言う。

「キミは天才だ。出来ないことは無いだろう」

子供心にも分かった。そんなことはない。出来ないことが無いのなら、なんで私はあの窓の外にいる子供達のように遊べないのだろう。

ある程度の教育が終わると、次は養父の研究所で研究をするよう言われた。私はそれに従順に従った。養ってもらっている恩があるからだ。だから、どんなに怪しげな研究も、疑問を持たずに続けた。ある時、自分ひとりの研究室を渡された。そこで、また新しい研究をするように言われた。でもそれは、今までとは違うものだった。その研究を続けていくには、感情があまりにも弱かった。だから自分分は、感情を押し殺した。もともとあまり感情を表に出さない方だったので、そこまで苦労はしなかった。

でも、完成に近づくにつれて、耐え切れなくなった。恐ろしくなった。だから逃げ出した。抜け出すのは簡単だった。

外ははじめて見るものに満ち溢れていた。

元気に走り回る子供たち。声を出してお客を呼び込む店の人。物騒な武器。美味しそうなお菓子。じっと見すぎて怪訝な顔をされたりもしたが、気にならなかった。

一日中、いろんなものを見続けた。お金もなく、宿にも泊まれなくてボロ布を纏って眠った。空腹を感じたが、今まではそんなこと感じたことも無かった。少し嬉しかった。

それでも、一日以上何も食べないと、やっぱり辛い。空腹のあま

り、倒れてしまった。

そんな時、二人に会った。二人は見ず知らずの自分にごはんを食べさせてくれた。そのせいで自分たちのお金が無くなったとしても、そんな人を見たのは初めてだった。自分のせいだったから申し訳なくなつた。だから、せめてと思つて、ギルドに連れて行つた。ギルドに行くのは初めてだったけど、うまく登録できた。

はじめて街の外に出た。狩りはそんなに大変じゃなかつた。魔物の血は見慣れてるから。でも、彼の血を見ると、とても嫌な感じになつた。自分の治癒魔法は今まで使う機会が無かつた。そのときがはじめてだった。

狩りの終盤、私は怪我をした。自分の魔法で自分を治せないことが齒がゆかつた。迷惑をかけたくなかつたから

自分で歩こうとしたら、彼がおぶると言い出した。断ろうとしたが、断りきれなかつた。

帰路は彼におぶられていた。おぶられていると、両親の記憶を思い出した。彼の背中は父親より小さかつたが、不思議なことにとても広く感じた。

道中、彼は言った。「努力すれば人は大抵のものになれると思う」と。なげやりな言葉だった。でも、今までに知つたどんな名言よりも、私の心に響いた。彼にそんな気は無かつたのだらう。だから余計に響いたのかもしれない。

街に戻つてから、私は思うようになった。ずっとこのままでいた

でも叶わなかつた。見つかつてしまった。二人に知られてしまった。知られたくなかつた。彼は私を連れて行かせまいとしてくれた。彼は危害を加えられた。

私のせいだ。私が研究所を抜け出したから。私が彼らと関わつたから。私があんなことを願つたから。

研究所に帰り、私は無心に研究を完成させようとした。完成が近付いてることを知っているため、所長は、ずっとこの研究室にいる。

突然、研究所内の警報装置が鳴った。私が気にしたような素振りをみせると、所長は続けるようにと、伝えてきた。私はそれに従った。扉の外から重厚な音が聞こえても、戦闘音が聞こえても、扉を開ける音も無視した。研究があと少しで完成する。

でも、次に聞こえてきた音は無視できなかつた。なぜなら、

「フィィナ、遊びに来たよー」

それはあまりにも、この場に不釣合いで、脈絡が無く、唐突で、軽い、子供のような、

「トモヤ・・・！」

もう会うことは絶対に無いと思っていた少年の声だったから。

扉のノブに手を掛け、一気に開ける。

そこはただっ広い部屋。いくつもの実験台があり、その上にはなんだかよく分からない器具や装置がある。

部屋の中にはこちらを見て、怪訝な表情をしているヘレイ・クリミナルと、装置に向かってなにやらしているフィナの二人しかいなかった。

フィナはこちらを向いてすらいない。しょうがないので呼ぶことにする。

「フィィナ、遊びに来たよー」

真面目なのは性に合わないので、ふざけて呼んでみる。はっとフィナは振り返る。信じられないようなものを見る顔で、

「トモヤ・・・！」

なんて言ってくるから、

「おっす」

と、軽く応える。

「なんで、、、どうして...」

フィナが呆然と呟く。

「だから言つたる、遊びに来たって」

「だから、それが…」

「それにそちらの方にやられた一発、返すのもあつたし」

言いながらヘレイを睨みつける。

すると、ヘレイが大仰に肩をすくめる。

「キミのその傷は私の部下がやったもの。私に返されても困るよ」

「上司なら部下の後始末くらいつけろよ」

「それもそうだな。なにより…」

ヘレイは俺が入つて来た扉の向こうを見ると、

「キミをこのまま帰す訳にも行かないようだ」

険悪な目つきになった。

「いえいえお構いなく。暗くなつたら勝手に帰るんで」

「そう言うな。そういえば、キミは遊びに来たんだけだね」

言いながらヘレイはフィナに近付いていく。俺は何かあつたら飛び出せるように身構える。

ヘレイはフィナのすぐ近くの台に置いてあつたビールを取る。中の液体を赤い液体で満たされた大きな器に入れる。ビールの中の液体がすべて注ぎ込まれると、器に入っていた赤い液体が一気に透明になる。その液体の中には赤い球体が沈んでいる。

「では、面白いものを見せてあげよう」

ヘレイは着ている服の上だけを脱ぎ捨てる。彼の体に贅肉など見られない。あるのは、骨と皮とほんの少しの筋肉だけだった。ヘレイは器の中に沈んでいる赤い球体を手に取ると、自らの心臓の位置に押し当てる。

瞬間、球体が体にめり込み、そこから神経や血管が浮き彫りになつていく。その光景に目を奪われていると、ヘレイの体が更に変化していく。まずは体格。お世辞にもがっしりしているとは言いがたい痩せ細った体だったが、急激なスピードで成長し、瞬き一つする間に2メートルを優に超した。体の細部にも変化が現れる。腕の

長さが足の膝を越すほどに長くなり、爪は異様なほどに鋭くなる。足も大きく、特に太ももの筋肉が肥大化する。足先の形状も人のそれではなく、獣のように爪先立ちになっている。体につく筋肉はただついているわけではない。必要な分だけ、行動に最適な分だけついている。病的なほどに吊りあがり、見開かれた眼。その姿はまるで

「ケモノだな…」

「ほう、なかなか鋭いじゃないか。ウチに欲しいくらいだ。だが…」
ヘレイはこちらをキツと睨みつける。

「キミは少々、やり過ぎた」

言い終えると同時に、ヘレイは襲い掛かってくる。その巨軀に合わぬ俊敏な動き。反応はギリギリだった。

「くッ…！」

ギリギリで拳を鞘で防ぐ。と同時に、刃で胴体を斬り付ける。切り口から鮮血が流れる。が、

その傷は一瞬で塞がる。

「なっ!?!」

驚いて声を上げる。ヘレイは意地の悪い笑みを浮かべたまま動かない。遊ばれてるなこりゃ。

折角なので乗っかることにする。振り切った刃を返し、今度は突き出している腕を斬る。が、また塞がる。

「ちっ…」

効果が無いのが分かり、一旦後ろに退く。

「くくく。どうだいこの能力ちから。素晴らしいだろう?」

「人間離れしてんな。むしろ魔物の方が近いんじゃないか」

「ほほう、なかなか鋭い。やはりキミはいい科学者になれるよ」

「そりゃどうも　ッ…」

今度はこちらから向かっていく。ヘレイはニヤけたまま動かない。

完全に舐められている。

「ざけんなっ!!」

大上段から振り下ろす。その刃を手で掴まれる。そして躊躇い無くその刃を握り締める。手のひらから血が滴り落ちるが気にした様子は無い。刃を引こうとするが、微塵も動かない。

「くくく。手も足も出ないとはこのことだね」

「…その笑い方、趣味悪いからやめた方がいいですよ」

冷や汗を流しながら言う。ヘレイはそのまま腕を引き、俺をぶん投げる。軽く5メートルは投げられる。キレイに受け身など取れるわけ無いので、無様に着地する。

「いつてえ…」

「どうしたどうした。ほら今度はこっちから行くぞ!」

言うが早いが走り出すヘレイ。……キヤラ変わってない?

そんなことを考えてる間にヘレイはかなり近付いていた。こちらに繰り出されるのは右の拳。ギリギリで防げるタイミング。拳を防ぐと、すぐに戻し、今度は左。これは防げない。脇腹に食らう。すんごく痛い。でも骨が折れた感じはしない。再び右。食らう。左。防ぐ。右。食らう。左。食らう。右。食らう。左。食らう。

何回も殴られるが、大きなダメージにはならない。この野郎、遊んでやがる…。

殴られた回数が二桁を超える。ふと、拳が止まる。見ると、俺とヘレイの間にフィナが割り込んでいた。

「なんのつもりだ、フィナ?」

ヘレイの鋭い眼光にもフィナはひるまない。

「もうやめて」

「なんだと?」

「お願い、もうやめて。私は何でも言う通りにする。だからトモヤは見逃して」

フィナは言う。自分の身を呈して俺を助けて欲しいと。まったく、助けに来たのはどっちなんだか。

フィナの願いを聞いたヘレイは笑う。慈しむように笑う。あまりにも似合わない笑顔。その笑みが嘲笑に豹変する。そして、フィナを横に弾き飛ばす。

「てめえ！なにしてやがる！」

「ふん。笑わせるな。何でも言う通りにする？そんなのは当然だ！
貴様は私のモノなのだからな」

フィナが…コイツのもの？

「おい…、どういうこったそりゃあ？」

俺の問いにヘレイは笑みを深くする。

「そうだな…」

ヘレイは飛ばされたまま動かないフィナを横目で見る。

「いいだろう、教えてやる」

典型的な悪役のセリフだなオイ。

「そうだなまずは…、フィナの両親の話からだな。二人共私の研究所で働いていた。可も無く不可も無い平凡な科学者だった。だが二人の娘は違った。幼い頃からその頭脳の片鱗を現していた。私は二人にその娘をこの研究所に入れるよう命令した。だが、二人は拒絶した。こんな研究、娘は知らなくていいと。そう言い残して二人はここを去っていった。それでも私は諦め切れなかった。どうしてもフィナが欲しかった。だから、私は…」

「二人を殺した」

！フィナの両親が…、どっかで聞いたような話だな。

「両親を失ったフィナを引き取るのは容易かった。金さえつぎ込めばどうにでもなった。フィナは私のモノになった。私はフィナに勉強をさせた。ただただ研究のためだけに使う為の知識を教えた。当然だろう。モノは使い勝手がよくなくてはならないからな。研究をさせると面白いように結果を出してくれたよ。研究の内容が少々この年の子供には酷過ぎたようで感情の起伏が平淡になったが…、ま

あいだろう。私が私のモノをどうしようかと、私の勝手だからな」話を聞き終えた俺の頭は混乱していた。感情が平淡？それほどまでに酷い中身の研究をさせた？自分のモノだから別にいい？この男は何を言ってるんだろう？

「くくく。お喋りが過ぎたな。どれ、そろそろ終わりにしようか」ヘレイが何かを言っているが、全く頭に入っていない。ひどい耳鳴りがして鼓膜が痛い。視界が窄まっていく。妙な浮遊感が体を包んでいるのを感じたのを皮切りに、少しずつ感覚が戻ってくる。

開いた俺の視界に映ったのは、左肩からごっそりと切り落とされたヘレイの姿だった。その光景に啞然とする。

《飛鳥》の刃に血が付いているのが見え、自分がやったのだと分かる。

俺の意思ではなく口が開く。次いで出てきた言葉は、自分で出しているのか信じられないほど冷たかった。

「なんだ。心臓真つ二つにするつもりだったのに。さすがケモノと言ったところか」

対するヘレイは、傷口ではなく、左胸を抑えている。

「キ、キサマ、よくもお……！」

ヘレイがてをどける。どけられた手の下からは欠けている赤い球体が見えた。だが先程までとは違い、膨張し、今にも破裂してしまいきそうな印象を覚える。

「そんなこと知ったことか。ほら、次行くぞ」

そう言っただけは構える。そこで俺は気付く。《飛鳥》の刀身が淡く光っているのを。なんなのだろうと考える前に、体は走り出す。その姿を見たヘレイは残った右腕で向かってくる。それを見た体は右拳の軌道に刃を構える。構えた刃は、振るわれた拳の中指と薬指の間に入り、その手首までを切り裂いた。

「ぐっ！がああああああ！」

絶叫を上げ飛びのくヘレイ。その両腕からは夥しい量の血が溢れ出していた。

それを見た俺は疑問を抱いた。

「おまえ、傷が治っていない？」

言って自分で驚いた。自分の意思で体が動いた。手も動く。問題ない。さっきまでののは何だったのだろうか。

「う、うあああ…」

呻き声にはつとずる。声のした方を見ると、ヘレイが胸の球体を押さえて悶えていた。

「う、うああ…、うがああ…、あああああああああああああ！！！」

呻き声はやがて絶叫へと変わっていた。変化は急激に訪れた。球体の周囲の肉が蠢き、体の大きさがさらに肥大していく。切り落とされた左腕が生えてくる。だがその手は元の腕とは大きく違い、長さが地に引きずられるほどまでであった。右手は中指と薬指の間で分かれたまま、遠目には指が三本しかないように見える。顔の形状も変化し、目は塞がり、口が耳まで裂けて歯が剥き出しになる。体表の色までも変化する。球体を残し、すべてが白になる。最も、研究所の白とは違いくすんだ白である。最初に球体によって訪れた変化とは、また違う変化の仕方。それはまるで暴走。

「つつか今度はマジでバケモノじゃねえか…！」

ヘレイの変化の様子は見ていて気持ちのいいものではなく、背筋がゾツとする光景だった。

「がるあああああああああ！！！」

体の細部はまだ蠢いているものの、大きな変化が止まったヘレイはこちらを向いて吼える。吼えたときに口の端からよだれが滴り落ち、嫌悪感を覚える。《飛鳥》を構える。そこで違和感に気付く。

刀が軽い。《飛鳥》の重量には慣れていたものの、ここまで軽く感じることは無かったと思う。原因として思い当たる節は一つ。光り続ける《飛鳥》の刀身。

「があああああああああ！！！！！」

刀身に気をとられている隙に、異形の姿になったヘレイが突進してきた。恐るべきスピード。この世界に来て始めて遭ったイノ

シシよりも速いと思う。でも、軽く回避することが出来た。体が軽く感じる。まるで羽のようとはでは行かないが、一メートル程横に跳んだつもりが、五メートル近くも跳んでしまった。

時間があればもう少し考えたいが、今はそんな時間が無い。すでに相手はこちらを向き、なにかしようとしている。

「ヴォウツ！」

「！！」

左腕が伸びた。引つ張ったゴムひもを戻したような勢いで腕がこちらに向かってくる。いつもなら避けることも難しいだろう。だが今なら容易い。それどころか、途中で切り落とすことさえ出来る。

「ヴォアアツ！？」

腕を切り落とされたヘレイは悲鳴を上げて腕を戻す。が、次の瞬間には左腕は元通り生えていた。

「ギイイ」

口角を吊り上げて笑ったヘレイはそのままこちらに駆けってくる。俺も駆け出す。交差する瞬間、ヘレイはこちらの首を引き裂こうとしてきたが身がかがめて回避。同時に、ヘレイの左足をすねの辺りから切り裂く。

スピードを緩めて振り返ると、すでに足が再生し、こちらを向いて笑っているヘレイがいた。

「これは…タフなことになりそうだな」

思わず苦笑すると、それに呼応するようにヘレイが襲い掛かってきた。

数十分経ったと思う。自分の体感時間なので本当はもっと短いかもしれないしもっと長いかもしれない。

すでにこの部屋は、切り落とされたヘレイの体の部位がゴロゴロ転がっている。腕や足はもちろん、下半身まるごとだったり、頭だつたりするのでかなりグロイ。子供がみたら絶対小便もらすレベル

だ。

そこまでスプラッタになるまで斬られたヘレイは恐るべきことにまだピンピンしている。まじでバケモノだ。対して俺は、結構ボロボロ。始めの辺りに結構殴られたし、途中から強くなったけどそれでも全く無傷とはいかないわけで、すれ違い様に何回か食らったりした。《飛鳥》の刀身の光も始めに比べて幾分弱くなった。もう長くは保たないだろう。

「ぐらあああああ!!！」

どんなに斬ってもすぐに回復して向かってくるヘレイに苛立ちが募る。もう何度目かも分からないヘレイの突進が来る。かわすのは容易い。でもそこで攻撃するのは難しい。

と、そこでヘレイが急停止。至近距離でのラッシュを繰り出してくる。動きは速いが攻撃直線なので避けることに集中し無くてもかわせる。その頭の余白分を使って、こいつを倒す方法を考える。

ふと思いつく。そして呆れる。ヘレイにはなく己に。思えば簡単なことだった。コレが原因だったのに。その場面を見ていたのにどうしてこんなことが思いつかなかったのだろうか。はじめから狙うべきだったのはコレなのに。

結論に至った俺は、ヘレイから一旦距離をとり、駆け出す。

「ヴオウアアア!!！」

向かってくる小さな敵に対し、ケモノは腕を伸ばす。あたればその身が裂けるような一撃を。だがそれはかわされる。その腕が戻ってくるまで、ケモノは腕を一本使えない状況になる。その隙に小さな敵はケモノの懐に入り込み、そこから抜け出す。

入り込んで抜け出すわずかな間に、ケモノの左胸にある赤い球体を両断して。

球体を破壊されたケモノの体が崩れ落ちる。もう立ち向かってくる様子はない。それを見た俺は小さく安堵の息を吐く。

「う…うあ…、な…なぜ…だ」

「!!！」

うつ伏せに倒れているヘレイの体から、呻くようなヘレイの声が聞こえてくる。

「なぜだ…、魔物のチカラを手に入れたこの私が…、なぜ…」

「…違うからだよ」

「な…なに…」

「アンタが手に入れた強さは、アンタの強さじゃないからだよ」

「…ふっ、答えに…なっていない…い…ぞ…」

ヘレイの体が消えていく。いや、正確には溶けていく。最後の残ったのは、砕けた赤い球体だけだった。

「はあ…。終わっ…たあ…」

足の力が抜け、思わずそこに倒れこむ。莫大な疲労と眠気が襲い掛かって来る。それに身をゆだねてしまおうと思いつき、目を閉じる。

突然頭を持ち上げられ、間に柔らかいものが挿まれる。まぶたを押し開けると、フィナの顔が目の前にあった。

「トモヤ、大丈夫？」

心配そうな声でフィナが尋ねてくる。

「大丈夫、と言いたいところだけど、残念ながら体中痛いんです」

笑おうとしたがうまく顔が動かない。フィナはなにかを逡巡するような顔を見ると徐に俺の体のほうに手を伸ばす。服越しに腹にフィナが置かれる感触がする。手が置かれたところを中心に暖かさが広がる。この暖かさには覚えがある。フィナの治癒魔法だ。暖かさは広がっていき、俺の体の痛みはすっかり無くなっていた。でもそこで疑問が残る。

「フィナ、お前の治癒魔法って酷い傷は治せないんじゃないっけ？」

自分の体は自分が一番分かる。ヘレイがバケモノになってからの攻撃は、かなりの威力で、結構ダメージあったんだけど…。

俺の問いにフィナは決まりの悪そうな顔をする。

「あれは嘘」

「嘘？」

「私の魔法は致命傷で無い限り治すことが出来る。でも、自分を治

せないのは本当」

「でも、なんで嘘なんか」

「強力な治癒魔法を使える者はとても貴重。下手に広まると最悪さ
らわれる危険もあったから」

「そうか」

魔法の才能と天才的な頭脳。その両方持った少女は辛い人生を送
ってきた。そんなことを思っていると、不意に頬に暖かい液体が落
ちる。フィナは泣いていた。

「ごめんなさい」

魔法の才能と天才的な頭脳。その両方持った少女は辛い人生を送
ってきた。

「私のせいで」

それでも、

「本当にごめんなさい」

彼女は優しい心を持っていた。

そんな彼女を見て、どうにかしてあげたいと思った。そしたら、
一つしか思いつかなかった。我ながら芸がないと思うが、これしか
思いつかないのでやることにする。

「お疲れさまでした」

「えっ？」

涙を流していたフィナは俺の顔を見る。きつと俺は笑えているだ
ろう。俺は続ける。

「長い間、嫌なことを耐えてきて、お疲れ様でした」

言いながら、まるで鉛のように重たく感じられる腕をどうにか持
ち上げ、フィナの頭にのせる。そして、ぎこちなくだが手を動か
し始める。

「もうオマエに命令するようなやつはいないから、これからは自分
のやりたいようにやればいい」

「…」

フィナは無言で俯いている。俺はフィナの頭をなで続ける。と、

その手にフィナの手が重ねられる。

フィナは泣いていた。

「ありがとう」

そして笑っていた。

今流している涙は、さっきの涙とは違うことが分かった。それに満足した俺は、心地よい眠気の波に身を委ねた。

第13話 少女のための戦い（後書き）

今回、一万字いくかな、とっていたのですが八千字しか行かなかったです。

次は結構早く出せると思いますよ。

ちなみに、バケモノのイメージはエヴァ量産型です。

第14話 彼女の選択（前書き）

あれ？この話、もっと短くなる予定だったのにな…
書きたいこと書いてたらこんななってしまった。でも後悔はして
いない。
それでは、どぞ

第14話 彼女の選択

目が覚めると、知らない天井：ではなく、一度見たことのある天井だった。ふと寝る前のことを思い出して、体の節々の痛みを感じる。傷は全部フィナに治してもらったので、これは筋肉痛かなとぼんやり思う。

周りを見渡す。日差しが差し込む窓、隣で安らかに寝息を立てているフィナ、壁に立て掛けられている《飛鳥》、こちらを見下ろして頬をひくつかせているエルナ…。

あれ、おかしいな。今なんかおかしなもの二つ程見えた気が…。もう一度確認してみよう。日差しが差し込む窓、今日もいい天気だな。隣で安らかに寝息を立てているフィナ、どんな夢みてるんだろうな。壁に立て掛けられている《飛鳥》、昨日のアレは一体なんだったんだろう。こちらを見下ろして頬をひくつかせているエルナ、あれは完全に怒ってるよ。…これは…そうだな…うん、わかった。「夢だなコレは」

「いいからさっさと起きなさいよ！」

現実から逃げようとした俺にエルナが一喝する。やっぱり夢じゃないのね。

「ん〜、うるさい…」

エルナの声がうるさかったようで、フィナは眉をしかめて…なぜか俺に抱きついてきた。俺、抱き枕扱いかよ。

「ほ〜う、随分と仲がよろしいようで」

エルナがキレていた。何故かは知らんが不機嫌度数が上昇していた。

「まあ、落ち着けエルナ。俺もいまいち現状が理解できていないんだ」

「へー、つまりアンタは無意識のうちに女の子をベッドに誘い込むような男だったんだ」

「断じて違つ！」

酷い誤解だ。俺はそこまで女に飢えてない…と思う。

「…うるさい」

抱きついていたフィナが、今度は俺の胸に顔をうずめてくる。このコ、ホントは起きてんじやないの？

「随分と見せつけてくれるじやないの…」

「だー待て待て誤解だ！あー畜生、またこんな事に…」

「…また？」

フィナとエルナの声が重なる。ってかやっぱりフィナ起きてたし。

「トモヤ、今またって言ったわよね？」

「どういうこと？」

「ちよつと待って！なんで二人とも興味津々なんだよ！それよりフィナ、お前いつから起きてた！」

「…そんな事はどうでもいい」

「なんで息ぴつたりなんだよ！」

くそッ。一体何がこの二人をこんな状態にしたんだ。逃げようにもすぐ後ろは壁だし前方は怖い人しかいないしもう八方塞がりだ。

「さあ、早く」

「説明して」

……………神様。どうかしてください。

数分後、俺の必死の説得によつて、二人は落ち着きを取り戻し、俺は難を逃れた。そして今、俺は二人の前で床に正座させられている…

「これってまだピンチじゃね？」

「なに一人でぶつぶつ言つてんのよ」

目の前で椅子に座っているエルナがこちらを睨みながら言う。ちなみにフィナはエルナの後ろでぼーっと突っ立っています。

「まあいいわ。とりあえず、アンタのさっきの発言については後々

聞くとして」

あ、忘れたわけじゃないんだ

「今聞きたいのは昨日のアンタの行動についてよ」

あゝ、やっぱりそのことですか。

「気付いたらベッドはもぬけの殻だし、宿屋の女将さんに聞けば怪しい研究所に行ったって言うし、研究所に着いたらあんなだし、拳句の果てにアンタはヘレイっていう人と戦ったらしいし、アンタ一体何考えてんのよ!」

めちやくちや怒ってるな。怒髪天を衝くとはこういう時につかうのか。

「いろいろ思うところがあつたんだよ。ごめんな、心配かけて」

そう言うと、エルナは顔を赤くして、

「心配なんかしてないわよバカじゃないの! アタシが言いたいのは、なんでアタシを置いていったのかってことよ」

「だってお前気持ちよさそうに寝てたし」

「うっ……」

「それに、下手したら戦うことになるかもって思ったから。お前に怪我なんてして欲しくないし」

「うっ……」

理由を並べていくにつれてエルナの顔が赤くなっていく、それに比例してフィナの表情がやや不機嫌に見えてくる。

「それから……」

「いいっ! もういいっ!」

続きを言おうとしたら、エルナに遮られる。

「え、でも……」

「いいのっ! もういいったらいいの!」

真っ赤になった顔で睨まれたらさすがに黙るしかない。

「次は私」

今まで後ろにいたフィナがすつと前に出てくる。ってか次って? ターン制なのこれ?

「あの時、私が殴られて気を失っている間、何があったの？」

至極真面目な表情でフィナが聞いてくる。これはおちゃらけて答えるものじゃないな。

でもどうしよう。フィナの両親のことや、体が勝手に動き出したこと、《飛鳥》の刀身が光ったことは言うべきか否か………よし。

「フィナが殴られたのを見て、俺がキレて、ヘレイを斬ったら偶然胸の赤い球体が傷ついたんだよ。そしたら急にヘレイの様子がおかしくなって、斬っても傷が治らなくなった。そしたらいきなりあいつの体が文字通りバケモノみたいになった。腕とか切り落としてもすぐに生えてくるようなバケモノだ。しばらくやりあって、俺が胸の球体を叩き壊したら死んだ」

言うのはやめた。フィナに伝えるのは今じゃなくていいし、後のことは俺の気のせいかもしれないし。

「そう……」

話を聞いたフィナは何かを考えるような仕草をする。

ん〜、どうするかな？あの赤い球体について聞きたい気もするし、なんか聞いちゃいけないような感じもするし、そもそも聞いたところで俺が理解できるのかどうか微妙だし。というわけで聞くのはやめよう。

「トモヤ、もう一つだけいい？」

なにかを考えていたフィナがこちらに向き直って言うてくる。

「ん、いいぞ。なんでも聞いてくれ」

「トモヤは私の両親についてなにか知ってる？」

「……………」

うわー、ピンポイントで来たよ。あれ、でもなんでだ？

「なんでフィナはそのことを俺に聞くんのだ？」

「あの時、気を失う直前、トモヤとヘレイの会話が少しだけ聞こえたから」

なるほど。核心に入る前に気を失ったのね。観念して話そうとした俺は、ふと思ひ留まり、エルナに視線を向ける。

「アタシ、ちよつと出てくるわね」

俺の意図を察してくれたらしいエルナが立ち上がる。「ここからの話は他人が軽く聞いていい話じゃないからな。」

すると、出て行こうとするエルナをフィナが制す。

「行かなくていい」

「でも…」

「いい。エルナの話は聞いたから。これでおあいこ」

フィナの言葉を聞いたエルナは微笑む。どうやら、俺が寝ている間にいろいろあったみたいだな。

「じゃあ、話すぞ」

「(コクリ)」

居住まいを正すフィナ。どうでもいいけどいつまで正座してればいいのかな俺。

「結論から先に言う。フィナの両親はもう死んでいる」

「……………」

覚悟はしていたのか、フィナの表情にあまり変化はない。それでも、全くシヨツクがないという訳でもないだろう。後ろのエルナも苦々しげに表情を歪ませている。

「フィナは小さい頃から天才的だったらしくてな、その頭脳をヘレイが欲しがったんだ。だけどフィナの両親は断った。それでも諦めなかったヘレイが二人を殺して、孤児になったフィナを強引に引き取ったらしい」

「酷い話ね…」

「……………」

エルナが呟くように言い、フィナは俯いて無言を貫く。だが、その肩が小刻みに震えていることに、俺とエルナは気付いていた。

「…アタシ、ちよつと調べたいことがあるから、ちよつと出てくるわね」

そう言って立ち上がったエルナは、こちらに視線を送ってくる。

その中身を理解した俺は小さく頷く。エルナが出て行き、部屋には

俺とフィナだけが取り残される。

「……」

俯いたまま喋らないフィナ。俺から何かを切り出すつもりは毛頭ない。すべてはフィナの反応待ちだ。

「……」

「……」

無言の時間が過ぎていく。俺はなにをすることもなくただ中空を眺めている。……正座で。

この体勢はさすがにないなと思い、立とうとする。

「私のせい、なのかな？」

フィナの呟きで完全にタイミングを外したが。

「な、何がだ？」

「私の、お父さんとお母さんが殺されたこと」

「……」

ああ、そうだったな。この子は、優しすぎるんだったな。ヘレイと戦った後も、俺の怪我は自分のせいだと言って涙を流していたっけな……。本人は欠片ほど悪くないというのに。どちらもヘレイが悪いというのに。

気付くと俺はすつと立ち上がり、フィナを抱きしめていた。

「あ……」

「バカだな、オマエ」

俺はゆっくりと語りかける。

「オマエは悪くないのに、なんで一人で勝手に抱え込んだじゃうんだよ」

「でも、でも……」

フィナの体が震える。俺はその震えが止まるように、さらに強く抱きしめる。

「大丈夫だよ。オマエはこんなに立派に育ったんだ。オマエのお父さんとお母さんも、きっとあの世で自慢してるよ。だから、自分のせいだなんて思わない」

「うっ…んっ」

「いいよ泣いても。今は俺しかいないから」

俺がそう言うと、フィナは俺の胸に顔をうずめて泣き出した。構わないと言ったのに、それでも声を押し殺して。俺はそんな彼女を見て、すこしおかしくなった。フィナの肩をさらに強く抱きしめる。少しでもいいから、彼女が安心できるよう、そう祈りながら。

数分後、フィナは泣き止んだ。すると、頬を赤く染めて離れていつてしまう。きつと恥ずかしがっているのだろう。しかし、時折フィナはこちらを見ている。それに気付いた俺がフィナを見ると、顔を赤くしてそっぽをむいてしまう。そんなやり取りが何回か繰り返される。徐々に部屋の中の空気がちよつとおかしくなっていく。

（ねえ、なにこの空気。気まずい。というよりなんだろう。ここから逃げ出したい。でも逃げ出したらダメなような気もする。なんなんだオイ。どうすればいいんだこれ。なにか、なにか変化を…そうだエルナだ。エルナ、早く戻ってきてくれ。頼むっ）

そんなことを考えている間も、フィナは俺のことを見てくる。気になってフィナの方を向く。すると、フィナはすさまじい速さで別の方を向く。一体何度目のやり取りなのかも分からなくなり、ため息をつきそうになる。

「ただいまー、って…」

俺の願いが通じたのか、戻ってきてくれたエルナだったが、部屋に入るなり訝しげな表情になる。この部屋の微妙な空気を感じ取ったのか。

エルナはまず俺を見て、次に赤くなっているフィナを見て、再び俺を見た。そして何を思ったかは知らんが、助走無しで俺にとび蹴りを繰り出してくる。…って、

「あぶない…！」

ギリギリで回避し、無様に転がる俺。対してエルナは華麗な着地

を決める。いや、そんなことどうでもいい！

「エルナ！いきなり何しやがる！」

「なんかしたのはアンタの方でしょ！正直に言いなさい。フィナに何をしたの？」

「何言つてんだよ！何もしてねえよ！」

「嘘よ！じゃあなんであの無表情のあの子が顔赤くしてんのよ！」

「！それは…その…」

「言いよんだわね！さあ言いなさい。フィナに変なことしたんでしょ！」

「変なことなんかしてないって！」

「だったら…フィナ？」

何かを言おうとしたエルナの肩をフィナが掴む。

「大丈夫。なにもなかった」

いつものように無表情で話すフィナを見て、エルナは小さく息を吐く。

「フィナがそう言うなら、分かったわよ」

そしてエルナは俺を見て、声を出さずに口だけを動かす。内容を理解した俺は得意満面に笑ってみせる。そんな俺をみて、エルナが呆れたように笑っていた。

ちなみにエルナが伝えてきた内容は簡単。

『うまくやったわね』

「トモヤ、エルナ。お願いがある」

フィナがそう言ってきたのは、さっきのゴタゴタがあっただけからしばらくした頃だった。

「なんだフィナ。改まってどうしたんだ？」

俺が聞くと、フィナは何かを言おうとする。が、躊躇う。俺とエルナは急かすようなことはしない。フィナの決心が固まるまで待つ。やがて、意を決したようで、フィナは口を開く。

「私も二人についていきたい」

「いいぞ」

即答する。否定する理由が見つからない。フィナがあまりの即決に面食らったような顔をしているが、気にしない。

「エルナ、オマエもいいよな？」

振り返って後ろにいるエルナにも尋ねる。きっと、エルナも快く頷いてくれるはずだと信じて。

「ん〜…」

当のエルナさんはなにやら渋い顔をしていらしたが…

「やっぱり、ダメ？」

悲しそうな表情でフィナが言う。

「違う違う。フィナが来てくれるのはかまわないんだけど。ちょっと…」

賛成の意を示すが、やはり渋い顔になる。

「なんか問題でもあるのか？」

「ええ、一つね。アタシ達、レパーラに行くためにこの街に来たじゃない」

「ああ」

「それで、さっき出た時に国境を通るための方法を調べたのよ。そしたら…」

「そしたら？」

「通るために必要な通行証が高いのよ。一番安い簡易通行券でも、結構高くてさ…」

嘆息するエルナ。どこの世界でも金が大事なのか…、世知辛いな。俺が余の不条理に嘆いていると、フィナが口を開く。

「それなら、問題ない」

そう言っつてフィナはポケットからなにかを取り出す。それは、宝くじ位の大きさの紙。

「それ、簡易通行券じゃない！フィナ、それどうしたの？」

フィナが持っているものを見たエルナが驚いたように言う。

「研究所にあつたのを持ってきた」

無表情で言うフィナ。でもやっていることは泥棒に限りなく近い。でもいいか。

「よし。これで問題解決だな。だろ、エルナ」

「ええ。これで国境を通ってレパールに行けるわね」

通行券を渡してくるフィナ。…あれ？

「フィナ、俺だけ一枚多い気がするんだけど…？」

俺の手元には2枚、フィナとエルナの手には1枚ずつ。

「1枚余った。持ってて」

…まったく、そんなに淡々といわれると断る気も失せてくる。とりあえず2枚ともポケットに詰めておく。

「さて、じゃあ改めまして、これからよろしくな、フィナ」

「よろしくね」

挨拶をする俺とエルナ。それに対してフィナは、

「こちらこそよろしく」

ご丁寧に頭を下げる。そんなフィナに俺とエルナは小さく笑ってしまふ。

「じゃあ行きましよう」

部屋の扉からさっさと出て行ってしまふエルナ。

「あ、ちよつと待てよ」

慌てて追いかけようとして、思い留まる。そしてフィナの方を向き、

「行こう、フィナ」

手を差し伸べる。

「分かった」

優しく、けれどしっかりと俺の手を握ってきたフィナの手を握り返し、先に行ってしまったエルナの後を追いかける。

第14話 彼女の選択（後書き）

あゝ暑いですね。作者はクーラーとか極力点けない人なので、日中は暑いです。ムシムシしてあんまり手が進みません。次の投稿は遅くなるかもしれません。

第15話 迷子に会ったら交番へ(前書き)

お久しぶりです。18日ぶりです。三週間ぶりです。

おかしいですね。他の方は夏休みに入ったら執筆速度が上がるものなのに、自分はかなり遅くなりました。

その分長いのが書けたので、どうぞ。

第15話 迷子に会ったら交番へ

ガタガタガタ……ガタン

道の起伏に合わせて車体が揺れる。その振動のせいでそろそろ尻が痛い。しかしとある事情で動くにも動けない。

新しくフィナを加えた俺たち3人は、無事国境を通ることが出来た。その先に都合よく『中枢都市ミナレット行き』と書かれた馬車（牽いてるのは小さな肉食竜みたいのだった）があつたので、渡りに船と乗り込んだ。御者の人の話では昼過ぎには着くとのことだった。

それはさておき、さっきのとある事情についてだが、まあこの事情には理由がある。

今俺たちがいる国、レパーラ。この国は国土の六割を農地や農村で占めている国で、技術が発達しているのは国の中央付近にあるいくつかの都市だけであり、馬車の窓が映していくのはずっと田園風景のためすぐに飽きる。そのため、馬車の中で時間をもてあます。退屈していると当然のように眠くなる。しかしこの馬車は乗車賃が安いので大きさが小さい。座席も一つしかなく三人で座っているため眠るには座って寝るしかない。というわけで簡潔に言ってしまう、現在エルナとフィナは体を俺に預けて熟睡中なんだよ。

もうぐったり俺に寄りかかっているから俺が動くところの二人も動いちゃうんだよ。気持ちよさそうに寝てるから起こしちゃうのも忍びない。結果俺はこのケツの痛みと戦わなくちゃいけない。まあ我慢できないほどでもないからいいんだけど。

「ん」

左のエルナからうめくような声が聞こえた。エルナの顔を見ると小さく笑っている。きつと楽しい夢でも見ているんだろう。

「……トモヤ」

エルナの口から俺の名前が出る。俺がいるのか？それで楽しいっ

てなんか照れ…

「逃がさないわよ…」

彼女の夢の中で俺は一体何をしたのだろう…

これ以上エルナの夢について詮索するのはやめよう。俺の精神衛生上の問題で。

「…トモヤ」

今度はフィナか。フィナの夢なら俺が何するでもないだろう。

「トモヤ…ダメ…それは…あつ！」

どうした！？どうした俺っ！？何が！何があつたんだ！

「あ……………すう……………」

寝るなああああああああああああ！寝るなよ！いや最初から寝てたけど！せめて俺の安否だけでもはつきりさせてからにしてくれよ！

……………ああ、もういいや。他人の夢の内容について考えるのは不毛だ。やめよう。

でもそうになると、一気に暇になるからな。何故か知らんが俺は一切眠たくない。俺の勘では到着まであと…2時間ちよっとってころだな。

「ふふふ、追い詰めたわよ…」

「ダメ…それは罠…あつトモヤ！」

気になる。この二人の頭の中で俺はどんな窮地に立たされているのだろう。分からない。分かりたくもない。

「ま、まさか、こんなことになるなんて…」

「うそ…」

二人が非常に気になる発言をし、なにやら身悶えている。そして何故かさらに俺に擦り寄ってくる。…………ああもうなんで女の子ってこんなイイ匂いがすんの！？

俺がどんなに悶々としていても、馬車の進む速度は変わらない。そのことをかなり恨んだ。

いよいよ目的地の中枢都市ミナレットに到着した。到着して起こした二人が俺を見て涙目で安堵していたことは早急に忘れることにした。

ミナレットの町並みはスゴイ。何がすごいかって言うと街のど真ん中にデツカイ城がどーんと建っている。あの城にはレパーラを統べる国王が住んでいるらしい。なんでも天才的な魔法の才能の持ち主であると同時にかなり賢いらしく、国交などの交渉の場ではその頭脳を遺憾なく発揮するという。(フィナ談)

この都市は東西南北で四つに分かれていて、今俺たちがいる南側が商業区域、東側が居住区域、西側が貴族区域、北側が工業区域となっている。(これもまたフィナ談)

まあそんなことはどうでもいい。俺が今一番気になっていることは他にある。

「フィナ、ひとつ聞いていいか？」

「うん」

「俺の目が確かなら…道行く人の中にちらほら獣耳が見えるんだが」「あれは獣人」

「獣人？」

「そう。考え的には人と魔物の中間と考えられている」「げっ…」

人と魔物、この二つから連想されるのはあのバケモノ。

「違う。アレは人の遺伝子に強引に魔物の遺伝子を混合させたもの。獣人とは違う」

俺の考えてることが分かったようで、フィナが補足してくれる。

「獣人は魔法が使えない。その分身体能力が高い。だから労働力として使われる」

「労働力って…奴隷か？」

俺の問いにフィナは小さく頷く。

「男の獣人は力仕事、女の獣人は使用人になることが多い。今は扱いが改善されたけど、昔は獣人をどんな扱いにしようとかまわなかった」

フィナの説明を聞き、俺は呆れる。差別に対する憤りもあったが、まず呆れた。この世界も、もといた世界も人間のやることは変わらないのだと。前にいじめをしていた奴をシメたことがあったが、あれではなんの解決にもならない。どうにかするには、その人の考えを根底から変えなくてはいけない。ただそんなこと一般人の俺に出来るはずもない。できるのは強いチカラを持った、それこそこの国の国王くらいの人じゃなきゃダメだ。

そんなことを考えている間、エルナとフィナがなにやら話し込んでいた。すると、エルナが俺を見据えて言う。

「アタシとフィナは買い物してくるから、トモヤは適当にぶらぶらしててちょうだい」

「えー、俺一人かよ。俺も買い物に付き合うよ」

見知らぬ街に一人だけで放置される恐怖に耐えかね、同行を申し出ると、エルナに睨まれた。

「アンタね、女の子だけで買い物に行くって言ってんの。すこしは察しなさいよ」

女だけで……………なるほど

「分かった。そこら辺うるちよろしてるよ」

「じゃ、集合場所はここね」

そう言うつとエルナとフィナは行ってしまつ。ふと見るとフィナの頬がほんのり赤らんでおり、自分のデリカシーのなさを嘆くべきか、フィナが感情を表に出すようになったことを喜ぶべきか一瞬悩んだが、もう考えるのもめんどくさくなったので適当に人ごみに入るところにした。

通りの様子は圧巻と言わざるを得ない様子だった。両脇にたくさ

んの露店が所狭しと並んでおり、見たこともない食材がたくさん売っていた。その通りを抜けると、今度はきちんと整理された様子でいくつかの店舗が立ち並ぶ場所に出た。しかし、整理されているといつても人通りは多く、どこか雑然とした印象を与えた。

そんな場所で見つけた。見つけてしまった。十字路の真ん中でメモのようなものを片手にきよるきよるしている亜麻色の髪を頭の両側で縛った、俗に言うツインテールでメイド服を着た獣耳が生えている女の子。

「……………」

何も言えない。言いたくもない。だって見るよあれ。物陰から脂ギツシユなお兄さん方があの子のことじっと見てるもん。この場合俺がとるべきアクションは

- 1、あの女の子に声を掛ける
- 2、あのお兄さん方をしばく
- 3、お兄さん方をしばいた後女の子に声を掛ける
- 4、逃げる

だ。どうする？出来れば4番を推奨したい。でもこの状況を放置するのはちよつとな。2番は簡単だけどな…あの子に声を掛けるのはまたトラブルに巻き込まれる気もするしな…

くいくい

「ん？」

「ごちゃごちゃと考えていると服を引っ張られる感じがした。視線を下げると件のメイド服の女の子が俺の服のすそを掴んでいる。

「あ、あの、すみません。グラドの屋敷ってどこにあるか知りませんか」

「え、えと、ゴメン。分からない」

いきなりのことにちよつと慌てながら、それでも正直に答える。

途端に少女の大きな鳶色の瞳が潤みだす。

「うつ…うつ…」

小さな女の子が目の前で泣くことに、俺は焦る。

「ちょ、ちょっと待って落ち着いて！なにがなんだか分からないんですけど！とりあえず泣くな。いや泣かないで下さいお願いします。そしてその頃物陰からこちらを見ているお兄さん方の視線が怖い！」
スッゲー怖い。もうあれ殺気とか出てんじゃねえの。

脂ギツシユなお兄さん方に殺されるなんて笑い話にもならない。そう判断した俺は目の前の少女を落ち着かせるために、とりあえず頭をなでてみる。

「んっ…ん…うう…うにゃあ」

最初は驚いたような顔だったが手を動かし続けると、目を細めて猫みたいに声を上げた。が、急にはつとしたような表情になり、パツと飛び退く。

「ち、違うから！別になでられて気持ちよかったとか、大きい手つてなんか安心できるなとか、そんなこと全然全くちつとも思ってなんかないんだよ！」

「あー、分かったから落ち着け」

大慌てで捲くし立てられても説得力は皆無だが、そこはあえて触れないでおく。

「そ、そうだね。…ふう、もう大丈夫」

「そうか。じゃあ一つ聞くがなんでお前は急に泣き出したんだ？」

「うん。私はアリスっていうんだよ」

「待て。俺はそんなこと聞いてない」

「私、さっき言ったグラドの屋敷にお仕えしていて、今日はおつかいで街に来ただけ…」

「ああ、迷ったのか」

「ち、違うよっ！迷ってなんかないよ！ただ帰り道が分からなくなっただけ！」

「それを迷ったと言うんだ」

「うう…口ばかり達者に育って」

「初対面の人に言うことかそれ」

「初対面の子供にも遠慮なくせに」

「甘いな。これでも結構優しく言ってるんだぞ」

「本気ならどんなこと言ってるの…?」

「つまり、お前はおつかいに来ただけで帰り道が分からなくなって、通りすがりの俺に道を聞いたけど俺も分かんなくて泣いたという訳か」

「……………うん」

「ガキだな」

「怒るよ!」

頬を膨らませて腰に手を当て、精一杯こちらを睨んでいる…様に見える。身長差のせいでこちらを見上げるカタチになっているため、どんなに頑張っても愛らしく見えてしまう。

こういうのは子供の特権だよなー、なんて考えつつ、とりあえず手を差し出す。

「ふえ?」

「屋敷に帰りたいんだろ。一緒に探してやるから。もう泣くなよ」

「泣かないよっ!」

頬を赤らめて反論しながらも、ちゃんと手を掴んでくるこの少女に出来るだけ優しく微笑みかけながら言う。

「俺の名前は智哉。篁 智哉だ。少しの間だけだろうけどよろしく」

「……………よろしくお願いします」

何故この子はそっぽをむいてしまうのだろうか? すこし見える頬は真っ赤だし。あれ? これ怒ってるの? なんで? 俺気に障るようなことした?

目の前の難問に首を傾げながらも、俺は少女「アリス」の手を引いて歩き出した。

「なあアリス、屋敷の周りになんか目印になるようなものはなかったのか?」

歩き始めてから数十分。とりあえず適当に歩き回って見覚えのあ

る道を探していたが全く当たらない。無軌道に歩くのもそろそろなのでこちらでなにか目標でもたてようと思ひ、言ってみたが、
「何を言ってるの。そんなの覚えてたらとっくに人に聞いて帰ってるよ」

どうやらこのまま歩き続けるしかないらしい。本気で膝を抱えたくなった。と、そこで不意にアリスの足が止まった。ぼーっと突っ立って何かを見ているようだ。視線をたどると、前方で談笑しながら歩いている二人組の女子。何の変哲もない普通の女の子だ。どうしてこんな凝視しているのだろう。もう一度アリスへ視線を落とし、そこで気付く。アリスの視線は少女たちをというより、少女たちの持つているものを見ている。少女たちが持つているものは……アイスクリームっぽいものだ。断じてアイスクリームではないだろう。だってアイスクリームはあんな色していない。真っ黒だもん。いや、確かイカ墨のアイスとかあったような……？

いかんいかん。思考がちよつと横にずれた。で、アリスがああ暫定アイスクリームを見ている理由は……考えるまでもないな。

「アリス」

「……」

「アリス！」

「ひゃ、ひゃい」

うん。いい具合にテンパってるな。

アリスの反応に口元を緩めながら、例のアイスクリームを指差す。

「あれ、食べたいのか？」

「えっと………うん」

なんかけっこ間があったけど、どうやら食べたいらしい。ここで買ってあげるのが紳士というものだろう。でもアイスクリームを売っている場所はさっぱりなので、仕方がない、都合よく近くで飴細工の店があったのでそこで兎の形の飴を買う

「んじゃ代わりにこれをやる」

「え？」

俺が差し出した飴を見て、アリスはぽかんとする。

「……………」

「……………」

「……あれ？おかしいな。なんでこの子は受取らないんだ？っついでよりキョトンとして俺を見上げてるし。」

「えっと……いらなのかな？」

「あ、くれるの？」

危なかった。危うくマンガみたいにすっ転ぶところだった。

「当たり前だろ。ほかにどうするんだよ」

「だって……今までお菓子とか食べたことなんかなかったし……」

あー、獣人の扱いはひどいってフィナが言ってたっけな。この子も今まで冷遇されてきたりしたのかな……。

そう思った俺はアリスの目線に遭うようにしゃがんで、再度アリスの目の前に差し出す。

「食べる」

「え、でも……」

「いいから食べ」

俺の言葉を聞いたアリスは、迷うように視線をめぐらせると、やがておすおすと俺の手からキャンディを取ると、ゆっくりと口に入れた。途端に少女の大きな目が輝く。

「おいしい！……とっても甘くて、とってもおいしい！……」

「そうかそうか。アリスも女の子なんだな」

「……どういう事？」

「いやな、女の子っていうのはな、甘いものを食べたら幸せになれる生き物らしい」

「ふん」

空返事で答えるアリス。お前が聞いたんだろと文句の一つも言いたかったが、幸せそうな顔で飴をなめているアリスを見ているとそんなことも言えず、優しく手を引いて歩き出した。

歩くことさらに数十分。途中、なめ終わった飴の棒をポケットにしまつアリスを見た俺が「捨てるから頂戴」と言つたところ、「やだ。返さない」と返されると言うやり取りがあつた。別に遠慮なんかしなくてもいいのに。結構責任感があるのかな、なんて思つたりした。

まあそんなこんなで俺とアリスは商店街的な通りを歩いている。

「なあアリス。道とか思い出さないのか」

「うん。なんかどこも似たようなに見えるんだよね」

オイオイ。それはちよつと問題じゃないのかい。それだと下手すると延々と歩くハメになるぞ。

そろそろ本気で諦めようかなーと思つてみると、またアリスが立ち止まる。今度は何事だと思ひ、アリスの顔を見ると、今度は随分と上のほうを見ていた。

「おい。どうした？」

「あれ」

そう言つてアリスは何かを指差す。その指先は街路樹を指差していた。

「あの木がどうかしたのか？」

「そうじゃなくて、木の枝のところ」

「枝？」

言われた通りに枝の辺りを見てみる。……あ、猫。

「きつと下りられなくなつたんだな」

枝の真ん中辺りでプルプル震えている猫。枝は結構太いから折れる心配はないけど、けつこう高いから下りるのも難しいのだろう。

ちよつと助けてやるかと思ひ、歩き出そうとした瞬間、隣にいたアリスが走り出し、あつという間に木まで辿り着くと、その木を登りだし…つてオイ！

「待て！アリス」

注意しながら俺も木まで走る。着いたときにはアリスは結構登つ

ていた。

「大丈夫。私、木登りは得意な方だから」

「そうじゃない。お前、自分の服装考えろ」

「え？」

そう言っただけ見えて、アリスは自分の服に目をやる。彼女の服装はメイド服。そうメイド服なのだ。当然下はスカート。そんな服で木になんて登ったらどうなる？そう、答えはパンツ丸見え。まあまだギリギリちよつとだけ見えるっていうレベルだけど。

「にゃああああ！」

猫みたいな声を上げて木から飛び降りたアリスは、顔を真っ赤にさせてスカートを抑えてうずくまっている。そんな彼女を見ていると、なんだかいたたまれなくなり視線を逸らした。と、視線を向けた気にはさつき見つけた脂ギッシュなお兄さん方が鼻血噴いて倒れていた。……うわあ

「うう……」

顔を赤くして呻いているアリスを見て、わりと本気である男共を排除しようかなと思ったりした。

「トモヤ！ちよつとしゃがんで！」

どうやら立ち直ったらしいアリスが立ち上がる。まだすこし頬は赤いが。

とりあえず言われたとおりにしゃがむ。と、肩に衝撃が来る。予想はついていたのでなんとか堪えて、足に力を入れて立ち上がる。

いわゆる肩車だ。

「うわあ！すごい。高い」

「こら、あんま動くな。落とすぞ」

手足をばたつかせて喜びを表現するアリスを軽く脅し、足を掴みなおす。

そこで気付く。アリスがはいているのが膝までのソックスだと。俺がちよつと脅したのを真に受けて俺の頭を足でしっかり挟んできた。これは……感触が……ヤバイ。

なんともいえない柔らかかさで戦いながら、怪しまれないように動

く。しかし、揺れるたびに頭をはさむ力が強くなって…ああチクシヨウ！なんでこんな目に。

俺が下で悶々としている間、上ではアリスが無事猫を確保したらしい。ほっと安堵するような息が聞こえた。だが当の猫はアリスの腕の中で暴れ、

「あつ……」

スルリと抜け出すと走って行ってしまった。

「あー、逃げちゃった」

「うう…もうちょっと抱っこしていたかった…」

さびしそうな声が聞こえてきて俺は苦笑する。とはいえ、現在脳髓から湧き上がる煩惱と交戦中。一刻も早くこの戦いを終わらせるために、ゆっくりしゃがんで言外に「降りろ」とアリスに示す。

だがアリスは一向に降りようとしなない。それどころか俺の首に手を回してもたれかかってくる。

「おい…なにを…」

「猫に逃げられた寂しさをこれで埋めろう…」

「これってなんだよ！？それは俺の頭だ！」

文句を言おうと手を放す様子はない。それどころか「これだけは放さない」とばかりに手に力を込め、さらに密着してくる。アリスのツインテールが垂れてきて頬をくすぐり、なんだか甘い匂いがしてくる。

もう抵抗する気力さえ失った俺は、

「トモヤの頭つてなんかイイ匂いがするね」

とか言つて人の髪に顔をうずめているアリスを肩に乗せたまま歩き出した。

「なんだあれ？」

俺がついそんな声を上げてしまったのは、アリスが仕えている屋敷を探し始めてからもう一・二時間経ち、そろそろ戻った方がいい

かなと思いついた頃だった。大通りの真ん中で一人の男に若い女が群がり、まんざらでもないような表情をした男がなにかするたびに黄色い声を上げている図だった。かなり腹が立つ。

「……デ○ノート落ちてないかな……」

そんな暗い願いを持ってしまふくらい目の前の光景は腹立たしかった。もう一度言おう、腹立たしい。

本来ならば通り魔的犯行である男を亡き者にしたい。そこまで行かなくとも、せめて石の一つでも投げてやりたいが残念だがそうもいかない。なぜなら俺の肩の上のアリスが舟を漕ぎはじめているので非常にバランスが悪いからだ。

真に遺憾ながら、この場は立ち去ろうと思う。運が良かったな名も知らぬクソ野郎。

視界に入れるのもイヤな集団を大きく迂回するように回避する。と、そこで、チラツと横目で見えた瞬間に中心にいる男と目が合ってしまう。そこまでならいいのだが、何を考えたのかその男はその輪の中から出てきて、俺の前に立つ。

「…なにか用ですか？」

ガン無視したいところだがそうもいかないっぽいのでとりあえず聞く。

ブロンドの髪を肩まで流し、その髪を無駄にかきあげた男は俺に言う。

「キミは、家の使用人と何をやっているんだい」

「あ？」

一瞬疑問に思ったものの、すぐに理解し、

「おい起きろ」

「うひゃうー!？」

強制的にアリスを起こす。方法は簡単。思いっきり上体を後ろに反らし、アリスの頭を地面にぶつけた。

俺の肩から降りたアリスは涙目で睨んできたが、気づかない振りをした。

「アリス、この人、お前んとこのひとか？」

「え……………ああ！ハルンお坊ちゃま！」

「お坊ちゃま？」

声を張り上げたアリス。俺が発言内容に疑問を抱くと、例の男が自信満々に言う。

「そう、僕はその使用人が仕えているグラド家の長男、ハルン・グラド。剣の腕前も頭脳も天才的。まさに神に選ばれた者。さあ、僕の美しさを、素晴らしさを、その頭に叩き込むがいい」

「黙れよ変態ナルシスト」

話している最中何度も何度も髪をかきあげやがって、そんなに邪魔なら俺が切ってやろうか？

「なっ……………キサマ、言うに事欠いて僕をバカにするだど…………？」

「なーんだ、バカにされてたことは分かるんだな。サル並みの頭かと思っただけど」

「キサマア……………」

憤怒の表情で俺を睨んでいたハルンは、ふと俺の持っている《飛鳥》に目を留める。そしてニヤリと笑う。なんだコイツ、気色悪い。

「丁度良い。キサマ、僕と……………決闘だ！」

……………はい？」

「イカン。話が見えない。」

「このボクをバカにするとは、どうやら身分が分かっていないようだからね、ここは決闘をし、実力の差を教えてあげようという訳さ」説明口調ありがとうございます。どうでもいいけど後ろの女共キヤーキヤーうっさい。

無表情で傍観していた俺。するとアリスに服を引っ張られる。見ると非常に心配そうな表情をしていた。

「ハルンお坊ちゃまと戦っちゃダメ。お坊ちゃまは頭はちょっとアしだけで、それでも、剣の腕前は確かなんです」

あれ？なんか俺が決闘する前提で話進んでない？

「もういいかい？まあ、どんなことをしたってキミが僕に勝つことは不可能だけれど」

「……………むっ」

そう言われるとちよつとむつとする。

「上等だ。やってやるうじゃねえか」

「トモヤ……………」

「大丈夫だ。なんとかするから」

アリスを後ろに下がらせて、ハルンに向き直る。気づくとグルツと人だかりが出来ていた。

「ふっ、覚悟が出来たようだね」

そう言うとハルンは腰から剣を抜く。俗に言うレイピアだ。対する俺は刀を抜かない。ただ棒立ちしているだけ。ハルンは一瞬怪訝そうな顔をするが、すぐに不適に笑う。

「いざ……………尋常に……………」

あ、前口上は普通だ。

「勝負！」

言つが早い。ハルンは突っ込んでくる。体全体を使った突き。結構早い。でも避けられない程でもない。

横に飛んでかわすとハルンは驚いたような表情をする。今の一撃で決まると思っていたのだろう。だがすぐに表情を戻すと、再び来る。

先程と同じで、突き。でもスピードは違う。より早い。それでも体を捻つてかわす。体勢を立て直す間もなくまた突きが繰り出される。これは身をかがめて避ける。と、そのまま刃が振り下ろされる。これを転がって回避。安全圏まで移動し、素早く立ち上がる。

「スゴい。スゴいよ。ここまで出来るとは予想外だよ」

ハルンは笑っていた。上品な笑いではなく、おそらく心からであるうらやみ。

「そりゃどーも。それならここらで止めにしませんかい？」

俺はこの戦いを早く終わらせたいんだよ。

マズい。マズいんだよ。よくよく考えたらエルナとフィナはもう集合場所にいるはずだ。いくら女の買物物は長いといっても一時間そこらで終わるはず。それよりも更に一時間プラスって、絶対怒ってる。特にエルナ。絶対なんかされる。体に深刻なダメージを受ける。また気絶する。っていうか俺この世界来てから気絶する回数多くね？

俺がこれからの未来に悩んでいると、ハルンは笑いながら言う。

「止める？ありえないね。久しぶりだよ。本気でやってもかまわない相手なんて。父上以来だよ。父上にはまるで歯が立たなかつたけど、キミは………どうかなっ！」

ハルンは楽しそうに突撃し、また突きを連発してくる。それを身を反らし、身をかがめ、かわし続ける。

ふざけんなよこのヤロウ。そりゃアンタは楽しいからいいかもしれないけど、こっちはそんなんじゃないんだよ。この決闘に勝っても負けてもどっちも痛い思いをしなきゃいけないんだよ！

そんなことを考えながらも、ハルンの攻撃をかわす。

突然、今までボディ狙いだった剣が顔に向けられ、そして突かれる。これを顔をすこし横に倒すだけでかわす。が、頬が切れる。

「んなっ！」

慌ててハルンから距離をとり、頬に手を当てる。確かに切れている。血も出ている。

おかしい。確かにかわしたはず。ハルンを見ると、なにやら不適に笑っていた。

くそつ。アイツ、何をした…？

再びハルンが向かってくる。繰り返される突きをかわし続ける。

それでも、体は切られていく。

「ちっ！」

再び後退。息を整えながら、考える。一体どうやってアイツは俺を切っているのか。俺がかわしそこねているのか。いや、完全に避

けている。

「ふっ、もう限界かい？まあ無理も無い。このボクとここまでやりあつたんだ。むしろ賞賛されるべきだ。だが、これで終わりだ！」

そう言つてハルンは突貫してくる。動作が大きい。その分威力も大きくなるだろう。これで決める気か。チクシヨウ。こっちはまだ考へてるつていうのに……。

なんでだ……？完全にかわしているはずなのに、なんで切れるんだ……？まさか剣を振つた時の風圧で切れたとかそんなのは……

……風？

そういえば魔法の属性にも風が……というより俺、水と風の二つだつたよつな……。

あー、そういえば武器に風を纏わせるつてイメージ湧かなくてすっかり忘れてたけど……なるほど、こんな風に使えばいいのか……

………つて

「何ちよございなことやつとんじゃこんクソがアアアッ！」

キレた。ちよつと口調もおかしくなつた。なんだよ決闘だつて言うからもつと正々堂々とやるもんかと思つてたのに小細工しやがつて！……いや、こつちの世界なら普通なのか……？つてどつちでもいいわ！

確証がないのは頭のどこかで分かつていたが、それで冷静になれるほど大人ではない。怒りのまま《飛鳥》を抜き、振り下ろした。

「………」

ハルンの動きが止まる。理由？そんなの決まつてんだろ。俺がハルンのレイピアを切つたからだよ。先つちよの方は地面を転がつている。

俺はのろのろと《飛鳥》をしまい、ハルンの横を通り過ぎる。そこでハルンは言う。

「ボクの負けだ。完敗だよ」

そう言つて、ハルンは歩いていってしまった。俺はというと、思わず足を止めていた。表情には出さなかつたが、内心さっきのハルン

の行動がスゴくカッコいいと思ったからだ。

そのことに苦笑し、前を見る。 呆然としているアリスと目が合い、はっとする。慌てて振り向くが、ハルンの姿はもう無い。アイツに道を聞く。というより、アイツについていけばよかったと後悔する。

申し訳ない気持ちでアリスを見る。 何故か彼女は満面の笑みを浮かべていらっしまった…。

「スゴいスゴい！スゴいよトモヤ！ハルンお坊ちゃまに勝つだなんて！ハルンお坊ちゃまが勝てなかったのはご主人様だけだったのに勝っちゃうなんて！スゴいよトモヤ！」

駆け寄ってきた途端に捲くし立てるアリス。どうやら自分が帰るチャンスに逃したのは気づいていないようだ。

とりあえず俺は、当面の不安を解消するため、騒ぎ続けるアリスをなんとか静かにさせ、集合場所へ向けて歩きだした。

第15話 迷子に会ったら交番へ（後書き）

いやー、夏休みももう終わりですねー

作者の中学校の夏休みは今日までなのですが、作者はろくに課題も終わっていません。まあ、これから頑張る予定です。
ではこれで

第16話 女は強い(前書き)

こんにちは。

今回は早く出せました。でもちょっと短いです。

では、ごじゆ

第16話 女は強い

エルナの決めた集合場所に向かう間、アリスに諸々の事情を説明した。エルナはあれでけっこう優しいから、人助けをしていたとすればそこまで怒らないだろうという算段だ。まあエルナやフィナのことを説明したら何故かアリスの機嫌が悪くなったりもしたがそれはそれ。これまでの人生で俺は悟っている。女心を理解するのは無理だと。

まあそんなこんなで、集合場所の南門付近へ到着。もう少し歩けば人ごみの中から出て二人を探せるだろう。ちなみにはぐれないようにアリスとはしっかりと手をつないでいる。

人波をかき分け押し分けのけ、なんでこんなに人がいるんだと悪態つきたいのも堪え進む。例え数秒だとしても早く到着するに越したことはないのだ。

「ちょ、待つ、トモヤ早い！」

「おっと……」

どうやら先を急ぐあまりほとんどアリスを引っ張るような形になってしまっていたようだ。いくら急いでいると言ってもこのせいでアリスが転んだりしたら大変。もうすぐだしすこし余裕を持っていくことにした。

人ごみの終わりも近くなってくる。と、そこでエルナの赤い髪が見えた。見ると、すこし先でフィナと話している。

「おい！エルナ！フィナ！」

手を振って来たことを伝える。二人は同時にこちらを見、エルナは怒ったような表情でツカツカと、フィナは無表情で歩いてくる。

俺は人ごみから抜け、

「トモヤ！どんだけ待たせるのよ！一体何を」

アリスの手を引っ張って人ごみから抜け出させた。

「……………」

エルナの動きが急に止まる。同じようにフィナも歩みを止めた。

そのことを不思議に思いながらも二人に近付く。その間も二人は動かない。

「ねえ、トモヤ。あの二人どうしたの？」

掴んでいる右手を引っ張り、アリスが尋ねてくる。俺は「分からない」と答えようとして

一瞬で左腕を持っていかれた。

バカな……左腕が動かせない。というか一体いつの間に後ろに捻られた。腕を掴まれたと脳が認識するよりも早く事を成すなんて、そんなバカな。

とりあえず、こんなことをしてくれやがった不届き者を確認しようとして首を捻り、

「え〜と……何してんのエルナ？」

スツゴイ笑顔で俺の腕を押さえているエルナと目が合った。

エルナは困惑する俺を尻目にアリスに話しかける。

「ねえ、アナタの名前は？」

「……………はっ！え、ええと、私はアリスです！」

「そう、アリスちゃんね。じゃあアリスちゃん、アリスちゃんはどうしてこの人と一緒にいたの？」

物腰丁寧にあリスに話しかけるエルナ。だがしかし、俺の腕を掴む力は一向に変わらない。

「実は私、迷子になっちゃいました。そしたらトモヤと一緒に道を探してくれるって言うてくれたんです」

「一緒にいる間、ヘンなこととかされなかった？」

「まてコラ」

その発言は俺がそういう趣味だと思ってたからのものだよな？

「ヘンなこと？そんなことされなかったよ。それどころか　い

「っぱい優しくしてくれた！」

ゴキッ

「ぎゃあああああ！俺の肩関節から鳴ってはいけない音が！！」
「ダメだ！もう左肩から下の感覚がほとんどない！早くフィナに治して貰わないと！」

「へえ……………どんな風に優しくしてあげたのかしら」

「待て！お前は壮大な勘違いをしている！」

「どんどん力が増していく！この人、握力どんだけあんだよ！」

「途中、どんなことをした？」

「今度はフィナがアリスに問いかけていた。それよりフィナ、俺の腕をなんとかしてくれ。」

「えっと……………あつ、女の子の幸せ？つていうのを教えてもらった」

「そうだねええええ！確かにそれらしきことは言ったね！でもそんな誤解生みまくりの言い方しなくてもいいんじゃない！？そんなこと聞いたら何をされるか分かったもんじゃ……………」

ガッ フィナが俺に足払いをかける

ドサッ 俺、うつ伏せに倒れる

ガシッ フィナが俺の右足を可動域限界まで捻る

「分かった。どうなるか十二分に分かった。ちゃんと説明したいからとりあえず俺を解放してくれ」

「他には？」

俺の言葉に耳を貸さず、再びアリスに問いかけるフィナ。ちなみに咄嗟に手を放したのでアリスが倒れたりしていることはない。

「ええと、それよりトモヤは大丈夫？」

心配そうに聞いてくるアリス。そうだよ。これが普通の反応だよ。この二人が異端なんだよ。

「平気よ。よくあることだから」

「そうなんだ」

エルナの返答にあっさり納得してしまうアリス。っておいおい。

「後は……肩車してもらった位くらいかな」

ほっ。これくらいなら何もされないだろう。

そう思った俺だったが、エルナとフィナは数秒間をおき、さらに俺の体を捻りあげてきた。

「痛たたたたたた。ちよ、ギブ！ていうかなんで！？肩車したくらいで！？」

悲鳴を上げる俺に、エルナがそつと耳元で囁く。

「スカートの子を肩車？随分とお楽しみだったでしょうね」

「ぐっ……」

何も言い返せない。あの時は確かに感触が伝わってきたから……

そんな俺を見たエルナとフィナは、より一層力を込めてきた。

そろそろ、もげるかもしれない……

アレ以上やられたら機^{オートメ}〇鎧をつけるのはハメになるので、全力で説明をして、なんとか解放された。かなり酷い目にあったが、行動に支障がなかった。自分の体が頑丈だったのか、二人のやったことがよっぽど上手かったのかは知らん。

なんとか解放された俺だったが、それでも未だに怒られていた。

「まったく、アンタは何してんのよ」

「ごめんなさい」

「途中でここに来て私たちと合流すればよかったじゃないの。人手が多いに越したことはないでしょ」

「返す言葉もございません」

「拳句の果てに貴族と決闘して。しかも勝っちゃうなんて。仕返しにでも来たらどうすんのよ」

「っ……」

ここまで畳み掛けられるとけっこう響く。本当にどうなるんだろう。アイツ、プライド高そうだったし。

すっかり意気消沈している俺に、アリスが話しかけてくる。

「そのことは大丈夫です。ハルンお坊ちゃまは、あれでも根はいい人ですから」

笑顔で言ってくれるアリス。なんだろう、スツゲエ安心できる。

「アリス、人のことよりもまずは自分の事を考えなさい」

そうだよな。何よりアリスが仕えている屋敷を見つけないとな。

「でも、全然道分らないし」

申し訳なさそうに言うアリス。何か言おうとすると先にフィナが口を開く。

「大丈夫。大体の場所は分かるから」

その言葉に驚いた表情をするアリス。当然俺もだ。

「本当かフィナ？」

「（コクン）」

「屋敷に言った事があるのか」

「それはない。でも」

「でも？」

「貴族なら、貴族区域にいると思う」

「……………」

「……………」

……………ですよねー

フィナの意見で貴族区域に向かった俺たち。幸い貴族区域はそこまで広くなく　　というか、もともと貴族の数はそこまで多いものでもなかったので、しばらく探し回るとアリスが覚えている辺りに来ることが出来、そこからは一直線に行くことが出来た。

現在、グラドの屋敷門前。

「うわぁー、でっけー」

グラドの屋敷は立派だった。普通の一軒家六つ七つ並べたような大きさ。人目でこの家の持ち主のスゴさ分かる。

「はぁ、やっと帰ってこれた」

「よかったな、アリス」

「はい。みんなのおかげです。ありがとうございました！」

深々と頭を下げるアリス。俺はそこまで役に立っていないけど。

「じゃあ、アタシ達はもう行くわね」

「またね」

そう言っ二人は戻ろうとする。俺も行こうと振り向き、

「お待ちくだされ」

呼び止められる。

向くとそこには、執事服をしつかりと着こなした初老の男性が立っていた。

「えつと、どちら様？」

俺がそう聞くと男は、

「申し遅れました。私、このこの屋敷の執事長を務めています、マロフ・テイクラミナと申します」

と言って礼儀正しく礼をした。

「執事長！どうしてここへ？」

「アリス、あなたがいつまで経っても帰ってこないから主もあなた両親も心配していたのですよ。一体どうしていたのですか？」

「あー、それは……」

口ごもるアリス。だがそんなことはお見通しだばかりにマロフさんは微笑むと、改めてこちらへ頭を下げてきた。

「この度はうちの使用人がご迷惑をおかけしたようで」

「いいんですよ、こっちが勝手にやったことですから」

俺がそう言っマロフさんは顔を上げて続ける。

「そうはいきません。是非お礼をしたいので、どうぞ上がってください」

「いえ、結構です。ご迷惑でしょうし……」

「何を言いますか。ここであなた方を帰してしまつたら、私は主からお叱りを受けてしまいます。この老いぼれを助けると思つて、どうかお願いします」

「う……………」

さすがにここまで言われると断るのが忍びなくなつてくる。後ろに視線をやると、仕方ないという風に苦笑しながらエルナが頷き、同じ様にフィナも頷く。

俺は前を向き、マロフさんに言う。

「分かりました。では、お言葉に甘えさせていただきます」

俺の返答に満足そうに頷くと、マロフさんは屋敷の扉を開け、入るように促してくる。

年寄りには敵わない。

俺はそんなことを思いながら、屋敷の敷居を跨いだ。

第16話 女は強い（後書き）

いやー、最近暑いですね。

自分の通っている学校では教室内で熱中症になる人が出てしまいました。

皆さんも健康管理には十分お気をつけ下さい。

ちなみに作者は平気です。バカなので

第17話 偶然も必然（前書き）

いや、また遅れちゃいましたね。ゴメンなさい。
なんか細かいところか考えるの苦手なんですよね。
まあ、頑張つて考えて書いたんで、どうぞ

第17話 偶然も必然

屋敷の中は広い。まず入ってすぐのところが俺の家のリビングの3倍以上は確實ってなんだよ。

マロフさんは俺たちを応接間っぽいところに通すと「主を呼んで来ますので、少々お待ちください」と言い残し、アリスを伴って部屋を出て行ってしまった。

「くはあ……こういう堅苦しいところは性に合わん」

五人座り位の長さのソファの真ん中に座る。めっちゃフツカフカだった。

「ホントね。ちよつと緊張する……」

そう言いながらエルナは俺の右隣に座る。

「私はそんなでもない」

そう言っつてフィナは俺の左隣に座る。……ちよつと近くない？ほんとど密着してるんですけど。

その状態を見たエルナが言う。

「トモヤ！アンタ、フィナに近付きすぎ！」

「いや、俺のせいじゃないと思うんですけど……」

「口答えしないで、いいから離れなさい！」

「離れろって……」

離れようにも両側に二人がいるのでどうしようもない。モタモタしていると俺を睨みつけるエルナの眼力が増していく。本能的にヤバいと感じた俺は、折衷案としてエルナの方に近づく。

「ちよ、ちよつと！なんでアタシの方に来るのよ!？」

「お前がフィナから離れろって言ったからだろ」

顔を真っ赤にして怒るエルナに正論をぶつける。「うっ……」と言っつて萎んでしまうエルナ。……勝った。なんか知らんが勝った。

優越感に浸る俺と顔を真っ赤にして俯くエルナを見たフィナが、何故かムツとした表情になった。そして理由は知らんが俺の腕を掴

んで思いつきり引つ張る。

「ちよ、フィナ、離して……」

「イヤ」

そう言つてフィナはさらに強く引つ張り、俺は勢いあまつてフィナにもたれかかるようになってしまつ。

「おっと……ゴメンな。すぐにどくから……」

軽く謝罪してどこうとする。 が、何故かフィナに止められる。

「フィナ……?」

「どかなくて、いい」

「へ?」

どかなくていいつて………何故?

俺が首を傾げていると、今度はエルナ。

「フィナ、何してんの!手を離しなさい!」

「イヤ」

「イヤじゃない!」

何だかよく分からない理屈を立てるエルナ。どうやら大層ご立腹のご様子。そしておもむろに俺の手を掴むとこれまた引つ張り出す。

「離れなさい!」

「イヤ。そつちこそ離れて」

「アタシはいいのよ。アタシは!」

どういふ理屈だそれは。

はあ。これはあれだな。なんでかは知らんけど、二人がムキになつていることだけは分かつた。

「離しなさい!」

「そつちが」

「いやあ、若いつていいですな」

「え?」

誰?自然な流れで年寄り臭い発言した人は。

見ると黒を基調とした立派な服を着ている男性が部屋の扉のこ

るにいた。隣には「え？それ舞踏会とかで着る用じゃね？」と言いたくなる程のキレイな白いドレスを着た、これまたキレイな女性。その後ろにアリスとマロフさんが控えているからこの人たちが主なのだろう。

二人は俺たちが座っているソファのテーブルを挟んだ向かいのソファに腰掛ける。

「はじめまして。私はヴァン・グラド。一応、この屋敷の主人だ」

「私はリリア・グラド。この方の妻です。この度は息子のハルンがお世話になったようで」

「うっ……」

心に刺さった。遠まわしに言ってくるのが余計に響く。

俺がそんなことを考えているのが分かったのか、ヴァンさんが無精髭を生やした顔を笑顔にして言ってくる。

「ご心配なく。私たちはあなたを恨んでなんかいない。むしろ感謝しているくらいなんだよ」

「へ？」

感謝？自分の息子がやられたってのに？

俺が困惑していると、ヴァンさんは続けて言う。

「ウチのハルンは、親の私が言うのもなんだが剣の才能がある。ただ今まではその才能に頼りきって最低限の修練しか積んでこなかったんだよ。でも、今日君に完膚なきまでにやられ、己の未熟さを知った。私たちはそれが嬉しくて仕方ないのだよ」

ヴァンさんの説明にリリアさんも頷く。だが、その説明には脚色がある。

「いや、完膚なきまでってのは言い過ぎじゃないですか？」

そこまで圧倒的にやった記憶はないんだが……

すると、今度はリリアさんが笑顔で言ってくる。

「そんなことはないですよ。魔法を使っている相手に対して、魔法を使わず武器だけを壊すなんて、かなりの力の差がないと出来ませんよ」

「あ、あはは…」

かなり褒められた。いや自分そこまで強くないっすよ、と言いたいが、この本気で感謝されている状態だと言いつづらう。黙ったままだと体がむず痒い。

ばれない程度に体をモゾモゾさせていると、ヴァンさんがさつきとは違う笑顔で話しかけてくる。

「で、その両隣の子達とはどんな関係なんだい？二股はいかんよ」「ぶっ」

思わず噴き出してしまふ。どうやら勘違いされてしまったようだ。俺は苦笑しながら説明する。

「やだなあ。別にこの二人とはそんなんじゃ」「ゴスツ×2」

大量の脂汗が出てくる。脇腹をサンドイッチされたのだから当然だろうよ。ていうかなんで？なんでこの二人は俺に危害を加えて来んの？そしてなぜ平然としていられるの？

「あの、どうかしましたか？顔色がよろしくないようですけど」「リリアさんが心配そうに尋ねてくる。

「い、いえ、別に…。あ、そうだ、自己紹介が遅れました。俺は篁智哉です」

余計な詮索はされたくないなので強引に話の流れを変える。

「フィナ・レノウド」

「アタシはエルナ・コーレインです」

俺に続けてエルナとフィナも自己紹介する。

「…コーレイン！？」

「ふえ？」

ヴァンさんが驚いたような表情をする。隣のリリアさんも然り。

「キミは本当にコーレインと言っのかい！？」

向かいのヴァンさんが腰を上げる程の勢いで聞いてくる。

「そ、そうですけど…」

エルナが戸惑いながら答えると、ヴァンさんは脱力したようにソ

ファに座る。

「あの……どうしたんですか？」

そこまでされると聞かないわけにも行かないので尋ねると、ヴァンさんはさっきと打って変わって弱々しい笑みを浮かべる。

「私はかつてイワン・コーレインとその妻ソフィ・コーレインの部下だった」

『！』

俺たちにかつてない衝撃が伝わる　　は誇大解釈だな。エルナは驚いているがフィナの表情に特に変化は見られない。俺もヴァンさんのリアクション見た辺りからうつすら分かった。

ていうかエルナの両親の名前初めて知ったんですけど。

ヴァンさんは続ける。

「この国の貴族には2種類あってね、国の創設時から続く貴族と、戦いなどで大きな戦果を挙げ、国王から爵位をもらった一族だ。私は後者。十数年前の戦いでね。それまでは二人と同じ魔法部隊にいた。といっても二人は副部隊長。私はしがない上等兵だったがね」

いや上等兵でも十分じゃね、というツツコミはそつと胸のうちに「二人は凄かった。元が他人とは思えないような連係。驚異的な頭脳。多種多様な魔法。どれを取っても一流だった」

隣のエルナが心なしに嬉しそうな表情になっている。両親の話が聞けて嬉しいのだろう。

「イワンさんは真っ赤な髪に鉛色の眼、ソフィさんは雀色の髪に紅い眼」

ヴァンさんはそこで一旦話を区切り、エルナを見据える。

「キミは本当にご両親にそっくりだよ」

その言葉を聞いたエルナは、少し誇らしげな表情をしていた。

「あの、ヴァンさん。ひとついいですか？」

エルナの両親の話が終わったので、ここらで本題を切り出すこと

にする。

「なんでも聞いてくれ。といつても、私の知っていることだけだがね」

ヴァンさんから了承が得られたので、遠慮なく。

「メイラ・ベルティ。この人を知っていますか？」

俺の問いにヴァンさんは口元を歪める。

「知っているも何も、メイラさんは私やイワンさんたちのいた部隊の隊長だった人だよ」

「え、マジ？」

あ、やべ、タメ口になっちゃったよ。

だが、ヴァンさんは気にした様子もなく続ける。

「メイラさんは天才だよ。冷静に状況を分析し、その場に応じて千変万化の技を見せる。イワンさんとソフィさんのペアでもメイラさんには勝てなかった」

「そんなに!？」

エルナが驚いたような声を上げる。同じく俺も。あの普通のおばさんがそんなに強い人だったなんて。

「イワンさんとソフィさんはメイラさんを母のように慕っていた。メイラさんも二人だけでなく部隊全員を子のように思っていた。うちの部隊はまるで家族のようだった」

そこまで言うと、ヴァンさんの顔が曇る。

「二人に、あんなことが起こるまでは」

悲痛な言葉。家族同然の存在の二人が殺された。おまけに容疑者は母のようだった隊長と来れば、その衝撃は計り知れないものだっただろう。

それを分かった上で俺は聞いた。

「ヴァンさん。あなたは本当にメイラさんがエルナの両親を殺したと思っていますか？」

「そんなわけないだろう!」

ヴァンさんは叫んだ。心の底からだということはずぐに分かった。

「あ、いや、すまない」

すぐにハツとしたような表情になり謝ってくる。

「いえ、いいんです。気に障るような質問をした俺も悪いんです」
こちらからも謝る。試すようなことを言ったのだから当然だ。

「もう一つだけ聞きます。メイラさんの裁判はもう終わったんですか？」

俺たちがここまでくるのに数日経っている。最悪、もう獄中かもしれない。

ヴァンさんは逡巡するような表情を一瞬し、答える。

「いや。そんなことが行われたという話は聞かない。だがすでに日数が経過しているなら、近日中に行われる可能性は高いだろう」

「そう……ですか」

「私の方も調べてみる。何か情報を掴んだらすぐそちらに伝えるようにするから安心してくれ」

「…分かりました」

そう言って、俺は席を立とうとする　と、

「あー、ちょっと待ってくれ。一つ頼みがある」

ヴァンさんに呼び止められ、腰を少し浮かせた状態でフリーズ。

「なんですか？」

「しばらくの間、アリスを君たちと一緒にいさせて欲しいんだ」

「……へ？」「」「」

俺、エルナ、フィナ、アリスの声が重なる。つーかアリス、お前も今始めて聞いたのか。

「え……と、なんでですか？」

「いや、今日アリスをおつかいに出したら迷子になっただろう。それはアリスがあまり屋敷から出なかつただけじゃなく、色々な経験が足りないからだと思うんだよ」

「はあ……」

「だから、キミたちに同行し、普段ならしないようなことをして経験をたませようと思うんだよ。お願いできないかい？もちろん、お

礼は出させてもらうよ?」

「まあ、別にかまわないですけど、なんで俺たちに?」

「ああ、それはね……」

ヴァンさんが笑顔を浮かべる。

「アリスがキミのことを気に入って」

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!」

「へるしっ!」

ヴァンさんの言葉は最後まで聞くことが出来なかった。顔を赤くしたアリスが突っ込んできたからだ。俺の耳を塞ごうとしたのだから、力の加減を間違えたようで、俺の首が約160度程回ってしまった。

暗くなる意識の中で思う。

やっぱり気絶する回数多くね?

「ん……あ……」

目が覚めると、また見知らぬ天井だった。

あれ?おかしいな?俺宿屋に意識がある状態で入ったことないんですけど?

上体を起こし、軽く伸びをする。が、妙な倦怠感が付き纏う。

「顔でも洗うか」

ベッドから降り、洗面所に向かう。間取りなんてものは大抵どこも一緒だから場所は大体分かる。

そして、一つのドアを開ける。そして

「……………」
「……………」
「……………」

裸の三人とばっちり眼が合う。

え?なにこれ?なにこの状況?イヤ、ベタ過ぎない?

三人は完全に硬直してしまっている。

幸いにも三人の大事な部分は見えていない。フィナはタオルで隠れているし、アリスはこちらに背を向けてエルナに髪を拭いてもらっていたようだ。エルナはアリスの体でいい感じに見えない。

「ん？」

そこでふと気づく。この空気の中で所在なさげにふらふらと揺れているものに。

「へえ。アリス、尻尾なんか生えてたん

サクツ

「だがあああああああああ！？目が、目に！？つぶされっ！？いや、何か刺さったあ！？」

痛い。眼球が痛い。眼球に何かが刺さった。

「な、何考えてんのよヘンタイツ！」

至近距離からエルナの怒鳴り声。　　って、

「エルナ、目えやったのオマエかツ！？」

「悪い！？覗いたそつちが悪いんじゃない！」

「事故だ事故！」

「どうだかつ！」

くそう。実際に見てしまったのはこっちだから、あまり強く当たれない。

「フィナ！ヘルプツ！眼球が尋常でじゃない位痛いんだ！」

眼球の痛みが一切和らがない為、フィナに助けを求める。

だが一向にフィナがきてくれない。思い切ってエルナに聞いてみる。

「なあエルナ。フィナどうしたんだ？」

「…真っ赤になって固まってる。アリスも同じ」

「……………ああ、そうか」

自力で治せてか。

風呂場の一件から十数分後、俺たちはテーブルに座っている。な

バレだっつの。

「いい加減にしてよっ！しょうがないじゃん、おなか空いたんだから！」

顔真っ赤にしながら言うアリス。そういや俺も腹減ったな。

「それじゃ、ご飯にする？」

「おう」

「分かった」

「はい！」

聞いてくるエルナにそう返す。アリスは特に気合入っていた。

「でも食材とかあんのか？」

俺がそう聞くと、

「もちろん。アンタが寝てる間にちゃんと買ってきたわよ」

と、こっちは悪くないのに、なんか罪悪感が湧き上がるような返答をされた。

このままだと、俺は何もしないダメ亭主みたいだ。そんなのは御免なので、

「じゃあ今日のメシは俺が作るよ」

自主的に申し出る。すると、

『えっ？』

ピツタリ同じ反応。さらに、

「何言ってるのよ」

「無理はしないほうがいい」

「冗談はやめてよ」

と、三者三様にバカにしてくる。コイツら……

「上等じゃねえか！俺がちゃんとメシ作れんのを見せてやんよ！」

軽くキレた俺は三人にそっくり残り、キッチンへ向かった。

結果としては微妙だった。エルナの買ってきたものの中には、見たことのないような食材が多数入っており、ギリギリどんなのかは

分かる食材だけを使ったため、あまり上等なものは作れなかった。本日の夕食は、肉野菜炒めとスープ、それにパンというメニューになった。

それを食べた三人の感想は、

「結構おいしいわね」

「意外」

「ビックリした」

といったものだった。多少気になる点があったものの、俺がちゃんと料理が出来ると分かっただけだったので、よしとしよう。

ちよつといい気分になりながら食べていると、気になる光景が見えた。

「こらアリス。ちゃんと野菜全部食べなさい」

アリスが肉野菜炒めの中の数種類の野菜を端に寄せていたのだ。

「え、苦い」

「お肉と一緒に食べれば平気だから」

お母さん？と言いたくなるようなセリフだと思った。

「それでも苦い」

「ちゃんと食べないと、大きくなれないぞ……………色々と」

「ねえ、今最後にスツゴク気になる言葉が聞こえたんだけど？色々ってどこなのかな？」

「それは……………」

俺はそつと目を逸らす。真実が人を傷つけることもあるからだ。

「目を逸らすなー！こつちを見る！」

アリスが怒る。しかし全くと言っていい程怖くない。むしろ「ぶんすか」といった風な子供っぽい怒り方に、悪いと思いつつも笑ってしまふ。

気がつくくとエルナとフィナもこちらを向いて口元を綻ばせていた。アリスはその様子を見てさらに不機嫌になっていたが、頭をなでてやるとすぐに蕩けた表情になる。それを見て俺は声を上げて笑う。

いつの間にか、部屋には楽しい雰囲気満ちていた。

第17話 偶然も必然（後書き）

改めて、遅れてスイマセンでした。

理由はちよつとゲームをやりこんだのと、他の方の書いた小説を読みまくってたせいです。

次はもうちょい早くいけるかもしれません。

第18話 何事も突然に（前書き）

また遅れてしまった。

今回遅れた理由はエロゲ全ルート攻略したり、ハリポタ全巻読んでたりしてたためです。

ついカッとなつてやった。後悔はしていない。
てなわけで、どうぞ。

第18話 何事も突然に

翌日、俺は一人でグラドの屋敷を訪れていた。

今朝、いつものようにドタバタ騒ぎを繰り返していると、唐突にマロフさんが来た。ヴァンさんが俺一人に用とのことだ。おばさんのことならエルナ達もよばれるだろうから、別の用件なんだろうけど…なんだろう？

マロフさんと一緒に門をくぐる。だが今日は屋敷の中には入らず、脇にそれて少しいったところにある木製の道場つばいところに案内された。そこでは丁度、ハルンとヴァンさんが胴着を着て木剣で戦っていた。

「はあっ！」

気合をいれたハルンの木剣が鋭く振り下ろされる。

「よっ」

が、ヴァンさんにかんたんになされる。

「たあっ！」

素早く剣を切り返すハルン。

「甘い」

またも軽くいなされる。

そんなやり取りが数回続き、

「おっ…と」

ヴァンさんの体が揺らぐ。

「はああああっ！」

ハルンが大上段に剣を振り上げ、決めようとする。

「足がから空きだ」

しかしヴァンさんの足がハルンの足を払う。

「くっ…」

ハルンはバランスをくずし、床に転ぶ。痛みに顔をしかめるも、すぐに顔を上げ、父親を見る。

「今のは卑怯ではないですか、父上!？」

激昂するハルンだが、

「バカモン」

「いたっ!」

ヴァンさんに木剣で頭をたたかれる。

「何が卑怯だ。相手の隙をついて何が悪い。実際の戦いでは相手もお上品に戦ってくれるわけではないぞ」

「しかし…」

「というより、これくらいあの子だってやるぞ」

そういつてヴァンさんは俺を指差す。指された方を見たハルンは始めて俺の存在に気づいたらしく、驚いていた。

「な、何故キミがここに!？」

「私が呼んだんだ」

ヴァンさんはハルンが落とした木剣を拾うと、俺に投げてよこす。

「つと………で、これは？」

意味が分からず、尋ねる。すると、

「ちょっと私と手合わせ願いたい」

いい笑顔で言われましたよハイ。

「え…と、なんでですか？」

「ウチの息子に大差をつけて勝利したその実力が知りたくてね」

流れるように喋るヴァンさん。しかしここで黙っていられない奴が一人。

「待つてくださいい父上!確かに僕は彼に負けましたが、大差をつけたなんてものでは…」

「そういうのはお互いに平等な条件で戦い、負けたときにいいなさい」

「うっ…」

ひどく傷ついたような表情をするハルン。俺も少しフォローしとくか。

「ヴァンさん」

「？なんだい」

「あの、俺もハルンと戦ったときは…その…苦戦…しました…よ？」
「その気遣いで余計惨めになるわー！」

走って出て行ってしまおうハルン。なんだアイツ、人がせつかくフ
オロー入れてやったのに。

「くつくつく。キミは本当に意識しないでやってるんだね」
「？」

何が面白いのか、ヴァンさんは口をおさえて笑っていた。その笑
いが収まると、急に真面目な表情になる。

「トモヤくん。私は本気でキミと戦いたいと思っている。もし、私
と戦ってくれるならキミにいい事を教えよう」

「いいことって？」

「キミが今一番知りたいことだけだと言っておこつ」

それだけ言つとヴァンさんは少し離れて木剣を構える。

「……」

俺も入り口付近に《飛鳥》を立てかけ、受け取った木剣を構える。
「はあっ！」

最初に仕掛けてくるのはヴァンさん。素早く踏み込むと同時に木
剣を振り下ろしてくる。

「つぶな！」

それをギリギリのところまで止める。それでも剣の勢いは止めきれ
ず、少し後ろに下がる。この人…本気だ…。

「ふっ！」

ヴァンさんの木剣は俺の剣の上を滑り、体ごと回転して横薙ぎに
振るわれる。

「よっ」

すぐさま剣の範囲外に跳んで逃げ、木剣が完全に振るわれるのを
見た瞬間、一気に床を蹴る。

俺の木剣の先は一直線にヴァンさんの胸へ向かうが、右に払われ
る。そのままの勢いで体を捻り、左足で蹴る。これは腕で防がれる。

一本足で立っている俺へ、容赦のない足払いが繰り出される。

「ぐっ！」

体制を崩し、倒れて行く俺の体に、ヴァンさんの掌底がヒットし、さらに勢いよく床に倒れる。

「ててー！」

痛みに顔をしかめていると、ヴァンさんが木剣を振るってくるのに気付き、慌てて転がって避ける。続けて二転三転し、十分に距離をとってから立ち上がる。

「どうしたんだいトモヤくん、キミはまだまだこんなものじゃないだろっ?」

ヴァンさんが軽い調子で聞いてくる。

「いきなりでそんなにやる気出ないですよ。元々俺はやる気出にくいんで」

少しばかりの苛立ちを込めるが、ヴァンさんは特に気にした風もなく、

「そっか。じゃあキミに本気になってもらおう」

と不思議なことを言う。

俺が口を挟まないうちにヴァンさんは続ける。

「キミが私に参ったと言わせたなら　メイラさんの裁判について教えよう」

「……」

一瞬口が開きかけるがすぐに閉じる。いつ知ったのだとか、どうして戦わなくちゃいけないのか。そんなことは後で聞く。今やるべきことは一つ

「上等だコラ」

このおっさんを叩きのめす。

今度はこっちから攻める。全速力で走り木剣をたたき付ける。あっさりと防がれるが、さっきとは違う。

「魔法は…ズルいんじゃないのかな」

俺の木剣が水に覆われていることだ。

「本気を出せって言ったのはアンタだろ」

そう言っただけで後ろに退がる。なんかもう敬語使ってないけどいいや。「そうか。キミがその気なら私も」

ヴァンは剣を正眼に構える。だがああ言っただけには何も変化は見られない。

「ふっ！」

ヴァンが剣を勢いよく振るう。しかし完全な空振り。特に何か変化があるわけでもガリッ

「！」

突然、俺とヴァンの中の床が削れる。反射的に俺は横に飛ぶ。すると、

バキイッ

俺がついさっきまで立っていたところの後ろの壁が大きく削られる。これは

「風…放出系の魔法か」

「ご明察」

ヴァンはそう答えると適当な方向に木剣を振るう。振った先の壁や床がガリガリ削れていく。

「なんだそりゃ、衝撃波か？」

「近いね。これは剣を媒体に風の刃を放っているんだよ」
似たようなモンじゃねえか。

「ほら！次行くよ！」

ヴァンは幾度も剣を振る。

「ちっ！」

俺は走り出す。相手の攻撃が見えない以上、その場に黙っているのは危険だと判断したからだ。

「まだまだあつ！」

さらに剣を振るヴァン。

「これ反則だ　ろっ！」

逃げるために円を描くように走るのから一転し、一直線にヴァンへ向かって走る。

「はっ！」

ヴァンが横薙ぎに剣を振るう。攻撃は見えない。見えない攻撃をまっすぐに進みながら避けるなんて、銃弾を見てから避けるくらいに難しいだろう。だから

「どおおらあっ！」

避けずに、砕く。

風の刃のスピードは大体分かっていた。何回も見たからタイミングはつかめた。

木剣を握っている手に伝わる確かな手ごたえ。うまい具合に砕けたらしいが、代わりにバキツと音を立てて木剣は折れてしまう。

半分ほどしか無くなってしまった木剣を捨て、止まらず走る。返す刀でもう一度剣が振るわれるが、冷静に斬線を見て、身をかがめて回避する。ヴァンの至近距離まで近付き、ジャンプして顔面目掛けて蹴りを繰り出す。

「おっと」

後ろに身を引いてかわされる。が、

「どうした、服切れてるよ」

「何!？」

ヴァンの胴着の前に真一文字の切れ込みが入っていた。

「これは…まさか!？」

驚いたように言い、ヴァンは俺の足を見る。そう、俺は足に風を纏わせたんだよ。ぶつつけ本番だったけど、成功した様でなによりだ。

「どうだ。もういいか？」

「……いいやまだだ」

俺の問いに、ヴァンは心底楽しそうに言う。

「始めは少しでもやられたらそれでいいと思っていたんだけどね…キミが私の予想以上にできるからね。もっと続けたくなくなってしまっ

たよ」

そう言っただけで含み笑いをするヴァン。

「……………怖っ」

若干ひく。ていうかそれアンタの個人的願望じゃん。俺を巻き込まないでくれよ。くっそう、こっちの方が不利だよこれ。

どうやら本当にまだ続けるらしい。木剣を持ち直すヴァンをうらめしそうに一瞥し、しょうがないのでこちらも構える。

「さあ来いっ！」

「テンション高いなこの野郎！」

叫んで走り出す。向かうヴァンは縦横無尽に剣を振るい、風の刃を放ってくる。やはり見えないが、そうばかりかすか撃たれば対処の仕方もある。手刀に水を纏わせ、叩き落していく。

放たれる風の刃を砕き続け、少しずつヴァンに近づいていく。十分に近づいたところで仕掛ける。

「でえいっ！」

回し蹴り。再び後ろに退がってかわされるが、今度は足の裾が切れている。

続けて手刀。さっきのは硬度を持たせていたが、今度のは斬れ味を持っていく。手刀を防いでいくヴァンの木剣が少しずつ欠けていく。

手刀と蹴りを乱発しながら、じりじりと後退させていく。

「はっ！」

防戦一方だったヴァンが、いきなり後ろに飛びずさり、同時に木剣を振り下ろしてくる。これを手刀で止める。続けざまに蹴りを繰り出されるが、これを足で防ぐ。

ヴァンは剣と足を同時に引き、さらに後退。そのまま剣で空を切る。体が覚えているタイミングで手刀を振る。放たれた風の刃を砕くために。

けれど手刀を完全に振り切っても手ごたえが無い。体に当たる感触もない。はっと間違いに気付く。

次の瞬間にはヴァンの木剣が脇腹に食い込んでいた。その衝撃に身体はひるみ、息が押し出される。体が硬直している間にまた一閃、足に力が入っていないかったこともあり横合いに飛ばされる。

「かはっ！はっ…はっ…」

息を吐き出し前を見る。眼前に迫る木剣に気付き、咄嗟に両腕を前に出す。魔法が遅れ、そのままの腕に伝わる痛みに呻く。お返しに風を纏わせた足で蹴り上げる。完全に入ったと思っただが、胸の皮膚が薄く切れているだけなのに舌打ち。後ろに退いていくヴァンを見ながらゆっくりと立ち上がる。腹の痛みは我慢出来るが、どうにも左腕がしびれる。あまり無理は出来なさそうだ。

ヴァンが走ってくる。木剣は左に構えている。丁度いい。こちらから向かうのも億劫だ。十分に間合いに入ったヴァンは腕をしなければ、剣を振るおうとする。両腕を持ち上げる。これ以上長くなると面倒くさい。一步踏み出し、迎え撃つ。

キィイーン

小気味いい音が耳に届く。向かい合っている俺とヴァンは身じろき一つしない。振るわれようとしていたヴァンの木剣を、水の籠手をつけ無理やり動かした左腕が押さえ、鋭い斬れ味を持っている水の手刀がヴァンの喉笛で止まっている。

「……くっ」

最初に動いたのはヴァン。

「くっくっくっく…、あっはっはっは」

初めは抑え気味だった笑いが、次第に大きくなっていく。

「…もっいいい？」

「ああ。いいよ。私の負けだ」

そう言っただけヴァンは剣をおろす。俺も両手をおろし、痛む箇所をさす。

「大丈夫かい。少しやりすぎてしまったようだね」

「いえ、平気です。…それより、約束の件ですけど…」

「ああ、メイラさんの裁判のことだね。分かった。約束だからね」

ヴァンさ もうヴァンでいいや。ヴァンは、そこで一息いれると真剣な表情になる。

「メイラさんの裁判は今日の深夜開かれる」

「……急過ぎんだろ」

「すまないね。実を言うと昨日の時点で分かっただけだけれど、キミ達 いや、キミの実力が知りたかった」

「どうして？」

「メイラさんを助け出すときに、足手まといにならないか不安でね」
「……助け出さなきゃいけないような状況なんですね」

ヴァンの表情が曇る。そしてゆっくりと説明を始める。

この国の裁判は公平に行うために、三人の裁判官、一人の上級裁判官、傍聴人、そして立会人として貴族が置かれる。問題はこの立会人としての貴族の存在で、裁判の終盤、裁判官同士の審議の際に、貴族が参考として意見を求められる。しかし大抵の場合、この時の貴族の意見が判決になる。これは昔からこの国で貴族の力が強かったためらしい。

「今回の裁判、立会人となるのはメイラさんに罪を着せた張本人らしいんだ。もし本当に犯人なら、メイラさんを死罪にするように言うかもしれない。言われたらおしまいだ。だから私は、裁判で騒ぎを起こし、メイラさんを助けようと思っている」

「…具体的な作戦は決まっていますか」

「ああ、それなんだが、私とキミが傍聴人席にいて、傾合いを見計らって私が飛び出し、その隙にキミがメイラさんを、というものだ。キミにもある程度の負担がかかるが、これしかないと思う」

ヴァンの考えを聞き、数瞬の熟考。そして、

「それよりいい考えがありますよ」

「…それはこちらとしては助かることは否定できない。けれどそれはキミに負担がかかり過ぎる」

俺の考えを聞いたヴァンの反応はこんな感じ。

「問題ありません。こっちはこっちで上手くやるんで」

「しかし…」

「お願いします。俺は大丈夫ですから」

真っ直ぐに相手の目を見て言う。ヴァンも俺の目をじっと見る。

「…分かった。君の考えでいこう」

「ありがとうございます」

ほっと胸を撫で下ろす。これで拒絶されたらどうしようかと。

「では今夜、屋敷の前で落ち合おう。彼女たちには気付かれないようにね」

「もちろんです。それでは」

道場を出て行こうと踵を返す　と、

「一つ聞いていいかい？」

ヴァンに呼び止められる。なんか既視感^{デジャヴ}。

「キミはどうしてそこまで頑張ろうとするんだい。もとは他人だろう？」

ヴァンの問い。それは俺の行動を傍から見た人からしたら当然気になることだろう。ただ、自分としてはちゃんとした理由がある。

振り返って言うのも恥ずかしいので、背を見せたまま返す。

「エルナとメイラさんは、この世界に来て右も左も分からない俺に親切にしてくれました。恩返しするくらいは当然でしょ。…それに」

「それに？」

入り口に立てかけていた《飛鳥》を拾い上げる。

「恩人一人も助けられなかったら、生きていく甲斐がないじゃないですか」

「…」

ヴァンは何も言わない。笑われても構わない。自分で聞いてもおかしくなるような考えだけど、これが今の気持ちだ。

それでも若干の恥ずかしさは覚えつつ、俺は道場を後にした。

浴槽からお湯を掬い、体についた泡を流す。

ヴァンとの打ち合いから数時間、外はもう真っ暗になっている。

俺は宿屋の部屋に備え付けの風呂に入っている。生憎とこの世界にはまだシャワーなるものが普及しておらず、体を流すには浴槽の水を使わなければならない。とは言ってもこれから入る人が三人もいるので、なるべく節制するようにしている。ちなみに、俺が一番風呂をわざわざ頂いたのは、ヴァンとの試合で流した汗を流したかったからとかそんなスポーツマン的な理由じゃない。昨日三人が入った後風呂に入ったら、浴室がイイ匂いで充滿していて、落ち着いてお湯に浸かれなかったからという、思春期あふれる理由からである。ふと、脇腹に手をやる。ヴァンとの戦いで傷めた箇所は帰ってきからすぐにフィナに治してもらった。ただ治してくれといっても怪しいので、正直にヴァンと戦ったと言った。もちろん、今夜のことは隠した。これで後は、バレないように宿屋を抜け出るだけ
コンコン

「ん？」

不意に浴室の戸がノックされる。誰？

「トモヤ、ちよつといい？」

「フィナ？」

戸越しなのでやくぐもって聞こえるものの、その声は確かにフィナだった。

「ああ、いいよ」

なんとなく股間の辺りをタオルで隠す。なんか落ち着かない。

「……トモヤ、なにか隠してない？」

はいあります。メツチャやましいことがあります。

「んー…別に。なんで？」

「なんとなく」

女の直感恐るべし。世の妻帯者たちがすぐに浮気バレるのもなんかわかる。

「なんとなく、つてひどくない？」

そう？と言って確実に戸の向こうで首を傾げているであろうフィナ。ははは、と軽く笑い、

「じゃあ今度は俺から質問。フィナはなんか俺に秘密とかある？」

軽い仕返しのつもりで聞く。とは言っても相手はあのフィナなので大したリアクションなど期待していなかった。が、

ドンガラガツシャーン

と、そんな感じの音が戸の向こうから聞こえてくる。一瞬唖然とした俺だったが、もしかしたらフィナが倒れたのだかと思ひ、

「大丈夫か？」

と戸の向こうに声をかける。すると、

「だ、大丈夫。じゃ、じゃあこれで」

俺が何か言葉をかけるより早く、フィナは行ってしまふ。ドタドタという足音から察するに、かなり急いでいったのだらう。俺はそんなフィナの行動に首を捻りながらも、自分も風呂から上がるうと思ひ、扉を開けて浴室から出る。予め近くにおいておいたバスタオルを使って体を拭く。あらかたの水分を拭き終えたので、足元の籠にタオルを投げ込む。この籠の中身は毎朝宿屋の人に渡し、その後洗濯してくれるというシステムだ。

たくさんの人が泊まったら洗濯大変そうだなと思いつつ、パンツに手を伸ばし、

「ちよつとー、さつきスゴイ音したけど大…丈……夫……」

ガラツと脱衣所の引き戸を勢いよく開けたエルナと目が合う。

「……」

「……」

お互いあまりに唐突過ぎることに思考停止になってしまふ。

ふと、俺の顔を凝視していたエルナの視線がゆっくりと下がっていき、

「x ツー!？」

一部分を見た途端、よく分からない言語を発し、爆発的に顔を赤く

する。その赤さたるや父親譲りの紅い髪にもひけを取らないほどだった。

エルナはありえない速度で回れ右をすると、全力で逃げて行ってしまう。……扉を開けたままで。

俺はゆっくりとした動作で扉を閉め、用意していた衣服を全部着て、はあああああ、と深く深くため息をつき、一言。

「……………もう死にたい」

第18話 何事も突然に（後書き）

どうでしたか？

今回は戦闘描写が長かったですが、うまくかけているか不安です。
次はいよいよ裁判です。

第19話 開廷（前書き）

いや、今期のアニメはなぜあんなにも面白いのが多いのでしょうか
ね

おかげで全然指が進まなかったよ、あっはっはっは

.....ごめんなさい嘘です

ただ自分に才能が無いのがいけないんです

無能なりに頑張ってみました

是非読んでください

第19話 開廷

「だ、大丈夫かいトモヤ君？その…目が死んでるんだが」

開口一番、ヴァンに心配そうに聞かれてしまう。だが問題ない。すでに腹はくくってある。

「はい。平気です」

「そ、そうか。ならよかつ」

「死ぬ覚悟は出来てます」

「全然よくないっ！」

だってねえ、エルナに『アレ』見られてから部屋の中がどんだけ気まずかったと思っただよ。エルナ、目すらあわせてくんなかったぞ。あんな顔真つ赤にして俯き続けるエルナ見たことねえよ。話を聞いたフィナとアリスも酷かった。内容が内容だけにやや顔を赤くし、それでも俺に非難がましい視線をぶつけてきた。正直、何度も何度も死にたいと思った。幸い、この世界は夜が更けるとやるこゝとがなくなるので、住民は基本早寝早起きだ。俺は一端の学生だったのでそれなりに夜更かしはしていたので眠らなかつた。ものすごく助かつた。ま、こんな話恥ずかしいから言わないけど。

俺が思考をめぐらせている間、ヴァンは俺に命の尊さを語ってきた。それを見事に聞き流し、適当な受け答えをすると、ヴァンは満足したように話をやめた。

「ああ、そうだ。これを着てくれ」

そう言っただけでヴァンが渡してきたのは黒いマント。手触りはいいし結構頑丈なのでそれなりにいいものだと思う。

「なんで？」

「キミのその格好は目立つしね」

ヴァンは俺の着ている服を指差す。たしかに前の世界の服は目を引くし、裁判なんかの最中では浮くこと間違い無しだろう。

そう判断した俺はマントを着る。大きかったので《飛鳥》もすっ

ぱり入った。

「じゃあ、行こうか」

俺がマントを着たのを確認すると、ヴァンは先行していく。俺はその後を追う。

街はすでに暗闇に包まれており、唯一の光源は空に浮かぶ月。綺麗な半月だった。耳に入る音といえば俺とヴァンの足音と僅かな風の音だけ。それほどまでに夜の街は静寂に包まれていた。

そんな街を歩いていくヴァン。行く先はいまいち分からない。裁判といってもこの世界に裁判所があるのか分からないし、もしかしたら教会的なところでやるのかもしれない。ただ一つ気付くとすれば進んでいる方向にデツカイ城があるということだけ。

作戦のことやおばさんのことを考えながら歩き続ける。どのくらいの距離を歩いただろうか。いつしか周りの建物は屋敷や店などといったものではなく、何か行事などに使われる、言ってみれば仰々しいものになっていた。ヴァンは何回か道を曲がると、ある建物の前で足を止める。建物の外観はRPGなどに出てくる教会そのものだった。だが十字架を掲げていたりすることはなく外壁も黒ずんでいて、なんとなく陰気な雰囲気を漂わせている。

「裁判はこの中で行われる。…準備はいいかい？」

ヴァンが木製の扉に手をかけながら聞いてくる。なに言ってるんだか。もうここまで来たんだから、いまさら帰るなんてありえないだろ。なんてことを思いながら頷く。

俺の気持ち伝わったのかは知らんが、ヴァンはなにやら納得したような表情を一瞬する。そしてすぐさま表情を厳肅なものにして、扉を開く。

「……」

建物の中は明るかった。ここで人の人生が決まったりするとは思えないほどに。

構造は前の世界のニュースやドラマで見られるようなものに近かった。傍聴人席は木製のベンチが縦四横三並んでいるだけ。その前

には小さな木の柵がある。高さはあまりなく、俺の腰程度までしかない。これはこちらからの侵入を防ぐためではない。線引きのためなのだろうと思う。こっちからは違う領域なのだという。

ヴァンは一番右の列の最前列、五人座りの一番左に座る。俺も続いて左から二番目に。

まばらに人が座っているだけだった席も、しばらくすると埋まっていた。中には隣の人とヒソヒソ喋ったり、俺の髪の色を興味深そうに見るひともいたが、彼らは基本無言だった。

ぼーっと中空を見ていると、正面に見える裁判官たちが座るであろう机の脇の小さな扉が開く。そこに目をやると、四人の男性が真っ黒な服に身を包み、悠然と入ってくる。この距離だと詳しくは分からないが、全員胸にバッジをつけている。二段になっている机の上の段に一人が座り、残りは下に座る。多分あの上の段の奴が上級裁判官ってヤツだろう。髭や髪に白いものが多いというのに顔つきは凜々しい。

「静粛に」

上の段に座った初老の裁判官が言うと、少し残っていたひそひそ話をしている人がすぐさま黙る。

「私が此度の裁判の上級裁判官を務めるワイト・デュール。名前は覚えなくて結構。活用する機会もないじゃろうからな」

すこし酷い言葉にも聞こえるが、遠まわしに「ここにもう来るな」って言うてんじゃないかな、と思う。

「それでは、此度の裁判の立会人となつていただく方に入廷願おう。お入りください」

彼がそう言うと、裁判官たちが入って来た扉とは反対側にある扉がゆっくりと開き、一人の男が悠然と入って来た。

濁ったブロンドに糸目。口元には人を小馬鹿にしたような小さな笑みがあった。

「旧貴族のロト・ド・ドーム氏じゃ。ドーム殿よ、よろしく頼む」

「こちらこそよろしく願います、ワイト殿」

ロトが恭しく頭を下げる。ワイトはそれに軽く手を上げて答える。ロトが頭を上げて指定の席であろう場所に着くと、ワイトは続けて口を開く。

「では続けて被告人に登場してもらおう」

俺たちが座っている席の柵を越えた右の壁の扉が開き、鎧を着た男二人に付き添われたメイラさんが入って来る。念のために俺はマントについていたフードを深めにかぶる。俺を見たおばさんが何かしないとも限らないからだ。

裁判席の真正面にある被告席におばさんが座る。

「被告メイラ・ベルティ。容疑は殺人、及び十数年にわたる逃亡。以上のことに間違いはないか」

「間違いありません」

いつの間にもやらいた人が言う。どうも検察とか警察とかそこら辺の人っぽい。

返答を聞いたワイトがよくあるあの小さい木槌で裁判台のちよつと浮き出ているところを叩く。

「これより、裁判を始める」

裁判はものすごくスムーズに進んだ。まず検察だか警察だかよく分からない人がおばさんとエルナの両親との関係性を語る。続けてメイラさんの過去の経歴を述べ、国に貢献してきたから情状酌量の余地があると言った。関係ないけどおばさん、『はぐれドラゴン単独討伐』ってスゴ過ぎるだろ。てかドラゴンいるんだ。

ワイトがおばさんに「なにか言い分はあるか」と聞いたたら、おばさんは「ありません」と答えた。

それからのことは分からない。あまりにも話が小難しすぎてちよつと寝てしまった。はつと気付いたときにはもう終盤だった。

「それでは立会人のドヘム殿の意見を聞かせてもらおうか。ドヘム殿、どう思うかね？」

裁判官同士で話していたワイトがロトに聞く。ロトは顎に手をやって考えるようにすると、

「被告と被害者はまるで家族のような関係だったと聞きます。そこまでの仲の者を殺めるといふのはあまりにも非人道的だとは思いませんか」

よく言うものだ、と隣で唸るようにヴァンが呟く。

「さらに被害者であるコーレイン夫妻の娘を連れ去った疑いもあります」

ロトはそこでおばさんに目をやるが、おばさんは目を閉じて黙り込んでいる。

「誘拐がまだ決定的ではないにしろ、夫妻の殺害の動機は近い仲であるが故の怨嗟だと思われます。恨みによる殺人、これは決して許されるものではありません。たとえ被告がどれだけこの国に貢献していたとしても、です」

おばさんは何も言わずに黙っている。何故だ？なんでおばさんは何も言わない？

「私は此度の判決に、断固たるものを求めます」

「……うむ」

ロトの言葉を聞き終えたワイトは難しい顔をして俯く。そして、

「判決は」

「一つ、いいかい」

おばさんがワイトの声を遮る。

「……なんだね？」

「いや、はっきりさせておきたいことがあってね。構わないかい？」

「……構わない」

裁判長！と下の段の裁判官がワイトを見るが、それを無視して、ワイトはおばさんをじっと見つめる。返答を聞いたおばさんは満足そうになると、告げる。

「コーレインの娘、エルナ・コーレインは　もういない」

「　！」

そうかこれか！おばさんの狙いは！死亡が確認されていない以上、エルナはおばさんと同じように探される。だが事件の犯人がつかまれば、その犯人が自ら「もういない」と言っつてしまえば、続けてエルナが搜索されることもないだろう。……おばさんはこのためだけに…。

「あたしの言いたいことはそれだけだ。続きをどうぞ、裁判長殿」
「貴様！何と言う口の聞き方だ！」

下の段にいる裁判官の一人が立ち上がる。が、すぐにワイトに手で制される。

「構わん」

「しかし…」

「くどい」

食い下がろうとする裁判官だったが、ワイトが一睨みするとすぐに押し黙る。

「それでは改めて　判決」

ワイトがおばさんを真っ直ぐに見つめる。

「被告、メイラ・ベルティを三十年の禁固刑に処す」

三十年。長いような短いような年月。と言つても俺が今まで生きてきた期間の二倍。その頃俺はもう四十五になっている。おばさんの歳は知らん。けどももう四十か五十くらいはいつてるような気がするな。んで三十年だから七十か八十。この世界の平均寿命なんかは知らないけど、そこまで長生きとも思えない。極刑とかそこらへんなら速攻で止めに入ったけどここまで微妙な感じだとリアクションに困る。

こっそりと隣に座っているヴァンを見る。するとヴァンも同じようにこちらを見ていた。どうするか困っているのだろう。というか若僧の俺に尋ねようとするなよ。あんたの方が場数踏んでんだから

あんたが決めてくれと思い、視線を外す。

そこで視界の端に偶然入ったものに自然と目がいく。笑っていた。

先ほどと変わらぬ席にいるロトの口元が大きく歪んでいた。周囲に悟られないように口を手で覆っているが、この角度からだと思える。

瞬間、頭に血が上る。反面、妙に冷静な部分がある。その冷静な部分の判断で、ヴァンに視線をやる。まだ俺のことを見ていたヴァンと視線があう。そして予め決めていた簡単な手の動きで俺の意思を伝える。それを見たヴァンはほんの僅かに頷いた。

俺は改めて正面を向き、キツとそこに映る全てを睨んだ。

ドサッ

最初に聞こえてきたのは何か床に落ちる音。

落ちたのは俺の隣に座っていたヴァンの体。ヴァンの体はゆっくりと傾き座席と座席の間に倒れこむ。その動きに気付いた人が僅かに動揺し、そのことに気付いた人もその理由に動揺する。それが何回も重なっていき、いつのまにかほぼ全ての視線が床に倒れ伏しているヴァンに集まっていた。

「あの…大丈夫ですか」

ヴァンが倒れた場所のすぐ近くにいた女性がヴァンに声をかける。二チャ

「え…?」

揺さぶるうとしてヴァンの体に触れると、そこからほんの少しの水音が聞こえる。女性が触れた指の先を見ると、そこには赤い液体がべつとりとついていていた。次いで、ヴァンの体と床の間から赤い水たまりが広がっていく。

「きっ…、きゃあああああああああああ！」

その女性の悲鳴を皮切りに、所内は騒然となる。傍聴席に座って

いた人たちが全て立ち上がり、何人かの男性が放心状態だった女性をヴァンから引き離す。

その混乱の中、俺は変わらずに席に座っていた。何も変わらないことが異常。何人かの視線が俺に向けられる。

その視線を浴びながら俺はゆっくりとした動作で立ち上がり、わざとマントの隙間から抜き身の《飛鳥》の刃を出す。

「コ……コイツがやったんだ！見る！刃物持ってやがる！」

近くから男のあせったような声が聞こえるが無視。俺はそのまま歩き、傍聴人席と裁判台とを仕切っていた柵に足をかけ、乗り越える。

「！え、衛兵！くせ者だ！」

ようやく事態に気付いた例の役割がよく分からない人が叫ぶと、さつきおばさんが入って来た扉から、簡単な装備の六人の男が出てくる。

手に二又の槍を持って少しずつ迫ってくるが、明らかに脅えている。人を切った俺を恐れているのだろう。少々申し訳無く思いながら接近。鞘に収めた《飛鳥》で殴打。鎧の隙間を狙っていく。当然反撃もされるがヴァンの攻撃より遅いし、ちゃんと見えるので反応するのは簡単だった。一人頭二、三十回ほどぶん殴った辺りで全員気絶。その労力を鑑みて、やっぱり自分は気失いすぎだと思った。

頼りの傭兵がやられたからか、傍聴人席の全員が慌てたように逃げていく。裁判官たちも、三人の裁判官がワイトを引っ張っていくようにして元来た扉をくぐっていく。ただ、ワイトが最後まで俺をじっと見てきたのが気になった。

さて、本来ならこの騒ぎに乗じて鳥の血でべっとりのヴァンがこつそりとおばさんを連れ出し、俺も適当なところで逃げる予定だったんだが……ここで一つ問題が発生。

傍聴人席にいた勇気ある数人が倒れているヴァンの体を担ぎ上げて持って行ってしまった。あちゃー、台無しじゃん。こうなると俺一人でやらないといけないじゃん。まあほとんどの人は逃げちゃっ

たし、残るは、

「あんたは逃げなくていいの？」

未だに余裕の態度を崩さないあの貴族様をどうにかするかだな。

「あなたこそ、しばらくしたら騎士団が来ますよ。逃げなくていいんですか」

「まだやることがあるんだよ」

適当に言葉を投げながらおばさんに近付いていく。

「あんた…トモヤかい？」

「ご無沙汰してます」

おばさんの手についている石製の手枷を外そうとする。がうまくいかない。

「なんてことをしてるんだい！あたしの事なんて放ってさっさとお逃げ！」

「そもいかないでしょ。…あれ？これどうやるん　ッ！」

全力で横に飛び退く。頬に何かがかすめて血が出てくる。

「テメエ…なにしやる」

俺は怒気を込めた目を攻撃してきたロトに向ける。

「いえ、少々当てが外れましたね。それで邪魔者の排除を」

「邪魔者とは失礼だな。さっきは何もしなかったのに」

「てつきりコーレイン夫妻の娘かと思いましたが」

「自分で殺した人たちの娘を助けようってか。罪滅ぼしのつもりか？」

「あなたの言っていることが理解できませんね。私は行方不明の少女を保護しようと思っただけです」

「飛び込んできたのが野郎だったから殺そうってか？女好きにも程があんだろ」

「………少し、生意気ですね……」

そう言ったロトは片手を軽く横に振る。何の意味も無いような動作が一番危険だとこの世界に来てイヤというほど味わっている。俺はさらに後ろへ跳ぶ。

カカカッ

俺が立っていた場所に何か突き刺さる。これは……針？

「おや、二度もかわされるなんてシヨックですね」

「けっ、針なんてみみっちいもの、当たるわけ無いだろ」

「そうですか。ではもう一度」

ロトは再び腕を振る。着ていたマントを脱いで針を防ぐ。わざわざ避けるまでも無い。今度は十数本の針が放たれたようでマントに結構な量の穴が開いていた。すでに針の影も形も無いのを見ると、やはり魔法か。

「なかなかやりますね」

「お褒めに預かり光荣ですよ」

「けれど、次はどうでしょう」

再三、ロトは腕を振るう。先ほどと同じようにマントを振るって針を絡め取るうとする。が、今度の針はマントを突き破り俺に迫ってくる。

「ぬおッ！」

強引に身を捻って針をかわそうとするも脇腹をかすめて、服と皮膚を裂かれる。

「…服これしかねえんだぞこん畜生」

ジクジクと疼く脇腹を押さえながら唸るように言う。幸い掠っただけだったので出血はあまりない。

「服位いくらでも買えるでしょう」

「この服にはちよつとばつか愛着があんだよ」

「以前いた世界の名残、ですか？」

「…分かる？」

「当然気付きます。そのことを踏まえて疑問があるのですが、何故あなたはメイラ・ベルティを助けようとするのです？そこまで親しい仲でもないでしょうに」

棒立ちになっっているおばさんを見ながらロトが問う。ニュアンスの違いはあるが内容は昼間のヴァンさんと同じだ。今頃はどうして

いるだろうか。死んだフリをさっさとやめてここへ来ようとしているのか。まあいいか。質問にはちゃんと答えてやるか。

「お前には理解できねえよ」

それぞれにピツタリの答えを。

俺の返答にロトはピクツと眉尻を動かすが、すぐにもとの表情に戻る。そして大振りで腕を広げ、嗤う。

「まったく。騎士団が来るまで平和的にお喋りでもして過ごそうと思っていたんですけどね…」

「なんだお前、男もイケるクチか？」

ロトの言葉を遮るように茶々を入れる。話の腰を折られたからなのか、はたまた言われた内容からなのか、ロトは小さく笑い、

「大概にしるよゴミが」

明らかな敵意のある目で睨んでくる。

「…ちよつと沸点低すぎない？」

「黙れ。喋るな。空気が穢れる」

それだけ言うとロトは素早く腕を振るってくる。咄嗟に横に走る。針が後ろを通過していくのを感じながら、走り続ける。次々と針が襲い掛かってくるが、走り、台の影に身を潜め、マントを広げて目を狂わせて、避け続けていく。

「…チツ！」

続くやり取りに嫌気が差したのかロトは舌打ちをする。そして辺りに巡らせていた細い目が枷に拘束されたままのおばさんを捕らえた様な気がした。口元が横に広がる。

（マズい…！）

そう判断して駆け出した時にはもうロトは手を振るっていた。何回も見たからか捕らえられる針の軌道。それは真っ直ぐにおばさんを狙っていた。おばさんを引っつかんで強引に避けさせる余裕などはない！

(くっ…！)

ザシュツッ！と肉が貫かれる音がした。だがそれはおばさんの体から出た音でも、ましてやロトの体から流れた音でもない。

肉を貫かれ、体から血を流しているのは 俺だ。

咄嗟の判断で体を突き飛ばしたおかげでおばさんにはかすり傷ひとつない。代わりにおばさんに刺さる筈だった鋭い針は俺の手を、肩を、腹を、足を、貫いていた。

「う…っ…」

痛みに体が揺らぐ。改めて体に刺さっている針を見て、青く半透明であることから水で出来ていると分かった。

突き飛ばされた時に打ち所が悪かったのか、おばさんは横倒しになったまま動かない。くっくっくと笑いが聞こえたのでそちらを向くと、ロトが口に手を当てて震えていた。

「そいつを助けるために少しでも隙が出来ればと思ったんだが、予想以上だな」

再び笑い出すロト。

「しかし分からねえ。何故そこまでその女を助けようとする？その女がどうなるうと、貴様には関係ないだろうに」

利己主義者が、と小さく呟く。

例えおばさんが殺されようが、目の前で大虐殺が繰り広げられようが、隣人が不治の病に苦しもうがこいつは動じないのだろう。むしろ表情は悲慘なものにしながら内心では笑うようなやつだ。

元来、人間の思想はそれぞれ別だ。こいつのように他人なんかより自分のことを優先させるものもいれば、逆に他人を重視するやつもいる。解決すべき物事に見てみぬ振りをするやつもいればいちいち事件に首を突っ込むやつもいる。美意識だつて人生観だつてそれぞれ違う。自分と違う考えを全て否定するなんてキリがない。だからロイツの考えを否定する気は無い。

だが、

「……………だよ…」

「ん？」

「……………イんだよ」

「なんだって？」

「…今ここでこの人を、恩人を見捨てたら、俺の寝覚めが悪イんだよ！」

自らの考えを曲げる気も無い。

「……………」

ロトは無言だった。善だの悪だのそんなことを言うつもりは無い。いつだって俺は自分がやろうとしたことを出来るだけして生きてきた。

どちらかといえば俺もロトと同じような利己主義者だ。己のやりたいことをやる。他人の意見などは気にしない。思うままに行動して悔いが残らないように生きていく。その結果他人が救われようが底辺まで落ちようが知ったことではない。俺がよければそれで満足である。

だからこそ、

同じ考えのロトとは反りが合わないのだろう。

視線の先にいるロトは無言だったが、急にニヤツと笑みを浮かべる。

「…面白い。面白いねえ。そうかそうか寝覚めが悪くなるか。結局は自分のため。そうかそうか」

そう言ったロトはますます笑顔になって、

「それじゃあよく眠らせてあげよう」

不意に、頭上に影が現れる。反射的に見上げた先にあったモノを、どう表現したらよいのだろうか。

全体的に青く半透明なのはさっきの針と同じだ。ただ違うのは規模。一辺が五メートル近くある正方形。奥行きは正確な長さは分か

らないが決して短くは無いだろう。その水で出来た大きな塊は、

一直線に降ってくる。

「！」

瞬発的に《飛鳥》を上げてその塊を受け止める。圧倒的な質量が身に掛かり、傷口から血が溢れていく。塊の質量は一向に減らず、むしろ時間が経てば経つほどに増大していくように感じる。《飛鳥》を支えている腕が震える。骨が軋む。踏ん張っている足が崩れそうになるのを、砕けるほどに歯を食いしばって堪える。そこまでしても、受け続けるので精一杯だった。

「どうだ、私の魔法は？」

薄ら笑いを浮かべたロトが問う。

「それは私ができるものの中で一番の威力を誇るもの。本来ならばあつという間に潰されて終わるのに、それに耐えているあなたはすごいですよ」

「冗談ではなく本当に感心したようにロトは言う。そんな余裕さが腹立たしかった。

「…へっ、なめんなよ。この…位、全然問題ないつての…」

「…ふっ、そんな状態でも軽口をたたか。ならば…」

ロトの手に三本の針が現れる。思わずぐっつと息を呑む。

「これも平気か？」

ドスツ！と一本の針が左の太ももに突き刺さる。

「ぐっ……」

思わず左膝をついてしまい、さらなる負荷が体に掛かる。

次は右。これも同じように太ももに刺さり、その痛みで力が抜け、地に膝を着く。両膝をついた状態で上からの重量に耐える。そんな姿は傍から見たら滑稽だろう。

「ふむ。ここまで耐えられると私も自信を失くすな」

ロトの呟きが聞こえるが、もうなにを言うことも出来ない。体中

の傷から血と一緒に力まで抜けていくような感覚。すでに服は真っ赤に染まり、足元には小さな血溜まりが出来ていた。

「…もう喋る気力も無いか」

ロトが言う。

「ならばいつそのこと、楽にしてやろう」

言葉の後に耳に届いたヒュンという風切り音。右肩に鋭い痛みを感じたのを皮切りに、全身から力が抜けていく。

直後、圧倒的質量が身を潰す。

第19話 開廷（後書き）

どうでしたか

裁判のトコは本っ当にテキトーです

もしどこかでイラッとしたなら誠心誠意謝罪させていただきます
次話は出来る限り急ぎます

第20話 想い(前書き)

ダルいです

今話は早く書き上げたのでやや雑かもしれませんが
ご了承ください

第20話 想い

夜の帳も下り、僅かな月明かりだけが照らす街をひたすらに駆ける。

アイツがいないことに気付いたのは偶然だった。たまたま夜中に目が覚めて、何か飲もうとベッドから降りたら、アイツのベッドがもぬけの殻だと気付いた。代金の都合上、しょうがなく同じ部屋で寝ることになったのがこんなところで役に立つとは思わなかった。

アタシが眠っている間にアイツがいなくなるのは二度目だった。不安になった。別にアイツが心配とかそういうんじゃない。アタシは、慌ててフィナとアリスを起こして、心当たりが無いか聞いた。

するとフィナが、アイツがヴァンさんのお屋敷から帰ってきてから何か隠していたと思う、と言ったので、さっさと身支度を整えてヴァンさんのお屋敷に向かった。

夜中だし流石に誰も起きていないと思っていたけど、屋敷の扉を叩くとすぐに執事長のマロフさんが出てきた。アタシたちの姿を見て驚いた様子のマロフさんに、アイツがどこにいるか知らないか、と尋ねると、言えません、と答えられた。

言えない。つまり知ってはいるけれど教えることは出来ないということになる。

そう言われてもただ引き返すことなんて出来ないアタシたちは、それからマロフさんに詰め寄った。初めの内は教えられないの一点張りだったマロフさんだったが、元が優しい人だったからか、やがてゆっくりと話してくれた。

今日裁判が行われること。その裁判がおばさんにとって不利になること。その裁判にトモヤが行くこと。そして アイツが囿になつておばさんを助けようとしていること。

それを聞いたアタシは、ほとんど掴みかかる様にしてマロフさん

から裁判所の場所を聞くと、一目散に駆け出した。

(…ふざけないで)

暗く、前すらろくに見えない道を全速力で走りながら思う。

(一人で勝手に突っ走って…置いて行かないでよ。アタシだっておばさんを助けたいの。そのためにここまで来たんだから。フィナの時だってそう。フィナを助けたいと思ったのはアンタだけじゃない。アタシだってどうにかしたいと思った。でもアンタを放っておくなんて出来なかったから我慢したのに、アンタは…)

息も荒く、胸がキリキリと痛んだ。後ろからフィナとアリスの声が聞こえた。それでも走る。

(また一人で背負い込んで…なんで自分だけでやろうとするの？アタシたちはそんなに頼り無いの?)

街並みが少しずつ変わってくる。簡素な造りの建物から、次第にしつかりした大きな建物に変わってくる。

(…バカにして…!)

周りに何人か人がいる。なにやら切羽詰ったような顔をしていた。いつもなら気になっていただろうが、今は道の小石ほどもどうでもよかった。

(あの夜、勇気を出せって言ったのはアンタでしょ!おばさんを助けられるか不安になっていたアタシに、あんなバカみたいな事を言っ
て元気付けてくれたのはアンタでしょ!あんな子供みたいな方法でも、アタシは…本当に…)

目の前に黒ずんだ壁の建物が見えた。マロフさんが言っていた建物の特徴が一致していた。その扉に向けて一直線に走り、扉に手をかける。

開けると同時に大声で叫ぶ。なんでも一人で解決しようとする、大バカ野郎の名を。

「トモヤ!」

開いた扉の中の光景を見たアタシは思わず目を見開いた。ぐつたりと倒れているおばさん。悠然と立っている男。そして、血まみれのトモヤ。

「ッ！」

慌てて駆け寄ろうとしたが、なぞの男がこちらを見てきたことにより思い留まる。なぞの男はこっちを見てその細い目をかつと見開き、顔を驚愕に染める。

「まさか……コーレインの……？」

その小さな呟きが聞こえ、アタシはさらに警戒を強めた。アタシの姿を見ただけでそこまで分かるなんておかし

「トモヤッ！！」

「！！」

アタシの思考は突如聞こえてきた悲鳴ともとれる声に遮られた。その声の主は遅れてきたフィナ。彼女の目は血まみれで倒れているトモヤに釘付けになっている。

「あ……あ……」

一緒にやってきたアリスはこの惨状に固まってしまっている。無理も無いだろう。自分だってギリギリのところなのだから。

「……くっ……」

男から小さく呻くような声が聞こえた。次々と人が来たことに焦っているのだろうか。

「トモヤ！」

「あっ、フィナ！」

男に目を奪われているうちに、フィナがトモヤの元へ走り出してしまふ。慌てて呼ぶも、彼女が振り返る様子は無い。座席の間を駆け抜け、小さな柵を乗り越え、倒れ伏しているトモヤの隣に跪き、体に手を当てる。ここからだとは見えませんが治癒魔法を使っているのだろう。

「！！」

その光景を見た男の顔色が変わる。その鬼気迫った様子で腕をフ

イナに向けて振るう。振るわれた手の間から何かが飛び出したような気がした。

「危ない！」

反射的に口から飛び出したその言葉を聞いたフィナはハッと振り返るが、飛び出したものとフィナの距離はもう長くはない。そのスピードを考えればあと数秒でフィナの元に辿り着いてしまう。思わず身を硬くしてしまうと、後ろからバキツとなにかを壊すような音が聞こえ、

ゴウツ！と音を立てて座席が飛んでいった。

「……は？」

ものすごい勢いで飛んでいく座席は真っ直ぐに男へ向かう。そのあまりの速度によって生まれた風によってフィナに向かっていった何かは軌道を逸れて壁に刺さり、男は慌てて飛来した座席を避けた。ぎこちない動作で後ろを振り向くと、無残に破壊された座席の留め金と、妙な姿勢で固まったアリスがいた。

「……………アナタが……」

まるで何かを投げた後のような体勢のアリスが言う。

「アナタが……トモヤをそんな目に遭わせたの……………？」

俯いて前髪が顔にかかっているのでその表情は窺えない。

「……もし、そうなら……」

アリスはゆつくりと体勢を解くと、座席の背もたれを掴む。

「許さないッ！」

アリスが腕を引くと、堅牢のはずの留め金がまるで鉛細工のように千切れる。かなりの重量があるはずの座席を片手で掴んで振りかぶると、それを一直線に投げる。

再び投げられた座席を前に、男は最小限の動きでそれをよける。

さっきまでの狼狽っぷりは完全に無くなっていった。それどころかお返しとばかりにアリスに向けて魔法を放つほどの余裕があった。

「アリス、フィナのところへ行つて！」

放たれた魔法をかわし、反撃のため新たな座席に手をかけたアリスに言う。一瞬迷ったような顔をするが、アリスは従ってくれた。フィナの元に向かうアリスを狙おうとしている男をフレイムランスで牽制する。

本来、魔法には名前は無い。属性や種類に違いはあれど、人それぞれで形も役割も違ってくる。けれど、魔法をはじめて使う子供やうまくイメージ出来ない人のために造られた、『イメージしやすくするための魔法名』がある。市販されている子供用の教科書にいくつか載せられており、『フレイムランス』もその一つ。子供たちはこういった魔法を扱えるようにし、そこから独自の魔法を考え出していくものだ。

けれど、小さい頃の出来事により魔法を使うことを恐れ、魔法への関心を失ったアタシは、この教科書レベルの魔法しか使えない。いや、知らない。

対してこの男はおそらく貴族。英才教育を受け、幼い頃からのびと魔法を使い、考えてきたのだろう。

両者のチカラの差は深い。純粹な魔法による勝負ならば勝てる確立は低い。

けれど、

(負けられない…!)

いや、負けたくない、の方が正しい。

だからこそ、

「アタシはエルナ・コーレイン！メイラ・ベルティを助けに来た！」

逃げ道を、なくした。

考えていたように、向かう男は口元を歪めた。

「はじめまして。コーレインさんの娘さん。私はロト・ドヘム。この国の旧貴族です」

こんな状況にも関わらず、ロトは恭しくも腰を折る。その態度に

苛立ちを覚えた。

「募る話もあるけれど、あなたに一つ聞きたい。あなたは本当に、あそこのメイラ・ベルティを助けるというのですか？」

ロトは横目で気絶しているおばさんを見る。その見下したような目つきに、さらに苛立ちが募る。

「ええ、そうよ」

溢れそうな怒りを押し殺し、出来るだけ平淡な口調で答える。

「知っているのですか？彼女は現在、あなたのご両親を殺害した罪に問われており、さらに、幼いあなたを誘拐した疑いまでかかっているのですよ」

「そんなこと、承知の上よ」

「では…何故？」

「十何年も一緒にいると、分かるのよ。あの人があるなことをするような人じゃないって。だから、助けに来た。トモヤと一緒に」

「……………くっくっく」

アタシの言葉を聞いたロトは笑った。そして倒れているトモヤを見る。

「あの少年はすごいですね。あなたにそこまで信頼されている。それに、治癒魔法なんて稀有な能力を持っている子、獣人の子にあそこまで心配されるなんて。よっぽどの魅力があるのでしょうかね」

一生懸命怪我を治しているフィナを見て、泣きそうな顔で声をかけているアリスを見て、

「まったく、腹立たしい」

吐き捨てるように言う。

「まったく最悪の気分だ。あんな友情ごっこをするガキが私の邪魔をするだなんて、身の程知らずにも程がある」

まくしたてるロト。その表情からは嫌悪感と侮蔑しか読み取れない。

「しかし思わぬ収穫もあったな。あの治癒魔法、かなりレベルが高

いようだ。容姿もいい方だし、あの獣人と一緒に裏の競売にでも出せばかなり値が出そうだ」

瞬間、頭が沸騰しそうになる。ほとんど無意識のうちに腕を跳ね上げ、魔法を撃とうとする。だが、撃てない。胸のうちから得体の知れないものがまとわりつく。

「どうした、コーレイン？私に攻撃しようというのか？おお怖い。これは身を守らなければな」

言ってゆっくりと腕を上げ、ロトは手から魔法を放ってくる。

「くっ……」

モヤモヤを振り払い、魔法を撃つ。放たれた魔法を狙うと考えれば、体も少しはマシになる。

バンツ、と音を立てて、互いの魔法がぶつかり合って消える。

「ふむ。まあまあだな。次はこれだ」

続けて一度に複数個の塊を出してくる。その数と同じだけの火弾を放ち、相殺する。

そんなやり取りが何度も続く。少しずつ難易度が上がっていく様子に、遊ばれている、と感じた。

「……もう飽きたな」

その眩きが聞こえたのは、撃ち合いがもう数十回も続いた頃だった。

「つまらんし、時間の無駄だ。限界を見てみたかったが、さっさと済ますか」

そう言っただけの魔法は、先ほどとは段違いだった。十数本の針が、一度に飛来する。

「なっ……!!」

慌てて魔法を放つ。一つ一つを撃ち落とすのは無理なので、役割が爆発のものを使い、爆風で蹴散らす。

こちらが放った魔法は、相手の針の束の先頭に当たると、ボンッ！と音を立てて爆発する。狙い通りにいったか、と一安心するが、

「っ……!!」

突然、ふくらはぎに鋭い痛みが走る。爆風で軌道が変わった一本が掠めたらしい。大した傷ではなかったが、突然のことで意表をつかれ、膝が崩れてしまう。

「終わり、だな」

わずかな煙の向こうからロトが語りかけてくる。

「お前を『保護』したいが、あまり動き回れても面倒だ」

ロトが軽く手を閉じて開くと、針が一本現れていた。

「足をやらせてもらう」

言葉とともに放たれる針。声にならない悲鳴がのどの奥に沸きあがる。逃げ出そうにも足が動かない。ぎゅっと目を閉じる。すぐに襲い掛かってくるであろう痛みを備えて。

「……………」
だが予想に反して痛みは一向にやってこなかった。僅かな風が頬をなで、瞑ったまぶたの隙間から光が入って来る。なにがどうなったのか知るために、恐る恐る目を開け、

「絶句する。」

「……………バカな」

相対するロトも驚きを隠せないでいる。

今、アタシの目の前にあるのは、光り輝く《飛鳥》を持ち、服を血に染めて、それでもしっかりと立っているトモヤの姿。

「な…ぜだ……………」

ロトが問う。

「何故立ち上がれる…？」

トモヤは答えない。

「あれほどの攻撃を受け！それほどの血を流し！あんな無残な姿で倒れていたお前が！何故！立ち上がれる！？」

そう叫ぶロトの顔には、はっきりと恐怖の色が浮かんでいる。

対して、問われたトモヤは、

「根性」

ただそう答えた。

第20話 想い(後書き)

どうでしたか

次回予告も世間話もしないで伝えるべきことだけ言います
作者はこれからゲーム三昧になるので、更新が遅れます
ゴメンなさい

第21話 決着（前書き）

ん、何故だろう。書きたいことは腐るほどあんのに思うように指が進まない。

やはり自分には文才が無いのだろうか。

しかし俺は諦めない。頭の中のストーリーを全て描くまでは！

第21話 決着

どこか遠くで名前を呼ばれたような気がした。

頭の中に靄がかかったように思考がはつきりせず、体はピクリとも動かない。心臓の鼓動がやけに小さく聞こえて、していることさえ忘れていた呼吸も浅いものでしかなかった。口の中はイヤというほどさびの味がし、鼻からは生臭いにおいしか嗅ぎ取れない。手足の感覚がうやむやで、唯一感じる頬からの感触も生ぬるい液体に浸っているものでしかなかった。

そんな状態の中、また名前を呼ばれたような気がした。だが分からない。一体何がどうなって、誰が俺の名を呼んでいるのか。分からなかった。誰なのか聞こうとしたが声が出ず、ただ息が漏れていくだけだった。

まるで接着剤でくっつけたように固いまぶたをどうにか僅かばかり押し開ける。視界は狭かったが見えるものがあつた。

凄まじい勢いで飛んでいく座席。

これはダメだな、と思った。本格的に天からのお迎えが来るかもしれないと思う。

「！」
声が聞こえた。内容までは分からない。だが声の主には覚えがあった。

(……エル……ナ……?)

いつも以上に鈍い思考がそう判断した瞬間、どつと色んなものが頭に浮かんでくる。体中を包んでいた痛み。その痛みを消していく暖かい感触。きつとフィナだろう。必死に名前を呼んでいるアリスの声。

(……ああ)

バれてしまった。誰が教えたのだろうか？さっき運ばれていったヴァンだろうか？誰でもいい。全く、なんてことをしてくれたのだ

ろう。

(…バレたら…怒られるじゃねえか)

こんな危険なことをしたのだから彼女たちは怒るだろう。そしてそれは心配したからこそそのものである。出来れば彼女たちには心配などしてほしくなかった。朝起きたらそこにおばさんがいて、全て誤解だと分かり、もう追いかけることがない。そんなハッピーエンドを迎えて欲しかった。

ふと耳に小さな爆発音が聞こえた。見るとエルナとロトが魔法を撃ち合っている。だがどう見てもエルナの方が押され気味だ。ロトはまだまだ余裕と言った表情をしている。

仮に魔法が互角だったとしても彼女は勝てないだろう。彼女は人を撃つことが出来ないのだから。

(……………)

体にはずつしりと疲労が残っているがなんとかする。傷はほとんどフィナが治してくれた。視線を下げれば、手のすぐそばに《飛鳥》が転がっていた。

……………それじゃあ始めよう。俺が最初に望んだようなハッピーエンドが無理ならば、どうにか別のハッピーエンドにするだけだ。

柄を握った瞬間、《飛鳥》の刀身は眩く輝いた。不思議と力が湧いてきた。

(……………ふう)

ロトの魔法からエルナを助け、内心安堵する。

(…マジでギリギリだった)

立ち上がるようになり、何でかは知らないけどものすごく速く走れた。でもタイミング的には結構ヤバかった。

(さて)

キツ！と眼前のロトを睨む。ロトは僅かにうるたえるが、すぐに余裕そうな表情を作る。

「ハハハハハ。スゴい。スゴいよキミは！こんなに驚いたのは本当に久しぶりだよ。あそこまでやられて、立ち上がった理由が“根性”？ハハハハハハハハ！……バカにしているのか？」

態度が豹変する。愉快そうな笑いから一転し、射殺さんばかりの視線と怒気をぶつけてくる。本気で苛立っているようだ。

「そのゴキブリ並の生命力を称えて、一思いに終わらせてやろう」
言つと同時に、今までよりもはるかに多い量の針を撃ち出してくる。

向かってくる数え切れないほどの魔法を前に、背後のエルナがひつと悲鳴を上げる。

その光景を前にして、俺は、少し足を開き、動きやすいようにする。そして

斬る。

飛来してくる針を一本、時には数本、時には数十本、刃を通していく。両断した針は一瞬で霧散していった。

「……は……？」

驚嘆の声が聞こえた。それはロトのものだったかもしれないし、エルナやフィナ、アリスだったかもしれない。驚くのも仕方が無いだろう。今の動きは明らかに有り得ないものだった。やっといてなんだが自分でもよく分からない。原因はこの光ってる《飛鳥》だろうけど、詳しいことは知らない。知りたいとも思わない。今はただ目の前の野郎から全員を守ればいい。

「くそっ！」

ロトは再び魔法を放つ。先ほどよりも数を増やして。それでも斬る。斬り残しはあつてはならない。後ろのエルナは動けないのだから。

全て斬り、さらに数を増やして放たれたものをまた斬る。これを

何度も繰り返すと、ロトの顔に焦りが見え始める。

「くそっ…クソッ…くそがあっ！」

「あんまり汚い言葉を使うなよ。品位が落ちるぞ」

「黙れエツ！」

もはや悲鳴に近い叫びとともに生み出される幾多の針。それをまた斬る。斬る。

「……………ッ！」

ロトの顔には焦燥と驚愕が貼りついていて。自分の攻撃が次々とかき消されていくのは怖いだろう。圧倒的な力の差を見せ付けられるようで、精神的にも大きなダメージになっているだろう。

「…く、そっ！死ねえええっ！」

ロトが手を俺の頭上に手をかざす。同時に俺の上に影が射す。これは覚えている。俺が押し潰されたアレだ。

素早く上を仰ぐ。そこには予想通り。いや、思っていたよりも大きな、俺が食らったのより数倍のサイズ。それが一直線に落ちてくる。

俺も跳ぶ。強化された分も計算に入れ、僅かに足首の膂力のみで跳ねる。それでも、予想よりずっと速く高く飛んだ。水の塊が眼前に迫ると同時に刃を二閃。十字に斬られ四分割されると、水の塊は一瞬で消失する。

「……………！」

もはやロトは言葉を発しなかった。ただただ俺を恐れるようにジリジリと後ずさりしていく。それを見た俺は一步踏み出す。ゆっくりと、しかし力強く。

「……………ひっ……………」

子供のように脅えるロト。その光景を見た俺は、もう目の前の人間をどうしようしようという気持ちも薄れてしまった。正直、もうどうでもいい。とりあえずけじめとして一発だけぶん殴って終わらせよう。

そう考えてさっきよりも速く踏み出してしまふ。どうもそれが攻

撃色だと思つたらしいロトは、激しく狼狽した様子になる。なにやら慌てて懐から取り出したのは……紙？

「おいだれか！誰かいるか！誰でもいいから出てきてくれ！」

ロトはその紙に向かつて叫ぶ。気でも触れたかと思つていると、

『これはロト殿。なにか御用でございますか？』

紙から声が聞こえてくる。だが肉声ではなく、一文字一文字で発音が違う、ボカロのような不自然な声だった。

「た、頼む！助けてくれ！」

『助けて？と申しますと、どういった状況なのですか？』

「ば、化物が！目の前に化物みたいなヤツが！」

失敬だなコイツ。やっぱり殴るの二発にしてやろうか。

『化物ですか。それは……都合がいいかもしれませぬ』

小さく不審な言葉が紙から聞こえてきたが、ロトは反応しない。気付かなかつたようだ。

「頼む、助けてくれ！金ならいくらでも払う！」

『ええ、もちろんです。ロト殿には日頃から懇意にしておりますので。…では どうぞ』

ピツと紙から赤い光が伸び、ロトの額を捉える。

「……………あ」

小さく声が漏れるとともに、ガクツとロトが膝立ちになる。

『さあ、どうなるかはお楽しみです』

ロトの手から滑り床に落ちた紙から声が聞こえる。その紙には、どうみても魔法陣にしか見えない代物が描かれていた。

「何……………あれ…？」

背後のエルナの小さな呟き。魔法陣を注視していた俺は、そこで始めて異変に気付く。

ロトの額 さっきの赤い光が当たっていた場所に、小さな赤い玉が埋まっていた。あれは…まさか……………。

「嘘……………」

フィナの微かな声が聞こえたことで、俺の疑念は確信に変わった。

彼女が驚いたのなら間違いないだろう。あれは、以前俺が戦ったヘレイが使ったモノと同じものだ。

「あ……………あ」

ロトの目から生気が消え失せ、瞳孔が開きっぱなしになっている。明らかに異常。以前の戦った記憶を思い出し、警戒する。

変化は一瞬だった。

たった一箇所。服を突き破って背中から数本の触手が生えてくる。ヘレイのように全身の変化は無いものの、明らかなその異質な状態は、俺の中の警戒レベルを最大まで引き上げるには十分だった。

ロトの背中から生えた触手はしばらく蠢き、ぎゅっとその身を締め、爆発的に伸びる。方向は三つ。俺とエルナ、フィナとアリス、そしておばさん。

俺は強化された体のフルスピードで駆け出した。向かってくる触手を中ほどで切断し、さらに駆ける。最初に捨てていた鞘を回収。おばさんの元へ向かうと同時に鞘を全力でフィナとアリスへ向かっている触手へ投げる。

まだ倒れているおばさんに向かう触手を切り裂くと同時に投げた鞘が触手を引き千切る。予想以上の威力だ。

斬られた触手は動きを止め、ゆっくりと戻っていく。そしてヘレイと同じように、斬られたところから一瞬で再生する。

再生した触手は、優先事項でも決めたのか、目標を俺に絞って襲い掛かってくる。

俺は再び走る。触手は素早く追尾してくる。それを逃げ切れるものは逃げ、先読みして回り込んできたものは斬る。

裁判所の中を駆け巡りながら、横目でロトの様子を確認する。目には生気が無く虚ろで焦点があっていない。ただ無心に中空を見つめ、触覚の動きにつられるように体が僅かに動いている。

哀れ。

今のロトを見た率直な気持ちこそそれだった。そして何故だろう。おばさんに罪を着せた張本人なのに。エルナたちを襲おうとしてい

たヤツなのに。どうしてだろう。どうしてこんなにもアイツを

(助けたい…)

分からない。理由が見つからない。ただ、まあ適当にアイツが死んだりしたらおばさんの無罪が証明されないとかそこら辺の理由でいい。理由なんて後付けでいい。大事なのは今、俺がどうしたいか。そして、そんなの、もう決めた。

(…助けてやる…！)

やるべきことを決めた俺は壁に向かって走る。ぶつかる寸前、跳躍。考えられないほど高く跳び、勢いそのままに壁を走る。天井近くに来た時点で再び跳躍。そしてロトの真上、天井に足を着け、体全体をバネのようにして、天井を蹴る。

一直線に降下してくる俺を迎え撃つため、触手が伸びてくる。その全てを斬る。斬る。斬る。斬

「ッ！」

バチィッ！と、触手の一本が柄を握る手に当たり、《飛鳥》が弾き飛ばされてしまう。

ドンッ！と重石を載せたように疲労が体にのしかかってくる。空中にいるためバランスがとれず、体がブレる。

(まだ…)

体を強化していた《飛鳥》が手元に無いため、もう体に力など残っていない。ロトから生えていた触手は全て斬った。再生してまた攻撃してくるより、自分の落下速度の方が速い。

(まだ…)

それでも体に力が入らない。このままだとロトの真横に、頭から落ちることになる。もしかしなくても即死だろう。

だが、

「まだだっ！」

諦めるわけにはいかない。諦めたくない。例えぶつかった衝撃と膨大な疲労で手指の感覚が無かるうと。

それでも、この五指を握り締める理由はある。

「あああああああああああああつ！！！」

体中から残りかすの様な僅かな力をかき集める。その力を全て、握り締めた右拳に込める。空中の不安定な体勢のまま、腰を捻り、戻す勢いとともに拳を突き出す。ただ一点。ロトの額の赤い玉目掛けて。

「けじめの、一発だあああああああああつ！！！」

ドガンツ！と拳が赤い玉に当たるとともに、バキツ！と指から、グキツ！と手首から、ブチイツ！と手首の中から、ゴキツ！と肩から音がして、完全に右腕の感覚が無くなる。

無様に床に落ちると、ロトの額にあつた赤い玉が割れて落ちてくる。ロトのからだは大きく揺らぎ、ドサリと倒れる。一瞬見えたロトの目は、もう虚ろではなかった。

「終わつ…た、か…」

思わず呟き、疲れから床に倒れこもつとして、

「…終わりましたか」

ロトが持っていた紙から声がし、一気に気を引き締める。

「…だれだデメエ？」

「ふむ。あれはまだ調整段階だったのですが、それでも倒してしまつとは。いやはやお見事」

俺の問いには答えず、声の主は喋る。

『そろそろ時間ですね。では、異世界からの旅人さん。機会があったら、また会いましょう』

「待つ」

待てと言いつ切る前に、紙は青い炎に包まれ消えてなくなつてしまふ。僅かに残つた灰をしばらく見つめ、疑念を振り払うようにその場から離れる。

転がっていた《飛鳥》と鞘を拾い上げる。《飛鳥》は柄を握るとまた輝いて体は軽くなったが、鞘に納めるとそれも消えてしまった。「おばさん、メイラおばさん」

エルナがおばさんを起こそうと体をゆすっている。しばらくする

とおばさんの目がゆっくりと開いていく。

「おばさん……」

「ああ、エルナかい……」

おばさんはまだ若干ぼんやりした目で周りを見回し、

「……………全部、終わったんだね」

小さくそう呟いた。

俺はそれに僅かに首を傾け肯定しゆっくりと後ろを向く、という
なんかカツコイイ気がしないでもない動作をし、

「トモヤのっ……………バカぁ……………」

「ぐほっ！」

半泣きのアリスに腹をぶん殴られて奇声を上げた。アリスよ、俺
一応重症なんだけど。

「トモヤのバカバカバカ！死んじゃったかと思ったんだよ！」

腕をぶんぶん振り回して叩いてくるアリス。動作は可愛いけど一
撃一撃が強い。ちょ、ま、痛ッ。

「……………」

「あの、フィナさん？」

無言無表情で同じようにフィナが叩いてくる。コイツあ腰が入っ
たいいパンチだ……………って本気じゃねコレ。

「痛い痛い痛い痛い！ちよっとフィナ本気で怒ってない!？」

「……………嘘ついた」

「へ？」

フィナはそれだけ言っただけでボスボス殴り続けてくる。これ以上のダ
メージは洒落にならないので手をつかんでガード。

「え、何？嘘って何？」

「……………隠し事は無いかって聞いたたら、無いって言った」

ああ、そういえば入浴中にそんなことを聞かれたような無いよう
な。いやあ、あん時はここまで大事になるとは思わなんだよ。じゃ
あ、とりあえず。

「ごめんなさい」

「……………(ゲシゲシ)」

くッ、今度は脛にローキックか。芯に響くぜ。

「まあ、そこまでにしといてやってくれ。かなりダメージもあるだろうしね」

こつちにやってきたお婆さんが助け舟を出してくれる。まだ足取りがおぼつかないのかエルナに支えられている。

「で、この子らはどちら様だい？見たことない顔だけど」

「…フィナ」

「アリスと言います。よろしくお願いします」

無表情で最低限のことだけ言うフィナと、折り目正しくお辞儀までするアリス。相対的だねえ。

「ほっ……………」

お婆さんはフィナを見、アリスを見、何故か自分を支えているエルナを見て、俺にニヤニヤした笑いを向けてくる。

「いやぁトモヤ、アンタも隅に置けないねえ。はっはっはっはっは！！」

「？何のことですか」

「気付いてない？いや自覚が無いのか。どつちにしても面白いねアンタは！」

バシバシバシと肩を叩いてくるお婆さん。何気に一番痛い。

しかしどうしたんだろう。お婆さんの発言の後三人の顔がやや赤くなったような……………ん？

「あ……………れ……………？」

グラグラと視界が揺れる。ちゃんと立っていられな

「おっと」

バランスを崩して倒れた俺の体をお婆さんが受け止めてくれる。……………無理も無い。この場所がこんなになる位の戦闘をしたんだ。

疲れて当然。あとはアタシに任せてゆっくり休みな」

お婆さんの声が聞こえた。確かに尋常じゃないほど疲れた。ああ、眠いな。

抗いようの無い眠気が襲い掛かって来た為、パンツ！と裁判所の扉が開いて鎧姿の奴らが入ってきて、俺は動くことが出来なかった。

第21話 決着（後書き）

個人的には部分部分に違和感があります。

いきなり自己反省です

他に何か間違いなどがありましたらご指摘ください
修正するとともに今後の糧としていきます

.....実はもうエンディング考えてたり

第22話 邂逅と説明（前書き）

ちわす。作者です

今回の話には色々細かい説明を突っ込みました
ぶっちゃけそこら辺は適当に流してもいいです

第22話 邂逅と説明

目が覚めると、見知らぬ天井だった。

流石に何回もやると目新しさがなくなってくるな。新しいフレーズを考えるか……って何考えてんだオレ？

薄目を開け、なんとなく高級感漂っている感じのする天井を見つめながら物思いにふける。大したこと考えてないけど。

まあ知らない場所でいつまでも寝ているわけにもいかないのとおりあえず起きることにする。

ぐいっ

「……………あれ？」

なんか、腕引っ張られる。

心の奥底になんかイヤな予感を抱えながら、そつとサイドを確認。そして、

「ぶっ！」

噴き出した。

そりゃそうなるでしょうよ。両腕にフィナとアリスがしがみついてんだもん。ビックリするじゃない健全な男子なら。

いやあ、それにしてもこうしっぴかり腕を抱きしめられるとき、その…ね、まあ何と言いますか、なんか……当たってんだよね。

あゝキツイ。ナニコレ拷問？ 青少年にはキツイよ。二人とも心配してくれててなんやかんやでこういう状態になったんだろうけども。これはかなり精神がヤバイ。急速に煩惱が増殖している。だがしかし、二人とも俺のことを心配してくれたのであって全くそういう気が無いのだからここで手を出したりなんかしちゃったら俺はもう男としてといますか人として終わるような気がするしああもうイイ匂いだなクソツタレ。

いや、しかしオレよ。これはよくよく考えたら結構な幸せ状態じゃないか？ フィナはもちろんだしアリスも無いように見えてたけど

寝間着みたいに薄い服だとちゃんとあることが判明する。何があるとは言わん。むむむ、これは今度からアリスのことを女の子扱いしよう。

まあ何はともあれとりあえずこの状態を長く楽しもう。こんなこと一生に一度有るか無いかだろうし。いやあ役得役得。

ガチャ

「ファイナー、アリスー、トモヤの具合は……っていないわね。どこに行っただのよあの子達ったら」

ラスボス登場。

マズい。マズぞ。こんな状態エルナに見つかったら確実に殺^やられる。ケガとか激戦の後だとか関係なく腹にドロップキック食らう。今度こそ死ぬ。

この状況を打破する為の何かが無いか。そう考えた俺は顔は動かさずひたすら眼球だけを動かし、

「……………」
いつの間にかパッチリ目を開けていたフィナと視線がぶつかる。

(フィナ！この状況どうにかならない！？)

俺は必死にアイコンタクトを送る。それを受け取ったフィナは小さくコクリと頷き、
ぎゅっ

「……………」
どこで伝わり間違えたのかやや頬を赤くして胴体にしがみついてくる。ホワイッ！？

「(ちょ、ちよつとフィナ！？何してんの離れて！)」
小声でフィナに懇願する。これ以上密着していたら見つかったときの俺の苦しみがハンパじゃなくなる。

「(イヤ…………)」
小さな声でそれだけ呟くとさらにキュッつと抱きついてくるフィナ。クソう。この天国の後には地獄しかないのか！

待て落ち着け俺よ。まだ諦めるな。どんな状況でも諦めなければ

希望が見えてくるって誰かが言っていたような気がする。まだ…逆転の発想が…。

諦めが悪い俺はさらに視線を巡らし、

「……………」
何故かほつぺたをぶくつと膨らませているアリスを見つける。てかコイツも起きてたし。

「(…何、どしたの?)」

「(フィナお姉ちゃんばかりズルい…)」

「(え?)」

「(えいつ!)」

「(ぬおう!)」

アリスまで抱きついてくる。本格的に意味が分からん。状況説明求む。

ていうかこれ完全に身動きが取れない。ええい、顔を摺り寄せるなこそばゆい!

くっ、俺は一体どうしたら

ガバツ

「……………」

「……………」

宙を待った布団の向こうからエルナの顔が出現。とても素敵な笑顔だ。まるで一輪の花のよう。…こめかみに青筋が浮かんでなければもつと可愛かったろうに。

あれ?俺、着替えさせられてる。誰がやってくれたんだろ?

現実逃避気味にそう考えながら、腹部に迫るエルナの両爪先をただただ見つめた。

「……………まだ腹痛い……………」

「ふんっ。あんなことしてるアンタが悪いのよ」

エルナ(加害者)が俺(被害者)に冷たく言い放つ。だから違う

と言っただろ。

まだキリキリと痛む腹を押さえながらも、つそいキレイな廊下を歩く。俺が腹を抑えて転げまわっている間に説明されたところによると、なんとここはお城の中らしい。……フィナはエルナに止められてました。

詳しい理由はエルナも知らないらしいが、俺がバツタリ倒れた後、残った四人は丁寧にお城へ通された。そこで三人はおばさんと別れ、ずっと俺の傍にいてくれたらしい。

ただいま俺たち四人は国王様のもとへ向かっている。先導してくれているのは王様直属の秘書　リアさんというらしい。黒のタイトスーツを着こなした出来る大人の女性という感じだ。…

……あれ、タイトスーツ？

ちよつとした違和感が頭を横切ったが、それを頭の隅に追いやる。これから一国の王と会うんだ。それなりにちゃんとしていないとな。「ここです」

大きな扉の前でリアさんが立ち止まる。凜とした落ち着きのある声だな。

俺たちが止まったのを確認すると、リアさんはその白い扉に手を掛ける。取っ手のとこまで細かい装飾が施されている。ものすごく緊張する。

ゆっくりと開かれる両開きの扉の向こうには、

一面に広がる　　畳。

「近代和風建築!？」

思わず声を荒げてしまう。畳の床と大理石の壁と天井まったくと言っただけ程あっていない。

「かっかっか。そんなに驚いてもらえるところって甲斐があるってもんだ」

「へ？」

不意に洪い声が聞こえてくる。声が聞こえた方に目をやる。部屋の奥、よく社会の教科書とかに載っている絵の…あ、勉強は嫌い

なんだよな。教科書読むのは好きだけど。

まあいい。何時代かは忘れたというか知らんけども、ちょっと一段高くなってすだれの的なアレで姫だかの顔が見えないようになってるあれ。あんなのがあって、上のほうにすだれ？が巻き上げられているので中が見える。んで、そこに座っていたのは、茶髪・青目・ムキムキ・よく日に焼けた、というステータスの、

着流しを纏った男。

「……………もう、どこからツッコんでいいやら」

つつい頭を抱えてしまふ。ていうかなんでこんな和風なものがこの世界にあるんだよ…？

「この世界には結構な頻度でお前のいた世界のものが来るんだよ。影響を受けるヤツはいっぱいいるぜ？俺もその一人だ」

「あれ！？心を読まれた!？」

「王様だからな」

「一国の王スゲエな!？」

「ま、冗談だ。思いつきり顔に出てたぞ」

「あ……………そうすか……」

一気にテンションが下がった俺を見て、王様はカラカラと笑う。ああ、とりあえず敬語だけは使おうと思ってたのに…。

何はともあれ、一応王の御前なので礼儀正しく正座する。俺に続いて座る三人は畳をじつと見たり触ったり、珍しいんだろう。

「という訳でだ、自己紹介が遅れたが、俺の名はユアン・レパーラ
「ウイリス。名前に国名が入っているのはそういう仕様だからだ。
んで、こっちが」

「改めまして、リア・ウイリスと申します。以後よろしく願います」

片やふんぞり返って、片や腰を折って、対照的な二人だな。……

……………おう？

「ちなみに俺のワイフだ」

「今度は米国!？」

かっかつかと笑うユアン王。しまった、つい反射的に…。

自己嫌悪に陥る俺に、ユアン王が話しかけてくる。

「そんなに畏まるうとしなくていいぞ」

「え、でも…」

「いいんだって。もともとお前は这个世界の人間じゃないから王に礼を尽くす義理なんてないし、なにより俺がそういうのは苦手だからな」

そういつてニヤリと笑うユアン王。この人は…いい人だな。

「俺の名は篁 智哉です。よろしく…ユアンさん」

「ん、まだちょっと固いが…まいつか。よろしくトモヤ」

快活に笑うユアンさん。きっとこの人はすぐ他の人と仲良くなれるんだろう。

「んで、そっちは？」

ユアンさんがエルナ達三人に眼を向ける。いくらいい人そうとは言えやはり王。三人は少し萎縮しているようだ。そう考えると軽く接せた俺って何？

「エ、エルナ・コーレインです」

「…フィナ・レノウド」

「ア、アリスでしゅ！」

…噛んだ。ヤベ、カワイイ。

「ほづ…」

なにやらユアンさんがエルナをじつと見ている。

「あ、あの…何か？」

気弱な問いかけ。十数分前、俺に大ダメージを与えた相手とは思えない。

「いや何、父親と母親の面影があるな、と……。それにどっちかといえは母親似だから将来有望だな……。どうだ、今からでも俺と

痛っ！」

いきなり前のめりになるユアンさん。どうやら後ろから叩かれたらしい。後ろにいるのは…

「おばさん？」

どうみても蹴りを繰り出した後の体勢で固まっているおばさん。え、あの、その人国王……。

軽く絶句している俺たちを尻目におばさんは呆れたように言う。

「まったく、嫁をもらって少しは落ち着いたかと思っただら……変わらないねアンタも」

「そっちこそ。その王に対して礼儀を一切尽くさないその態度。相変わらずのようぞで」

「くっ……」

「ふっ……」

ははははと笑いあう二人。そこで俺はおずおずと手を挙げる。

「あの〜、一つよろしいでしょうか？」

「ん、どうした？」

「先ほどから親しげに話しておりますが……お二人はどういったご関係で？」

おばさんがこの国の軍隊の体長的なポジションについていたことは知っているが、それにしても国王を足蹴にしたりそれを笑いあったりするなんて……と、素朴な疑問をぶつける。

すると二人は数瞬間を見合わせ、そして、

「「姉弟」」

「……………へ？」

衝撃発言キタコレ。

「いやな、姉弟っていつでも腹違いでな。前国王って言うか俺の親父が正妻との間につくったのが俺で、愛人との間に生まれたのが姉貴なわけよ」

「……………はあ」

ユアンさんの説明に俺たち四人は生返事をする。ビックリが一周まわってもう返しが平淡だよ。

「今まで姉貴が名乗ってたベルティっていうのは母親の方の姓でな、愛人との子といえど我が子だからそれなりの暮らしをさせてくて魔法部隊の隊長にしたんだとき。ま、姉貴にはちゃんとそれだけの能力はあつたけどな。まったく、親父の女好きにも困つたもんだな」
「アンタが言うな」
「うっせ」

二人の軽いやり取りを見ていると、ホントにおばさんは国王の姉だというのを呑み込めた。

「ああそれから、ロト・ドヘムの屋敷を搜索したらいくつか証拠が挙がった。ロト本人も犯行を認めたことからコーレイン夫妻の殺害の犯人をロト・ドヘムと断定。めでたく姉貴の疑いは晴れたから心配すんな」

うん、なんか今結構重要なことをさらつと言われた気がするがもう気にしない。いちいち考えてると疲れる。

「他にも幾つか言いたいことはあるが、とりあえず…リア」
「はい」

ユアンさんが呼びかけると今まで黙っていたリアさんが音も無く俺の前に出てきて、後ろから何かを差し出してくる。これ……

「《飛鳥》？」

「ん？これは《飛鳥》って言うのか。気になる点があつて少しばかり調べさせてもらったが…コレは古戦器オールドだな、珍しい」

「……………え、何だつて？」

「いやだから古戦オールド…ああ、知らないか。もともとこの世界にいるヤツでも知らないのがほとんどだしな」

言われてみるとエルナやアリス、フィナも首を傾げている。

「説明は少々専門的になるが…まず「待った」…どうした？姉貴」
説明しようと言葉を続けようとしたユアンさんをおばさんが遮る。
「トモヤには魔法の仕組みすら説明してない。いきなりそのことを説明しても分からないだろう」

「む、そうか。…………じゃあちよつと面倒だが……」

ユアンさんが指をパチンと鳴らす。すると、

一瞬で周りが本棚だらけの明らかに別の部屋に。座っているのも畳ではなく木製の椅子に。

「んじゃ、これから授業を開始する」

いつの間にもやら白衣を羽織ったユアンさんが黒板の前に立っていた。

「すみません。いろいろツツコミたい所があるのですが」

「トモヤ…お前な……突っ込むとか、そういうのは夜ベッドで言いなさい」

「そのつつこむじゃねえよ！」

下ネタ言われるとは思わなかったよ！…ってあれ？三人娘は分かかってない。過剰反応しすぎたか。いいやおばさんとリアさんは呆れたように息をついてるし、この三人が疎いだけか。

「まあ青少年は放っておいてだ」

誰が青少年だ、誰が。

「とりあえず大前提として、この世界には魔力というものが存在している。魔力には二つに分けられ、大気中に点在している粒子魔力、そして生き物の体内で精製・存在している固有魔力と呼ばれている」

「……..
「普段俺たちが使っている魔法はこの固有魔力を核とした粒子魔力の塊で出来ている。このとき魔法に属性が付与されるのは固有魔力の属性に粒子魔力が反応・変化するからだ」

ふあ…ああ

「この粒子魔力ってのは世界中の大気中に点在していて、その総量は絶対に変わらんらしい。そして固有魔力は体内から出ると長くは保たない。核である固有魔力が消えるとそれに集まっていた粒子魔力はもとに戻るって寸法だ」

……..
眠い

「んで固有魔力ってのは血液と一緒に体中を巡っている。いくら消費してもまた体内で精製される。体内の魔力量は人によって違う

が、多いからってあまり消費しすぎると意識を失う。ここら辺は血液と同じだな」

……………ZZZ

「一部の武術の流派では魔力の流れを制御して身体能力を向上させ

、……………おい起きろ！」

「…はっ」

あ…ヤッベ。寝てた。

「ったく、人が折角説明してやってるつてのに」

「ご、ごめん」

「…まあいい。気持ちは分からんでもないしな。説明を続ける」

そう言っつて再び説明しだすユアンさん。悪いことしたな…。

「あ…つと、どこまで言っつたっけか？ん…、まいいや。魔法についてはもうやめだ」

前言撤回。

「じゃあ次は…そうだな。とりあえずちよつと昔話だ。今からおよそ千年前、この大陸は五つの国になど分かれず、人と獣人とエルフとドワーフが手を取り合っつて暮らしていたらしい」

ん？今エルフとドワーフって言っつたか？

「エルフはその聡明な頭脳を、ドワーフはその卓越した技術を、獣人はその特化した腕力を、そして人は三種類の和を取り持っつていたらしい」

やっぱり言っつてる。この世界にはエルフとドワーフがいるらしい。

「ある時、友好と感謝の意を込めて、三種族が協力して人にしか扱えないものを造ろうとしたそうだ。獣人が材料を集め、エルフがその加工法を編み出し、ドワーフが技の粋を凝らして作り出したもの。

それが古戦器だ^{オバツ}」

俺は手に握る《飛鳥》を見る。こいつがそれだつてののか。

「人は贈られた古戦器^{オバツ}の秘められた力に大層感動したらしい。悦び、魅せられ、酔いしれ、そして溺れた」

語るユアンさんの言葉は悲しそうなものだった。

「力に溺れた者の末路はわざわざ言うまでもないだろう。人々は欲し、争い、対立した。力を手にするために醜い行いを繰り返した。エルフとドワーフは人のその姿に絶望し、姿を消した。獣人は最後まで戦いを止めようとしたらしいが……知っての通りだ」

人々を救うために残ったのにこの扱い。……人間ってのは酷いな。

「三種族が別れ、もう古戦器オパーツは造られなくなった。そして残った古戦器オパーツも人から人へと渡り、散り散りになって今はもうどこに何があるかなんて分からなくなっている」

「……ふん」

そんな大層なものが、何の因果が俺の手に。世の中ってのは不思議だなあ。

「それと、古戦器オパーツに使われてる金属は現在では精製不可能でな、それをつかった古戦器オパーツはかなりの価値がある。国宝級と言っても過言じゃない」

「え、マジ？」

「ああ。その鞘自体も『龍の胃石』っていう激レアな素材で出来ていてな、鞘と刀身合わせて大体城一、三個分の価値がある」

「……………」
「……………売るなよ？」

「……いやそんなこと考えてねーし！」

ホントだよ！別にそんだけあつたらウハウハだなとか思っていないよ！

「……………まいいか。次はその古戦器オパーツ 《飛鳥》だっけか？その能力について説明する」

話を再開するユアンさん。ふっ、どうやら誤魔化しきれたようだ。「うちの研究者たちが詳しく分析した結果、どうやらその古戦器オパーツには魔法の中にある固有魔力を消し去る能力があるらしい」

「チートじゃね？」

「ちーと？意味分らんが……続けるぞ。さっきも言ったとおり魔法は固有魔力を核とした粒子魔力の塊。その核である固有魔力が消さ

れるということとは魔法自体が消えるということだ」

おい、これオレ無敵じゃね？」

「おそらく今調子のいい事考えているだろうが、現実にはシビアだぞ」
ああ、社会の荒波にもまれた大人の言葉。

「そうだな…トモヤ。戦っている最中、それに変化はなかったか？」
変化？あー、変わったところ…あ。

「《飛鳥》の刀身が光ったんだよ。ピカーッ！って」

「そうか。じゃそれだな」

「？何が」

「古戦器オパーツの発動だ。さすがに常にそんな反則技が使えるわけじゃない。古戦器オパーツは人の何かに反応して発動するんだ」

「何かって何だよ。そこが一番重要だろ」

「んなこた分かってんだ。それは心とも想いとも願いとも気持ちとも言われている、不確かなものだ。さらに古戦器オパーツを発動させるのは誰にでも出来るって訳じゃない。ここまで不確定要素があるんだ。簡単に分かったら苦労しねえよ」

そういうユアンさんの表情はやるせなさが含まれていた。苦労してるんだな…。

「説明は以上だ。何か質問があるものは元気に手を挙げる」

「はい」

ビシッ！と手を挙げる。

「はいトモヤくん」

「俺たちがここまで来たのも魔法ですか？」

「よい質問だ」

そう言っユアンさんはメガネをくいっとする。どっから出したそれ。いらんだろ。

「お前たちをここに飛ばしたのは俺の転移魔法だ。この転移魔法、魔法ではなく魔術だ」

「なにが違うんですか？」

「よい質問だ。魔法は固有魔法を核として形成されるが、魔術は…」

…これがこうで……よし。このような魔法陣を媒体として成っている」

そこら辺にあった紙に描かれたのは、これぞ魔法陣といった代物。ユアンさんはそれになにやら文字を書いていく。そいえば俺こっちの文字読めないんだよな。

ユアンさんは何かを書き終わると、紙を折って簡単な紙飛行機を作る。それをヒョイッと投げる。普通ならあっさり落ちてしまうはずなのだが、紙飛行機は一向に落ちる気配を見せず、それどころか数度旋回すると、ひとりで扉から出て行ってしまふ。

「このような魔術には属性がない。だからいろんな使い道があるんだよ」

へー。魔法と魔術にそんな違いが。

「あ、ついでに言っとくと魔術による攻撃はそいつじゃ消せないから」

相変わらずサラリと結構重要なことを言ってくる。

「あとさっきの訂正。魔術には属性がないって言ったけど描く魔法陣によっては属性も出るから」

「ホントにサラリと言うなアンタ！」

声を荒げるも効果なし。むしろかっかつかと豪快に笑われる。

「いやいや。トモヤ、お前と話していると楽しいよ」

「……………ども」

くそ、そんなに真正面に言われると何も言えねえ。

黙りこむオレに、それを見て笑うユアンさん。おちよくられてる。

コンコン

「失礼致します」

戸を叩いて入って来たのはメイドさん。でもアリスと違って服の作りがやや違うからか違う印象を受ける。

「ああ、さっき伝えたことか。早いな」

「いえ、それほどでもありません」

よく通る声で喋るメイドさん。なんか有能そうだ。

「ユアン、何のことだい？」

二人のやり取りに疑問を抱いたらしいおばさんが尋ねる。ユアンさんは何か楽しみでたまらないといった風な笑顔で答える。

「心配だ」

「だから何の？」

「今日のパーティーの」

「……………は？」

「……………はあ……………」

視界の隅でため息をつくりアさんが印象的だった。一番苦労しているのはこの人なのかも……………。

第22話 邂逅と説明（後書き）

どうでしたか

魔法・魔術の仕組み、痛々しかったら言ったださい泣いて土下座するので

ではこちらで

作者は積みゲーを解消するべく奮闘します

第23話 宴の場で（前書き）

どうも、すっかり深夜に投稿するのが通例になっている作者です
学校の勉強を全くとっていい程やらずにサブカルチャー分野にど
っぷりつかっているので一日が短いのです
どうしたらいいでしょうか？

ちなみに作者が目下のところ一番楽しみにしてるのは

あとがきに続く！（単なる場稼ぎ）

第23話 宴の場で

愛人の子ども。

殺人事件で犯人になって悲しい過去を語ったり、突然親のもとへ連れて行かれて跡を継ぐことにされたりする、フィクションの世界では割かし取り上げられることの多いポジションだと思う。

だが実際のところそんなことになるのはごく一部の少数。生まれる前に中絶されるか、生まれたとしても片親の顔を知らずに生きていくことも多いと思う。よく愛人とその子どもが正妻に虐げられたりするような作品もテレビでやっている。実際あんなモンだろう。

んで、本題。その愛人との間に生まれた子どもであるメイラ・ベルティ 通称おばさん。彼女は王様と愛人との子どもであり、最悪殺され、それが黙認されることがあってもしょうがない立場だ。

しかし、レパーラの前国王アロイス・ウイリスは大変な女好きであつたらしく正妻のほかに妾やら愛人やらをたくさんつくっていたらしい。彼曰く『オレは全員を等しく愛してる！』とのことらしい。まあそんなこんなで国のお偉いさん方も呆れ、そんな残念な性格でありながら彼の政治の手腕は目を見張るものがあつたらしく、女好きなのは黙認されたらしい。

そんな彼だが、どうも子を作りにくい体質だつたらしい。何人も女性に囲まれ、……………を繰り返したが、なかなか子どもが出来なかつたらしい。そんな折、愛人の一人が身籠つた。正妻より先に愛人が子を宿したことにより、城は大騒動。後に愛人との子どもが女の子であるとは判明し、同時期に正妻の妊娠も発覚、それが男児だつたことよって事態は沈静化したらしい。

それはさておいて、問題は愛人との子。仮にも王の血を引く者であり、国の伝統では一番最初に生まれた子が王位を引き継ぐことになっている。一時期は愛人の子か正妻の子、どちらが王位を継ぐかで論争があつたらしいが、正妻との子であること、男児であること

から、最終的に正妻の子　ユアンが王位を引き継ぐことになったらしい。

それでも、王位を引き継げなかったが王の血が流れている愛人の子。下手をすると事件に巻き込まれる可能性があったが、立場や伝統上の問題で城にいることは出来なかつたらしく、城下に家を与えられた母親とともに暮らすことになった。暮らしは豊かとはいえず、城からの最低限の支給によって支えられていた。そんな姿を見た王様は心を痛めた。『彼女たちを何とかしてやりたい』と。幸いにもその子どもには魔法の才があった。そこに目をつけた王様は新しい組織を結成。その隊長にその子を指名した。当然お偉いさん方は反発したが、彼とその腹心の部下、そして話を聞いた王子の尽力、なにより彼女の能力によって認められた。

王の子だということは伏せられ、ただの一兵として扱われていたが、当人の才能とその功績によりその名声は広く知れ渡つたらしい。まあなにが言いたいのかというところ、そんな有名人が冤罪を迎えてめでたくない訳がないので、記念パーティーが開かれました。………当の本人の知らないうちに。

そんな行動力に溢れたレパーラ現国王ユアン氏は、幾人もの貴族様方と歓談中…着流しのまま。あれいいの？

おばさんはちゃんとした礼装で、元部下の人たちとかお世話になった貴族の人たちとあいさつを交わしている。以前おばさん捕らえに来た人たちも元部下らしく、「仕事とはいえメイラさんを捕らえるなんて…」と涙を流して謝罪していた。なんというか、スゴいカリスマだ。

「にしても…んっんっ…急に決まったのに…んっんっ…結構集まってるな…んっんっ」

「そう…はぐはぐ…だね…もぐもぐ」

「王様の…はむはむ…主催だから…あむあむ…無理をしても貴族は来る」

「アンタ達……」

エルナが呆れたようにこちらを見ている。そりゃアリスはケーキ食ってばっかだし、フィナはステーキ一択だしな。そこらには好青年も多くいるのに、この子らはまだ花より団子か。

「……………」
あれ？三人から妙な目で見られてる気がするが…ま、気のせいだな。うんうん。

そう思い直して、俺は改めてオレンジジュースを煽る。周りからは子どもっぽいといわれるが、オレンジジュースはミルクコーヒーと並んで好きだ。パーティには貴族共の子どもも来ているので、こういう飲み物も用意されていた。本来ならコップに入れて飲むんだろうけど、そんなチマチマしたことはやってられないのでビン入りのヤツをラッパしている。今飲み終わったので…十…二十…数えるの止めよ。

ちなみに、ただいま俺たちは礼服に着替えている。一応ちゃんとしたパーティだからな。三人ともドレスを着ている。もともと素材がいいので三人ともキレイで、周りの男共がチラチラ見ている。かく言う俺も初見はちょっと見惚れた。俺もフォーマルな服を着ている。モーニングコートかフロックコートか燕尾服かタキシードのどれかだろう。ぶつちやけコレヤダ。動きづらい。俺には似合わないよこんなの。その証拠にエルナ達に見せたときも俯かれたもん。あれ絶対笑い堪えてたよ。

思い出してやや気落ちしている俺。そこに話しかけてくる人物が。「やあトモヤくん。体の具合はどうだい？」

ヴァン・グラドだった。すっかり存在忘れてた。…っていつか

「……………」
「?どうしたトモヤくん」

黙りこんだ俺を心配そうに見てくるヴァン目掛けて空き瓶をスパークキング!

「うおおおお!?!?」

五割半くらいの力で投げたピンは顔面まで数センチのところまで止

められる。

「…チツ」

「当たらなかつたのがそんなに悔しいかい!？」

そう言いながらテールブルにそつとピンを戻すヴァン。そこまで声荒げたらもうマナーとかいいだろ。

「全く…なんで攻撃してきたんだい？」

「復讐だ」

「簡潔過ぎて怖いね…。なにか悪いことでもしたかな？」

「いや別に」

ちよつとムシヤクシヤしてただけですハイ。

「別につて…いや、いいさ。キミには返しきれない恩がある」

真つ直ぐに俺を見ながらそう言うてくるヴァン。そして深々と頭を下げてくる。

「メイラさんを助けてくれて…本当にありがとう」

「いえそんな、大したことじゃなかったですし」

「それでも…」

「いいんです。俺自身がやりたかったことだったんですから」

「トモヤくん……本当にありがとう」

笑顔で再度お礼を告げてくるヴァン。それに「だからいいですつて」と返していると、

「なんで動物がここにいるんだよ」

「ここは人間様の来るところなんだよ」

「…あん？」

見るとケーキを食べていたアリスに、同じくらいかやや下の歳であろうガキ二人がからんでいる。おまけにあの言い草、完全に獣人差別してますね。

「おら、とつとと出てけよ」

「や…やだ…」

「口答えしてんじゃねえよ」

「痛いッ!…や、やめて…」

ガキの一人がアリスの髪を引つ張る。その前からやるべきことを決めていた俺は、

「はいどーん！」

「うぎゃあああああ！」

顔面にホールケーキを叩きつけてみる。その後アリスを背中側に押す。何も言わなくてもエルナとフィナ、ヴァンも駆け寄ってくれた。

「て、テメエ何しやる！」

早くも顔のこびりついた生クリームをそぎ落としたようなので、

「もう一丁！」

「熱つちやあああああ！」

今度はステーキ。焼き加減はレアです。

「熱ッ！熱いッ！熱ッ！」

必死そうな声が耳障りなので口にパンをねじ込み、ついでに服の中にスープを投下。

「んもももももっ！？もごごごっ！？」

涙目になって転げ回っているガキ二人を見ると、笑いがこみ上げてくる。

すると、いつの間にか出来ていた人だからから、偉そうにヒゲを蓄えたおっさんが飛び出してくる。

「なっ…貴様！私の息子達に何たる事を！」

「ん〜？」

唾を散らしながら叫ぶおっさんを、どうでもいいような眼で見る。

「キサマア…なんだその眼はあ！」

ツカツカと近付いてきて胸倉を掴みあげられる。おーおー青筋浮いてるよ。

「大体、キサマ何の恨みがあつてこんなことをした！」

「うわっ、ツバ汚ねっ！…ったく…」

「そのガキどもがうちの女の子いじめたんだよ。それが理由だ」
眼で後ろにいるアリスを示す。男はアリスを見ると…鼻で笑った。

「ふん。いいではないか。たかが動物の一匹如き」

……………あ？

「その程度、理由にもならん」

……………いいかな？

「どうせその動物が粗相をしたんで、うちの子らが躡けてやったんだろう。むしろ感謝してほしいくらいだ」

……………やったガキもだけど、子どもにこういう教えをした大人も問題だし、やっちゃってもいいよね？

そう思いながら右手に風を纏わせる。ヴァンとやった時より強く濃く、食らえばタダではすまない密度。俺もちよつとばつかキレてんだ。我慢しろや。

腹に一発いいのをくれてやろうとすると、横合いから声が掛けられる。

「ほづ？俺の前でそんなことを言うとは…いい度胸じゃねえか」

「ツ！ユ、ユアン様…」

「俺が、こういうの大っ嫌いだったのは知ってるよな？」

「そ、そうですが、これはあまりにも…」

男はもどりながら手を離し、じりじりと後退りする。

「それに、だ」

ユアンさんは俺とエルナ、フィナとアリスに視線をやり、目の前の男だけでなく今こちらを見ている人全員に聞こえるように言う。

「この四人は俺の客だ。こいつらに文句があんなら俺に言え。同時に、こいつらに石を投げるならそれは俺に石を投げるのと同じだと思え」

それだけ言うとユアンさんは踵を返し、俺の背を押しながらアリス達のところへ歩いていく。少しだが瞳が潤んでいるのに気付くと、やり場のない怒りが湧き上がってきた。

ユアンさんはアリスに向かって頭を下げた。

「俺の開いた場でこんな目にあわせちまって…本当にすまない」

「うっん。いいから…気にしてない」

笑顔で首を振るアリス。一応強がりと言つくらいは元気らしい。

同じ事を考えたのかユアンさんも安心したような表情をすると、

「これにてパーティもお開きだ！全員帰ってクソして寝ろ！」

そう宣言した。仮にも上流階級の人が集まっているこの場で『ク

ソ』発言はいかがなものかと…。

やや苦笑いしている俺を訝しむような目で一瞬見ると、

「しっかし、お前も酷いなあ。何もあそこまでやる必要はないんじ

やないのか？」

言葉と同時に向けられた指の先には、さっきの男に手を貸されて立ち上がるうとしていいる半泣きのガキがいた。

「いいんだよあれくらい。ちよつとはやられる方の身になればいいんだよ。…それより、アンタの方こそいいのか？こんなことして、

アンタの支持率下がるぞ」

「構うもんか。権力と立場ってのはこういう時こそ使うもんだ。そ

れにもともと俺主催のパーティだ。いつ閉めようが俺の勝手だ」

「横暴だな」

「王様だからな」

はははと二人で笑いあう。そして一頻り笑うと、

「じゃ、行くか」

とりあえずヴァンに礼と別れを告げ、勝手に歩いていくユアンさんの背中を追った。

コンコン

「どうぞ」

パーティから帰り、用意された部屋のベッドでごろごろしていると扉が叩かれる。失礼します、と言って入って来たのはリアさんだった。俺は上体だけ起こし、

「なにか用ですか」

「ユアン様が呼んでいます。ついて来て頂けますか」

尋ねられてるのに否といえない、もう命令されてるのと変わらな
いこの感じはなんなんだろう？

そう思いながらもベッドから降りて、もう歩き始めているリアさ
んに追従する。

歩きながら気付いたが、どうやらあの和室に行くのではないらし
い。通り過ぎる扉のサイズからしてそう大きくない部屋。おそらく
自室か執務室みたいところだろう。

ボンヤリと考えながら歩いていると、不意にリアさんが一つの扉
の前で止まる。

「こちらです」

そう言つて扉を開けてくれるリアさんに軽く頭を下げて部屋に入
る。そこには難しい顔をして座るおばさんとユアンさんがいた。部
屋は洋室だった。

「おお来たか。悪いな。こんな時間に」

「別にいいけど…なんかあったの？」

なにかあったのは二人の表情を見れば分かる。そして一番怪しい
のは二人の前に置かれている一枚の紙。

「いやな、本来ならお前には関係ないことなんだが…一応な」

そう言つて手渡される紙には文字が書いていた。これは……

「読めない」

「おいおい……んじゃリア、頼む」

「分かりました」

スツと俺の手から紙が抜き取られ、ゆっくりと読み上げられる。

『拝啓 レパーラ国王 ユアン・レパーラ・ウィリス殿

王という立場のご多忙さを鑑み、失礼を承知で時候の挨拶を端折
らせていただきます。

此度、このようなものをしたためたのは単に挨拶をさせていただ
く為です。

我々『アレウス』はかつて失われた国家アヴィルムの復権を悲願としていた組織です。復権と言ってもやることは簡単。現在クロウド大陸を収めている五つの国を滅ぼし、その上でアヴィルムの復活を宣言するだけです。

尚、この手紙は同時に他国全ての王に送っております。

では、実際に会える日を楽しみにしております。 敬具』

「バカにされてるな」

「まったくだ」

「はあ…、と心底疲れたようなため息をつくユアンさん。この手紙、もといた世界の手紙の書き方をマネしてるな。しかも中途半端に。」

「……んで、なんで俺が呼ばれたの？」

「ああ、そのことなただけどね」

俺の問いに答えてくれたのはおばさん。

「実はこの手紙にある『アレウス』っていう組織は、ロトが尋問中に口にしてるんだよ」

「マジでか」

「ああ。どうも資金を提供していたらしい。見返りは悲願が成就されたときのそれなりの地位だつてさ」

「ふ〜ん。ま、どうせ絞れるだけ絞ったらポイントとこだろっけだな。悪の組織なんて往々にしてそんなもんだ。…んで、このアヴィルムってのは何さ？」

次に俺の問いに口を開いたのはユアンさん。

「そうだな…今でこそこの大陸は五つの国に分かれてるが、二百年ほど前までは一つに統一されていたんだ。その時の国の名がアヴィルム。あまり詳しくは分からないがそこで反乱が起こり国家は崩壊。その反乱軍を率いていた五人が、大陸を五つに分け、それぞれで治めることにしたらしい」

「ん〜……アヴィルムってのを復活させて得をするヤツっているの？」

「そうだな…かつての王の一族とかじゃないのか？」

「そいつらの消息は分かるか？」

「いや、分らない。数百年前に滅んだ国の王の血族なんて調べても無駄だったからな」

「そうか……。もしかしたらロトの他にもこの『アレウス』っていう組織に関わっている貴族がいるかもしれないな」

「あ、言われてみればそうだな。よしリア、めぼしい貴族連中に密偵手配しといてくれ」

「かしこまりました」

音もなく部屋を出て行くリアさんの姿を見て、絶対にただ者じゃないと思ったのはしょうがないだろう。

「あとは、相手の出方待ちだね」

「うん。…んじゃ、俺はこれで」

ふああ…眠い。早く帰って寝よ。

「ああトモヤ。もう一つ用あったわ」

「ん？」

ユアンさんがハンドベルをチリンと鳴らすと、部屋のドアがゆっくりと開き、一人のメイドさんが入って来る。紫色の近い色の髪が印象的な若い人だった。

「トモヤ。この人お前のお付のメイド」

「は？」

「はい自己紹介」

「はじめましてトモヤ様。この度あなた様のお世話をさせていただきます。くことになったクレア・エスリークです。よろしくお願ひします」

「いや、あの」

「よろしくお願ひします」

「……………はい。こちらこそ」

女性の放つプレッシャーに負けっぱなしの今日この頃。

第23話 宴の場で（後書き）

モンスターハンター3rdです

何がって？前書きの答えです

作者は3（トライ）をやっていないので初見の敵だらけですが、双剣を手に狩場を走り回りたいと思います

あ、それとこれから城での暮らし的なものを書こうと思います

第24話 お城にて(前書き)

どもども、ダメ作者です

投稿遅れました

だってしょうがないじゃん！モンハン面白いんだよ！新モンスター！

やりがいがあるんだよ！エロゲだって積んでんだよ！

……… 失礼しました

では、どぞ

第24話 お城にて

やめてくれ。

頼む。もうやめてくれ。

耐えれない。耐え切れないんだ。

俺には出来ないんだよ。だからもう許してくれ。

俺は悲しいのも苦しいのも痛いのも泣きたいのも気持ち悪いのもだめなんだ。見ていてイヤになるんだ。

心が弱いんだ。心が痛いんだ。自分がどうにかなってしまいそうなんだ。

なあ頼む。許してくれ。

誰か助けてくれ。助けてくれたらなんでもするよ。

身が切られそうなくらい辛いんだ。『死にたい』とさえ簡単に思ってしまう。

俺は弱いんだ。決して強くなんかないんだ。

だから……………だから頼む。

もう……………もう俺に

「 陵○系のエロ本なんて見せないでくれええええ!! 」

「 ……いやまあ確かに見ていて気分悪くなるけどさ… 」

そう言っつて本を後ろに戻してくれるユアン。そうそう、あんなの百害あって一利なしだ。

「 んじゃ、コイツはどうだ。SM系なんだけど? 」

「 問題ない。むしろバッチこい 」

「 ……もうお前がなんなのかわからん… 」

ユアンがなにか言っているが、そんなものエロ本に集中している俺からしたら瑣末なことだ。…むむ、ここ縛りが甘いな。…いや目隠ししなくていいだろ。

さて、

どうして俺がユアンと一緒にえっちい本を読んでいるのかというと、まあぶっちゃけ朝飯の後にちよつと部屋に誘われて行ってみたら机の上に十数冊ほど積んであったのよ。これらも向こうの世界から流れてきたらしい。しかもどう見てもカラー印刷。外国のはやっぱりきわどかったです。

ちなみに。この部屋に来てエロ本を閲覧。それが丁度ストレートど真ん中だった俺は、無言でユアンとハイタッチし、続けて固い握手を交わした。ここまでのタイムラグは一切無く、その瞬間だけは阿吽の呼吸だった。そして『漢同士の間には遠慮はいらねえ！』とのユアンの言葉に俺は一も二も無く賛同。以降タメ口で喋るようになった。

「……しっかしまあ、おまえがそんなだとは思わなかったな。女と一緒に宿に泊まって手の一つも出さないから、てつきりそつちの方には興味が無いかとばかり」

「俺も人並みの青少年だからな。興味が無いわけないさ。でも流石に女子の比率の方が多いところでそういうこともアレかなと思って考えないようにしてたんだ」

「ああ分かるぜそれ。俺も欲望のままに城の雇用を女だらけにした方がいいけど、おかげで気兼ねなく猥談出来る野郎がいなくなっちゃったな。ちつとばっか辛かったんだよな」

「……………そうですか。それは大変でしたね」

「まあな。でもその代わりに城に女が多くなって目の保養に……………」

「……………なあトモヤ、ちよつと声高くないか？」

「……………オレじゃない」

ギギギ、と間接部分が錆びたロボットのようなきこちない動きで見ていた見開きから目を離すユアン。移動した視線の先には絶対零度の気を放出するリアさんが佇んでいた。

「……………リア、いつからそこに…………？」

「ユアン様が欲望の赴くままに城の雇用枠を改竄したという発言の

辺りからです」

はいアウト。

一応上下関係はあるんだろうけどリアさんの気迫と、なによりユアンの脅えた表情から、今だけは逆転可能なだろう。

俺は音を立てないように椅子から立ち上がり、扉へ向かう。一瞬ユアンが視線で援護要請を出してきたが、受信拒否にして逃走を開始する。

「……………トモヤさん」

ビクウツ！！

「……………なんでしょうか？」

「今後、また同じようにユアン様に誘われた場合、すぐに私に伝えるようにして下さい。お願いできますか…？」

「……………かしこまりました」

この時俺は知った。『お願い』という名の命令があるのだと。

全く音を出さない動作で扉をくぐり一礼とともに扉を閉める。そして全速力で走りだした。

『トモヤアアアア！！』
『テムエ後で覚えてやぎやああああああああああああああああああああ！！』
あつ……………

……………何も聞こえない。

全速力で走ること数分。息を整えがてら、ユアンの冥福を祈る。

「……………にしても、ここどこだ？案内図なんか無いだろうし…参ったな」
流石に、来て間もない城の中を後先考えずに駆け回るのは無茶だったな。適当に部屋に入っていくってこういう手もあるけど、ユアンのバカが城の雇用を全部女にしたって言うてたしな。もし着替え中の部屋とかに入ったら……………

「……………人は時に、死すら厭わないことがある」

そつだ。たとえ後に社会的に精神的に肉体的に死のうとも、それまでの行いに悔いが無ければいいじゃないか。一度だけでも楽園が

見ればいいじゃないか。

残念な開き直りをした俺は、しばらく先にあつた他よりもやや大きめの扉に手を掛ける。

「我死すとも、我が魂はここに永遠に留まるだろう」

完全に遺言だが気にしない。こういうのはノリが大事だ。

俺は数度深呼吸をし、落ち着いた心持ちで扉の取っ手に両手を置く。

そして、

「…開け！夢の扉！」

ぱつと勢い良く扉を開ける。

まず目に入ったのは 大量のぬいぐるみ。

「は？」

犬猫猿鳥亀狐狸、他にもいろいろな種類のぬいぐるみがあつた。

「ん？」

次に見えたのは本棚。それはもうギッシリと本が詰まっている。タイトルは…読めん。でもなんか小難しそうな雰囲気がある。それと大量のぬいぐるみとのギャップがスゴい。

「ねえ、アンタ誰？」

「？」

どこからか声が聞こえてきたので辺りを見るが…人っ子一人見当たらない

「こつちよこつち！」

「え？」

聞こえたとおりに視線を 下げる。そこにいたのは、

「なんだ幼女か」

「誰が幼女だ！」

お前だお前。つか身の丈が俺の太ももまでぐらいしかないのを幼女以外なんと言えはいいんだよ。

「…ラ、ランちゃん…やめようよ…」

「！」

なんと！幼女の後ろにもう一人の幼女が！しかもそっくり。スゲ、双子ってホントに似てんな。もう顔のつくりとか鏡映しみたいで

あれ？なんかこの二人の顔、どっかで見たような…？

「何言ってるのよりん！勝手にアタシたちの部屋に入って来たコイツが悪いんですよ！」

おいコラ。人を指差すな。あと年上の人に向かってコイツとはなんだ。

しかしまあ言ってることは正しいので、

「勝手に入ってすまなかつたな。迷ったんで道を聞こうと思ったんだが…まさか中に幼女×2がいるとは思わなくてな」

「誠意が感じられない！」

目の前の幼女様は大層憤慨なさっているご様子。まったく、俺の謝罪のどこのに問題があったのだというんだ。

と、そんな感じで途方に暮れていると、

「おい。何騒いでんだ。廊下まで声が聞こえてきたぞ」
扉からユアンが入って来た。

なんだ生きてたのか。

「なんだ生きてたのか」

「残念そうに聞こえるのはオレだけか…？」

妙なところに引っかかるなこの人は。まあ無視。

「でユアン、この幼女×2は何よ？」

「幼女言っつな！」

性格的に騒がしい　ランと呼ばれていた方が噛み付いてくるが、これまたスルー！。

「ああ、娘だ」

「……………はい？」

「いや、だから娘だつて」

ぱっと幼女たちのほうを向く。その勢いに二人はビクッ！として

た。ちょっと傷ついた。

でも言われてみれば顔立ちがどこことなくリアさんに似ている気が……細部もユアンの面影があるようなないような……。

「な、何よ。人の顔ジツと見て……」

「いや……その……お父さんに似なくてよかったね」

「そうだな　　ってどういう意味だコラア！」

文字通りの意味ですけど。

いやあ、それにしても。子供がいるとは思わなんだ。ユアンは女好きっぽいけど、リアさんがあんなだからな……てつきりそうというのは無いもんだと……。

「トモヤ……お前の考えてることは大体分かる。……だがひとつだけ言うておく！リアは……ベッドの中ではかなり甘えんぼっ！」

赤裸々に語りだそうとしたユアンが奇声を上げて倒れてきた。俺のほうに来たので、ついつい条件反射でビンタして軌道修正。「テ、テメエ……」とかすれた声が聞こえた気もするが気のせいだということにした。

んで、ユアンの背後だった場所で握りこぶしを作っていたのはリアさん。いつもの冷静な顔が崩れている。

「アナタという人は…… 客人と娘の前で何を言おうとしているのですか……！」

お。ユアンの呼び方が様付けからアナタに変わってる。普段はそんな呼び方なのか。

「……リアよ。追いつくのが随分早くなってきたな……」

「アナタの行動パターンは大体読めています。彼女たちと話していなければもう少し早く着きました」

？彼女たちって……お、リアさんの後ろに見慣れた顔と新顔が。

「ト、トモヤ……」

「……奇遇」

「あ、あはは……」

「……どうも」

あれ？なんで彼女たちは俺から目を逸らすの？なんで頬が赤いの？
「…リアさん、これは一体…？」

「分かりません。ただ彼女たちには私がユアンさんを追っている理由をすべて事細かに話しただけです」

「おまつ、バツカじゃねえの!？」

「…全部話したってことはアレだろ？俺がいたことも話したんだろ？エロ本読んでたのも話したんだろ？オイオイ勘弁してくれよ。関係ギクシャクするよ。特にクレア 従者だから呼び捨てでいいらしい は昨日会ったばっかだぞ。俺の印象最悪じゃん。」

「そ、そうよね。トモヤも…男の子だもんね」

「これが普通…」

「う…うう」

「…私は専属メイドですし…そういうご命令とあらば従うこともやむなしですが…」

「…おい、何考えてんの。特にそのメイド。んな命令するかボケくっ、だがマズい。このままでは彼女らとの距離感がおかしくなってしまう… 話題を強引にシフトさせる！」

「…そう判断した俺は刹那の速度でしゃがみ、今まで呆然としていた幼女×2と視線を合わせる。」

「こんにちは」

「…ふえっ…」

「急に話し掛けられてテンパってんな。後ろのほうは涙目だ。精神に多大なダメージを受けるが、俺は負けない！」

「俺は篁智哉。そっちは？」

「え…あ…ラ、ラン・ウイリス…」

「…リン…です…」

「ランとリン？安直過ぎるだろ父親！しかもリンはかなり内気ですね。声ちつちえよ。これはいよいよ両親に似てないよ。」

「…まあ俺別世界の人間だし、礼儀とかしらないけど、よろしく」

そう言って手を差し出す。友好の証です。

「……………一応、よろしく」

ゆっくりと俺の手を握るラン。一応ってなに？そしてリン、ランの後ろで縮こまるな。

だがまあしかし、この子どもとの邂逅という微笑ましいシーンを繰り広げたからには、きつと場の雰囲気も元通りに

「（ガシツ）…トモヤ、ちょっとお話があるんだけど…？」

「……………来てくれない？」

ハツハツハ、ヤダなア二人とも。断るうにも脊髄を掌握されている以上、俺に拒否権なんかないだろう？仕方ない。ここは大人の余裕を見せて アレ？二人とも？俺まだ返事言っていないよ？なのになんで部屋の外に引き摺り出されてんのオレ？あとちょっと待つて。首が、首の骨から変な音が！首を握ったまま引つ張らないでお願いだから！

「……………痛ツ！ク、クレアもうちよい優しく……………」

「これくらい普通です。男の子なら我慢してください」

「…はい」

エルナとフィナ、途中参加したアリス達からの肉体言語によるお話を^{ンチ}受け、なんとか生き延びたオレはクレスにケガの治療をしてもらっていた。

「…はい。これでおしまいです」

「ん。あんがと」

礼を言いながら脱いでいた上着を着る。打撲傷のほとんどは腹と背中にあつた。やりかたが陰湿すぎると思う。

そんな陰湿な女性達は、現在双子と歓談している。と言っても、話しているのはもっぱらランで、リンは時折曖昧な返答をしているだけである。

なにはともあれあんな女子が集まっている空間に入っていける程

オレは勇者じゃないので、とりあえず静観を決め込むことにする。
……………あ、眼が合った瞬間リンが脅えてる。うう、泣きたい。

見ているだけで脅えられることが分かったので、視線を外してとりあえずダラ〜とする。

……………つか部屋汚い。ちゃんと片付けろよ。……………お、紙見つけ。ここをこうしてああして……………アジサイの完成。次は……………カニ。いいねえ、結構紙散らばってるから自由に折れるよ。……………はいツル。これは結構自信作。

ツルの羽を広げて下から息を吹き込んでいると、不意に誰かが目の前に立っていた。顔を上げると、そこにいたのは、

「リン…?」

「(ビクッ)」

名前読んだだけでビビられた。ショックです。オレそんなに怖いかな…?」

やや落ち込みながらふと疑問に思う。なぜ彼女は来たのだろうか。こんなに怖いならランのところに戻ればいいのに。

そう思っていると、リンがじつとオレが作った折り紙を見ているのに気がついた。これはもしか…。

オレは近くの紙を引き寄せ、丁寧に折る。

「ほら、カエル」

「……………?」

よく分からないといった表情のリンの目の前で、カエルが跳ねる。

「…!」

「すごいだろ」

続けて風船。パパッと折って膨らませ、手の上で弾ませる。

おお、目が輝いている。

「……………作ってみる?」

「はい!」

紙を受け取るときの手にまだ少しの恐れが見えたものの、好奇心が恐怖心に打ち勝ったらしく、もう涙目になったりはしない。

「はい、じゃあまずこう」

「こうですか？」

「うん。次にこことここをこうする」

「…こう？」

「そうそう。んで、ここをこうして」

「…あれ？」

「あ、違う違う。そうじゃなくでこう　はい完成」

うむ。紙飛行機は初心者にも優しい設計だ。

「んじゃいくよ……それ」

ひょいっと手首のスナップだけで飛行機を飛ばす。……あ、ユアンに当たった。しかも先端が頭頂部に。…どうでもいいか。

「やってみ」

「はい　それ！」

リンの手から放たれた紙飛行機は弧を描いて飛んでいく。……あ、ユアンに当たった。つか目に入った。でもま、リンが楽しそうでなにより。

「ねえ。アンタたちさつきから何してるの？」

お、ラン。むこうの方でエルナたちと話してたのに、いつの間にエルナたちもこっちに来てる。

「見て見てランちゃん。これスゴいんだよ」

「？　どうしちゃったのよリン。アンタがそんなにハッキリ喋るなんて。しかも会ったばかりの人とそんなに話せるなんて……で、なにこれ？」

ランも折り紙を知らないのか。

よし、いっちょ楽しませてやるか。

後日、流石に文字が読めないのはマズいと思った俺は、クレアに頼んでこの世界の文字の読み書きを教えてもらっているのだが、

「ねえねえトモヤ、勉強なんかやめて遊ぼうよ」

「トモヤさん、次はどうするんですか？」

「……なんか懐かれた。」

「トモヤ」

「トモヤさん」

「……はあ……」

勉強ならん。

第24話 お城にて（後書き）

どうでしたか

今回はいつもより短い？気がします

内容も……どうかなあ？

次の更新もこんな感じだと思います

第25話 日常（前書き）

奇跡だ…

こんなに早く投稿できるなんて奇跡だよ

つつても内容は短いんだけどね

まあおつまみ感覚（？）で読んでください

第25話 日常

どうもこんにちは、智哉です。

城での生活も数日が経ち、そろそろいろんなことのスケールのデカさにも慣れてきたかなという感じがします。

俺の一日は朝クレアに起こされることから始まります。

美人のメイドさんに起こされるなんて、そういう趣味のやつなら発狂するくらい喜ぶかもしれません。

しかし、現実はそのないうまくはいきません。

考えてみてください。朝ですよ朝。熟睡状態ですよこっちは。何が…とは言わないけれど、俺の朝一番の行動はポジショニングを確認することです。まどろんでいる暇なんかないんだよ。俺を起こそうとする声が聞こえた瞬間脳が急激に覚醒するからね？からだに負担大きいからね？

とまあそんな感じで俺の一日は始まります。でも起きても特にやることなんかありません。大体は城の中を適当に歩き回ったり、人と話して過ごします。

そう、今日もそんな風に過ごしてました。そしてお昼。王様専用の食堂で俺たちも食べることになっている。メンバーは俺、エルナ、フィナ、アリス、おばさん、ユアン、ラン、リンの八人だ。リアさんとクレアはあとで別席で食べるらしく、今は壁際にたたずんでいる。立場が違うとかそんな今更な。

ユアンが「今日はトモヤのもといた世界の食べ物を用意してみた」と言っていたので、結構楽しみだった。ほかの面々も同じで、壁際にいたリアさんとクレアも興味深そうに食卓を見ていた。

そして運ばれてきた料理は……………

「……………」

なんだろうこの白い物体は？ドロドロで水っぽくてところどころ焦げてるっぽい。

「えっと…何これ？」

「変なの」

「なんか気持ち悪い…」

「トモヤはこんなのを食べてたのかい？」

「これは…無いわ」

「ホントに食べ物なのこれ？」

「…信じられない」

わずかに震える手でスプーンを掴み、目の前の物体を掬ってみる。やはり水っぽい。そして何だろうか、ドロドロの白い粒々が入っている。

「…なあ、ユアン」

「何だ？」

「これはなんていう食いもんだ？」

「あ？確か……………「メ？だったか」

「……………」

ユアンの返答を聞いた俺はゆっくりと席を立ち上がる。

「トモヤ様、どうしたのですか？」

俺の行動を見たクレアが俺の元へ寄ってくる。

「……………クレア」

「はい？」

「……………厨房まで案内しろ」

「え？」

クレアは俺の申し出に戸惑っていた。俺はその目をまっすぐに見据え、そしてこの場にいる全員に言い放つ。

「俺が本当の米を食わしてやる！」

数時間後、俺は図書館にいた。

え？米？成功しましたよ。炊飯ジャーなんてものは無かったから鍋で炊いたけど、案外うまくいったわ。やっぱあれだね、『始めチ

ヨロチヨロ、中パツパ』は守るべきだね。

手順はちょうどいたコック長さんに教えたし、米を使ったレシピも知っているだけ教えた。これからのメシが楽しみである。エルナ達も米の味を気に入ってくれたみたいだし。

「……………おしまい」

パタンと読んでいた本を閉じる。

クレアから文字を教えてもらい、一通りの文章は読めるようになった。始めはさっぱり分からなかったけど、一応は高校生だしなんとかなった。

とは言ってもまだそんなに流暢に読んでいける訳でもないので、今は子供用のおはなしを読んで少しずつ慣れるようにしている。

つかこれ桃太郎なんだけど。魔法使う桃太郎なんだけど。倒しにいくのが鬼じゃなくてオーガなんですけど。

「…次読むか」

今度はもうちょい難しいのに挑戦してもいいと思う。そう考えた俺は、とりあえず桃太郎を元の場所に返すため席を立った。

児童用の本が並べられているところにはリンがいた。お行儀よく座って本を読んでいる。近づいてきた俺に気づいたリンは顔を上げた。

「あ、トモヤさん」

「おう」

「読み終わりましたんですか？随分早いですね」

「……………まあね」

内容ほとんど知ってるからね。

「…今度はもう少し難しいのを読みたいんだけど、どこらへんに行けばいいかな？」

棚に本を戻しながら尋ねる。チラツと見たリンの読んでいる本には青年が亀に乗っている挿絵が載っていた。見たことある気がする。

「そうですね……………あの辺りがいいと思います」

「ん、分かった。ありがとう」

礼を言つて、リンが指差した方へ足を進める。

「…にしてもスゲーな…」

何がすごいかって言うつと本棚の高さがすごい。五メートルくらいはあるんじゃないか？これ高いところの本とるにははしごでもないし

「…トモヤ」

はしごを持ったフィナと出会った。

「おおフィナ。お前も読書か？」

小さく頷くフィナ。そのまま俺の横を通り、本棚にはしごを立てかけて登りだす　　っておいおい！

「フィナ！ストップストップ！」

「どうして？」

首を傾げるのは自分の服装を思い出してからにしろ。そしてスカ―トはいた格好で高いところに行くな。

「…おかしなトモヤ」

おかしいのはお前の羞恥心だよ。いや、この場合は自覚なしか。

フィナは気にすることなくはしごを登り、本棚の一番高い段の―冊に手をかけた。

(危ねえなアレ)

フィナの身を案じた俺は、なるべくスカートの中を視界に入れないように努力しながらじつとフィナを見ていた。

「ん…ん…」

お目当ての本が中々抜けならしい。よくあるよね、本詰め込みすぎた時とか。

あれ危ないんだよね、とか思っていると、フィナが引っ張っていた本が抜けた。…：…周りの本と一緒に。

「え…」

そのことに驚いたフィナが本から手を離してしまう。思い切り本を引っ張っていた勢いそのままにフィナの体ははしごから離れていく。さらにその上には本の雨。

「フィナ！」

慌てて駆け出す。フィナの真下で止まり、受け止めようと身構える。フィナ一人くらいならなんとかなるが、さらにその上からは大量の本が降ってくる。

(やば…)

少なくともフィナにケガはさせたくない。

そう思った俺は落ちてくるフィナを受け止め、すぐさま押し倒すようにフィナを庇う。

次々と体に本が当たる。そのうちの一冊が、運悪く後頭部に直撃する。

「がつ……！」

打ちどころが悪かったらしい。

霞んでいく思考の中、俺は自分よりフィナの身を心配していた。

「ん……」

ゆっくりとまぶたを開けていく。その先にあった天井をしばらく見ていたが、一つの違和感に気づいた。

(どこも…痛くない?)

自分は確かにはしごから落ちたはずだ。さらに上からはたくさんの本も落ちてきた。大怪我まではいかなくとも無傷で済むということとは考えにくい。

ともかく、今の状況を確認しようとして体を起こそうとする　が、動かない。上に何かが乗っている。

それをどかそうとして、気づいた。自分の上にトモヤが覆いかぶさっていることに。自分の顔のすぐ横にトモヤの顔があることに。

「あ……」

みるみる顔が熱くなっていく。顔が真っ赤になっているのが分かる。

「ト、トモヤ…そ、その…」

しどろもどろになりながら何かを言おうとするがうまく口にできない。言葉にならない声を上げていると、ふと気づいた。トモヤから何の反応も無い。何かあったのかと心配になったが、心臓がちやんと動いていることに安心した。脈を取る必要は無い。接している胸から確かに鼓動が伝わって

「あ……う……」

さらに顔が熱くなる。その熱さを忘れようとして、慌てて抜け出そうと動く。その拍子にトモヤの上から何冊かの本が滑り落ちる。

首だけを起こして見てみると、自分たちの周りには大量の本が散らばっていた。特にトモヤの上には多く。それを見て、自分を守ってくれたんだと気づいた。

不思議な感覚がする。顔の熱さはまだ残っているが、それとは別に胸の中が温かい。

首を横に向けてトモヤの顔を見る。自分はこの少年から救ってもらった。あの非道な研究を繰り返す日々から助け出された。立ち直るきっかけをくれた。あの日あの時あの場所で、この少年に出会わなかったら自分は何一つ変わらなかつただろう。変わることが出来なかつただろう。

…少しばかり女性との関係にはひっかかるものを感じるが、その面を差し引いても彼はとても魅力的だと思う。だからこそ自分はこの少年に

「……………」

また顔が熱くなってしまった。ようやく熱が引いてきたところだったのに。

早く抜け出してしまおう。そう考えながら手を動かすと、偶然トモヤの手に触れる。

(…あれ?)

意識していないのに、手は自然に動いてトモヤの手と重なる。自分より大きく硬い手。なにより温かい手。その感触に、今度は自らの意思で手をさらに強く握る。

「ん……」

トモヤがうめき声を発する。驚いて見ると、さっきよりも近くにトモヤの顔があった。

じっとトモヤの顔を見つめる。視線は自然とその唇へ。そしてゆつくりと顔を近づけていく。

(ダメ)

頭の中で声が聞こえるがとまることが出来ない。まるで引き寄せられるように近づく。あと十センチ……あと五センチ……あと三センチ……あと二センチ……あと一センチ……
バサッ

「!」

何かが落ちたような音が聞こえ、はじかれたような勢いで顔を離す。そして音が聞こえたほうを向いた。

「あ……あ……」

真っ赤な顔をしたリンがいた。足元には本があり、さっきの音は彼女が本を落とした時のものだろうと考えた。

「あ……あの……わ、わたし何も見てませんから!お、お邪魔しましたっ!」

そう叫ぶと、リンはものすごい速さで走って行ってしまった。その光景を呆然と見つめ、再びトモヤに視線を戻す。

さっきはあんなことをしようとしてしまったが、やっぱりやめよう。相手の意識が無いのに勝手にしてしまうのはよくないと思うし、なにより彼女たちに悪い。

でも、

「……少しくらいなら……いい……よね?」

誰にもなく呟き、彼の体をぎゅっと抱きしめる。

幸せだった。

その後、リンから話を聞いたらしいエルナがやってきてトモヤをポコポコにした。

トモヤはその仕打ちに涙目になっていたけど、治癒魔法を使っ
てあげたら「ありがとう」と笑顔で言ってきたので、また顔が赤くな
ってしまった。

その様子を見たエルナにトモヤはまたポコポコにされていたけど、
私は顔の火照りを抑えるので精一杯だった。

第25話 日常（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回はフィナ視点を入れてみました

彼女の気持ちとかよく分かりなかったけど頑張ってみました

……つ、次も早いと思うなよ！

第26話 体調管理はしっかりと(前書き)

どもどもダメ作者です

最近はモンハンばっかやってます

……え？クリスマス？家族で出かけてましたけど何か？リア充爆発
しろ

ではござ

第26話 体調管理はしっかりと

風邪をひいた。

理由なんか分からない。今朝起きたときから体がだるくてフラフラして倒れそうだった。てか朝食の後マジで倒れた。

別に寒い中裸でいたとか汗を拭かずについて体温が下がったとかではなかった。流行り病もない時期の季節外れの風邪。症状は熱だけなので医者と呼ばなかったため詳しくは分からないが、ユアンが言うには急激な環境の変化によるものじゃないか、とのことだった。俺こっち来てから数週間は経ってるけど。

という訳で俺はおとなしく寝ているのだが……

「(じ〜)」

「(じ〜)」

「(じ〜)」

見られてる。メツチャ見られてる。ちっこいの三人にじっと見られてる。

このアリス、ラン、リンの三人は最初はずっと騒いでいたけど、見かねたおばさんの一喝によって沈静化。以降ずっとこうして俺を見ている。

やりづらい。ちょっと咳き込んだだけですごい慌てるし。心配してくれてるってのは分かるけどこの状況はストレス溜まる。相手が小さいだけに邪険にすることも出来ない。…はあ……。

そんなことを考えてるとガチャッとドアが開き、エルナとフィナが入ってきた。エルナの腕の中には水の入った桶がある。

「まったく…こんななんでもない時期に体調崩すなんて…日ごろからだらけるからよ」

「…面目ないです」

「ごめん。私の魔法、病気は治せない」

「いいつて。大体俺のせいなんだし」

本当にね、と言いながら俺の額のタオルを交換してくれるエルナ。
ああ……ひゃっこくて気持ちいいなあ……。

「……エルナ」

「なによ」

「ありがとな」

「……！……ど、どういたしましてっ！」

あれ？お礼を言ったのに怒鳴られた。なんでだ？

「トモヤ、あたしは？」

いやアリス、お前もしてないだろ……まいいか。

「よしよし」

ベッドから手を伸ばして頭をなでてやる。

「えへへへ」

おお、すごいいい笑顔だな。頭なでられてそんなに嬉しいもんか？

「……」

「……」

「……」

なんか残りの三人から無言の圧力を感じる……。

そうそうに負けを認めた俺は、とりあえず三人の頭もなでてやる。

三人ともものすごく笑顔だった。

「……そうよね。所詮トモヤだもんね……！」

エルナさんが何か言いながらものすごい怒気を放っていらっしや

った。違っよ。それはこんなところじゃなくてもっど別のところで

発揮しようよ。きつと世界を狙えるよ。

俺が冷や汗をだらだらと流していると、部屋のドアがコンコンと

ノックされる。入ってきたのはクリアだった。

「失礼します。トモヤ様、お加減はどうでしょうか？」

「ん〜、だいぶ楽になっだし、もう大丈夫」

「そうですか……」

心持ち嬉しそうな表情をするクリア。こういう反応されるとなんか照れるな……。

クレアは落ち着いた動作で歩み寄ってくると、ベッド際の台に持っていたトレイを置くと、俺と自分の額に手を当てる。

「確かに熱は下がったようですね。よかったです」

笑顔のクレアに微笑み返す。そして、クレアが運んできた器を見る。

「この匂いは……お粥？」

「はい。病人に食べさせるものだとトモヤ様が言っていた、とコック長が」

ああ、そういや前にコック長につくり方を教えたな。

「そうか。それじゃ、ありがたく頂きま……」

俺は器に手を伸ばした　　が、直前で器を取り上げられた。

「あのお……クレアさん？」

取り上げた張本人であるクレアはにっこりと微笑み、

「トモヤ様は病人ですし、ここは食べさせてあげるのがいいかと瞬間、他の面々の目が輝いた気がした。

「そうよね。病人なんだし」

「無理はよくない」

「これも看病の一つだしね」

「ちゃんと食べないとダメだから」

「遠慮しないでいいですよ」

「いやあの……大丈夫だから……」

俺の発言は全員に無視される。そして彼女達は匙へと手を伸ばした。　　一つしかない匙へ。

まあ当然誰がやるかでもめるよね。

ギヤーギヤー騒ぎながら誰がやるのか決めるエルナ達から目を逸らし、布団をかぶる。

「……………俺の安息は何処へ……」

結局、お粥は順番に食べさせるといふ妙な結果に至ったらしい。拒否権の無い俺はかわるがわる女子勢に「あーん」をさせられた。むっちゃ恥ずかしかった。

でもお粥はおいしかったんであっさり完食した。もうお昼の時間なので、今度はエルナ達が昼食をとりに行くことになった。

「では失礼します」

クレアがそう言って出て行くのに続いてみんなも部屋を出て行く。出るときにみんな一声かけてくれるのだが、そのほとんどが「私達がない間に無茶したりしないでね」っていう言葉なのはどういうことだコラ。

最後に出ていったエルナの表情がいつもと違うような気がしたが、気のせいだと思い一眠りしようと思つて布団に身を埋めた。

振り返り、たった今通つた扉を見つめる。

自分が何をしたいのか分からない。ただ何かが引つかかっているのだ。

「エルナ、行こう」

「……ええ」

フィナに呼ばれ踵を返す。何かに引つ張られるような感じがしたが振り払つた。

「……」

長い長い城の廊下を無言で歩く。他のみんなはそれぞれ相手を見つけて話したりしているが、今はそんな気分じゃなかった。

歩きながら思つのは昔のこと。まだおばさんと二人で暮らしていたときのこと。

当然だけどその時に自分も風邪をひいたことはある。そんな時、おばさんはしっかりと看病してくれた。たまに怖いところがあるけ

ど、根はいい人なのだ。

風邪をひいたときはおばさんが特製のスープを作ってくれた。温かくておいしくて、しかも栄養満点で。具合が悪いときには丁度いいものだった。

トモヤにもつくってあげようか、と考え、

(あ……………)

思い出した。自分が何に引っかかっていたのかを。

「エルナ？」

急に足を止めたアタシを見て、フィナが心配そうに声をかけてくる。

「…ごめん。先に行つてて」

それだけ言つてもと来た道を引き返す。

忘れていたのはそのときの気持ちだった。病氣の時、一人でいるとどうしようもなく不安になつてしまふ。そのことを分かつていたのか、おばさんは出来るだけ傍にいてくれた。でもどうしても離れていってしまう時があつて、その時は寂しくてしょうがなかった。

だからという訳ではないけど、トモヤが心配とかじゃないけど。

(ただ…トモヤにはそんな気持ちになつて欲しくなくて……………あれ？アタシ何考えてんだろ?)

そう考えながら歩いていると扉の前に着いた。そして、扉のノブに手をかけた。

(……………ん?)

扉の前に誰か立っている気配がする。一流のヒットマンとかなら誰なのか分かるだろうが、生憎と俺にそんなスキルは無い。

まあここは城の中なので、曲者とかじゃないことは確かだろう。しばらくしてゆっくりと扉は開かれる。その向こうにいたのは、

「エルナ?なんで?」

「…なによ…悪い？」

「いや…」

悪いとかそういうんじゃないよ、さっき飯食いにいったばかりだろ。早食いは体に悪いぞ。

「……ご飯ならまだ食べてないわよ。アンタ、一人にしたら何するか分かったもんじゃないから戻ってきたの」

さいですか。

文句を言いながらもベッド脇の椅子に座って、額の濡れタオルを交換してくれるエルナを見て、少し笑ってしまう。

「何よ。急に笑い出して」

「別に」

適当に返事をして誤魔化す。真実を言ったら病人とか関係なく殴られそうで怖い。

実のところ、さつきわずかな時間一人でいるときは不安だった。

風邪の時って無性に心細くなることがあるけど、それと同じだ。

あの不安さは症状の重さと比例していくけど今回はそれにより拍車がかかった。なにせここは異世界。いつもはなんでもないので振舞っているけど（実際大して気にしてないけど）こういうときに不安を大きくする材料としては十分だろう。

だから扉の前に誰かいると分かったときは少し安心した。エルナだと分かったときにはもっと安心した。

この世界に来て最初に会ったのがこの少女だった。あの時彼女が助けてくれなければどうなっていたらだろうか。

以来エルナとはずっと一緒にいる。やはり一緒にいる時間が長いと傍にいて安心するようになってくる。

「…エルナ」

「なに」

「傍にいてくれて、ありがと」

「…！いいからさっさと風邪治しなさいこの馬鹿！」

「ぐべっ！？」

な、殴られた。……何故に……？

午後になり、病状は悪化した。

「トモヤ、大丈夫……？」

心配そうに聞いてくるアリスに返事をしようとするが、うまく声が出ない。なので適当に頷いておく。

正直大丈夫とは言いがたい。頭痛は頭が割れるんじゃないかって程ひどい。体温が高く、濡れタオルを氷嚢に変え、脇の間も冷やしているのに向に下がる気配が無い。汗がとめどなく噴き出してくる。髪がべつとりとくっついて気分悪い。そろそろ切りたい。

「どうして熱が下がらないのでしょうか……？」

そう呟くクレアの声も不安で一杯だった。

もともと俺の体は頑丈な部類に入ると思う。風邪も一年に数度ひくかひかないかだったし、なったとしても風邪薬飲んで数時間も寝ればかなり回復していた。風邪薬を飲まないだけでここまで悪化するものだろうか。抗生物質を少し尊敬　あれ？熱で思考が変になつてきた。

あー熱い。すっげー熱い。ん？「熱い」だっけ「暑い」だっけ？

「厚い」は違うしな……。「暑い」は夏とかそういう気温が高いときに使うんだっけか？じゃあ「熱い」でいいか。あー熱い。額と脇は冷たいけど他の場所はものすごい熱い。

みんなめっちゃ心配そうに見てるよ。……………やめて、そんなに見ないで。照れる。

ぼーっとする頭で自分でも変だと思つたようなことを考えているとコンコンと部屋のドアがノックされる。入ってきたのはユアンだった。

「おーっす。見舞いに来てやったぞ……っつて、これはひどいな」

つかつかとベッド際にやってきてはそんなことを言うユアン。だがこのバカの参入によって部屋の中の重い空気が払拭されたは事実

なので、内心で僅かばかり感謝しておこう。

「症状はどんなもんだ？」

「はい。昼前は熱も下がって安定していたのですが、午後からまた熱がぶり返してさらに酷く」

「そうか……」

お医者さん？と言いたくても言えない俺の前で、ユアンは着流しのすそからなんか出した。つか石ころ出した。

「トモヤ、これ握ってみろ」

なんで、と聞くのもだるいので、とりあえずは言われたとおりに石ころを受け取る。

「ユアン様、それは……」

「いいから。俺の考えが正しければこれで何とかなるはずだ。トモヤ、その石に意識を集中してみろ」

高熱で意識が薄いんですけど、と言っても聞き入れてもらえないだろうからなけなしの意識を手のひらに集中させる。すると、

「……おお……」

石ころが発光している。かなり眩しい。石ころが光り続けるにつれてどんどん気分がよくなってくる。すげーと思いつつさらに意識を手のひらに集中させ

バキン

「あ……」

石ころが砕けてしまう。石が輝きを失うと体調の回復も止まってしまうが、先ほどよりもだいぶ楽になった。

「……ここまでとはな……」

ユアンがなんか驚いてるっぽい。まさか、この石貴重品だった!?

「いや、その石ころはそんなに高いものじゃないぞ。むしろ探せばいくらでも出てくるものだ」

……どうして考えていることが分かるんだろう……?

「いやお前モロに顔に出てるからな」

マジでか。

「マジだけど。とりあえず説明だ。まずお前が壊した石だが、握った者の魔力を吸収して光を放つという代物だ。これはまだ小さいからいいが、あまり大きいものだとは中の魔力搾り取られるから気をつける。これが砕けた理由は…はつきり言って処理し切れなかったんだな」

「どゆこと？」

「それは、今回お前が体調を崩したことに関係がある」
「そう言うとユアンはびしっと俺に指を向ける。」

「お前の固有魔力が多いんだ」

「……………なんだっけそれ？」

「ぱしーん。ユアンが俺の頭を引っぱたく。痛え。」

「はあ……………この前説明してやっただろうが。平たく言うと体内にある魔力のこと。お前はその量がバカみたいに多いんだよ」

「バカとは失礼だなこのバカ」

「うるせーバカ。で、その石ところに魔力を吸い取られて体調が悪くなったってことは、なんらかの理由でお前の中の魔力が暴走してたんだろうよ」

「へー。まあどうでもいいけど。とりあえずありがとう」

「おう。どういたしましてだ。んじゃ、俺は忙しいから、これで」

ユアンは笑顔で返すとそのまま部屋を後にした。……………カッケエ。

「……………トモヤ、本当に大丈夫なの？」

「おうすこぶる元気だ。なんなら今ここでムーンサルト決めてもいいぞ」

「お願い」

「すみません勘弁してください」

予想外の切り返しをしてきたフィナに思わず謝る。ムーンサルトなんて出来ません。

「ほら、アホ言っていないで寝なさい」

「だから大丈夫だって」

「何言ってるの。風邪は治りかけが一番大事なんだから。おとなしく寝てなさい」

言いながら俺を布団に押し込めるエルナ。軽く抵抗してするが、俺はあっさりと根負けした。

「分かったよ。おとなしく寝るから」

確かに大分よくなったとはいえまだ平熱ではないのはなんとなく分かる。だから寝ることに　しよつとしたのだが、

「(じゅん)」

「(じゅん)」

「(じゅん)」

「(じゅん)」

「(じゅん)」

「(じゅん)」

.....俺を一人にしてくれ。

第26話 体調管理はしっかりと（後書き）

どうでしたか？

今話は一度全面的に書き直しをしたので遅くなってしまいました
他にも短編小説をいくつか書こうとしているのですがうまく指が進
みません

所詮自分の才能なんてそんなものです
ではまた次回

第27話 散髪と失敗（前書き）

どうも作者です

今話は今年最後の投稿です

今思うと連載し始めてから約半年よくもまあ続けてこれたなと思います

アクセス数も気付いたら8万越え！驚きました

ただ半年もやってて若干投稿数が少ないんじゃないかな、と思いました

来年はもっと早く投稿していけたらなと思いました

そんじゃ、どうぞ

第27話 散髪と失敗

ある日、窓から射す暖かな陽の光を浴びながら、俺は自室で本を読んでいた。

今日はクレアはメイドさんたちの集まりで、ランとリンは家庭教師の人が来るとかでいないので、今日は部屋にはエルナとフィナとアリスしかいない。いつもみたいに大勢でいるのも楽しいけど、こういう少ない人数でまったりするっていうのもいいもんだ。

なんてことを考えながら、俺は本のページを捲り進めていった。

「(ぐしぐし)」

「……………」

「……………」

「……………」

「(ぐしぐし)」

「……………」

「……………」

「……………」

「(ぐしぐし)」

「……………」

「……………」

「……………」

「(ぐしぐし)」

「あーもうさつきから気になるわね！どうしたのよ!？」

黙々と編み物をやっていたはずのエルナが急に叫びだした。何？

俺？

「いや…あの…さつきから髪が目に入って…」

「髪？確かに長いわね」

「チクチクしてうざったいんだよ」

「ふうん……アタシが切ってあげましょうか？」

「え、出来んの？」

当然でしょ、と言って自慢げに胸を張るエルナ。まったく、張るような胸も無「トモヤ……？」なんでもございませぬ。

「…それじゃ、お願いします」

「…分かったわ。で、どれくらい切……」

「え〜っと、けっこうざつくり エルナ？」

俺の髪に触れたエルナが急に黙り込んでしまう。え何？白髪でもあった？それともシラミの卵でもあった？

「ア…アンタ……」

「な、何？なんかあったの？」

「なんで………なんでこんなに髪質いいのよッ!？」

「………はい？」

予想外でした。

「なんでこんなにサラサラで………どうやってんの!？」
「いや知らんよ。」

「………本当だった」

「ふわぁ………柔らかい……」

おいコラ。三人で頭こねくり回すな。

「トモヤ、あんたメシユラとか使ってる？」

今エルナが言った『メシユラ』というのは、俗に言うリンスみたいな物です。なんでも髪に良い植物のエキスを濃縮した女性御用達の一品らしい。この城の風呂場にもあったけど……

「使っていない………けど？」

「じゃあなんでこんなに髪いいのよ………なにアンタ、ケンカ売ってる??」

「なんでそんなに怒ってるの!？」

よく分かんが恨みを買ったようだ。

「はぁ………まあいいわ。それより髪切りに行くわよ。街には美容室くらいあるだろうし」

「ええ〜、いいよ面倒くさい。こんなのはさみでちよっちよっちや

れば……」

「ダメよ！そんな良い髪を適当にするなんて、一人の女として我慢できない！」

「いや俺の髪だし……」

「アンタの意見なんてどうでもいい！」

うわぁ、酷い横暴だ。

そのまま俺はすすると引きずられて扉へ近づいていった。

ガチャ。扉を開けると、

「いいじゃねエか。髪くらい」

「ダメです。一国の王なら身だしなみくらいしっかりしてください」

「じゃあ王様辞める」

「下らない事言っていないでちゃんとしてください！……あ」

「お……」

同じように引きずられているユアンと引きずっているリアさんがいた。

『どうも……』

妙な空気が流れた。

「まったく……どうして女ってのはあんな細かいことを気にすんだろな」

「まったくだ」

俺とユアンは愚痴っていた。

今いるのは城ではなく街の中。方角的には東南の辺りらしい。ここらへんにユアンがよく使っているという美容室があるそうだ。

ちなみに護衛なんかはいない。王様が外出するんだから護衛の一人や二人、少なくともリアさんくらいはついてくるものだと思っただけだ、

「護衛なんて意味ありません。なにより私はユアン様が残した政務を処理しなければならぬので」

とのことだ。ちゃんと仕事しろよ国王様。

さらにユアンは服装を変えていない。いつも通りの着流し姿だ。周りの人がちらちらこっち見てる。隣を歩く俺の姿が普通だから余計に目立つのかもしれない。

今俺が着ている服はこの世界の一般的な服だ。元々着ていた服は穴ぼこで破けたりしてしまっているの直してくれているらしい。ありがたい話だ。

「着いたぞ」

ユアンの声に前の建物を見る。普通の白い漆喰の壁、はさみを模ったかわいらしいデザインの絵。店舗名は『乙女の園』と書いてある。

「なんか……普通だな。店名以外は」

王様御用達って言うからもちとすごいのかと思ってたけど……案外平凡だった。

「俺は名より実を取る派だからな。店はこんなでも店員の腕は確かだぞ………ちょっとアレだけど……」

「？」

最後のほうなんて言ったのか聞こえなかったけど………いいか。

ユアンがドアを開けるとカランコロンとドアベルの音が鳴る。ああ……いい音だ。

「あああ、ユアンちゃんじゃない。いらっしやい」

(……ん?)

おかしいな。何だ今の声？優しい大人のお姉さんが言いそうなセリフなのにもものすごく野太かったぞ？

声の主は店の奥にいるらしい。ちょうど日陰になっていて姿は見えないが、徐々に近づいてくるにつれて、その全貌が見えてきた。

丸太のように太い脚。着ているタンクトップに浮き出ている八つに割れた腹筋と逞しい胸板。熊くらいなら数秒で絞め落とせそうな

がっちりとした腕。そんな見事なマツスルボデイの持ち主は、

口紅とマスカラで彩られた、角刈りが似合う濃ゆい顔のおっさんだった。

「……………それじゃあユアン。私は買い物に行つて来るから、ちゃんと切ってくるのよ」

「お母さんみたいなことを言つて逃げようとするな。しかも下手だし」

くそつ。回り込まれた。

「ユアンちゃん、その男の子どちらさま？」

ユアン『ちゃん』で。国王様をちゃん付けて。

「ああ、こいつは俺の客だ。ちよつと姉さんが世話になつてな」

「あら、メイラちゃんが？裁判で騒動が起こつて助けられたつて風の噂で聞いたけど…もしかしてその子が？」

「そつだ」

「まあそつなの！私からもお礼を言つわ。ありがとね」

「……………どうも」

うん。根はいい人なんだろうね。ちよつと感性とかが歪んでるだけで。

「そつそつ自己紹介が遅れたわね。わたしはガイル・ロゼルタ。可愛らしくガツちゃんつて呼んでね？」

……………根はいい人なんだろうな…。

「なあガツちゃん。お話はそれぐらいにして本業のほうさつさとよろしく」

「もう分かつてるわよ。ユアンちゃんつたらせつかちねえ」

ガツちゃんつて呼んでたよ。

見た感じ従業員は彼（？）一人らしく、必然的に髪を切るのは彼（？）のようだ。あの太い指ではさみなんか持てるのかと思つたが、意外にちゃんと扱えていた。小指がピンと立っているのが無性に腹

立たしいが。

「あらそうなの。またリアちゃんにせつつかれて？」

「そうなんだよ。リアのヤツ毎度毎度うるさいのなんのって…」

「ふふふ。女の子っていうのは好きな人にはちゃんとしていて欲しいものなのよ」

美容室恒例の美容師さんとのトークが始まっている。俺ああいうの苦手なんだよな。話してるくらいなら雑誌とか漫画読んでるし。

まあそんなこんなで

「はい終わり。お疲れ様でした。でももったいないわねえ…。ユアンちゃんは髪型を少し変えればもっとカッコよくなれると思うのに…」

「いいさ。俺は十分カッコいいからな」

「あら言っじゃない」

笑いあつ国王様とオカマ美容師。改めて考えてみるとなかなかシユールな光景だな。

「はい。それじゃあ次は坊やの番ね」

……… ついに来てしまったか…。正直イヤなんですけど。

「ほらさっさとしろトモヤ。早く帰らねえと怒られるぞ俺が」
いやどうでもいいけど。

「でも………なあ…」

「大丈夫だ。慣れてくれば目を開けていても視界がハッキリしないようになるから」

なりたくねえ。というかそんなに鏡に映った『アレ』の姿は衝撃的なのか。

「ほおら早くして」

「いいから行け」

二人にせかされて俺はとうとう観念する。そしてガツち　ガイルの前にある椅子に座った。うう…後ろからの威圧感が半端ない…。

「それじゃあ、はじめのわね」

鏡に映ったガイルがウイソクをしてくる。オエツ。

「どんな感じに仕上げま」

ピタツ。俺の髪に触れたガイルが動きを止める。あれ？また？

「んまあああああああああああああああ！スゴいわ！素晴らしい！この手触り！この指通り！このツヤ！完璧だわ！百年に一人の逸材よ！」

グワアアアアアアアア！耳があ！耳がキーンってなるう！

「こんな素敵な髪を切れるなんて……わたしの生涯で一番名誉なこ
とよ！今この瞬間に、わたしの美容師人生のすべてをかけるわ！」

「重ッ！たかが髪切るだけなのになんでそんなに意気込んでんの！
？」

「任せて頂戴イイイイイ！」

「もう黙れええええええええええ！」

……… ついつい怒鳴ってしまった。反省。

ただガイルの腕は確かだったといっておこう。まああんま切られ
ずに形整えられたただけだけど。

「そうだ、カジノへ行こう」

「破産しろ」

時は昼。昼食も終わり、部屋に帰って本の続きでも読もうと思っ
ていると唐突にユアンが言い出した。その言い方はどこで知ったん
だ？

「つれないこと言うなよ。いいじゃん行こうぜカジノ。豪遊しよう
ぜ国民からの金で」

「お前は今すぐ国王を辞めるべきだ」

「冗談だつて冗談。ちゃんと俺の小遣いから出すつて」

「いや小遣い制かよ」

きつと財布の紐を握っているのはリアさんなんだろう。本当に尻
にしかれてるな。

「つか真昼間からカジノなんか行けるかよ。夜行け夜」

「いや門限あるし」

子供か。

その後なんやかんやでカジノ行きを承諾。そして連れて来られたのはこじんまりとした小さな一室。部屋の中央には石製と思われる魔法陣が設置されていた。

今回俺は《飛鳥》を所持している。なんでも自衛のためらしい。どんなに立派な人でも酒が入って金が関わればどうなるか分からないから……らしい。なんとも悲しいことだ。

「これはカジノ行きの転移魔法陣。例えば国王専用のVIPルームに出られるぜ。ちなみにこれは代々レパーラ国王の間で伝わってきたものだ」

余計な補足をありがとう。おかげでさらにこの国の行く末が心配になってきたよ。

そんなことを思いながら、割と興味津々で魔法陣に近づいてみる。「けっこう古いな。大丈夫なのか？」

かがみ込んで魔法陣の線を見ながら聞いた。ところどころ小さな傷もある。

「なんのなんの。ちゃんと整備はしてあるから平気だ。ちょっとやそつとじゃ傷なんてつかねえさ」

バシバシと足で魔法陣を叩くユアン。まったく、物を大事にしろバキン

「「あ」」

見事にユアンの足の下の線が壊れる。その瞬間、魔法陣がピカ―ツと光りだした。

「……なあユアン」

「……なんだトモヤ」

「……光ってるんだけど」

「……光ってるな」

「……俺内側にいるんだけど」

「……内側にいるな」

「ははは、と笑いあう。その間にも魔法陣の輝きは増していく。

「なあユアン」

「なんだトモヤ」

「これからどうなるんだ？」

「さあ分かんねえなあ」

魔法陣の外側に出ようにもなんか見えない壁があって出られない。

そろそろ光でユアンの顔が見えなくなってきた。

「なあユアン」

「なんだトモヤ」

「俺は……これからどうすればいい？」

「……まあ……頑張れや」

プチッ

「っざけんなこのバカヤロオオオオ ！！」

怒号の最中、光が一際眩くなると

「 へ？」

「？」

鳥と 眼が合った。

第27話 散髪と失敗（後書き）

どうでしたでしょうか

主人公が髪を切りに行く話なんて見たこと無いなと思ってこんな話を書いてしまいました

非ツ常に書き難かったです

なんとか繋げるために主人公を無駄に美髪にしました（笑）

そして最後の方

こちらは無駄にひっぱってみました

来年からはまた新しい事態が起こります

章分けはしません面倒なんで

拙い文ですが来年も読んでいただけると幸いです

それではこれにて失礼させていただきます

後書きこんなに書いたの初めてかもしれない…

第28話 何事もなるようになる(前書き)

お久しぶり?です。作者です

やや更新遅れました。すいません

年始ってことでのいろいろ忙しく なかったです。むしろ一日中暇

な日がほとんどでした

何故か妙に指が進まないんです。スランプですかね?

……… ありえないですね。スランプになるほど才能は無いですし
という訳で今話は短めです

「ここどこだよ？もしかして国すら違う？最悪、また異世界かもしれない。」

「いや。ここがどこかは今はどうでもいい。何より優先すべきは生き残ること。何かいい方法はないかと下の広大な森を見渡す。」

すると森の一角、そこに湖があるのが見えた。

水の中に着水すれば運良く助かるかもしれない。そう考えた俺は湖に落ちれるように必死に進路修正を始めた。同時になるべく抵抗を受けるような姿勢になり、僅かでもいいから減速しようとした。つっても気休め程度。ほとんどテレビで見たような猿まねだし、ほとんど効果なんて無い。それでも、少しずつ体は流れていった。

地表まで残り30メートルくらいまで落下した辺りでようやく真下に湖が来た。

そこで素早く体勢を変える。大きく面積を取るような状態からピシッと真っ直ぐに。着水するときの抵抗を出来るだけ小さくするためにだ。この速度で腹打ちなんかしたらそれこそ轢かれた力エルの如くなりかねん。

そんなこと思ってるうちに残り20メートルも無い！目寸で残り10メートル！

思わず目を瞑る。

「.....あれ？」

「いつまで経っても予想していた衝撃が来ない。さっきまでの速度でならもうすでに水の中にドボンしていたはずだ。」

おそろおそろ瞑っていた目を開き、

「.....あれ？」

また同じ言葉が口から出てくる。

俺の目が腐っていないければ、今俺の身に起きていることはありえないことだろう。

「だってそうだろう？湖の水面約1メートル手前で体が止まってるんだから。」

あまりのことにポカンとしてみると、独りでに体が動いていく。手足をじたばたとさせるも効果なし。そのまますーっと動き、

「…あいたッ！」

岸の上についた途端、地面に落ちた。

「つつつ…」

打ち付けた腰をさすりながら、あんな状況でも手放さなかった《飛鳥》を杖代わりにして立ち上がる。

ちよつと視線を動かせば目の前には大きな湖。どこから見ても何の変哲もない至って普通の湖である。だったら、何故……？

「むむ…」

思わず腕組みをして考え込む。いや分かっているんだよ？もつと他にするべきことがあるのは分かっているんだよ。でもまず目の前の疑問を解決したいっていうか……この状況から軽く逃避したいっていうか……。

くすくす

「え？」

今なんかどつからか笑い声が聞こえたような気が……。気のせいかな？思わずきよるきよると周りを見渡す。

くすくす

「……やっぱり」

再び聞こえた笑い声。発生源は 湖。慎重に、そしてやや警戒しながら湖面を覗き込む。

そこには、

「……………わー、妖精さんだー」

としか言いようがないほど完全な妖精がいた。ちみっちゃい布の服を着て、背中から虫のような翅が生えている、あの妖精がいた。ちなみに顔は女の子っぽい。

いやはや、ファンシーな世界だなとは思っていたけども、まさか妖精までいるとは思わなかったな。この調子で行くと伝説の聖剣とか魔王とか出てきそうだな。

妖精は意味の分からない　ただ楽しそうというのはなんとなく分かる声を発すると、俺の顔の前へ飛んでくる。おお、なんか光ってる。

妖精はしばらく俺の周りを飛び回っていた。たまに鼻を突かれたり耳を引つ張られたりしたけど、こそばゆいだけだった。

妖精は俺の反応が鈍かったのが不満だったのか、

「あっ!？」

俺の手から《飛鳥》をぶん取っていった。そこで問題が一つ。妖精の体はとも小さく俺の手のひらに納まってしまいう程しかない。そんなヤツが重たい日本刀　特に《飛鳥》は刀身だけでも1.5メートルくらいあるし普通より重たいだろう。という訳で、

「!？」

当然、落ちていく。その拍子に鞘から刀身が出てきてしまい、偶然にも刃の先には

「危なっ!」

咄嗟に手を伸ばして《飛鳥》を支えると同時に、妖精を引き離す。ふう…ギリギリだったな。あと三秒遅かったら妖精は二つになるとこだった。

「……………」

妖精は少しの間俺の手の上でぽけーっとしていると思うと、俺の顔に飛びついてきた。

「!」

よく分からんが、どうも感謝されてるっぽい。それにしても顔面に張り付いてくるのはどうかと思うぞ。それにお前光ってるからめっちゃ眩しいんですけど。

しばらくされるがままになっていた俺だったが、いい加減鬱陶しくなったあたりで妖精の服を掴まんで顔から引き離し

「こらぁーっ！なにしてるんですかっ！！」

「へ？」

突然聞こえてきた声に、思わず呆気にとられる。

「妖精さんを苛めるなんて……許せません！」

あれ？なんか勘違いされてる？ そう思い、弁明しようとして声のした方を向く 瞬間、見えたのは青白い閃光で

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ！？」

痺れた。

「……………う……」

いつからか閉じていた瞼を開く。

あれ？どうしたんだ俺？確か…魔法陣が光って落ちて浮いて妖精見つけて助けて怒鳴られて……ああ。

「…またトラブルか……」

ついついそう呟いてしまっくらい大変だったんですハイ。

ややぼんやりしている頭を軽く振って覚醒を促しながら体を起こし、そこで自分がベッドの上で寝かされていることに気付いた。

とても質素なもので城にあるふかふかのベッドに慣れかけていた俺からすると、少し硬く感じた。

(……………ん?)

なんだろう？布団からいい匂いがする。かけていたシーツを手繰り寄せて鼻に近づける。なんだろうか？どこかで嗅いだような気がするような……？

うーん、と悩む俺。

「あ、気がついたんですね」

「うえ！？」

不意にかけられた声に驚き、つい変な声を出してしまう。

「……ぷっ」

笑っていたのは少女だった。

まず目の留まるのは金色の髪。とても長く腰を通り越して膝近くまで伸びていた。前髪が特徴的で顔の半分を隠すような形になっている。残りの半分からは海の蒼の色をした優しい瞳がこちらを見ている。着ている服もまた特徴的で、一枚の布を体に巻きつけたようなつくりになっていて……肌の露出が多い。そしてもう一つ。この娘は発育がとていいようです。

「あの……？」

じつと見入ってしまった俺に少女が不安げに話しかけてくる。

「あ……な、なんでもない……です」

慌てて誤魔化すと、少女は安心したような表情をすると、

「ごめんなさいっ！」

深々と頭を下げてきた。そりゃもう深く、百二十度くらい。

「え？あ……あの……」

突然のことに流石の俺も戸惑う。てかなんかいやだね、女の子が自分に頭下げてるのって。

「さつきはいきなり魔法で攻撃しちゃって……本当にごめんなさい！」

頭を下げたままでさらに謝罪する少女。それを聞いて納得した。

あれはこの子の仕業か、と。

「……頭を上げてくれ」

「……はい」

再び見る少女の顔は申し訳なさで一杯で、見ているこっちが悪いことをしている気分になるほどだった。

「そんなに謝んなくてもいいのに」

「で、でも……」

「きみはあの妖精を助けようと思ってやったんでしょ？だったらし

「ようがないよ」

俺が気絶する直前、彼女はそんなことを言っていた筈だ。

「それにほら、体だってもう全ぜ んっ!？」

ベッドから立ち上がってももう平気だとアピールしようとするど、突然体に電流が走ったようになり動けなくなってしまっ。なにこれ…?」

「だ、大丈夫ですか!？」

少女が慌てて俺の体をベッドの上に押し戻す。

「大丈夫大丈夫。問題ない」

ちよつと体中が長い間正座した後の足みたいに痺れてるだけだから。

「……………私のベッドで悪いですけど、しばらくはここで休んでてください」

俺の言葉を聞いた彼女は小さく微笑むと、そう言って別の部屋に行ってしまった。

「……………はあ。参ったな……………」

少女の背中が見えなくなったのを確認して、小さく漏らす。

全身を包む妙な痺れは弱くはなったが無くならない。動けないほどではないが満足には動けない。でもすぐに治ると思う。

ひとまず寝よう。そう思って布団に潜り込 もうとしたが、ピタツと止まる。

(さっきあの子『私の』って言ってなかったか?つかその前に俺……………)

「……………考えるのやめよ」

思い直した俺はシーツを被った。

……………あくまで眠る為にです。

第28話 何事もなるようになる（後書き）

近頃寒いですね

この小説を書いているパソコンはデスクトップのうえ、ストーブから遠い位置にあるため、パソコンをしている間は辛いです

キーボードをたたいてる手が死にそうです

それはさておき

作者の冬休みは今日で最後で明日からはまた学校に行かなくてはなりません

という訳で投稿はやや遅れると思います

ご了承ください

第29話 考え過ぎはよくない(前書き)

遅れて申し訳ありませんでしたあ！以上！

第29話 考え過ぎはよくない

翌朝、起きるとものすごくお腹が空いていた。軽く死ねるレベルで。

今思うと大体午後二時くらい（だと思う）に空から落ちてきて、それから一切飲まず食わずだったから当然か。

食べ物を探すためにベッドから出ると、体の痺れは無くなっていった。我ながら頑丈な体でよかったなあ、と思う。

んで、適当に部屋を移動していると、昨日の少女がいた。

「あ、おはようございます。もう体は大丈夫ですか？」

「うん。もうぜんぜん平気」

「そうですね、よかったです。これから朝ごはんですけど一緒に食べますか？」

「ぜひお願いします」

少女に案内されるままにテーブルに着き、しばらくするとパンとかサラダとかスープとかが運ばれてきた。ありがたいです。

「むぐむぐ……このパン美味しいな」

「そうですね。手作りなんですけど、喜んでいただけただけで何よりです。そう言って微笑む少女。ええ子やなあ……。きつとご両親の育て方が良かったんだろう。」

「あれ？そういえばキミ、家族は？」

パンをもしゃもしゃしながら聞くと、彼女の顔に影が射す。

「その……母は数年前に病で亡くなって「すいませんでした」えっ！？あ、あの、気にしないでください」

彼女がいいと言ってくれたので土下座体勢をやめる。まったく、自分のデリカシーのなさには呆れるな。こつちの世界に来てから何回こんな話を聞いたんだよ。いい加減ちよつとくらいは考えるよ俺ともあれ、目の前の少女の顔に影を射したままにしておくのは忍びない。何か話題を。

「あ、そついやまだ自己紹介もしてなかったな」

「あ、本当ですね。うっかりしてました」

俺はこほんと咳払いをして、

「俺は篁智哉。昨日は泊めてくれてありがとう。礼を言つよ」

「私はシルフィア・リーフレットです。気にしないでください。責任は私にあるんですから」

笑っている少女　シルフィアの顔がまだ少し暗いことに気付いた俺は、ここぞとばかりに質問をする。

「ここつてどこらへんなの？まだレパーラの中？」

「？　はい。ここはレパーラの北東にあるアルトリアの森ですが…

…知らなかつたんですか？」

「えっと……それが…」

首を傾げているシルフィアに簡単に事情を説明する。

「それは……大変でしたね…」

哀れまれた。

「ここから城……ってか、ミナレットまではどれくらいかかる？」

「そう……ですね。ちゃんと計算したわけではないのではつきりとは言えませんけど……2日、いや3日くらい歩き詰めれば着くと思います」

OK。帰りたくないです。メンドイです。かつたるいです。……

……はあ。

「……どうすっかなあ……」

ぐでー。テーブルに突っ伏す。ちなみにもう食事は終わってたりする。

「……あの」

「ん？」

食器を流しに置いて戻ってきたシルフィアが声をかけてくる。

「もしよろしければ、何か手段が見つかるまで……ここにいませんか

？」

「え？」

「その…トモヤさんがよかったですけど…」

「……………」

じっと目の前の少女を見つめる。

普通は、会って間もない他人を家の泊めるなんてそう無い。よっぽどお人好しか、なにか考えることがあるかのどちらかだろう。

今思うとこの世界に来たばかりの俺を家に泊めてくれたエルナとおばさんはそのどっちだったのだろうか？

エルナとおばさん、そして目の前の少女。いい人だとは思う。それでも他人を家に泊めるほどだろうか……………？

……………。

……………。

……………。

………考えんの面倒。

「じゃあ……………お願いします」

そう言うとシルフィアの顔が輝いた……………気がした。

「分かりました。それじゃあ私は食器を洗ってくるので、トモヤさんはゆっくりしてて下さい」

流し台へ向かうシルフィアの足取りは軽かった　　ような気がしました。

「……………」

……………よく分かん。

ゆっくりしてくれと言われたものの、ただじっと人が働いているのを見ているだけというのはなんか落ち着かない。

ということで手伝いを申し出たところ、薪拾いか洗濯と言われたので薪拾いを選んだ。……………手伝いをさせてくれるまでかなりの問答があった。

そんなわけで現在森の中。木々の間をくぐり、えっちらおっちらと木の枝を集めています。

いつそのこと樹をまるっと一本切り倒してしまおうか、と一瞬思ったりもしたがやめた。切ったら切ったで運んだりするのが大変だし。

でも、ちまちま枝を拾っていくのは結構腰にくる。
なので上半身を捻ったり適当にストレッチしていると、

バキバキと木々を押しつけながら、前方より巨大な猪が出現した。

(あ、なんか既視感……)

呆然とする俺を見つけた猪は、前足で地面を引っかき始める。突進の予備動作だ。

鼻息荒く身構えている猪を、ぼーっと見つめる。

何故だ……？なんでこんな状況に俺はいるんだろうか……？とりあえずこの猪のせいではない。偶然遭遇しただけだし攻撃してこようとしているのも自然の中では普通だろう。

シルフィアも違う。薪拾いを選んだのは俺だし、そもそも手伝いだって強引に請け負ったところがある。

俺がこんな森のど真ん中に落ちる要因を作ったのはユアンだが、あれは事故だと割り切ろう。どこか釈然としないものがあるが。

じゃあ、いつからだろう。こんな不幸なのは。異世界に落ちたのは……まあいいや。面白いし。

ていうかあれ？幸せって何だっけ？俺今まで幸せだったのか？いや待て俺。そんなこと考え出したらキリがない。きっと俺は幸せだったさ。そう信じよう。

ここまでの思考に数秒。その間ずっと地面を引っかいていた猪は、猛烈な勢いで突っ込んで来る。一歩進むたびに地面に根付いている木の根が砕けていくのを見るとすごい威力なんだと分かる。

急いで避けよう。そう思って横に飛んで回避しようとした
その時、猪が砕いた木の根の破片が額に直撃した。

それなりの勢いだったものの小さいものだったためケガにはなら

なかった。少しヒリヒリする程度だ。

だが、そのわずかな痛みを認識した瞬間、俺の中で……何かが弾けた。

猛烈な勢いで迫ってくる猪。それに対して俺は回避行動を中断して向き直る。漫画やアニメで見た姿を真似して、《飛鳥》を構える。森は危険だからとシルフィアに持たされたのが役に立つとは思わなかった。

猪との距離が数メートルを切る。前の世界で得た知識、そしてこの世界に来てからの経験。それらを総動員して刃を振るう。……同時に、今までの人生で体験した理不尽なことを思い出す。

そして、

「こんちくしょおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお！」

「ブモオツ!？」

叫ぶとともに繰り出した渾身の一撃。腕だけでなく体全体で踏む込むよう放った突きは、猪の小さな目と目の間。眉間に真っ直ぐに吸い込まれていき、貫通。猪は悲鳴を上げながらもその体は慣性の法則に従い進み、鏝近くまで猪の体内に納まったところで動きを止める。程なくして、猪の目から生気が失われ、ズウン……と重苦しい音を立てて地に伏した。

「……っ」

右腕が痺れる。流石にこのサイズの生き物の頭蓋骨は硬い。フェンシングとかを参考にして片腕だけで突いたのは間違いだっとな、と考えながら猪の亡骸から《飛鳥》を抜き取る。刃を一振りして血を飛ばし、鞘に収める。

「しっかし……どうしたもんかなあ、これ」

改めて見ると猪はまじでデカイ。一人で運べるものでもないし、そもそも森の中だと運びにくい。かと言って放置すんのもなあ……。

「……………トモヤさん、何してるんですか？」

「え？」

不意に後ろから声をかけられる。振り向くとシルフィアが小走りで駆け寄ってきていた。

「一体何を……わっ、スゴい！こんなに大きいのはじめて見ました。トモヤさんがやったんですか？」

「ん、ああ。突然飛び出てきたから。でもこれどうするよ？二人じや運べないだろうし……」

「あ、それなら大丈夫ですよ」
「？」

俺が首を傾げていると、シルフィアは片方の人差し指と親指を口に咥え、ピー、と指笛を鳴らした。F 10を思い出して切なくなつた俺は間違つていないだろう。

しかし、こんな森の中で指笛なんか鳴らして、どうするつもりなんだろうか。

バサツ、バサツ

「ん？」

頭上に影が射す。もともと樹が生い茂つてたからあまり陽の光は入つてこなかったが、それが遮られた。気になって上を見る。

緑。

それしか視界に無かつた。わずかに見えていた青い空が、緑色のなにかで見えなくなっている。

いや違う。なんなのかは分かっているんだ。ただそれを受け入れるのを脳が拒否しているだけなんだ。

その何かは自らの翼を動かし、ゆっくりと降りてくる。やがてそこいらに生えている木々よりずっと太く頑丈そうな脚で地に降り立った。

その体の大部分はこの森にあるどんな緑よりも深い緑で彩られていて、部分部分にこげ茶色が混ざっている。

バギインツ！ とそれが尻尾を一振りしただけで、その範囲内に

あつた樹が折れる。

………うん。いい加減現実を見よう。今、俺の目の前にいるのは ドラゴンだ。

俺が呆然としてしていると、シルフィアがドラゴンの方へ歩いていく。俺は止めない。だってそうだろ？あのタイミング、どう考えてもシルフィアが呼んだんだ。

「ゴメンね、いきなり呼んじゃって」

「グルルウ」

シルフィアがドラゴンの頭を撫でると、ドラゴンは気持ちよさそうに鳴いた。

「あ、紹介しますね。この子は緑地龍アイストラゴンの子どもで、名前はグラです。子どもで。少なめに見積もっても全長十五メートルはあるんだが。

「じゃあグラ。あれ、私の家まで運んでくれる？」

「グルウ」

グラは小さく喉を鳴らすと猪の死体を両足で掴み、再び空へと飛び立っていく。というか飛ぶときの風がものすごく強いんですけど。これで大丈夫です。グラは頭のいい子なんで、ちゃんと運んでくれると思います。今日はご馳走ですよ、トモヤさん。………トモヤさん？」

「お、おう………」

風で乱れた髪を直しながらシルフィアが話し掛けてきたが、ついつい呆然としていた。

「…驚きましたか？」

「うん。あんな近くでドラゴンを見たことなんかし」

そもそもドラゴンがいる時点で驚きだし。

「そうですか。でも、すぐに慣れると思いますよ」

慣れたくないです。

「じゃあ帰りましょう。薪もすっかり集めてくれたようですよ」

シルフィアは俺が置いていた薪の束を抱えて歩いていく。俺はそれを追いかけてシルフィアから薪を取り上げる。「私が持ちます」と

言ってくるシルフィアをぬらりくらりとかわしながらふと思つ。

(俺は今幸せなんだろうか?)

第29話 考え過ぎはよくない（後書き）

なんなんでしょうね今回は。遅いくせに中身は短い。もつすこしが
んばりたいです。

それはさておき

前書き・後書きに何を書けばいいのか分かりません。他の方の小説
を見るといろいろ書いているのですが、自分はあるというのがながて
なのでどう書けばいいのいかなり悩みます。

……苦心して書いたものがすっかりで消えてしまつこともしばしば
ありますし。

まあこの場は近況報告的なものとして使っていけたらな、と思いま
す。

それでは

第30話 森での生活（前書き）

気でも狂ったのか、唐突にモンハンの小説をはじめてしまいました。
この小説もろくに更新できてないのに。
まあどちらも手を抜いたりしないように頑張ります
ではどうぞ

第30話 森での生活

「……おお……」

俺は今、モーレッツに感動している……！

何故かって？それは、今俺の目の前に 本物のマンガ肉があるからだっ！

すっげえ。ホントに骨ごと焼いてる、と感心しつつ、俺はゆっくりと手を伸ばした。触った骨は多少熱かったが我慢できないほどでもない。両手でしっかりと骨の両端を握り、かぶりつく。

「熱っ！でもうまっ！」

美味い。とにかく旨い。ちょいっと硬くて筋を感じるのはいはりもどが食用じゃないからか。でも味付けが塩だけだから食欲を刺激されて食べるのをやめられない。口の周りにべったりと肉汁がついているのに気にならない。

「お口に合いましたか？」

「ふあい！ふおってもおいひいでふ！」

「そうですか。それはよかったです」

正面に座ってご飯を食べているシルフィアは俺とは違い、ナイフとフォークを使って少しずつ削いで食べていた。くそう、これが育ちの差か。悔しいのに食べるのを止められない。

「そんなに慌てて食べなくてもお肉は逃げませんよ。それにおかわりは一杯あるんですから」

どうぞ、と渡されたおしぼりで口の周りをぬぐい、どうにか気を静める。さっきまでの俺ははじめてのマンガ肉でちょっとおかしくなっていたようだ。

時は夕暮れ、偶然にも俺がしとめた猪のおかげで豪華な夕飯になった。八つ当たり気味に倒したことが申し訳ない。

それはともかく、この世界はまだ電気なんて便利なもの普及していないので、夜になると主な光源はランプかろうそくになる。でも

真っ暗い中、ランプの灯りに照らされながらご飯を食べるのはちょっと…、というシルフィアの要望で、夕ご飯はまだ早いうちに食べることにした。とは言っても用意したのはシルフィアだけだね。そういやこの子とはかく俺に気を使うよな。いきなり押しかけたのは俺なんだし、どっちかっていえば気を使うのは俺のはずなんだけど…どうかしたのかな。

「……………」

じっと見られていることに気付いたシルフィアが首を傾げる。小さい子どもがするような仕草をしっかり者のシルフィアがすると、

(うっ…可愛い…)

そう思ってしまったのが恥ずかしくて、俺はやや俯いて肉を食べ始める。

今更ながらシルフィアってかなりの美少女だよな。同じくらい美少女のエルナやフィナやアリスと一緒にいたからかそこら辺の感覚が麻痺してるな。もともにもどさないと。

……………ハッ！今気付いたけどこんだけ美少女に囲まれてる俺ってかなりのリア充なんじゃ…って、んなわけないか。シルフィアとは会ったばかりだし、エルナとフィナとアリスとはそういうんじゃないくて、友達とかそういう関係だし。

あ、肉全部食っちゃった。もう一本いけるか…いけるな。よしおかわり。

そうやってぐるぐるといろんなことを考えていたからか、俺は気付けなかった。

「……………」

俺を見るシルフィアの瞳がどこか寂しげだったことに…。

夜、俺はむくりと布団から起き上がる。

「眠れない…」

あれだよ、寝すぎたんだよ昨日から今朝にかけて。よくあるよね、

日中眠りすぎて夜眠れないの。俺は基本的に学校の授業中だったけど。

どうする？このまましばらく起きているか、それとも眠りにつくのをひたすら待つか。

「…ちよつと散歩でもするか」

少し考えてそうすることにした。外の空気を吸えば眠くなるかもだし。

布団から出て、出来るだけ音を立てないようにして進む。途中、シルフィアが寝ているであろう部屋に視線を向ける。

寝るときは大変だった。どうしてもベッドを俺に使わせたいシルフィアと、家主を布団に寝かすことの出来ない俺。しばらく言い争って折衷案としてシルフィアが「じゃあ一緒にベッドで寝ましよう」と言い出したときはマジで焦った。危うく悪魔の誘惑に負けそうになったし。

最終的に俺が「布団で寝かしてくれなきゃ腹を切る！」と《飛鳥》の切っ先を腹に押し当てることになってなんとか押し切ったけど。暗い中、何回もどこかに脚をぶつけ、そのたびに焦ってシルフィアの部屋のほうを確認したりしながら外の出る。

外は月明かりのおかげで明るかった。見ると、あと数日で満月になるであろうという微妙な形の月だった。

ちなみに俺が一番好きな月は半月。自然の中で丁度半分になったところかすごいと思ったから。まあ満月も好きだけどね。

「グルウ」

「ん？」

横を見るとそこにはドラゴン。名前は確かグラだったな。グラの足元には骨が散らばっている。多分猪の骨だな。半分は俺達でもう半分はグラ。かなり大きかったから二つに分けても結構な量があった。俺もあの後四本ほど食ったせいで腹パンパンだし。

最初会ったときは驚きが増してたけど、こうやって落ち着いて見ると、

「かつこいいな、お前」

ドラゴンがいるって事は知ってたけど、まさか実物を見れるなんてな。

やっぱり強いのかな？コイツはまだ子どもだって言ってたけどすでにかなりデカいし。大人になったらそれこそ怪獣レベルだ。勝てる気がしない。

でもギルドとかあるし、やっぱりドラゴン討伐とか卵運びとかの仕事もあんのかな？

俺はやりたくないな、とさえつつ、そっとグラの頭に触ってみる。

堅いけど……どことなく暖かい。やっぱり生き物なんだよなと思う。
「……ガルルア」

しばらくグラを撫でる。やがて手を離すとグラは一声鳴き、俺から数歩離れてどこかへ飛んでいった。暗い空を飛んでいくその姿を目で追う。

ガタッ

「？」

今、家のほうからなんか物音がしたような………気のせいかな………戻るか。眠くなってきたし」

ふわあ……とあくびをしながら来た道を戻る。明日は早く起きてシルフィアを手伝おう。そう思いながら。

「おりゃああああああああああ！！」

全力で《飛鳥》を横なぎに振るう。その一閃によって俺の目の前にあった樹はズウンと重苦しい音を響かせて地面に倒れる。

「ふう……とりあえずこれでいいか。んじゃグラ、あとはよろしく」
「ガルル」

グラは短く鳴くと、俺が切り倒した樹をその強靱な両足で掴み、翼を飛ばたかせ一気に飛んでいく。ちゃんとシルフィアの家の近く

までは運んでくれるはずだ。

夜が明けた次の日、やる気満々の俺に与えられたお手伝いはまたしても薪拾いだった。昨日拾ったではないかというところ、猪を焼くのに使ったので少し足りないと言われた。

やや渋った俺だったが、申し訳なさそうにお願いしてくるシルフィアを見ていて断る気になれなかったのだ。

またデカい生き物と遭遇したらやだな、と考えながら外に出た俺の目の前にグラがいた。その巨体を認識した瞬間、俺の頭の中にいいアイデアが浮かんだ。それは樹をまるごと一本持って来たらいいのではないかと考えた。

少し考えて出来なくもないと判断した俺はグラを連れて森の中で手ごろな樹を切り倒した。あのサイズならばらくは持っただろうから、明日からは他のお手伝いだろう。

ちなみに何故今日からやらないのかというと、初日にシルフィアから手伝いは一日一回と条件付けられてしまったからである。

しかし、改めて目にするとうまいな、《飛鳥》の切れ味は。剣の腕は素人にケガ生えた程度の俺が振るっても樹を一刀両断にできるんだから。古戦器オーバーだからかな。

でもそうなつてくると、この切れ味を活かすためにも俺も少しくらい剣の心得があつてもいいと思う。幸いここは森の中。見る人なんていないしな。俺は努力を人に見せたくないタイプなのである。

やっぱりこういうのは型から入るべきだよな。なんかいい感じの記憶に無いかな……

「あ、あれでいいか」

ちょっと考えたら出てきたのはモハンハンの太刀の動き。あれなら分かりやすいし、大まかな動きは頭に入っている。伊達に使用回数が200回越えてるわけじゃないぜ。もっと多く使ってるのもあるけど。

基本は振り下ろし、突き、切り上げの繰り返しだったな。気刃斬りは……よくわからんので、とりあえず基本の動きを適当にやってみ

ることにする。

振り下ろし、突き、切り上げ、振り下ろしを繰り返す。たまに振り下ろしを二回続けたり、斬り下がりを加えてみたりといろいろ試行錯誤する。頭の中にあるゲーム画面の動きと自らの動きが少しずつ重なっていく。そして、画面では分からないような細かい動きなどをこの場で考え出し、少しでも動きやすくなるように微調整を重ねる。

ある程度一連の動作が体に染み付いたところで《飛鳥》を振るう手を止める。かなり息が上がってるし、そろそろ帰るかと思いつつと離れた場所においてあった鞘を拾い、刃を戻す。

今日気付いたことなのだが、どうもグラはこの“鞘”を怖がっているらしい。最初は《飛鳥》自体を避けているのかとも思ったが、刃を抜き、鞘を適当放り投げると、明らかにそれから離れるように動いたので判明した。一体何故“鞘”なのだろうか。何か嫌な匂いでも染み付いているのだろうか？

(そういえばユアンがこの鞘は『龍の胃石』とかいうので作られてるって言ってたな。『龍』ってついてるしなんか関係あるのかもしれない。帰ったらシルフィアに聞いてみよう)

というわけで、帰宅。

「ただいま」

「おかえりなさい」

俺の声に反応して台所から小走りでやってくるシルフィア。

「……………」

「どうしたんですか？顔を逸らして」

「いやなんか…今のやり取り、結構恥ずかしいっていうか……いや、なんでもない」

「？…とにかく、座っててください。洗い物が終わったらお茶にしましょう」

促されるままに椅子に座る俺。さっきのやり取りのせいで顔は俯いたままである。

なんだよさっきの！家族か！つか夫婦か！ああもう恥ずかしい！
ていうかあれ？俺こんな純情なキャラだったっけか？

自分のあり方に首を捻っている、洗い物を終えたらしいシルフィアがお茶とお菓子を持ってきてくれる。お茶とお菓子を楽しみつつ、楽しい会話に花を咲かせる。

しばらく歓談をし、お菓子とお茶もなくなりかけた頃、俺は小さな疑問をぶつけた。

「シルフィア、『龍の胃石』って知ってるか？」

「『龍の胃石』ですか？確か………ちよつと待っていてください」

そう言っただけ席を立ったシルフィアが部屋に入っただけ、数十秒後、一冊の本を持ってきた。皮の表紙が擦り切れていてかなり古いものだと思われる。

「確かこの本のどこかに………あつた。ここです」

シルフィアが開いたページを見せてくれる。こういう時、こつちの文字を勉強してて良かったなと感じる。読み聞かせてもらうのは恥ずかしい。えつと、なににな……

【『龍の胃石』とは、ドラゴン種の中でも炎を吐く炎獄龍の仲間の胃に堆積された鉱物のことである。この鉱物はもとはただの岩石だったが、炎獄龍の吐くプレスの熱と、胃液などの体液の影響によって変化したものである。この鉱物は炎に対し、圧倒的とも言える耐性を持っており、それを持っていけば炎から避けていくとまで言われている。

ただ、この『龍の胃石』は、年を重ねれば重ねるほどに強靱な固体になっていくドラゴン種の中で、特に老成した炎獄龍の体内から僅かしかとれない上に、熱することで軟らかくすることが不可能なため、加工が難しいとされ、これを用いた武器は超一級品として扱われる】

「……………なにこれ……？」

これを読む限り、そして俺が理解できる限りだと、『龍の胃石』というのはすさまじく貴重なものらしい。それをただの鞘に使うな

んて…。

「私が知っているのはこの本に書かれていることだけですけど……どうしていきなり『龍の胃石』なんてものを？」

「あゝ、いや、実はね……」

俺はグラが鞘を避けていることを説明する。すると、

「ああ、それはですね、きっと怖がっているんですよ」

「怖がってる？」

「はい。おそらくですけど、長年龍の体内にあった『龍の胃石』には炎獄龍の臭いが染み付いているんだと思います。人や他の動物は分からなくても、おなじドラゴン種のグラには分かったんじゃないでしょうか」

「なるほどねえ……」

俺はしみじみと呟きながら鞘を見る。これがそんなものだったとは……俺今まで抜刀した後は邪魔だったからそこらへんに投げたんだけど大丈夫かな？傷とかついてないよね？

「あ、そうだシルフィア。この本、しばらく借りていい？俺の知らないことがけっこう載ってると思うし」

「ええ、構いませんよ。私は何度も読みましたし」

「そうか。ありがと」

許可を貰った俺はさっそく本を読み進めていくことにする。

「……………くすっ」

シルフィアはそんな俺を見て、なにがおかしいのか小さく笑っていた。

「…ふい〜……」

肩まで湯船につかり、息を吐きながら空を見上げる。夕暮れ時で空が赤い。

あれから時が経つのも忘れて本を読んでいた俺。するとシルフィアが「お風呂に入りませんか？」と言ってきたので、俺はお言葉に

甘えることにした。

驚いたことに風呂とは木桶風呂。それを見た俺はこの世界に来て何度目かの感動を覚えた。

俺が本を読んでいる間に風呂を沸かしておいてくれたいたシルフィアにお礼を言い、申し訳なさを感じつつも風呂に入った。

風呂といっても、いつてしまえば家のそばに木の桶をドンと置いてその中にお湯を入れたもの。体を洗ったりすることは出来ないが、熱いお湯に浸かるだけでも大分違うものである。

十分に風呂を堪能し、体を拭いて服を着る。濡れた頭に貰ったタオルを巻きつつ、再び読書に勤しむ。

それからしばらく経って、

「あ、《飛鳥》忘れた」

シルフィアに風呂に呼ばれたときになんとなく持つていき、それから家の外の壁に立て掛けっ放しだ。

今までだったら明日取りに行こうと思っていたのだが、いよいよアレの価値が分かっていると、放置しておくのは不安だ。

どうしようもなく小市民な俺は、結局《飛鳥》を取りに行くことにした。

陽はまだ完全に落ちきってはおらず、やや薄暗い程度。周りを注意したりすることもないので、俺はすたすたと歩いていく。

木桶風呂は家の裏側にあり、《飛鳥》はその壁の端に立てかけた。はつきりと場所を覚えていた俺は、前を見ずに少し歩けば入ることの出来る森の中を眺めていた。

「あっ！」

転ぶ。地面から飛び出ていた木の根が何かに躓いてしまったらしい。咄嗟に両手をついたのでどこかを擦りむいたりはしたくないよっだ。

いたた…、とついた両手を振りつつ立ち上がる。ちょうど角から飛び出すかたちで転んだらしい。気をつけないとダメだな、と呟き

ながら前を向き、

「……………」
木桶風呂に浸かっていたシルフィアと眼が合う。

「……………」
いきなりのことに俺も固まってしまい、見詰め合っている状態になる。

少し考えれば分かることだった。俺が風呂から上がってからシルフィアに会わなかったんだから、彼女がここにいることは予想できたはずだ。てつきりシルフィアはもう風呂に入ったのかと思った。

「……………」
呆然としていたシルフィアがわずかに声を発する。それと同時に彼女の顔がどんどん赤くなっていき、

「いやあああああああああああああああー!!」
ばっ、と突き出された彼女の手で青白い光が集まっていき、俺目掛けて飛んでくる。

それに対して俺は微動だにしなかった。理由は二つ。
一つは、このままアレを浴びれば、少なくともこの状況から脱することが出来るから。

もう一つは、なにか疑問を感じたから。
そして、

「ぐぎゃあああああああああああああー!?!」
青白い光を受け、俺はゆっくりと倒れる。
頭の中に小さな引っ掛かりを覚えながら。

第30話 森での生活（後書き）

さて、前書きでも書きました。新しく始めたモンハン小説。

ストーリーなどはともかく、出てくるモンスターや主人公の装備などは完全に自分の趣味です

各話投稿の割合はあちらの方を二話出してからこちらを一話出すという風にいきたいと思います

どちらもどうかよろしくお願いします

第31話 精霊（前書き）

頑張った：頑張ったよ：俺。今までに無い速さで執筆できた。モン
ハンの方を入れればこれで三話目だよ。

でも読者の方を待たせてしまったのは事実なので、そこはしっかり
謝罪します。ごめんなさい。

あと、早く書いた分だけ文章がやや雑になってしまっている感がある
ので、ご了承ください

第31話 精霊

「シルフィア、一つ聞いていいか」

朝食のサンドウィッチを頬張りながら対面に座っているシルフィアに話し掛ける。

「はい。構いませんよ」

俺とは違い、葉菜類のサラダを食べていた手を止めてから話すシルフィア。くっ、ここでも育ちの差が…。

だがまあそんなことは気にしないので、継続して食べながら、

「シルフィアの魔法って、俺の知ってるのとなんか違うんだけど」
思い出すのは昨日、気付かずに入浴中のシルフィアの前に出てしまったときのこと。お湯に浸かっていたせいで肌がほんのり桜色に染まっていたり、髪が体に張り付いているのが妙に色っぽかったりしたのはあまり思い出さないようにして。思い出さないようにして！考えるのはあの時はつきりと見たシルフィアの魔法。

あれはどう考えても…電気だった。

俺の記憶が正しければ魔法は炎、水、風、土の四つだったはず。

俺まだ土は見てないけど。

あれか？隠された属性、とかそんなんですか？カッコいいですね俺も使いたいです。

「ああ、あれは精霊魔法です」

「……………」

本当にそれっぽい来たよ。ていうか精霊で。俺は召喚獣とかの方が好きだけど。

それはおいといて、

「なにそれ？」

「精霊の力を借りて使う魔法のことです」

「……………じゃあ昨日のアレも精霊の力で？」

「正確には精霊の力を分けてもらって、ですけど」

違いが分かりません。あ、今思うと湖のそばで気絶したのもシルフィアの魔法のせいかな。

「何気にシルフィアってすごい？」

「そんな大したものじゃないです。きつとトモヤさんだって使えますよ」

照れたように言うシルフィア。ふーん、俺でもねえ……………、

「……………え、マジ？」

「はい。ちゃんと手順を行えば」

「……………なんか特別な才能とか試練とか」

「ないですよ。強いてあげれば精霊に認めてもらうことですけど、小さい頃の私にも出来たんで大丈夫だと思います」

「…そうか…そうか」

俺は残ったサンドウィッチを一口で食べ、淹れてもらったお茶をぐつと飲み干して「ふう」と息を吐く。

そして思い切り身を乗り出して手を伸ばし、シルフィアの両手を包み込む。

「是非お願いします！」

「……………ふえ？」

それからしばらく、「早く行こうよ」とせがむ俺に対して「これが終わったら行きますから、ちょっと待っててください」と言いながらお皿を洗ったり洗濯を干したりするシルフィア。駄々っ子の子どもを持つ母親のようだった。その駄々っ子が俺だというのは情けないが。

んでもってずるずると時間は過ぎて、ようやくシルフィアが「それじゃあ行きましょうか」と言った時は、両手を挙げて「やったー！」と大声を上げてしまった。

そのことで自己嫌悪に陥りながらシルフィアに先導されて歩く俺。何故かグラもついてきた。《飛鳥》は家に置いてきたから俺から離

れたりすることは無かった。

ということやって来たのは森の中の湖。

「ていうかここ、もしかしなくても…」

「そうですね。私とトモヤさんが初めて出会った場所です」

「出会ったっていうか、俺がシルフィアに襲われた場所だけだな」

「うっ…ごめんなさい」

見るからに落ち込むシルフィア。その姿を見ていると罪悪感でずきずきと胸が痛みます。

「き、気にすんなって。俺ももう気にしないから」

「…分かりました」

シルフィアは笑顔になるが、やはり少し気にしている様子。どうしたもんか。

うんうんと唸っていると、シルフィアが説明をしだす。

「この湖は古来より精霊たちの世界とつながっているといわれています。湖の中に入ると、自分と最も相性のいい精霊が現れます。そしてその精霊に認めてもらうと、精霊魔法が使えるようになります」
へえ〜。案外簡単な内容だな。もっと大掛かりなものかと思ってた。

「認めてもらうって、具体的には何をすればいいの？」

「それは人それぞれだそうです。私の場合は質問をされただけでしただけ」

「どんな質問だったの？」

「確か…『大切な人はいるか？』でした」

「なんて答えたの？」

「…『お母さん』と答えました。そうしたらその精霊は私に力をくれました」

お母さん、と言うときに少し辛そうだった。やっぱり、そう簡単に割り切れるものでもないのかな？

「よし分かった。とりあえずこの湖に入ればいいんだな」

言うが早い俺は湖に飛び込もうとする。女子の前で全裸になる

ほど俺は変態じゃないので服を着たまま。

「あつ！待つ」

シルフィアの制止の声は遅く、俺の体は湖面に向けて飛んでおり、
「おぐつ！？」

湖面よりも上の空間で、見えない壁にぶつかったかのように止ま
つてしまう。

「大丈夫ですか！？湖に入るのは少しやることがあるんです！」

「あたたた…早く言つてよ…」

「うう、すみません。言おうとしたらトモヤさんが飛び込んでしま
つたので」

はいすみません。俺の責任です。人の話は最後まで聞いたほうが
いいね。自分の身の安全のためにも。

反省する俺の前でシルフィアは湖のふちにしゃがみ、両手を器の
形にして湖の水を掬い上げる。不思議なことにシルフィアの手は見
えない壁などに当たらなかつた。

シルフィアはそのまま水をこぼさないように気をつけながら俺の
前に来て、

「どうぞ。飲んでください」

笑顔で言つて、両手を突き出してくる。え？飲め？この水を、ア
ナタの手から直接？

「無理」

「ええ！？で、でも、湖の水を飲まないと入れないんですよ。湖に
触れられるのは湖の水を飲んだ人だけですし」

何そのメンドクさい設定！一番最初の人はどうやったんだよ！？
つか手から飲まなくてもコップとか使えば…

「それと、この水は何故かコップなどに移すと消えちゃうんです。
だからこのままで飲んでください」

最後の逃げ道が断られた！

「で、でも…」

「？」

首を傾げないで！貴方は恥ずかしくないの！？羞恥心とか無いんですか？いやあるか。入浴シーン見たときは恥ずかしがってたし。いやそんなことはどうでもいいんだよ！

「さあ、どうぞ」

「うっ…」

ずいと差し出される手。白くて細くて、こつこつのを白魚のようになっというんだっけ。

ここは…腹をくくるしかないのか。

自分自身に活をいれ、ゆっくりと顔を近づけていく。

そして、

「…いつてきます」

「はい、いつてらっしゃい。頑張ってきてくださいね」

やや赤い顔をシルフィアに見られないように気をつけながら湖の縁に立つ。またぶつかったりするのではないかと一瞬不安がよぎるが、シルフィアの言葉を信じることにする。

たん、と軽く地面を蹴って跳ぶ。今度は、ちゃんと入水することができた。

水しぶきが上がらなかったことに疑問を持ったが、いまさらそんなことを気にすることも無いと判断し、先を急ぐ。

といつても別にあてなんか無い。何処に行けば精霊さんとやらに会えるのかさっぱりである。こんなことならもっと詳しくシルフィアに聞いてとくんだった。

むっ、そろそろ息苦しい。とりあえず上がって息継ぎをあれ？進まない。

上だけでなく前にも下にも右にも左にも後にも動かない。いくら手で水をかいても動くことが出来ない。

ちよっと待て…これ…マジでもう息が………

「……こはっ」

俺の口から空気が漏れる。いくつもの気泡となったそれはあつという間に浮上していき、水面で消える。

ああ……もう……ダメ……か……

「……あれ？」

生きて……る？ 苦しくない？ 普通に息が出来る。よく考えると、今更ながら、服がまったく濡れていない。

……なるほど。

「……ファンタジーだなア……」

気がつくと普通に体も進む。さっきより断然楽になった状態で泳ぎを再開する。

と、そこで、

「なんだありや……？」

見つけたのは光の塊。水面から入った陽光などではなく、ただ純粹に光が集まっていた。

おそろおそろ。しかしどこか確信めいたものを持ちながら、光に近づいていく。

光との距離が数メートルほどのなつたところで変化がおきた。光の塊。最初見たときは球体に近い形状だったのだが、今は少しずつ変形している。

ただ見ているだけの前で、光は変化を止める。最終的な形は人の形だった。

【 ようこそ。異世界の迷い子】

どこからか声がする。声質的には女性だろう。どうにも音源がはつきりとしなかったが、おそらくは目の前の存在であることは容易に想像できた。

【ここに来たならば、目的は一つ。そうでしょう？】

「……そうだな」

警戒心や緊張感はあるものの、さりとして怖いとも思えない。いい感じに毒されてきたな、俺。

【では貴方に問います。貴方は力を欲しますか？】

「ああ」

【どうして力を欲しますか？】

精霊の問いかけ。なんと答えればいいのかだろうか。カッコいいセリフか？正義感に満ちたセリフか？

…ああ、もう、まったくもって、めんどろだ。

「知らん」

口から出た言葉はあっさりとしたものだった。表情なんか分からないが、どこか驚いたような雰囲気から伝わってくる。

【知らない、と言いますと？】

「知らない。分からない。少なくとも今は理由は無い。ただ、今得られる力があるなら欲しい。いざ、というときに望んだって力が手に入るなんて限らない。だから、今欲しい。………最も、そんな事態にならないのが一番だけだな」

すると、何も考えずに言葉が出てくる。俺ってこんなこと考えてたのか、と自分の事ながら思う。

【ふふっ。貴方は面白い人ですね】

「そうか？」

【ええ。今までここに来た人たちは「誰かを守りたい」「悪いやつを倒したい」といったようなことを言っていました。それはそれで認めてきたのですが、ふふっ、貴方のような考え方もあるんですね】
なんだろう。精霊とかじゃなくて普通の女の人と話してるみたいだ。

「で、俺はどうなんだ？認めてくれるのか」

【そのように返事を急かすような人も貴方が初めてです。……分かりました。貴方を、信じます】

人の形をした光が腕に当たる部分をすっと上げ、人差し指であるうものを向けてくる。眩し過ぎてよう分からんが。

指の先端に少しづつ別の光が集まっていく。何故分かるのかといえはその光が青いからだ。

光はバスケットボール大になると指先を離れ、俺に向かって飛び、すつと胸の中に入ってくる。

【 貴方の歩む道に幸多きことを願います】

どこからかそんな声が聞こえてきたと思うと、目の前の光は爆発的に眩しくなって、何も見えなくなった。

「……………ぶはぁ」

いつの間にやら仰向けで水面に浮かんでいた。ぼけーっと空を見つめる。

いつまでもぶかぶかと浮かんでいるのはそれなりに気分が良かったのだけれど、シルフィアを待たせているのを思い出して慌てて泳ぎ始める。

しばらく泳いでから「あ、正確な方向とかわかんないじゃん」と思ったものの、そのまま泳いでいたら無事に到着できてしまった。

岸に上がり、やっぱり服とかがまったく濡れていないことにやや感動。そのまま歩くとグラが眠るように横になっていた。

「おー」

声をかけようとしたが、咄嗟に自分の口を抑える。

「……………うん…」

グラに包まれるような形でシルフィアが眠っていたのだ。普段見ること出来ないシルフィアの無防備な姿をついつい見つめてしまっ

た。この子はいつも家事とかをして、俺のためになにかしてくれて。

俺が増えたから家事の量も多くなっただろうし、その疲れがここで出たのだろうか。

きつと休めといっても聞いちゃくれないだろう。だから今ぐらいは休ませてあげよう。そう考え、静かにシルフィアの隣に座り、そ

の寝顔を見る。

前々から思っていたのだが、シルフィアは髪の毛で顔の半分を隠すようにしている。そういうオシャレなのか何か事情があるのか。なんとなく、ほんの少し魔がさして、その下を見たいと思っ
てしまっ

ゆっくりと、ゆっくりと手を伸ばす。そして指先が髪に触れ、

「……………あう」

神懸かり的なタイミングでシルフィアがぼんやりと目を開ける。

慌てて手を引つ込めたお陰でバレずに済んだらしい。危ない危ない。

「…あれ？トモヤさん？いつの間に…もう終わったんですか？」

「おう。なんとかな」

そうですか、と言って小さくあくびをしながらぐぐつと体を伸ばす。それで胸が強調されるカタチに げふんげふん！

「……………あつ！私眠っちゃってましたか！？」

「気付くの遅っ」

「す、すみません」

急いで立ち上がるシルフィア。そんなに急に立ち上がると立ちくらみするぞ。釣られるようにして俺、そしてグラも立ち上がる。

「それでトモヤさん、精霊とはどうでしたか？」

「大丈夫。ちゃんと認めてもらったから」

光の球が入ったところがまだほんのり温かいから、あれが夢なんかじゃないと分かる。

「それじゃあ、トモヤさんも精霊魔法が使えるようになったんですね」

「……………いや…そのことなんだが……」

「…どうしました」

その…なんていうか……………

「精霊魔法って、どうすれば出るの？」

「どっつて……………「じゅ…ぐっ、て感じですよ」

「分からない！」

「えっと……じゃあ、ぐっ、はっ、って感じですよ」

「より分かんねえ！」

「え、えっとですね、私の場合は手の先に魔力を集中させる感じですよ」

「……………それで分かったら苦労しないんだけど、ま、やってみつか。手ごろな距離にある木に向けて手を伸ばす。魔力を集中させるつてのがいまいち分かんないが、とりあえずは神経を集中させてみる。」

「……………」
何も起こらない。やや落胆しながらも、一応木目掛けて何かを撃ち出すようにイメージする。

一瞬で、その木が凍りついた。

「……………は？」

「……………わぁ……………」

俺はいきなりのことに驚きながら、シルフィアはその光景を見て感動している。うん、確かにキレイに氷が出来てるけど。

「……………これ……やったの……俺？」

「きつとそうですよ！トモヤさんの使う精霊魔法は氷ですね！おめでとつございます！」

まるで自分のことのように喜んでくれるシルフィアの気持ちはとても嬉しいんだが、流石にこれは……ちょっと……危ない。使いどころ間違えるとヤバイよこの魔法。使い方がまだよく分かってないくせにかなりの威力がある。まあ持ってしまった以上は使いこなせるようにならないといけないんだけど、

「……………なんだかなあ」

俺はぼりぼりと頭を掻き、はぁ、とため息をついた。

第31話 精霊（後書き）

ぶっちゃけますと、自分、受験生です。入試が三月にあります。本当なら小説書いてないで勉強をしなければならぬのですが、めんどくさいんで三月に入ったら頑張ろうと思います！

なので二月一杯は執筆を進めていくので、よろしくお願いします。

第32話 前兆（前書き）

受験まで、十日切ったぜイエーイ！

という訳で、そろそろ本気でヤバくね？ と思い始めた作者です。

一応志望校は自分の学力では平気なのですが…やはり油断禁物ということで。

そんなこといいながらも勉強そっちのけで書き上げました。

遅いくせに中身は短いという初期の頃のような状態です。すいません。

第32話 前兆

湖から帰ってきてからいろいろと試した結果、この精霊魔法とやら、けっこう使えた。

基本的には前から使ってた魔法と変わらず、ようはイメージすればいいだけだった。考え一つで床が氷で覆われたり、壁から氷柱を生やすことも出来た。

だが、そんなことをする機会などは当然あるわけがない。日常で使いどころといえば飲み物を冷やしたり、でっかい氷塊を作って生物の日持ちを良くする位だった。……家庭的過ぎるわ！ まあシルフィアが喜んでくれたからよしとしよう。

それはさておき、本当にこの魔法ってどんなときに使えばいいんだろ？ せっかく精霊さんに貰った力だし、なるべく有効活用したい……
「というわけでやってきました森の中」

とりあえず広いところに来ればなんか浮かぶんじやないかと思つて来たんだけど、そう上手くもいかない。うーん、と唸りつつ木の根の上に腰を下ろす。

木に背中を預けてほけーっとする。さらさらかさかさと風が吹き木の葉を揺らす音が耳に心地いい。目を閉じて、わずかに差し込める陽光の中でまどろむ。

「……………オオ……………」

「んっ？」

今、なんか聞こえた気がする。……………なんだ…？

「……………グオオ……………」

動物か？ それにしてはなんか弱弱しいっていうか……………苦しそうっ

ていうか…気になるな。ちょっと見に行くか。

こびりつく眠気を振り払い、立ち上がって声が聞こえてきた方向かう。声はかなり小さいけど注意していればちゃんと聞こえる。悟られないように静かに、足音を立てずに。でもちんたらしてるとどっか行っちゃうかもしれないので迅速に。

「グオオオ……グオオオ……」

よし。近づいてきた　ってあれ？この声、聞いたことが…

声の主はもうすぐ近くにいます。ちょうど目の前を背の高い大きな草が遮っているけど、その向こうから声がする。

草を押しつけた先は少しばかり開けている場所だった。そこでうずくまり苦しそうな声を上げていたのは、

「グラ…？」

だがいつもと様子が違った。倒れた体勢のままうめき声を上げている。グラだってドラゴンだ。そのドラゴンがこんなに苦しそうだなんて…、ただ事じゃない…と思う。

「お、おい。大丈夫か」

駆け寄って声をかけるも返答なし。気付いていないのかもしれないと思いいと思い、軽く叩こうとすると、

「…ガ、ガアアア！」

「うわっ」

触れようとした瞬間、グラは勢いよく立ち上がり、俺はその勢いに押され尻餅をつく。

「グオオオオ！」

「つぶな！」

立ち上がるうとするときかなりグラが噛み付いてこようとしたりで、服が汚れるのも構わず地面を転がって避け、慌てて立ち上がる。「グオオオ、グオオオ」

グラは俺のことを血走った目で見、砂煙を上げながら突進してく

る。

「どうしたんだグラ！俺だ！トモヤだ！分からないのか？！」

「ガアアアア！！！」

それを回避しながら呼びかけるが変化なし。木々をなぎ倒しながら止まり、再び突進してこようとして、呻きながら膝をつく。やはり弱っているようだ。ならなんで襲い掛かってくるのだろうか。

ちらりと横目で手にしている《飛鳥》を見る。グラはこれを、というよりこの鞘を怖がっていたはずだ。弱っている上に怖がっていたものに自ら突っ込んでくるなんて…どうということなんだ？

窮鼠猫を噛む

あれ？なんかいきなり慣用句が浮かんできたんですけど。どゆこと？なんで？てかどういう意味だっけ。

確か『追い詰められたねずみは怖い』的な意味だった気がする。

……ああ、そうか。

「追い詰められてんのか…」

元々何らかの理由でグラは弱っていた。そこに恐れているものが近づいてきた。だからこうして死に物狂いで反撃して来てるのか。

ていうかよく見て。そして気付いて。俺だから。むしろ俺がねずみだから。俺のほうに追い詰められてるから。とか何とか考えてるうちにまた突っ込んできた！

「とっつ！」

ギリギリまでひきつけて全力で横に跳ぶ。グラが体勢を立て直してまた来るまでの時間でなんとか対策を考えなければいけない。

第一に、グラを傷つけるわけにはいかない。アイツは訳が分からなくなってるだけだし、なによりアイツは友達だ。だからグラを傷つけずに、尚且つアイツに正気を取り戻させないといけない。キツいな。

方法は浮かんでいる。いけるかどうかは分からない。でも、このままダラダラしていたら、俺より先にグラの方がどうにかなっちゃうしそつだ。やるっきゃない。

数秒で思考をまとめ、やることを決めた俺は目を閉じ集中する。魔法はイメージ。精巧にイメージすればその通りになる。

どうやらグラが立ち直ったようで、こちらに向き直り再び突進してくる。グラの足音が徐々に近づいても集中を切らさない。

もう彼我の距離は数メートルといったところで、かつと目を開く。予想よりグラの巨体はかなり近くにあることを確認する。間に合うか。

《飛鳥》を抜刀し、刃先で地面を四ヶ所突き、刀を横に構える。

「次の舞・白連！」

叫ぶと同時に刺した地点から大量の冷気が雪崩のように現れる。

「グオオオ!？」

膨大な量の冷気はグラの巨軀に激突し、瞬き一つする時間でグラは氷漬けになった。

「……………ふう」

動かないのを確認して一息つく。

…しっかし、よくもまあ上手くいったもんだな。三秒で思いついた策にしては上出来だ。いや、思いついたっていか思い出した技だな。つかこれもう魔法じゃないし。

「あ、いけね」

このまま氷漬けだとグラが逝っちゃう。

でもこの厚さの氷ぶった斬んのは無理だしな。やっぱこう、指をパチンと鳴らして中身もろとも氷が砕け散るっていうのをダメだつて。それだとグラ死んじやう。

ということ指パチン。すると俺が考えたとおりに氷だけが砕けグラは無事。よかったよかった。

いや待て俺よ。一番大事な問題が残っているだろう。なんでグラがあんなに弱っていたかつてことだ。

ぐったりしているグラに恐る恐る近づく。どうやら完全に気を失っているようだ。大丈夫。死んでない。ちゃんと呼吸してるし。…かなり弱弱いけど。

「あ」

ちよつとやりすぎたかな、と今更ながら心配になっていると、視界に異変が移った。

グラの体は緑色の鱗というか甲殻で覆われている。だが、その背中的一部分。その甲殻は、黒かった。

一応他のところも見てみるが特に変わったところも無いので、やはり原因はそこだと判断する。ただこれが何なのか分からない。俺はとりあえずシルフィアを呼ぶことにし、いつの間にかまた苦しそうな声を吐いているグラを一瞥し、走り出した。

ろくに説明もせずに家から引つ張り出されたシルフィアは、倒れているグラの姿を見るなり駆け寄り、心配そうに声をかける。シルフィアのこととは分かっていたのかグラは小さく鳴いた。

俺が黒くなっている甲殻のことを教えると、シルフィアは血相を変えてその甲殻を見て、とても…悲痛な表情になった。

「なあシルフィア、グラはどうしたんだ？」

「……グラは…『腐鱗症』ふりんじょうという病にかかっています」「不倫症？」

あちゃー。それはどうしようもないね、って違うな。きっと漢字が違うんだろう、どう書くかは分からないけど。

「はい。見ての通り、鱗が腐っていく病気です」

ああ、腐鱗ね。

「ただこの病気の恐ろしいところは、本当に腐っているのが鱗ではなくその下の肉だということなんです。鱗はついでに過ぎません。

病は徐々に体を蝕んでいき、脊髄や体の重要な器官まで到達したら…絶命します」

怖ッ！病状怖ッ！なにより説明が淡々として怖ッ！

「な、治す方法は無いのか？」

「……あります」

「本当かつ!」

答えるまでのわずかな間が少し気にはなったが、ひとまず置いておく。

「どうすればいい?」

「…治すには、ある植物が必要です」

「植物?」

「はい。その植物の葉をすり潰したものを黒くなっている部位に塗り、花を食べさせることで治すことが出来ます」

「じゃあその植物つてのを探さない!」

俺は慌てる。いつからグラがこの病気にかかっていたのか分からない。いつ死んでしまいかもしれない。急がないと、そう思っていた俺は、ぴたつとその感情を押し殺す。

震えている。

シルフィアの体が、震えている。寒いからではない。あれは…怖がっている?

「…場所は、分かっています」

「……どこ?」

「………聖域」

「え?」

俺が聞き返すと、シルフィアの震えはさらに増す。それでも彼女は言葉を続ける。

「この近くに村があるんです。そこで、聖域と祀られている場所に…あります」

「…だったら、早くそこに「出来ません!」…え?」

俺の言葉にシルフィアが割り込む。その声はどこか必死で、悲しかった。シルフィアは俯いていて前髪で表情は良く見えない。体の震えは酷くなっていた。

「…ごめんなさい。…でも、出来ないんです…!」

振り絞るようにそう言うと、シルフィアは走り去っていく。

「……………」

俺はその背中を見ていることしか出来なかった。

第32話 前兆（後書き）

最初に、次の投稿は遅れます。

最低でも3月8日以降になりますね。モンハンの方もあるので、多分そつちを優先すると思います。あしからず。

あ、後これからもちよくちよく他作品の氷系の技を使わせようと思っ
っていますので。

では、これで

第33話 生い立ち（前書き）

どもども、お久しぶりです。

まずは投稿が遅れたことに謝罪をさせていただきます。

理由は自分が東北地方在住の為、被害がそれなりにあつたからです。幸いに、家が倒壊するなどといったことにはなりませんでした。

ただ、今回の地震によって決して少なくない数の方がお亡くなりになられました。

その方たちを想い、ここに哀悼の意を表させていただきます。

第33話 生い立ち

シルフィアが走り去った後、俺はしばらく森の中にいた。

どうしてシルフィアがあんな風になってしまったのかは分からない。それでもなんとなく、考える時間が必要だと思ったからだ。俺も、彼女も。

どれくらいだろうか。木の根に座り、ぼーっと宙を眺めていた。何も考えていなかった。いや、必要が無かった。するべきことは決まっている。

とりあえず、シルフィアと話す。後のことはそれから考えればいい。

日が傾き、空の色が紅に変わり始めた頃、俺はようやく腰を上げる。ぱんぱんと汚れを落とし、帰路をたどる。

家についた時には太陽はほぼ沈みかかっており、家の中は真っ暗だった。扉を開けて中に入るも、窓からこぼれるわずかな月明かりしか頼れるものが無かったのとどこどこに足をぶつけた。

さて。

とにかくシルフィアと話さないことには始まらない。暗いままだと何処にいるか分からないので記憶を頼りに手持ちのランプを探し出して着火。室内が薄く照らされる。………ちよっと怖い。

んで、どこにいるかな、と探し始めて約十数秒、手始めに覗いてみた部屋にいらっしやった。まあそこがシルフィアの部屋だったんだから当然かもしれないけど。

シルフィアはベッドに腰掛け、毛布を頭から被っていた。俺は特に足音を隠すでもなく近づき勝手に隣に腰掛ける。隣に来た途端ビクツとされたけど気にしない方向で。

「……………」

俺もシルフィアも何も喋らず、ただただ無言でいた。俺から何か

を切り出したりはしない。シルフィアが自分から話し掛けてきてくれるのをひたすら待つ。

……うん、なんで女の子って近づくだけでいい匂いがするんだろうね？布団からも同じような匂いが漂ってくるし。やばい、ドキドキする。

いや待って俺よ。今はそんなことを考えてる場合じゃないだろう。もっとシリアスっぽい感じであるべきだ。あ、でもなんだろう。エルナともフィナともアリスとも違う、この嗅いでいるだけで落ち着けるような匂いは

「……トモヤ……さん」

「……ん、なんだ？」

表面上は平静だけど内心かなりビビってます。すみません、へんなこと考えてすいません。

「なんにも……聞かないんですね……」

「まあな……」

ホントは聞きたいけど、聞かない。俺が聞いて答えたんじゃ、それは意味が無いから。シルフィアから話してくれなきゃ意味が無いから。

ま、隣に座った時点で軽く催促してるけど。

シルフィアは俺をしばらく見つめ、ぱさつと頭の上から毛布を落とすと、ベッドから立ち上がり俺の前に立つ。

「……お話します」

「いいのか？無理しなくても……」

「大丈夫です。私が話したいと思ったから、言うんです」

トモヤさんのことを信じてますから、とシルフィアは寂しそうに笑った。

あるところに小さな村があった。そこには大昔に人から離れていったエルフたちが幸せに暮らしていた。

ある時、その村に一人の男がやってきた。男は森の中で迷い、ひたすら彷徨い歩き続けた結果、偶然その村にたどり着いたらしい。

エルフたちはその男を歓迎した。人に絶望したといつてもそれはもう随分と昔の話。エルフの中にそんなことを気にする者はいなかった。

男はいつしか当たり前のようにその村で暮らすようになった。ある時は農作業の手伝いをし、ある時は長い年月の間に人の暮らしがどうなったかを村の人に話したりして過ごしていた。

幾ばくかの年月が経ち、男は一人の女性と恋に落ちた。そしてやがて二人は子を授かった。

そのことを知った瞬間、村人たちは手のひらを返したような態度になった。

村を歩けば後ろ指を指され、石を投げられる。まだ子が母の胎内にいるときはその程度で済んだ。やがて子が生まれると、村人の行為はさらに悪化した。

仕事を奪われ、謂れの無い誹謗中傷が広まり、時には明確な殺意がこもった行いさえあった。耐え切れなくなつたか、その男はある日忽然と姿を消した。しかし女性は、愛する人に裏切られながら、それでも母として自らの子を育てると決めた。

娘への被害を避けるために周りに誰もいない森の奥に家を構え、女手一つで娘を育て続けた。一人だけで田畑を耕し糧を得る。どうしても必要なものがあれば村へ行き、泥だらけになるまで頭を下げ、どれだけ拒絶されようともすがりつき物資を得る。そんな暮らしをしながらも娘へ愛を注ぐのは止めなかった。そのお陰で娘は真つ直ぐに育つた。

娘は母親が大好きだった。母もまた、娘の笑顔を見るのが楽しみだった。

だが、そんな生活も長くは続かなかつた。娘が十を過ぎた頃、母は倒れた。長年の無茶な生活のせいで、その体は病魔によって蝕まれていた。

もう助からない、と母は悟っていた。そのことを病身の母から告げられてから、娘は泣き続けた。来る日も来る日も、母の手を握り

ながら。

母は娘の姿を見、悲しそうな、けれど笑顔で、やがて息を引き取った。

それ以来、娘は一人で暮らしていた。

「その娘というのが、私です」

「……………」

何も言えなかった。

どこかで聞いたことがあるような話だった。悪く言えばよくある話だった。エルフと人の子、つまりはハーフエルフとかいうのだから。そんな話は前の世界のゲームでよく見た。

それなのに。それも何も言えない。原因は、シルフィア表情笑っていた。

形は笑顔で、寂しそうで、どこか諦観していて、やっぱり悲しげで。いろんな感情がごちゃ混ぜになっている顔。正直…見ていられなかった。

何も言えない俺を、シルフィアは予想していたような目で見た。

「……………やっぱり、怖いですよね」

その言葉に、いつの間にか俯いていた顔をハッと上げる。声は震えていた。今にも泣き出しそうだった。なのに、顔は笑っていた。

「分かっています。エルフと人の混血児は忌むべき存在。気持ち悪いと思うのは当然です」

淡々と言う声。それは俺へ向けてではなく、自分自身に言い聞かせているように感じる。

「…最後に一つ、お見せしたいものがあります」

震える声。シルフィアは自身の顔の半分を覆い隠すように伸ばしている髪に手をやる。

なにか事情があるんじゃないかと思っていた俺は声をかけようとしたが、それよりも早くシルフィアは髪をかき上げた。

俺の予想とは違い、そこには傷一つ無いきれいな肌しかなかった。

ただ一つ違つとすれば、それは。

深い海のような蒼の右目とは違つ、まるでアメジストのような紫色の左目。

「これが、混血児である証。父から受け継いだ瞳です」

「……………」
「そう…ですよね。いくらトモヤさんが優しいとはいえ嫌なものは嫌ですよ。分かってました。分かってましたから、平気です。気にしませんから」

「……………」

「はあ、と小さく息を吐き、俺の前で儂げに微笑んでいるシルフィアにデコピンをかます。

「あうっ！…何するんですかあ？」

涙目になっている。俺のデコピンは結構痛いらしい。だがまあそんなことは置いておく。

「お前はバカか？何を勘違いしているんだ」

「え？」

キョトンとしゃがって。心の底からそう考えてたのか。

「そりや確かにお前の話を聞いたときは話を聞いたときは何も言えなかった。予想以上に重い話だったからな。でも、お前の左目を見て黙つたのは理由がぜんぜん違つ」

「……………じゃあ、どうしてなんですか？」

うつ…言わなきゃダメか。かなり恥ずかしいけど…ええい！

「綺麗だったから」

「え？」

「その…シルフィアが……………綺麗だった…から…」

「……………」
「いやー！恥ずかしい！なにを面と向かつて綺麗だとかほざいてんの俺！？どんなプレイボーイですか！？死ぬ！死にたい！羞恥心のあまり自害したい！」

自分で言つといてなんだが恥ずかしい。でも本当にそうだったん

だから仕方な

「嘘、ですよね」

「…え？」

「嘘ですよ、私が綺麗だなんて。トモヤさんは優しいから、私を励まそうとしてそんな あっ」

「……………」

俺は無言でシルフィアの腕を引っ張り、こちらに倒れてきた体を立ち上がって抱きしめる。

「あ、あの…」

俺の胸に顔をうずめながらシルフィアが戸惑いがちに声をかけてくる。

「嘘なんかじゃない」

「え？」

「シルフィアは、本当に綺麗だった」

「…やっぱり嘘です。トモヤさんは優しいから」

「はいそこ間違い」

「え？」

「別に俺はやさしくなんか無い。思ったことははっきり言う。好きなら好き、嫌いなら嫌い、やりたくないならやりたくない。自分のために嘘はついても、他の人にために嘘はつかない。そういう人間だよ俺は。だからシルフィアが綺麗だったのは嘘じゃない。俺の、心からの言葉だ」

「……………ッ」

俺の胸の中でわずかに嗚咽が発せられた。発生源は分からない。ということにしておく。

「シルフィアが怖い？気持ち悪い？そんなことない。少なくとも俺はそんなこと思わない」

「…………私、母が死んでから一度だけ村に行ってみたことがあるんです」

唐突に、シルフィアは切り出す。その体は少しだけ震えていた。

「別に村の人たちは私に何をしてもありませんでした。何もせず、ただ遠巻きに見ているだけでした」

「……………」
「でも、その目が…怖かったですッ！まるで人じゃないものを見ような目で…！」

「…ッ」
「もう嫌なんです！またあんな目で見られるくらいなら、いつそのことここから出なければ」

「ふざけんな！」
「ッ！？」

「確かに、ここから一步も外に出なければ誰にも嫌われない。でも、代わりに誰にも愛されない！外に出れば誰かに疎まれることもある。非難されることもある。拒絶されることもある。でも、それでも、大切な人に出会って愛して愛されることが出来る！」

「…………ッ！」
「それに、お前はグラを助けたくないのか！？お前のお母さんが死んでから、ずっと一緒にいた友達なんだろ！助けたくないのかよッ！？」

「助けていですよ！私だって！見捨てることなんか出来るわけないじゃないですか！でも…ッ！」

「だったらそうしろよ！村人の目なんか気にしないで、行けばいいじゃないかよ！」

「でも…でも…！」
「…………守ってやるから」
「え？」

涙で濡れた目で見上げてくるシルフィア。その頬を優しく撫で、優しく言う。

「俺が、守ってやるから。村のやつらが後ろ指を指してくるなら追いついてやる。石を投げってくるなら打ち返してやる。お前がいやな目で見えてくるやつがいたら凍らせてやる」

「……………あ」

「一人で苦しまないでくれ。誰かに頼れ、俺に頼れ。一緒に苦しんで、一緒に何とかすればいい。俺にも少し背負わせてくれ、お前の苦しみを」

「……………うっ」

言いたいことを言い終えると、シルフィアは泣きだす。

「う、く。うえ……………う、うああん！」

「よしよし」

声を上げて泣くシルフィアの頭を撫でる。泣き止ませるためではない。むしろ逆。今ここで全部出させるために。

それからしばらく、シルフィアは泣き続けた。まるで、小さな子どものように。

「……………うっ」

あー分かる分かる。思い切り泣くとしゃっくりでるよね。

「ほーら、もうそろそろ泣くのをお止め」

くいとシルフィアの顎を掻い摘んで上を向かせる。目の端に涙が溜まっていたので親指で拭ってやる。

「なあ、シルフィア」

「なん…ですか」

「シルフィアは、自分のその目、嫌いか？」

「それは……………」

「どっち？」

「あまり…好きにはなれません」

「そう…か。残念だな」

「？」

俺の言葉に不思議そうにするシルフィア。その左右で色の違う目をじっと覗き込み、小さく笑う。

「俺は好きだよ。シルフィアのその目」

「……………あう」

シルフィア？どうした、顔真っ赤だぞ？

俺が首を傾げると、シルフィアはぎゅっと俺の胸に顔を埋める。

「…やっぱり、トモヤさんは優しいです」

「いやだから…ま、いいか」

「までも見当違いなことを言ったので訂正しようとしたが、やめた。しょうがないか、と呟き、しがみついてくるシルフィアの頭をぽふぽふと撫でた。

第33話 生い立ち(後書き)

後書きはないぜッ！

第34話 決着と決心（前書き）

思いつきり詰め込みました。もうぎゅうぎゅうに押し込みました。どう頑張っても戦闘描写とか上手くない。むしろ戦闘シーンが適当。あとサブタイも適当。そんなんですけど、どうぞ。

第34話 決着と決心

「ふう…ま、こんなところかな」

軽く《飛鳥》を一振りして鞘に収める。そのままストレッチ。関節を伸ばすたびにパキパキと音が鳴るのが気持ちいい。

シルフィアの話聞いたのが昨日の夜。あれからしばらくして寝てしまったシルフィアをベッドに寝かせ、悪魔のささやきとかいんな誘惑に打ち勝ち、逃げるように家から出て森に入り、それから夜通しで剣を振るった。かなり眠いが問題ない。これでも現代っ子、完徹には慣れてる。いつか時間のあるときに思いつきり寝れば問題ない。

…あゝ、でも眠い。そして寒い。眠い。寒い。

いつまでもうだうだしてても仕方ないので踵を返して家に向かう。んで、着いたのだが…

「トモヤさん！どこですかー！いるなら出てきてくださいー！」
という聞きなれた声とともにバタバタガタガタとやかましい音が家の中から響いていて、俺は家の扉の前で立ち尽くしたままになっている。あ、今なんかバキッていった。

これは…なんとも…

「入りたくないなあ」

しかし、この暴走を止めないと家が壊れかねない。……よく子どもが騒いできると家が壊れるって親が叱るけど、ありえないよね。

とりあえず、がちゃ。

「ただい」

「トモヤさん！」

「ぶっ！？」

ぐふっ…シルフィアが、普段からは想像もつかないような速度で飛びついてきた。徹夜明けの体には辛いよコレ。

「トモヤさん、一体何処に行つてたんですか？心配しましたよ…」

「い、いや。ちょっと外で……」

てかヤバい。締め付けられてる。シルフィア案外力強い。胴体がギリギリと締め付けられてる……。

「……目が覚めたらどこにもいないし……本当に心配したんですよ。一緒にいてくれるって言ってくれたのに……どこかにいつちゃったんじゃないかって……また一人になるんじゃないかって」

ぎゅっと俺の服を握って抱きついてくるシルフィア。その姿を見て俺は何も言えなくなってしまふ。

そうだよな。お母さんが亡くなってからずっと一人だったんだよな。朝起きても誰もいない。ご飯を食べるときもいつも一人。寝るときには誰にもおやすみと言えない。そんな生活。きつと寂しかったんだろう。きつと辛かったんだろう。そんな時、ひよっこり俺がやってきたんだから、嬉しかったんだろう。

「一人になんかしないよ。一緒にいてやるって言ったじゃんか」
笑いながら、頭を撫でる。シルフィアの目には涙が浮かんでいたので拭いつつ、

「シルフィアは泣いてばっかだな。実は泣き虫か？」

「な、泣き虫じゃありません！」
ぱつと離れて抗議してくる。怒っても可愛いから美少女って得だな。

「分かった分かった。ほら、早く飯食ってグラを助けるための草取りに行こうぜ」

「……………うん」

ややシルフィアの表情が曇る。きつとまだ村とやらに行くのが怖いんだろう。勇気付ける方法なんて知らないんだけど、やれるだけやってみよう。こういうのは気持ちだよ気持ち。

「大丈夫だって。必ず守ってやるから。な？」

「……………はい」

少しだけ、少しだけ表情が和らいだ。やっぱり俺じゃ不安を全部消すのは無理っぽい。他の人ならもうちょっと気の利いたセリフを

いえたんだろうけど。

それから、シルフィアが簡単に朝ごはんを作ろうとしたので手伝うと言いだしたら驚かれた。ちゃんとお手伝いしたらもつと驚かれた。そんなに俺は料理が出来なさそうに見えますか？？まあいいや。んで、ちゃちゃつと食べ終わり、いよいよ出発の時間。それでもやはりシルフィアの表情は暗い。

そこで俺は一計を案じた。

「ほら」

「…はい？」

俺が手を差し出すとシルフィアは首を傾げ、視線を手と俺の顔で何回か往復させ、何を思ったのか同じ方の手で手を掴んでくる。これじゃ握手だ。

「いや違えよ。逆だよ逆」

「え？こつちですか？」

言った通りに手が変わり、俺とシルフィアは手をつないだ状態になる。

「うむ。これでよし」

「えっと…なんですか？」

つながれた手を見ながら不思議そうに言うシルフィア。俺はやや恥ずかしさを覚えつつ、

「こつやって手をつないでれば、シルフィアのこと必ず守れるだろう？だからほら、元気出せ」

「……はい」

顔を赤らめながら、嬉しそうに手に力を込めてくるシルフィアを見て、恥ずかしい思いをした甲斐があったなと思った。

俺たちは手をつなぎながら、家から出た。

「……トモヤさん」

「なんだ？」

「あの…あつちの森、凍ってるんですけど…」

「……」

… ちょっと調子に乗ってました。

歩くこと数十分くらいで、視界の先に村らしき建物が集まっている場所が見えてくる。建物はみんな白い。どうやら白い石を削ってつくったっぽい。ちらほらと人影もある。

「……………」
握った手に力が入る。どうも緊張しているようだ。手もわずかに震えている。その手を握り返すと震えが止まった。手を引いて村へと歩を進める。

俺達が村へ入る空気が変わった。ぴりぴりとした静寂を肌で感じる。シルフィアの言っていた通り、村の連中は何をしてくるでもなく、少し離れたところから俺達を見て、時折隣の奴とひそひそとなにやら話し合っている。不思議そうにしている小さい子供たちは親に何事かと尋ねている。

しかし、これまた見事に全員金髪だな。おまけに目も青い。とはいってもシルフィアの右目ほどじゃない、普通の青色。その目が全て俺、というよりもシルフィアに向けられている。おかげでシルフィアは俯いて、痛いくらいに手を握り締めてくる。それでも、立ち止まったり戻ろうとはしない。ひたすらに俺についてきてくれる。村人達の無言の圧力に耐えながら黙々と歩く。すると、人垣を掻き分け、一人の男性が出てきた。

一見すると三十代前後の姿。でもRPGとかだとエルフはかなり長生きするって言うからもう少し年食ってんのかな？分かんねえや。男はきびきびとした動作で歩み寄ってきて、俺達の前で停止する。「私はこの村で長のようなものややってるものだが…お前は誰だ？」

「ちょっとした迷子みたいなもんだ」

「迷子だと？そのようなものが何故ここにいる。そっちは…例の『忌み子』か」

「シルフィアをそんな風に呼ぶんじゃないやねえ…！」

『忌み子』と言われた瞬間、シルフィアの体が大きく震えたのが分かった。だからこそ、余計に腹が立った。

「ふん。で、何をしに来たんだ」

「…知り合いのドラゴンが腐鱗症とやらに罹っちゃってさ、治すための植物が聖域とやらにあると聞いたんで採りに行こうと思って」

俺がそう言った途端、村の雰囲気は一変した。

「ふざけるな！」

「聖域に貴様らのような者が入るだど！」

「そんなことは許されない！」

さきほどまで黙視をしていた村の奴らが全員激昂して叫んでいる。ちよ、うるさい。ほら小さい子泣いちゃってるじゃん。

「静まれっ！」

目の前の男の一喝で村人たちは途端に黙る。よく躡けられているようだ。

「…申し訳ないが聖域とは我らエルフにとって神聖な地。おいそれと部外者の侵入を許すわけにはいかないのだ」

「部外者って…シルフィアだってエルフだろ」

「半分だけな。残りは人間だ」

「デメエ…」

見下したような言い方をする男に、そろそろ堪忍袋が割れそうになる。

「やれやれ、騒がしいね。何の騒ぎだい？」

「あ？」

大きくは無いがどこか耳に残る声。それが聞こえてきたほうに目を向ける。人垣が割れ、そこから出てきたのは…婆さん？

「長老！？何故このようなところに？」

「なんだい、あたしがここに来ちゃいけなかったかい？」

「い、いえ。そのようなことは…」

すげえ、あんなに偉そうだった男がめっちゃ下手に出てる。あの

婆さん、そんなにすごい人なのか。

「で、アンタがこの騒動の原因かい」

婆さんが男の隣に来る。近くで見るとかなり小さいな。腰がひん曲がってるってのもあるんだろうけど。年のせいかやや白いものが混じった長い金髪が地面に引き摺られている。

「…騒動を起こしたかったわけじゃない。ちよいつと用があったんだけどそれがコイツらにとって気に食わなかったただけだ」

「ふーん。で、その用ってのはなんだい？」

「龍の腐鱗症つてのを治すための植物が欲しい。聖域つてところに入れないならその植物を貰えるだけでいい。婆さん偉いんだろ？なんとかしてくれないか」

「貴様！長老に向かつてなんとという口の利き方だ！」

黙っていた男がいきなり怒鳴ってくる。いい加減にイラツとしたので指をパチンと鳴らす。それと同時に地面から氷柱が出てきて、男の喉の数センチ手前にその鋭い先端が来たところで止まる。上手くいって良かった。下手したら大惨事だもん。

「ッ！？」

「ほお…精霊に認められたのかい」

驚いて仰け反る男を尻目に婆さんは珍しそうに目を広げる。

「なあ、頼むよ婆さん。どうにかしてその植物をもらえないか？」

「ふむ…どうしても必要なのかい？」

「ああ。どうしても助けてやりたいんだ」

おふざけなし。ただまっすぐに思いを伝える。婆さんは俺の目を真っ直ぐに見て、

「その武器…古戦器オーバーツかい」

「そうだ」

「…使いこなせるのかい」

「発動できたのは二回だけ。まだ自分の意思では扱えない」

「そっか……」

質問に答えると、婆さんはまた俺のことを見る。今度は目じゃな

くて髪とか含め全身を見られてる。というかこの目は俺の内面まで見透かそうとしているな。てか見透かされてるな。

じつくり見られること数十秒。そして、

「いいだろう。聖域への立ち入りを認めよう」

「長老ツ!？」

「いいじゃないか。この坊主は精霊に認められた上古戦器オーバーツまで使えるんだ。十分に信用に値するだろう?」

「ですが…しかし!」

婆さんが理由を言っても男は食い下がる。周りの民衆もざわざわがやがやと口々に何かを言っている。すると、

「喧しい!この件で何かあった場合はすべて俺が責任をとる。それでいいだろう。ほらガキ共、ついてきな」

言つが早いが婆さんはさっさと歩いていくので、俺はそれについていく。村人たちは呆気にとられている様で、黙って俺達に道を空ける。あ、男の前の氷柱砕くの忘れてた。まいつか。

何も言わずに先導するばあさんの後ろを、やはり何も言わずに歩く。そっぴや村に入ってからシルフィア一回も喋ってないな。ずっと俯いてるし。

「ここだよ」

婆さんが立ち止まる。その先には森の入り口がある。

「この先が聖域。そこに住むある生き物の体に大きな花が生えている。それが腐鱗症を治すための植物だ。悪いけどここから先は俺は行けない。そっぴやうしきたりなんでね」

「そっぴや。親切にありがとうな、婆さん」

「ふん、別に構いやしないよ。精霊が認めたのなら信用は出来るしね。ところで、精霊とはどんな問答をしたんだい?」

「それは内緒だ」

「そっぴや。まあいい。その生き物もただでは花はくれないだろうからね。怪我をしないように」

「おっ。んじゃ、行ってくる」

シルフィアの手を引いて婆さんの前を通り過ぎる。その時、婆さんがシルフィアに何か言いたげにしていたのが見えたが、結局婆さんは何も言わなかった。

森の中は薄暗く、地面には木の根が浮き出ている歩きにくかった。ただでさえ木の根が複雑に絡み合っていて躓きやすいつてのに、おまけにその上が苔生してるから滑ってしまう。いや、俺は大丈夫だよ？問題はシルフィアで、気をつけるようにって言った傍から転びかけるんだよ。しかも転びかけるたびに俺にしがみついできて、その度にむにゅむにゅが…いや、なんでもない。

にしても婆さんが言ってた生き物ってどんなのだろ。さっきから狐っぽい小動物くらいしか見かけないんだけど。あ、シルフィアに聞けばいいか。

「なあシルフィア」

「はい、つとと、なんですか？」

声かけただけで転びかけないでくださいお願いします。わざとか？もうわざとなのか？

「…その花が生えてる動物ってのはどんなのなんだ？」

「えつとですね、確か体色は緑で四足歩行で、特徴は背中に大きな花が生えていることです。私も本で読んだだけなのでこれ以上は分かりません」

「そっか…」

となると適当に歩き回るしかないか。

……………。
……………。
……………。

見当たらない。

今歩いてる道が獣道だから適当にあるいてれば見つかると思ったんだけど、そう上手くはいかないようだ。

しょうがない、いったん休憩しよう。シルフィアも疲れてきてるだろうし。振り返ってその事を言おうと

「！」

今、目の前の草むらの奥からなんか聞こえたような。

「あの、トモヤさん？」

振り向こうとした瞬間、また慌てて元の方を向くという奇行をした俺にシルフィアが不安げに話しかけてくる。

「ごめんシルフィア、ちょっと待ってて」

「え？あの…」

何か言いたそうにしているシルフィアと手を離し、出来るだけ音を立てないで草むらを覗く。

草むらの向こうは小さな池があった。そしてその畔にたたずんでいたのは、

「フ、フシギ ナ!？」

な、なんでこんなところに？まさか例の背中に大きな花を咲かせた生き物ってアレのことですか？いやそんなバカな。いくらなんでもそんな面白い展開になるはずが無い…よね？

「トモヤさん、やっと見つけましたね」

いつの間にか隣に来ていたシルフィアが嬉しそうに言うてくる。

「え、なにを？」

「なにをって、あの花ですよ。私達が探していたのは」

フシギ ナの背中に咲いている花を指差す。……………あはははは。もういいや。どうにでもなれ。

草むらから飛び出だす。そこで気付かれて緩慢な動作で振りぬこうとしているうちに駆け寄り、走り際に抜いていた《飛鳥》で斬りかかる。狙った場所は前足。

「ぐっ!？」

硬い。それなりに速度と体重をかけたはずだったんだがな。と、

そこでフシギ ナが動きを見せる。どっしり構えたかと思うと背中
の花から蔓を伸ばしてくる。つるのむちか！

ぐにやぐにやと動いて気持ち悪いが、数は二本。避けきれない量
でもない。

しばらくかわしていると思われを切らしたのか蔓を引っ込めて、今
度ははっぱカッターを飛ばしてくる。考えていたより速い！

「どわっ!？」

目の前に分厚い氷の壁を出してギリギリ防ぐ。

「トモヤさん、大丈夫ですか?!」

シルフィアが雷で牽制しながら近づいてくる。ただ、こっちはい
まひとつのようだ。

「バーナ!」

フシギ ナが連続ではっぱカッターを繰り返してくる。念のため
壁の後ろにもう一枚壁を出し、その裏で一息つく。

「大丈夫ですか？」

「ああ、なんとかな」

質問に答えながら壁の状況を確認する。げ、かなりひび割れてる。
こりゃ長くはもたないな。

さて、どうしたもんか。腕を組んでむむむと悩む。

「……トモヤさん」

「ん?なに」

見るとシルフィアは何かを決意したような顔をしていた。

「私が囷になります。その隙にトモヤさんはあの花を 痛っ!」

ばちゃんとデコピンを当てる。涙目になっているがどうでもいい。

「はあ…お前バカか？」

「うう…なんでですか？」

まだ分らないのかと今度は頭を叩く。軽くぼんとだけど。

「ずつと言ってたんだろ?お前を守るって。それなのに、お前をそん
な危ない目に合わせられるかよ」

ぼふぼふと頭を撫で、立ち上がる。念には念を入れてもう一枚壁

を作る。同時に、壁が一枚砕け散った。

そつと覗くとフシギ ナははっぱカッターを出すのを止め、代わりに背中の花を太陽に向けていた。花の中に少しずつ光が溜まっていく。あれは……！

「ソーラービームまで使えんのかよ！」

だつと壁の後から飛び出す。それに反応してフシギ ナはからだの向きを変える。これでよし。ソーラービームなんて喰らったらあの程度の壁なんて一瞬で蒸発するからな。

大きく迂回するようなかたちでフシギ ナに近づく。狙うは体の側面。だが完全に近寄る前に光の充填は終わったようである。「バナツ！」

ゴウツ！と凄まじい速度で光線が発射される。服が汚れるとかそんなの気にする余裕はない。全力で体を投げ出して避ける。

ソーラービームは俺の体の少し横を通り過ぎ、森にある木々を吹き飛ばし、爆発。立ち上がった俺は爆風に後押しされるようになりながら駆け出した。フシギ ナは反動でしばらく動けない。今が好機！……あれ？ソーラービームって反動あつたっけ？ま、いいか。

狙っていた体の側面にたどり着き、刃を叩きつける。硬い。だが強引に押し付ける。続けて突き。狙いは脚の関節。間接部分は多少軟らかかったようで刃が入る。刃を体内に入れたまま斬り上げるとそのまま斬れる。

これならいける。そう思った俺は一気に畳み掛ける。

《飛鳥》を振りかぶり、大きく弧を描くようにして一閃。たつぷりと遠心力の乗った一撃は足の傷をさらに広げる。すぐさま刃を返し先程とは真逆の軌跡を描いて振るい、また傷を大きくする。続けて小さな動きで斬りつけ牽制。そして大上段に振り上げ体重を乗せ刃を叩きつける。

気刃斬り。何度も画面で見たから動きは覚えている。あとはそれを実際にやってみるだけだったんだが、思っていた以上に上手かった。

だが、これで終わりじゃない。俺達の目的はコイツの背中の花。コイツを倒すことじゃない。故に、もう一度だけ刃を振るう。

全身を使い一歩踏み出す。前ではなく左右の足を交差させ踏み換えるように前に出る。足の動きと連動させ、体ごと捻るようにして全身を回転させる。上半身の回転にあわせ、円を描くように周囲を刃で刈る。

振り切った後も勢いは止まらず、しばらく振り回される。が、手応えはあった。

気刃大回転斬り、だっけか。あんまり覚えてないけど、その一撃で、フシギ ナの背中の花は根元から切り飛ばされた。

「バアア……」

フシギ ナは倒れる。あれ？そんなにその花は重要な部位だったの？だったらゴメンね？

今更ながらに申し訳なくなった俺は切り取った花を引つ掴んで逃げるようにシルフィアの元に向かった。

「お疲れ。花は採ったし、帰ろうか」

「……………」

あれ？シルフィアが睨んでくる。なして？怖くないけど。

「えっと……なんで睨むの？」

「…………トモヤさん。必要なのは花びらと葉っぱが一枚ずつでよかったですよ？そんな風に丸ごと切らなくても良かったんです」

「え、マジ？」

コクンと頷くシルフィア。…………え……。

振り返って見てみると、倒れたフシギ ナの周りにはいつの間にかフシギ ネットかフシギ ウっぱい小さい生き物が集まっていた。

フシギ ネットのはフシギ ナの傷を心配そうに見て、フシギ ウっぱいのはこっちを見て威嚇してくる。

「……………」

シルフィアが非難するような目で見てくる。

……………え、これ俺が悪いの？

村に戻って俺が花を丸ごと持っていたことでまた一騒ぎあったことはさて置いて、その花を食わせたり塗ったりしてグラを治療したこともさて置いて。

今、俺は家のテーブルを挟んでシルフィアと座っている。これからはちょっとマジモードだ。

「…シルフィア。俺はそろそろ帰ろうと思ってる。前いた場所に」「はい。私も付いて行きますよ」

「そうだな。急すぎるってのは分かってる。でもきつとアイツらも心配してる　って……え？」

「ですから、私も付いて行くと言ってるんです。…ダメ、ですか？」

「え、え？い、いや、全然構わないんだが…」

「そうですね。なら良かったです」

良かった良かった、と言うシルフィア。……急展開過ぎて付いていけないのは俺だけ？

「えっと…いいのか？シルフィア」

「何がですか」

「いや、その…色々と」

「いいんです。決めてましたから。トモヤさんが出て行くというのなら、私も付いて行くって」

「そうなの？」

「ええ。……いつまでもこの家にいたって何もありませんから。そう言ってくれたのはトモヤさんじゃないですか」

「え？…あー」

そういや言った気がする。外に出れば云々出なければ云々、って今になって冷静に考えるとあり得ないくらい恥ずかしい。

でも、

「本当に、いいのか？」

「はい」

「…グラのことは」

「腐鱗症は治療しましたし、グラは賢い子ですから私がいなくてもちゃんと生きていけます。本人が言ってたんだから間違いないです」
本『人』って部分に引っかけられるが…というかもう伝えてるのかよ。

「えっと…じゃあ…」

「何を言っても変わりませんよ。私はもう、決めましたから」

「……………分かったよ。一緒に行こう」

何を言っても無駄だということが分かった。あんなにキラキラ輝いてる目を曇らせるのは不可能に近い。俺が折れるしかないよ、これは。

で、準備があるというので家の外で待つことにする。しばらくして古びたトランクを持って、白い幅広の帽子を被ったシルフィアが出てきた。

「んじゃ、行こうか」

「あ、待ってください」

重そうにトランクを引き摺るシルフィア。ええいまどろっこしい！

「貸せ、俺が持つ」

「あっ…」

シルフィアが何か言う前に強引にトランクを奪う。ぐつと肩に負担がかかるが、そこは男の子。意地を見せて平然と振舞う。

「……………ありがとうございます」

シルフィアが微笑む。ほら、ちょっと痩せ我慢しただけでこんなにいい笑顔が見れるんだ。安いもんだろ。

「ほっほっほ、若いのう」

「え？」

声のする方を向くと、婆さんと例の村の長だっという男がいた。それに気付くとシルフィアはまた俯いてしまう。

「行くのかい？」

「ああ。心配させてる奴らがいるんでな」

「そうか。ならば、ほれ」

婆さんが何かを投げってくる。キャッチしてみると、それは古びた紙。つてか地図だなこれは。

「…何これ？」

「見ての通り地図じゃよ。この森を抜けて一番近くの村まで行く道が書いておる」

「そっか、あんがとな。婆さん」

「構わんさ。儂にはこれくらいしか出来ない」

婆さんは悲しそうに呟く。そして視線はシルフィアに。

「娘よ」

「……はい」

「お主は、儂達を恨んでおるか」

「……正直に言えば、恨んでいます」

「…そっか」

「……でも」

「…なんじゃ？」

「今地図をくれた事と…今まで私のことを見逃してくれていたことは、感謝しています」

「…最初のはともかく、後の事はなんのことかわからんのう」

「…そっ…ですか」

それだけ言うと、シルフィアは黙って婆さんに一礼し、そして歩き出した。俺も一礼し、同じように歩く。婆さんも、男も、何も言わなかった。

でも、俺、思ったんだ。何も言わなかったけど、婆さんも男も、シルフィアのこと大切に思ってるんじゃないかって。

本当にシルフィアを忌むべき存在と思ってるなら、さっさと殺していたと思う。だから、さっきシルフィアが言ったように見逃してたんだと思う。

今さっき気付いたんだけど、あの婆さんの目、それにあの男の目。シルフィアの右目と同じで、まるで海みたいに蒼かった。だからきつと、あの二人は……。

もしかしたら違つかもしれない。何か別の理由があつたのかもしれない。でも、そう思った方が後味がいいから、俺は勝手にそう思うことにする。

「……………」

無言でシルフィアが手をつないでくる。俺はその手を、ぎゅっと握り返した。

「行きました…ね」

「そうだね。でも心配するこたアない。あの坊主、なかなかいい目をしていた。ちゃんとあの子の事を守ってくれるさ」

「ええ。…あの少年、おそらく…」

「ああ、『渡り人』だろうね。まったく、ああまで明るいと余計に悪く思うよ」

「お気持ち、お察しします」

「いいんだよ察さなくて。この事は儂のような老愚が抱えるべき問題。お前のような若者が気にすることじゃない」

「いいえ。我らエルフは一蓮托生。先人達の罪は我らの罪でもあります」

「はっ、若造が大きな口を叩く」

「申し訳ありません」

「ふん。…さて、あの坊主は真実を知ったら……やはり、儂らを恨むだろうね」

「それよりも、まず心がどうにかなくなってしまつてもいいかもしれません」

「そうだね……願わくば、あの坊主が真つ直ぐに進めることを……」

第34話 決着と決心（後書き）

どうも、妙な複線のようなものを張った作者です。

今回も何も言うことはありません！

以上ッ！

第35話 再会（前書き）

どうも作者です

先日、『オーズ・電王・オールライダー レッツゴー仮面ライダー』を観てきました。すごく面白かったです。

内容を出すのはネタバレになってしまうので控えるとして

ここではひとつ、皆様にお願いがございます

映画の上映中は、あまり喋らずお静かに映画を見ていただきますようお願いいたします

面白い映画であるなら観ている最中、一緒に来た人に話したいという気持ちは分かりますが、あまりにも話しすぎると周りの人に不快な思いをさせてしまうことがあります

何も話すなどは言いません。ただ、ある程度は自制してください。ちなみに作者は隣の席の方たちがとてもオタクチックで、その隣の席の友人であろう人と終始感想を言い合っていてとてもとてもイラッとしました！思い出だけでもムカムカします！

なのでみなさん、気をつけてください

第35話 再会

「……………」
馬車の外の景色が流れていく。見たことの無い景色はいつもなら多少は気にしていたけれど、今はどこか上の空だと自分でも分かる。窓枠に頬杖を付きながら外を見ている、考えているのはまったく別のこと。

「……………」

「……………」

どうやら他の二人の同じようなことを考えているらしい。

「……………」

ため息も吐きたくなる。一体何度目だろうか。

アイツ トモヤが消えてから、すでに一週間が経過した。

消えた原因が転移魔法陣の事故というものなのでどこに行ったのか見当もつかない。魔法陣自体の性能がそれほどのものではない為それほど遠くではない。最低でも、レパール国内であることは間違いないと言っていた。

ある程度場所の目処が立たないと捜索隊を出すことも出来ない、と謝罪とともにユアンは言っていた。

トモヤが消えてしまったそもその原因を作ったのはユアンだが、本人が故意にやったわけではないのであまり責めるつもりはない。それはフィナとアリスも同意見のようだった。……その代わりいっては何だが、彼は彼でこのことで自分の娘達にかなり泣かれたようで大分堪えていた。

…………… 一体いつの間にかそこまであの二人に懐かれたのだろうか？ そんな事を考えていけば、多少は不安も安らぐ。

それからというものの、日がな一日部屋にいて、トモヤが早く見つかるようにと祈るばかり。不安で食事もなくに喉を通らない、そんな毎日を過ごしていた。いつの間にかトモヤはアタシの中でそれほ

ど大きな存在になっていったようだ。それほどまでに長い時間一緒にいた訳ではないのに。

気付いたら傍にいるのが当たり前になっている。そんな気にさせるのだ、アイツは。そんな才能でも持っているのだろうか？ そうだとしたらなんて傍迷惑な奴だ。そんな風にさせるなら、ずっと一緒にいてくれればいいのに…。

二人も似たり寄ったりの行動をしていたらしく、見かねたリアさんとおばさんが気晴らしにとユアンの視察に付いて行ってみてはどうかと言って来た。なんでも北西にある小さな村でこの国の新しい特産品になりうるものが出来たという報せがあつたので実際に見に行けらしい。国王自らが行く必要はないと思うのだが、そこはユアンの主義らしい。

馬車に揺られること数日、目的の村に到着した。この村は広大な森の外周に沿ってに拓かれていた。名前は聞きそびれてしまった。

「
」

向こうでユアンと村の代表らしき壮年の男性がなにやら話し合っている。ユアンの格好はいつも城内で着ている変な服 トモヤは『きながし』と呼んでいた ではなく、ちゃんとした立派な物だった。

「
」

二人は話しながらどこかへ歩いていく。きっとその特産品とやらを見に行くのだろうが、アタシ達は付いて行くとはしなかった。誰からともなく、誰が言い出すでもなく、ぶらぶらと村の中を歩き始めた。村には人気がない。みんな向こうに行っているのだろうか。理由はどうあれ丁度いい。今は誰の目を気にすることなく、ただ歩いていったかった。

考えなしに歩き続けていると、ふと気付くと森の中にいた。

すう、と大きく息を吸い込む。街とは違うどこか爽やかで涼しい空気が体に染み渡り、続けて大きく息を吐き出すと胸の中のモヤモヤも一緒に出て行くような気がした。見ればフィナとアリスも同じように深呼吸している。

「……いい気持ち……」

つい言葉が口をつく。思えばまともに言葉を出したのはしばらくぶりだった気がする。今まではおばさんやリアさんの問いかけに曖昧な返事をしていただけだった。

一回言ってしまうば、あとはするすると言葉が出ていく。

「あのバカ……どうしてんのかしら……」

「……」

その言葉に二人は押し黙る。

一週間。十分に生きていることが出来る期間であり、同時に何かあってもおかしくない期間。それに加え、アイツはこの世界に来てからあまり時間が経っていない。ということは、アイツにはこの世界は分からない事だらけということになる。

「……」

誰も何も言わない。せつかくややスッキリした気持ちもまたすぐに曇ってしまう。

トモヤに会いたい。

認めるのはとても癪だが、アタシの頭の中はその事で一杯になっている。それはきつとこの二人も同じなのだろう。

バギッ！

「！？」

突然、森の奥からなにやら音が聞こえてくる。まるで木を無理やりへし折ったような音が。

連続して木が折れる音がし、被せるように鈍く低い足音がする。

おまけにその音は徐々にこちらへ近づいてくる。普通に考えて、あの足音の主が木々をなぎ倒しながらここへ向かっていると考えるのが妥当だろう。

生まれてから森の近くの家に住んでいたからか、足音とその間隔でその生き物の大体の大きさが分かる。足音から察するに四足歩行おそらくその体勢で高さ二メートルになるだろう。

体の大きさはそのままその生き物の生命力の高さを表していると言っても間違いではない。今ここにいる面子では太刀打ち出来ない。……逃げるわよ！」

そこまで考えてアタシは二人に声をかけた。二人は戸惑いながらもそれに従い、村に戻ろうと体の向きを返す。

その時、

「グオオオオオオオオオ！」

「……！」

前方の茂みが裂かれ、その奥から姿を現したのは黒い毛を揺らし、闊歩する大熊。

マズい。獲物を見つけたことで興奮して二足歩行になった。すでに体高は五メートルに届きそうになっている。

どうする。どうするどうす

「グオオオオオオオ！」

雄叫びを上げながら黒い巨体が疾駆する。向かうは格好の標的であるアタシ達！

「くっ！」

苦し紛れに、咄嗟に火球を撃ち出す。仕留めるまではいかなかったも足止めくらいはしたい。

「グルアッ！」

ただそれも、奴の腕の一振りで霧散してしまう。

「……………ッ」

「グルルル……」

今の一撃で多少は警戒しているのか、ゆっくりと、だが確実に近

づいてくる。

背を向けて逃げようとするれば一瞬で追いつかれる。かと言ってこのままじりじりと後退しても、向こうは四足で歩いてくるためこちらよりも速い。いずれ距離は縮まる。

「きゃっ!?!」

「アリス!」

耳に届いた小さな悲鳴に反射的に振り向くと、アリスが足を滑らして転んでしまっていた。そのことを把握すると同時に、致命的なミスをしたことに気付いた。

「ガアアアアアア!」

振り向いてしまったことで背中を向けてしまった。そのことをきっかけにその巨躯を弾ませて飛び掛ってくる。のしかかられてしまえば、最悪圧死。なんとか助かっても数秒後には食われる。

絶対的な死の恐怖に身がすくみ動けなくなつた瞬間、

「キイイイイイックツツツ!」

「ブルアッ?!」

横合いから飛来した人影によつて、大熊は吹き飛ばされ地面を二転三転していく。

「あたたたた……硬^かつてえなチクシヨウ……」

見事に熊の横っ面を蹴り飛ばしたその人物は、蹴った足をさすりながらぼやいている。

「ア……アンタ……」

その人物は、

シルフィアとともに出発して早一日。一日で森を抜けることは叶わなかった。森の中で野宿するなんて初めてだったからかなりビビ

った。だって寝てる間に襲われたら一たまりもないんだよ？おまけに昨日寝てないから死ぬほど眠いし。

でも流石に寝ずの番とかをシルフィアにさせるわけにもいかなかったから頑張った。寝なかつた。黙ってると思くなるから焚き火の灯りを頼りにシルフィアの本を読んでただけど、けっこう面白かった。

てかこの世界スゴいよね。ドラゴンが一杯いるんだって。種類はフレイムドラゴン、グランドドラゴン、スプラッシュドラゴン、ゼトニックドラゴン、リアルドラゴン炎獄龍、緑地龍、海碧龍、雷光龍、真空龍の五種類。どれこれも馬鹿デカくて、最大で全長五十メートルはあるらしい。もう笑うしかないよ。あつはつは。

「？ どうしたんですかトモヤさん。いきなり笑い出して」

やべ、声に出してみたいだ。「何でもないよ」とポーカーフェイスで告げ、「それよりも」と話題を逸らす。

「あとどれくらいで森から出られる？」

「あ、はい。えつとですね…」

地図を取り出していそいそと確認するシルフィア。俺が地図を読めかつたため、シルフィアに地図を預けている。

「…もう大分歩いたので、あと少して小さな村に出られると思います」

「そっか。じゃあもう一頑張りだな」

そんなこんなで、てくてくと歩を進めていると、

「グオオオオオオオオオオオオ！！」

どこからか、決して遠くない距離から獣の雄叫びが聞こえてくる。

「トモヤさん！」

「ああ。行ってみよう」

小走りで声が聞こえてきた方へと向かう。走っている間も雄叫びが聞こえてくる。もしかしたら人が襲われているのかもしれない…！

「シルフィア、これ頼む！」

「あ、ちょ、ト、トモヤさん?!」

併走していたシルフィアに《飛鳥》を放り投げ、足元にトランク

を転がしてそのまま全力ダッシュ。

少しずつ開けてきた視界にはかなり大型の熊が誰かににじり寄っている光景があった。

それよりも襲われている人は、まさか！？ いや、俺が見間違っ筈がない。でもどうしてこんな森の中に？

ええい！そんなことは今はどうでもいい！あいつ等を助けるのが先決だ。

さらに加速する。もっと速く速く。速く　！　あのバカデカい熊に会心の一撃を与えるために！

「歴代ライダーよ、俺に力をツツ！」

ただひたすらに足を動かし、直感が示す地点にたどり着くと同時にジャンプ。今までの速度を攻撃力に変換し、全てこの一撃に籠める！空中で体勢を整え、そして、

「ライダーアアアア……キイイイイックツツツ！！」

最高の一撃が熊の顔面にクリーンヒット。シュタツと上手く着地する。………って、

「あたたたた……硬^かってえなチクショウ……」

膝を伸ばしたり足首を回したりして痛みを和らげる。

「ア……アンタ……」

さっきまで襲われていたうちの一人がゆっくりと俺を指差す。

「……久しぶり。エルナ」

「……トモヤ……」

「ト……モヤ」

もう二人が信じられないような顔をしながら名前を呼ぶ。幽霊でも見たような顔だなおい。

「フィナとアリスも。久しぶ「トモヤツ！」ぐはっ！」

弾丸並みの速度でアリスが飛びついてきやがった……。目で捉えられないだと……？バカな……。

「本当に、トモヤなの……？」

いつの間にやら正面に来てぺたぺたと顔やら体やらを触ってくる

フィナ。いやなんでそんなリアクション？一週間ぐらい会わなかっただけじゃん。死んだと思ってた人が実は生きてた的な反応はやめてよ。

「トモヤ…なのよね？夢とか幻じゃなく、本物なのよね？」

エルナまで。止めて。ホントに止めてそういうリアクション。地味に傷つくんだよそれ。

と、内心でぶつぶつ言っていると。ぎゅっ。

エルナが抱きついてくる。ついでにフィナも抱きついていた。一体いつの間に。

「どこに行ってたのよ…」

「…心配したんだから」

「…でも、生きてて良かった」

…ああ、そっか。俺としては飛ばされてからも結構楽しかったし、結果的には良かったと思ってるんだけど、エルナ達はそんなこと知る由もなかっただろうから、やっぱり心配してくれてたんだろう。

「…心配かけて、ごめん」

謝罪と感謝の気持ちを込めて、俺からも三人をぎゅっと抱きしめる。「嫌がられるかな？」とも思ったけどそんなこともなかったの
でちょっと嬉しい。

「グロオオオオオオツ!!!」

「!!」

ふっ飛ばした熊が起き上がって叫び声を上げる。くそ、気を失わせるくらいは出来たと思っただのに。

「マズい！トモヤ、早く逃げるわよ！」

「まあ待ってっ」

ずっと手を前に伸ばす俺を奇異な目で見るエルナ。一方で猛スピードで走る熊の前方の地面が円状に凍る。そして熊の体が完全に円の中に入ると、円は輝き、光が収まるとそこには巨大な氷の柱が空高くまで伸びていた。

初の舞・白連。円に架かる天地の全て、ってのは無理でしょさす

がに。そこまでイメージすんのもかつたるいし。

氷の柱を見て、まさかという表情になって、エルナが俺を見る。

「何…これ。トモヤ、アンタがやつ」

「トモヤさ〜ん、どうしたんですか〜」

「あ、ゴメンなシルフィア。荷物全部預けちゃって」

『（ピキッ）』

後ろの茂みから荷物を引き摺りながらシルフィアが出てきたので、慌てて駆け寄って荷物を受け取る。

「どうしたんですかって、わ〜、キレイな氷像ですね」

「いや氷像で。確かにキレイだけどさ」

氷に入り込んだ太陽の光が内部で乱反射してキラキラと光ってるから見てて面白いけど。この光景を見てキレイだと済ませられるのがすごいね。

「あれ？トモヤさん、そちらの方たちは？」

「ああ、紹介するわ。紅いのがエルナで、銀色なのがフィナ。獣耳生えてんのがアリスだ。全員俺の知り合い」

「……………」

なんかシルフィアがぶすつとしてる。何が不満なんだろ？

ああ、そつか。エルナ達にもちゃんと紹介しなきゃいけないよな。

「んで、エルナ。こちらはシルフィア。俺が世話になった人で」

くるりと振り向いて紹介しようとして、視界を埋め尽くしたのは靴底と思しきもので。

「えっ？」という暇もなく、俺はさっきの熊に自分がしたように、蹴り飛ばされた。

第35話 再会（後書き）

この前の放送で仮面ライダーの放送が通算で1000回を突破しました

ぶっちゃけますとその話を見て今話でライダーキックをさせようと魔が差しました

ていうかあれ、なんでハリセンボンが登場したんでしょうかね？

私程度では理解できません

おっと、気付いたら仮面ライダーの話しかしていないな

でも、後悔なんてしません。だって好きだから

第36話 酒はやっぱ二十歳になってからだよね（前書き）

あー、なんでだろ。思うように書けない。

何故だー、何故なんだー。いざ書こうと思ったたらふと他の方の書いている小説に目がいつてしまっつてつい読みふけっちゃうのは何故なんだー。

という訳で、遅れました。申し訳ない。

何とか書き上げたものの、なんとなく不完全燃焼です。

これからも、精進します。

第36話 酒はやっぱ二十歳になってからだよね

「では、トモヤの帰還と新メンバーシルフィア加入を祝って、乾杯
！」

『乾杯ッ！』

ユアンの音頭にあわせみんなで一緒に杯を掲げる。てか新メンバ
ーって言い方変じゃね？

それはさておいて、杯に口をつけ一気に傾ける。大人組の中身は
酒だけど、まだ未成年の俺たちはジューズです。

一息に中身を空にしつつ、腕に浮かんだ縄の後を摩り、ぼんやり
と物思いにふける。

エルナに蹴り飛ばされて（犯人は後で判明した）気絶して、気付
いたら縄でぐるぐる巻きにされて木に逆さ吊りにされてて、エルナ
とかフィナが体にハチミツっぽい塗りたくってて、もうあまりの
急展開に一瞬訳が分からなかったね。

そのハチミツっぽいのがさっきの熊の仲間の大好物だったのが分
かったからさあ大変。縄を解けと言ってもスルーされ、信じてたシ
ルフィアに助けを求めるとぶいっとそっぽを向かれ、そういや見当
たらないアリスはどこだと探しているところから大量の生肉を持
ってきて俺の周りに配置しだした。俺の死亡率を上げようっていう
ことですね。

いや、危なかった。なんとかユアンやおばさんに助けてもらっ
たけど、危うく熊さんの餌になるところだったぜ。

その後、なんやかんやでシルフィアにみんなを紹介して、なんや
かんやと飛ばされてからの事を説明して、なんだかしらんが話の途
途中で三人にいいパンチを貰ったりして、なんだかんだで城に帰
ってきて現在に至る、っと。ざっくりまとめ過ぎたかな。

それにしてもユアンが精霊魔法にがつり食いついてきたのは驚
いたな。その剣幕にシルフィアがやや涙目になっていたのは可愛か

った。そしてその後のリアさんの一撃の鋭さは怖かった。もうね、音がね、『ボコツ』とかじゃないんだよ。『グシャ』なんだよ。あれは人体に向けていいものじゃないと思うんだよね。しばらくしてケロッとした顔で起き上がったユアンにはマジで戦慄した。

城に帰ったら帰ったでランとリンが泣きついてくるわ、クレアが目 endpoint に涙を浮かべながら「おかえりなさいませ」って言うてるわ、もう罪悪感で一杯だった。悪いことしたな、ってしみじみ思った。

そして、結果的に俺を連れて帰ってきたかたちになったユアンは愛娘二人に「ありがとう、パパ！」と言って抱きつかれて有頂天。いきなり「宴だっ！」とか言い出してついつい「おうっ！」っノってしまった。

「トモヤ様、どうぞ」

「おう。あんがと」

空になったグラスにクレアがジュースを注いでくれる。それをまたくいくと呷る。

「つぶは、うめえ。って、なんだクレア、お前は飲まないのか？」

「はい。私には給仕の仕事がありますので」

「いいじゃねえか。少しくらいなら」

ほいほい、と近くにあった空のグラスをクレアに持たせ、飲み物を注ぐ。

「あ……………しょうがないですね、頂きます」

グラスに両手を添え、ついと傾けるクレア。とても上品だ。それに比べると俺の飲み方は下品だと自分で分かるのが悲しい。

「あー、今度はクレアとイチチャついでる」

「トモヤさん、不潔です」

「ちよつと待てやそこのちっこいのども」

なんて人聞きの悪い事を。あの三人に聞かれたらまた折檻されてしまう。そうつと覗き見ると、三人はシルフィアと一緒に楽しくおしゃべりしている。やっぱり女子って仲良くなるのが速いな。

「ふん。何よ、人が心配してたつていうのに、あんたはまた女のと楽しくやってるなんて」

「心配して損しました」

ぷいっとそっぽを向かれる。あちゃー、これは俺が悪いな。心配させちゃってたか。なんとかしないと。

「悪かったな心配させて。お詫びにまた一緒に遊んでやるから」

そう言いながら二人の頭を撫でてやると、二人は目を細めて気持ちよさそうにする。

「本当！？また一緒に鬼ごっことかかくれんぼとかしてくれろ？」

「私も折り紙を教えて欲しいです！」

「分かった。今度遊ぼう。約束だ」

…クツクツク。子どもは扱いやすいから助かるぜ。

ズビシッ

「そんなこと考えてはいけません」

……何故バレた…？

「ん？ アリス？」

うつらうつらと舟を漕ぎ始めたランとリンをクリアに任せ、誰に話しかけるでもなくぼけっとしてしていると、

「……………」

なにやら虚ろな目で宙を見つめているアリスが目に入った。

「おい、どうしたんだ？」

隣に座って話しかけるも返答なし。なんだか蕩けたような表情をしている。流石に心配になりぱたと目の前で手を振ってみる。

するとその手をがしつと両手で掴まれ、

「……………あむ」

「っ！…!!?!?!?!」

い、いきなり…指を咥えただとう…！

「ん……………んむっ、んんんっ」

そのままの状態ですぐでなめられる！うわあ、舌のザラザラした感触が伝わってくる…。

「んちゅ……んっ……んふ……ちゅ……あう」

エローい！！ 擬音といつかなんといつかもつとにかく音がエロい！ナニコレ！？ どしたのこの子！？なに、発情期！？

「お、おい。どうしたんだアリス？一体どうしたんだよ」

とりあえず平静を装って話しかけながら、なんとか指を離させようとして顔を押すが離れない。この…！

「うにゅ……あう……にゃああ」

………ん？』にゃあ『？

ぐりぐりと頭を押し返すと、アリスはまるで猫のようにむずがる。あれ、これってまさか。

きよろきよろと辺りを探すと、明らかに酒瓶と思しきものが空っぽになって近くに転がっていた。

「にゅうう……あむ……くちゅ……」

俺が動きを止めたことによって指をなめるのを再開するアリスからはアルコール臭が。

………コイツ……酔ってやがる……！

てかなに？コイツは酔うと人の指を舐めるの？意味がわかんない。

「あうん……えう……あくう……」

「……………」

指先でアリスの口の中を擦る。

「ひう……ああ……ん、にやうう……」

続けて舌の上を爪先でかりかりとやさしく引つ掻く。アリスは舌を動かすのを止めて俺にされるがままになっている。反対の手で顎をつかみ持ち上げる。

「えう……あん……くうう……」

指先で口内の粘膜を刺激するたびに、アリスから艶やかな声が漏れる。右手で口内を弄くりながら左手で首筋や頬をそつと撫でる。

「あっ……にやっ……んっ……は、ああ……」

涙で潤んでいる瞳をじつと覗きこみながら俺は…、

「……………」
……………なにしてんだ俺。

ぱつと慌ててアリスから離れる。口の中から引き抜いた指はつうつと細い糸でまだアリスの口の中とつながっていた。つかもう涎でべとべとだ。

うわと若干ひいていると、いきなり背中に誰かがのしかかっていた。

エルナだった。

「アハハハハハハ！どうしたのよトモヤ、ぼーつとしちゃって？」
いや、ちよつと訂正。空の酒瓶振り回しながら真つ赤な顔で爆笑し続ける、エルナだった。

「おやおやーん？アリスちゃんがアダルトちっくだ。さては……エツチなことでもしちやったのかー！」

ばたばたと足を動かしながらさらにもたれかかってくる。うわウゼえ！酔っ払ってるエルナうざい！

うわー、あれだな。酔ってる時って普段まったくやらないようなことをやるんだな。いつものエルナだったらこんな風にべったりとくっついてきたりはしないだろうし。

そっぴや酔ってるときの記憶って残る人と残らない人がいるって話だけど、エルナには綺麗さっぱり忘れていて欲しい。素面るときに思い出されたら八つ当たりで蹴られかねん。

「にゅふふふ。へー、トモヤってば小さい子が好きなのかあ」

「おいそこ、謂れのない中傷をするな」

「だってそうでしょー？ちっちゃい子のアリスに変なことしたんでしょー？あ、それともトモヤは胸が小さい子が好きなの？だったら…えへへ」

何が嬉しいのか、頬を赤らめてエルナは笑う。あのさ、お願いだから人の肩に顔を載せて笑わないでくれない？息が耳に当たってこそばゆいんですけど。ああ、ちなみに小さい胸が好きなのかという

質問にはあえて答えません。否定しないんで。

「……………何してるの？」

「ん？おお、フィナか」

声に気付いて顔を上げるとフィナが：仁王立ちして俺をにらんでいた。：ふっ。俺だってそろそろ学習している。大方、フィナもまた酔っているんだろうよ。さあ、今度はどんな酔い方なんだい？

「…また女の子とべたべたしてる。トモヤはそんなに女の子が好きなの？」

おおっと。軽く怖い目でフィナが俺を見る。こいつはあれだな、絡み酒とかいうやつだな。

「いつも思ってるんだけど、トモヤはもっと女性との関わり方を考えるべき。どんな女性にも優しいのは褒められるところだけど、優し過ぎるのもどうかと」

なんか目の前でくどくど言ってるフィナのお話を右から左へ聞き流しつつ、そっぴやシルフィアが見当たらないときよろきよろする。

「……………」

いた。なんだか知らないけど頬を赤くして空を見ている。なんだか目が虚ろだ。

そして、徐に着ている服に手をかけ…

「うおおおおおい！？ちよっと待てえええ！！」

何をやるうとしてしているのかを一瞬で見切った俺はエルナを背中にくっつけたまま走り、その手を掴む。

「うみゆ。なにをするんれすか、トモヤさん」

「うわ喋り方がベタ過ぎる、じゃなくって。お前今何をしようとしてた」

「なにつて、ちよっとぶくをぬごうとしていただけですよ。あついで」

「暑くねえし、お前は人がいる場所で服を脱ぐのか」

「うるさいれすねー。わたしはわたしのおもっようにするんです。」

そんなにとめたいならわたしをたおしてみろです」

「思いつきり悪役のセリフだな」

そうこうしている間にもシルフィアは服を脱ごうとし、俺はそれを全力で阻止する。心の中の悪魔が「いつそのこと脱がしちまおうぜ」とか言ってくるけど全力で無視！というか俺の中の天使は何をやっているんだ！？

「……なーによ。なんでそんなに頑張ってるのよ。あれか！？コイツの裸は俺だけのものとかいいたいのかぁ！！」

なんか急にキレたエルナが背後から俺の頬を掴み思いつきり引張ってくる。くそう、文句を言いたくても上手く口が動かない。

「……また女の子とイチャイチャしてる……！！」

これがイチャイチャしてるっていうなら俺の幻想は粉々に崩れ去るわ！つかなんで怒ってるんのフィナさん！？

「……んむ、あくう……ちゅぱ……っ」

いやー！どつかから沸いて出てきたアリスがまた俺の指をー！今度は親指だー！

……はっ！ちよつと気を抜いた隙にシルフィアが軽く服が肌蹴てやがる！くそ！これはどう対処すればいいんだ！？しかもエルナとフィナが俺が胸ばっか見てるって言うってくるし。ああ、もう……

どうすりゃいいんだ

！！

「いよう、お疲れさん」

「……お疲れ」

四人が眠りこけている隣で疲労困憊状態になっている俺に、ユアンが妙にニタニタしながら話しかけてくる。

「はっはっは。大分お疲れのようだな」

「まあな。まさかこの四人がこんなに悪酔いする奴らだったとはな」

「全くだな。あそこまで面白い展開になるとは、こっそり飲み物の中に酒を混ぜた甲斐があっただぜ」

「つてテメエの仕業か！つか未成年に酒を飲ませんなよ！」

「？ 未成年？なんだそりゃ」

俺の全力の叫びにひるみもせず、むしろ気にもしないで疑問を投げかけてくる。その態度にイラツとした。

「未成年つてのは…あれだ、20歳未満の人の事だ。俺のいた国では未成年は酒を飲んじやいけないんだよ」

「うへー、酒を飲めないとか、人生の半分を損してるぜ」

そこまでいうか、と軽くツツコミを入れる。

「にしても、お前のいた国にはそんな決まりがあるのか…面白そうだな。もうちょい話を聞かせろ」

「は？いや、俺あんまり法律とか詳しくないぞ」

「いいって別に。お前の普段の暮らしとかでいいからさ、聞かせてくれよ」

えー、と渋る俺をに、いいからいいからとグラスを持たせてジュースを注ぐユアン。いつの間にか面白そうだとのおばさんとリアさんも寄って来ていた。

「……しゃーないか」

はあ、とため息を付いた俺は諦めて話すことにする。

俺の世界の話を。

「そつだ、肝試ししよう」

「いきなり何言つてんだよアホ」

「頭どうかしてんじやないのバカ」

「…なんでお前生まれてきたの？」

「そこまで言わなくてもいいじゃないか！？」

机に突っ伏した弾を見て、楓と一緒に深いため息を吐く。

時刻は12時15分ちよい。正直あんまり意味がないんじゃない

かと常々思う土曜授業の最後の時限が終わり、後は帰りのHRを残すのみのこのタイミングで、いきなりこいつは何をほざいてるんだ？
「で、どうして肝試しなんだ？聞いてやるから出来るだけ簡潔に答えてそのまま帰れ」

「おう！……ってやっぱり扱い酷くね！？」

「黙れ」

「うっ…酷い。イジメ、かつこ悪い！」

弾がなんか言っているが軽く無視しながら帰り支度を済ませる。教科書なんかは全部置いていってるのでかばんの中身は筆箱と配布されたプリントくらいだ。

「なにになに…。どうしたの？」

とてとてと教室の前のほうから一人の女子がやってくる。

こちらは上浦京子^{かみづらみょうこ}。楓の親友的なポジションにいるクラスメイト。特徴はとても高校生には見えないその低身長。目算だと140cmくらいだろうか。本人も気にしているらしいのであまり口にすることはしない。

「ようちびっこ。飴いるか？」

「ちびっこじゃないよっ。アメは貰うけど」

俺が差し出したミルク味のアメを受け取ると嬉しそうに頬張る。

その姿ほどっからどう見てもただの子どもである。

「いけませんよ京子さん。まだ授業は終わっていないのですからアメなど食べては」

爽やかな声で横合いからやさしい注意をしてきたのは才崎修也^{さいしゅうや}。成績優秀。スポーツ万能。おまけにイケメン。駄目押しとばかりに物腰が柔らかく、誰に対しても優しいという完璧超人。うん、軽い不幸に遭えばいい。

だがしかし、やはり神様というものはいるのであるう。この男には一つ問題がある。

コイツは……真性のロリコンなのである！

入学して早々、同年代または先輩の女性方から熱烈なアタックを

受けたにも関わらず、全員に丁寧なお断りの返事をし、学園一の美人と名高い生徒会長様に告白されたときは、

『残念ながら僕は14歳以下にしか性的な興味を持ってないんです』
と言って完膚なきまでに叩き伏せたのはまだ記憶に新しい。

…余談だが、その生徒会長はそれから極度の男性不信に陥り、それから同性愛の道を進んでいられるとか。

まあどうでもいいか。

「うー、ごめんなさい」

「これからは気をつけてくださいね」

まるで幼稚園児と保父さんのやりとりである。ちなみに修也的には京子はどうなのか、と以前聞いたところによると、

『確かに京子さんの体型は幼いです。しかし、彼女はもう高校生。

僕からしたらすでに対象外です。ロリ体型ならばいい、などという
ような下賤な輩と僕を混同視しないでください』

とかなりマジな目で言われた。あれは怖かった…。

「それで、一体どうしたのですか？なにやら弾さんが叫んでおられたようですが」

「そうそう。弾くんがうわーって大声上げてたけど」

「ああ。実は」

俺は弾がいかにアホな奴なのか、ついでに弾が肝試しをしようと言い出したことを話した。

「そうですか。肝試しとは中々面白いと思いますよ、有吉さん」

「うんうん。季節的にもピッタリだと思うよ、有吉くん」

「なんか距離を置かれた!？」

なにが悲しかったのかまた机に突っ伏す弾に、ふと俺は尋ねる。

「んで、いつやるんだ、肝試し?」

「ああ、今日だ。今日やろう」

「…バカかお前?夏休み3日前だぞ。夏休み中でいいだろ」

終業式は日曜日をはさんで月曜日に行く。中途半端だと生徒たちはぶーたれているが教職員たちは華麗にスルーしている。

すると、突然弾の両目からぶわつと涙が溢れ出した。

「何が夏休みだー！部活と補習に俺の夏休みはほとんど持っていけるんだぞー！そんな暇あるかー！」

「ああ、なるほど」

つい先日やった期末テストが今日返却されたのだが、その時このバカが悶えていたのを思い出す。赤点でも取ったのだろう。コイツが所属している野球部の練習も厳しいらしいからな。俺は帰宅部だけど。

「と、いう訳で。せめてひと夏の思い出が欲しいと思い、肝試しを発案したわけです」

「いやいや。部活はともかく補習はお前がちゃんと勉強しなかったせいだろう？ちゃんと日頃から予習・復習をしていればこんなことにはならなかったはずだ」

「そうよ。自己責任よ」

俺と同じ帰宅部で今回の期末テストで学年一位の点数を取った楓が言うと、ものすごく説得力があります。

「……なら智哉、お前テスト期間中毎晩なにしてた？」

ジト目で弾が聞いてきたので、俺は正直に

「エロゲ」

と答える。

「おかしいだろ！普通の日とかならまだしもなんでテスト期間中にエロゲやってんだよ！？それでなんで赤点にならないんだよ！？」

「なんでだろううね（笑）」

「笑うなっ！」

思い切り噛み付いてくる弾を適当にあしらう。

「確かに、智哉さんが普段勉強していないにも関わらず、テストで結果を残しているのは多少疑問ですね」

「学年二位が何言ってたっつーの」

ちなみに修也と楓の順位は度々入れ替わる。学年一位になる比率は4：6ってところか。まあ学年二位でも十分にスゴいんだけど。

「うー。すごいなーみんな。私なんか毎日ちゃんと勉強してるのにそんなに頭良くないよ」

「何言ってるの。京子は華道とか茶道とかお琴とか一杯習い事してるじゃない。十分すごいわよ」

京子の父親はどっかの会社の社長らしい。詳しくは知らないけど、家とかど〜んとデカかったし。遊びに誘うと「今日はお花のお稽古があるから」とかマジで言ってくる。

「つか肝試しやるつっても、場所がないだろ。ここら辺あんまいいところないぞ」

いくつか墓地はあるものの、すぐそばにコンビニやらなんやらが建っているため雰囲気ぶち壊しである。

「ふふん、抜かりはない。こんなこともあるうかと前々からそれっぽい場所を探していたのだよ」

「いや、その時間を勉強に使えよ」

「うるせいつ。とにかく、場所は町外れにある廃病院だ。なんでも数年前の不況の影響を受けて潰れたらしい。解体の目処も立ってないから肝試しのスポットとしては良く使われてるらしいぜ」

ふーん、とおざなりに反応するみんな。

「んじゃそこでいいや。詳しいことは」

「はい、みなさん。帰りのHRをしますから席に戻ってください」

言葉の途中で担任が教室に入ってきたので、ひとまず自分の席に戻る。

俺の席は窓際の後からの二番目、なんてベストポジションではなく、窓から三列、後ろから二番目の席。よりによって後ろの席には楓が座っているのでおちおち居眠りも出来ない。しようものならシヤーペンで背中を刺される。

尚、先程言ったベストポジションには弾が座っている。「これで俺にも春がー！」と席が決まったときに喜んでいたが、今では直射日光に耐え切れず我等が担任に早くも席替えを申し出ている。

「連絡事項は特にありません。今日も終わってあと一日だけ頑張ればお待ちかねの夏休みです。みんな、もう少しだけ頑張りましょう」
教壇にたつてにこにこしながら言うのは担任の初音美玖先生だ。

あれだよ？ けしてご両親は某ボーカロイドから名付けた訳じゃないよ。むしろこつちが先だからね。こつちのほうで遥かに先輩だからね。時代先取りしまくってたからね。

「…どうしてでしょう。それとなく失礼なことを考えられてる気がします」

おつと気付かれてしまった。自重自重。

「まあいいです。それでは日直さん、帰りの挨拶を」

「先生！ ちよつといいですか！」

「え？ なんですか有吉くん」

いきなり弾が立ち上がりて声を上げたもんだから先生はちよつとビックリしてる。それを尻目に弾をぐるりと教室のみんなを見渡し、「本日20時より、町外れの廃病院で肝試し大会を開催する！ 参加は自由！ 他クラス、他学年の奴を呼んできても構わん！ ひと夏の甘い思い出を作りたい方は振るつてご参加ください！」

『おおおおおおおおおつ！！！！』

「何でこのクラス無駄にノリがいいんだよ!？」

はっ！ こんな大っぴらに言い出したら流石に先生が止めるんじゃないか？

「いいですねー、肝試しですか！ …… ホント、羨ましいです。

私は学生時代勉強しかしてこなかったもので、ひと夏の甘い思い出なんてこれっぽっちもないんです…。 ああ、もし願いが叶うなら、もう一度あの頃に戻りたい……!」

なんか号泣しながら何かを強く願っていらっしやいました。見てて可哀想だけど肝試しが止められなくて良かったと思う。弾が言い出したときはいよいよトチ狂ったかこのバカ、と思ったけどこうなってくるものすごく楽しみだ。

俺は期待に胸を膨らませた。

「……………」
「後ろの楓は、なんかムスツとしてたけど。」

第36話 酒はやっぱ二十歳になってからだよね（後書き）

いえーい、なぜか過去編突入ー。ひゅーひゅー。

…いえね、ネタが尽きたわけじゃあないんですよ。ただなんとなく書きたくなってしまっただけで、女性陣の悪酔いの仕方なんか微妙です。

なんだろ…なんかもう…

すみませんでしたあっ！！

第37話 『変態』のワンランク上って『変人』だと思っ(前書き)

遅くなりました。マジですんません。

妙に手が進まなかったんです

ああ…やっぱり俺には文才ってもんがないのだろうか…

うう…才能が欲しい…

第37話 『変態』のワンランク上って『変人』だと思っ

あれから復活した美玖先生による、それでもやや暗い雰囲気のHRが終わり、俺と楓はクラスの中で適当に挨拶してから教室を後にした。

今日は楓と二人きりで下校になる。行きは大抵弾も一緒なのだが、弾は放課後は野球部で青春の汗を流すので一緒に帰ることは滅多にない。修也は時折どこかの部活の助っ人に行っている。今日は確かテニス部とサッカー部だったか。京子は家の人が黒塗りリムジンで迎えに来る。あのチビブルジョワめ。羨ましいぜ。

そんな訳で楓と二人、他愛もない会話をしながら校門を抜ける。俺達が通う県立木暮学園こぐれは中高一貫の学校である。ちよつと前にあった市町村合併の関係でこちら辺にあった高校といくつかの中学校が一緒になったものだ。中学校はまだいくつかあるものの、高校はここしかないので色んなところから人が来る。修也と京子もその内だ。それぞれ中学校の頃はギリギリで別々の中学校の学区内だったらしい。んで高校からここに通うようになったと。ちなみに俺と楓と弾は中学一年からの付き合いになる。

出合いのきっかけって何だったか……ああ、そうそう。中学に入学してばっかの頃、街で弾が楓をナンパしてるのを見かけたんだっけ。それがあまりにもしつこくて、見かねて間に割って入って。それで偶然にも同じクラスだって気付いて。それからずっと続いてきたんだっけか。

いやー、あの時の弾は楓の上っ面にだまされて声をかけてたんだな。もしその時楓の本性を知っていたらば声をかけたりせずに、むしろ姿を見た瞬間逃げ出してたんだろうな。それくらい楓は恐ろしいおっと、こんなこと考えてるとまた「なんかムカついたから」って理由で殴られちまう。

歩いて十数分、毎朝待ち合わせている十字路まで来た。ここで俺

は真つ直ぐ、楓は左に曲がっていく。それじゃあ八時に廃病院で、
と言いながら別れた。

十字路から家までは歩いて数分、走って数十秒つとところにある。
ま、特に急ぐわけもないのでのんびりと歩いて家まで歩き、「ただ
いま」と言いながら玄関を開けた。

「おかえりなさい、あなた。ご飯にしますか？お風呂にしますか？
それとも…わ・た・し？」

我が篁家の玄関のマットの上に裸エプロンの女性が三つ指付いて
座っていた。

「……………」
俺はとりあえず、靴箱の中から『鈍器のような物』を引っ張り出
し、その女性目掛けて振り下ろした。

「危なっ!？」
女は素早くそれを察知し、身軽な動きで避けて後退して行く。動
きの中で気付いたが、裸エプロンじゃない。エプロンの下にスクー
ル水着を着てやがる。マニアック度が上昇したな。

「……………んで。何をやってるんだ、鈴？」
怒りを押し殺しながら尋ねると、その女　　たかむしすず 篁鈴はにやぱつと快
活に笑う。

「あはははは。なんだよお。可愛い義妹いせつとのちよつとしたおちゃめじ
やないか、お兄ちゃん」

「可愛い義妹はスク水エプロンで兄を出迎えたりはしない」
『鈍器のような物』をばいっと投げ、とりあえずは靴を脱いで家
に上がる。どうして家の扉からここまでの狭い空間でこんなに疲れ
なければいけないのだろうか。

元凶である妹はおろしていた髪をせっせとサイドポニーに結って
いる。その姿だけ見れば可愛いんだけどな……………着ている服が問題で
す。

エプロンのポケットから手鏡を取り出して、それを見ながら髪を整えた鈴は、改めて俺に向き直った。

「で、どうかな？」

「……何が？」

「むう、質問に質問で返すのはマナー違反だよ。じゃなくて、この格好どう思う？」

「着てて恥ずかしくないんですか？」

「まったく！」

無駄に威張って言ったな。てか、その姿で胸を張られても困るんですけど。主に視覚的な面で。

「とりあえず、そのスクール水着（紺色）はどこで入手したんだ？」

「ふっふっふ。それは当然あの人さ！では、スポンサーの方、カモン！」

大げさな身振り手振りで鈴が合図すると、今に続く扉から一人の男が出てくる。

「やあやあ、どうも。スポンサーのお父さんだよ？」

「何故に疑問系」

手に持ったボウルの中身を泡だて器でかき混ぜながら、我が家の大黒柱である^{たかむらりゅういち}篋籠一がニコニコしながら登場した。

この篋籠一という人間を漢字二文字で表すとするなら“変態”という言葉が一番ぴったりである。別に性癖”だけ”が変態という訳ではなく、もう身体的スペックから頭脳まで。天才を超えて変態なのだ。

もう俺を含めた家族や近所の方々はこの人が何をしても、もう驚かない。実は元死神ですとか、超大型マフィアのナンバー2だったりとか、何回か世界を救ったことがあるとか言われても「ああ、やっぱり」と返せる自信がある。仮に正体がウルフォルフェノクとかだったとしても、「へー」と言っただけならアクションをすることもない。そんな存在だ。

「…そっぴいや母さんは？鈴が帰ってきてから俺が帰るまでの貴重な

ツッコミ役は一体何処に？」

俺の母親にしてこの家ではツッコミ役の片割れを勤める^{たかむらびゆうまき}篁優希。彼女がいれば、血のつながらない義妹がスク水エプロンでお出迎え、なんていう状況にはならなかった筈だ。

「ああ、優希なら駅前のスーパ―が特売だと小崎さんのところの奥さんから聞いたらしくてね。ちよつと前に走っていったよ」

「いやあのここから駅前のスーパ―まで五キロはあるんですけど…
…まあ大丈夫か。」

「それよりお父さん、今日は何を作ってるの？」

「ああ、今日はブッシュドノエルさ。ちよつと時間が余ったから退屈しのぎにね」

ボウルの中ではチョコクリームがかき混ぜられていた。なるほど、確かにスポンジの焼けるいい匂いがする。

「ホント！？わーい！私お父さんの作るケーキ好きなんだ！やったー！」

ぴよんぴよんと跳ねて喜びを表現する鈴。うむ、俺も親父の作るケーキは好きだぞ、美味しい。なによりチョコレートケーキってのが一番いい。俺はチョコが大好きなのだ。

ちなみに、我が家ではなぜか男性陣の方がお菓子作りが上手かったりする。順番的には父、俺、母、鈴といった具合にだ。このことが分かったときの女性陣の落ち込みようと来たら、今思い出しても笑える。普通の料理は父、母、そして俺と鈴が並ぶ順序になる。なんで親父のほうが上手なんだろうか。

「そんなことより、いつまでもそんな格好でいたら風邪ひくぞ、鈴？もう夏なんだから蚊に刺されるかも知れんぞ」

「うへー。蚊に刺されるのは勘弁！。さっさと着替えよ」

とんとんと階段を登っていく鈴に向かって俺は、

「風邪は引いてもいいのかよ」

「うん。だってもし風邪になったら、お兄ちゃんが看病してくれるじゃん」

元気一杯の笑顔でそう言って、鈴は二階にある自室へ向かう。あれだけ元気なら風邪は引かないな。

「んじゃ、俺も部屋いくわ。ケーキ期待してるからな」

「おう。任せておけ」

いつも楽しそうな親父に思わず苦笑し、俺も部屋に向かう。

俺の部屋は鈴の部屋と隣同士。『トモヤ』とゴシック調で書かれたプレートが掛けられているドアを開けると、いつもと変わらない俺の部屋があった。

足元に散らかっている漫画雑誌を踏まないように気をつけつつ、机の上にカバンを放り投げ、ベッドにダイブ。しようとして思いとどまる。制服のまま飛び込んだら制服が埃だらけになる。ちょっと面倒に思いながらも制服を脱いでハンガーに掛け、朝起きたときに着ていたシャツとジーパンを着たところで予定通りベッドにダイブ。パイプ式の簡易ベッドが軋んだ音を立てるが気にしない。

だるい。あーだるい。だるいー。だーるーいー。眠いー、のに眠くないー。

とりあえず床に転がっていた雑誌を一冊手に取り、パラパラと流し読みながら何をしようかと考える。

と、そこで携帯から『JOINT』のサビの部分が流れ出す。この着メロはメールだな。なにになに…

『From 有吉 弾

Sub 忘れてた

本文 肝試しやる廃病院の場所教えるの忘れてた。地図添付しといたんで確認よろ』

おお、そーいや肝試しなんかやるって言ってたな。玄関先での出来事のインパクトが大きすぎてすっかり忘れてたぜ。

集合は八時だっけ。今が12時ちよいだから時間あるな…。何してようか？

あ、それよりみんなに肝試しに行くって言つとかない。

「つーことで場所を移動して現在一階のリビング。親父はそこでスポンジにクリームをコーティングしていた。」

「なんつーか、普通に出来栄がプロなんですけど。そういや親父の作ったケーキを一口食べた近所のケーキ屋の店長が『一から修行し直してきます』て置き手紙を残して消えたことがあつたけどぼんやり思い出す。どうでもいいか。この程度のことならよくあるし。」

「ということで、今晚肝試しに行つてきます」

「いきなりで話がよく分からないんだが……」

「なんと。超人的な変人である親父にまともな返答をされてしまった。しょうがないか。流石にいきなり過ぎたしな。」

「かくかくしかじか、って訳だ」

「なるほどね。それじゃあちよつとその廃病院までの地図を見せてくれないか？一応確認しておきたい」

「そう来ると思つてちゃんとケーキはメール画面のまま持つてきてるぜ。」

「……………ああ、うん。かくかくしかじか、で伝わったことについてはツツコミは入れないよ？これぐらいでいちいちツツコミを入れてたら一週間で喉がつぶれる。」

『ただいま』

あ、母が帰ってきた。

「丁度いいから優希にも説明してきなさい。私は場所を確認しながらケーキの仕上げをするから」

「おーけー」

フォーク一本でリアルすぎる樹皮をケーキに表現しながら、視線はケーキの画面から離さないという神業をやつてのけるいつも通りの親父に背を向け、俺は帰ってきたばかりの母がいるであろう玄関に向かった。

『……………そうか、肝試しか……。フッフ、随分と面白そうじゃないか。』

どれ、少しだけ悪戯を試してみるか…」

その、いかにも悪巧みしてますよ的な親父の台詞は、どういう訳か俺の耳には届かなかった。

「おかえりー」

「あ、智哉帰ってたんだ。おかえりー、そしてただいま」

両手にスーパーの袋と思しき物をぶら下げた格好で、我が母はゆつたりと挨拶を返して来た。その表情は親父にも言えることだが、とても高校生の息子がいるとは思えないほど若々しいし、どこか抜けている。相手にもよるが初対面の人には大体20代前半辺りに見られる。

「見て見て、今日は大漁だったんだよ」

「ふーん、どれどれ」

親父の様にニコニコしながらスーパーの袋を広げて中身を見せてくるので覗きこむ。

「ステーキ用お肉、560グラム」

「それ絶対業務用」

母上…あなたは一体何処に買い物に行ったのですか？つか肉しっかり人数分買ってきてるし。

「ふふ〜ん、これだけじゃないんだよ。じゃじゃーん、業務用チョコレート10kg」

「有難う御座いますお母様！」

ビシッ！ と完璧な最敬礼を決めた俺は、母さんからチョコレートを貰おうと手を伸ばし、

「（ガシッ！）何をしてるのかな、お兄ちゃん？それは私がお母さんに頼んだものだよ？」

隣に現れた鈴に手を掴まれる。いつの間に来やがった…！

「…この手は何なのかな、鈴？」

「それはこっちの台詞だよお兄ちゃん。人がお願いしたものを横合
いから搔っ攫おうなんて、いい根性してるじゃん」

両親のようににこにここと笑いあいながら、されど目は一切笑って
おらずガンくれ合う。

「いいじゃねえかチヨコレートの10kgや20kg。器が小さい
ぞ、ついでに胸も小さいぞ」

「っ！人が気にしてることを…！ふん、そっちだって妹のお菓
子を奪おうとするなんて大人気ない。ついでに大人毛無い」

「いやあるわ大人毛。そっちこそ大して生えてないくせに」

「なにおう！」

「なんだよ！」

ごろりと額をぶつけ合いながら、鼻先が触れ合う距離で睨み合
う。もうすでに二人で分け合うという発想なんか存在しない。ただ
ひたすらに己の欲望をぶつけ合うだけだ。

だがそんな中、

「あらあら。そんなに近くで見つめ合っちゃって…これからキス
をする恋人同士みたいね」

「ッ!?」

外合いから入れられた母の冷やかしの言葉に、一気に二人で冷静
さを取り戻す。

ヤバイ…この距離はヤバイ。お互いの吐息を唇で感じる。鈴の睫
毛の一本一本の長さまで手に取るように分かるほどの距離。あとわ
ずかでも顔を動かせば口付けを交わせるほど近い。

「…………お兄ちゃん」

あああああああ！やめろお！ほんのり潤んだ目で俺を見つめ
ないでマイシスター！

はっ！そうだシスターだ妹だ！そうだよ鈴は妹、こんな風にうる
たえる必要は無い！

『でも義理じゃん。義理の妹ってなんかぐつとくるものがあるよね』
それには激しく同意するがとりあえず今は黙っててくれもう一人
の俺！てか死ねっ！

「そんな風に取り合いしなくても大丈夫よ。ほら　もう一袋買っ
てきてあるから」

「どんだけ力持ちなんだよ！」

平然とした顔で片手で買い物袋から10kgチョコレートのを袋を
引っ張り出す母親に兄妹揃ってツッコむ。片手に10kgずつとか
普通にスゲエよ。

「そうだ。丁度いいから二人のお昼ごはんはこれにしましょうか」

「あんた鬼か！」

相も変わらずにこにこの笑顔で言っただけのける母に多少戦慄しなが
らも、あの微妙な空気をなんとか出来たことにちよつとだけ感謝し
た。

まじで昼飯はチョコレートオンリーだった。うぶ、もう無理
食えない。これからしばらくは甘いものを見るのも勘弁し『智哉、
ケーキ出来たよー』はい、今行きまーす。

時間はあっという間に過ぎ、時刻は7時30分。特に何をす
るもなくうだうだだらだらとしていたらこんな時間になっちゃった。

地図から判断するところから目的地の病院まで歩いて15分前後
だと思ふ。途中、いつもの十字路で楓と合流することになっている
ので多少早めに出発することにする。

適当に選んだTシャツとジーンズを着て、リビングでお茶をす
っている両親に出かける旨を伝える。

その時、妙にニヤニヤした親父から携帯を渡されたのが気になっ
たが、気にしないことにした。

それよりも、だ。

今一番気になるのは白いワンピースとピンクのキュロットスカートを合わせて着た格好で玄関で立っている我が妹だ。

「何で一緒に出かける気満々なんですか鈴さん？」

「面白そうだからっ」

そうかそうか。面白そうだからやるという考えは分からなくもないので二つ返事で了承する。うちのクラスの奴らは基本的にいい奴ばかりなので問題はないだろう。

「んじゃ、いつてきまーす」

「いつてきまーす」

「「いつてらっしゅい」」

夫婦の完璧の揃った声に小さく笑いつつ、鈴と一緒に玄関を出る。すると、丁度同じタイミングで向かいの家から一人の女性が出てきた。

「あ、トモちゃんに鈴ちゃん。こんばんわ」

「柚葉お姉ちゃん！こんばんわっ」

こちらは小崎柚葉。お向かいの小崎家の一人娘。小さい頃から俺や鈴と一緒に遊んでくれる優しいお姉さんだ。

年が経つに従って俺はあんまり遊んだりすることはなくなったが、鈴とはよく買い物に行ったりするらしいし、俺は俺で時たま街に誘われたりする。なんでも彼氏が出来たときのための予行演習らしく腕を組んで歩かされるからかなり恥ずかしい。逃げようと試みるもすぐにまた捕まる。普段はおっとりしてるくせにいらん時にやけに行動的になるから厄介だ。

今は確か大学一年生のはず。18歳で女性としては相応の身長に規格外の一部をもっていて、そのせいで今着てるシャツにプリントされている猫の顔が歪んでいる。

「こんにちわ、柚葉。というかこんな時間に外に出るなんてどうしたんだ？」

ちなみに俺がタメ口&呼び捨てなのは、何年か前にさん付け+敬語で話しかけたらいきなり泣き出してしまい、泣き止ませようとお

たふたしているうちになんやかんやでこうするよりに約束してしま
ったからだ。どうしてこうなったか。俺も良く覚えていない。

「うん。これからポマのお散歩なんだよ。そういうトモちゃん達は
？」

「俺たちは肝試し。急に今日やることになったんだ」

ポマというのは、今のんきに「うわ〜、面白そう。私もついてい
つていいかな？」と言っている柚葉の足元で大人しくしている柴犬
のことである。

俺が小2で柚葉が小5のときに飼い始めたから八歳そこそこ。飼
い始めた理由が柚葉がクラスの男子に告白されたのを知った小崎家
父が番犬代わりにと思ったらしい。なんて親バカ。

「ほら、お兄ちゃん！早く行こうよ！」

「うえ？ お、おう」

そっぴやポマってオスだっけメスだっけ、と悩んでいたら鈴に急
かされてしまったので、慌てて思考を放棄して歩き出す。

「肝試しか！。何年ぶりかな？楽しみだな〜」

「待てい。何故に柚葉がついてくる」

いつもの散歩コースは真逆の筈だ。

「え？柚葉お姉ちゃんも来るって決めたよ？私の独断で」

あ、そうすか…。

まいいか。夜道の女の一人歩きは危ないし。うちのクラスの面子
なら笑いながら（男子はテンションを上げて）向かい入れてくれる
だろう。

その後、楓と合流した。楓と柚葉はそれぞれ初対面だったが、鈴
がいい感じに間を取り持っていてくれたお陰でそれなりに仲良くな
ったようだ。今では女子三人で楽しそうに話してるし。

…そのせいで俺は軽く孤立してるんだけどね。まあ三人が楽しそ
うだから俺はそれで満足だけだな。

ゴメン嘘。やっぱり軽くさみしいです。うわーん、ポマ慰めて〜。
「わふん」

ぼんぼんと前足で励ますように叩いてくれるポマ。その優しさに俺は軽く涙ぐんだりした。

廃病院の前にはもうそれなりに人数が集まっていた。全員が参加するわけでもないだろうし、それでも三十人前後集まっているんだから十分だろう。つかみんな暇だな。

「お、来たか智哉。遅いつつーの」

待ちくたびれたであろう弾が眉間にしわを寄せているので、悪い悪いと軽く謝る。

「数人からは来れないという連絡があつたので、とりあえずこれに参加するメンバーは全員集まりましたね。ところで智哉さん、そちらのお二人は？」

修也が後ろにいる鈴と柚葉に視線をやりながら聞いて来る。そういや修也は知らなかったけ。

「このサイドテールのが俺の妹の鈴。んでこっちのおっとりお姉さんがお向かいの小崎柚葉さんだ」

「はじめましてっ。お兄ちゃんの義理の妹の鈴です。血はつながっていません！よろしくお願いしますっ！」

「はじめまして。小崎柚葉です。トモちゃんとは小さい頃から仲良くして一緒に風呂に入ったこともあります。よろしく願います」

うん、おかしいね。普通なら血がながっていないことはもう少し隠すことなんじゃないかな？あと一緒に風呂ついても最後に入ったのは俺が小3の時だぞ。……あれ？これもおかしいか？

『……………チッ』

……………なんだろう。男性陣から尋常じゃないレベルの真っ黒い怒りを感じる。

「ちよちよちよちよーとこっちに来てくれるかな智哉くん？

」！

「あん？なんだよ」

なんかテンションがうざいくらいに上がっている弾に引つ張られて三人から離される。

「おま、あのちょー胸のでかいお姉さんは誰だよ？まじストライクだわ。紹介してくんない？」

「いやだよ。今のお前の台詞聞いて紹介できるか。胸しか目に入っ
てねえのかお前は」

「当たり前だろ！女性といえはおっぱい！おっぱいは言わば母性の
象徴。男がそれに惹かれるのは致し方のないこと。あえて言おう。

俺は、おっぱいの大きな女の人が好きだ ！！」

「……うわぁ」

「流石にそれは……」

大声で宣言した弾に対し五メートルほど距離をとる。もうみんな
どん引きですよ。近くで話を聞いてた修也も笑顔が崩れかかってる
し。ほら、その女子なんか通報しようとしてるよガチで。

「なんだよお前らその反応は！じゃあお前らはどんな女の人がいい
んですか！？」

どうやらキレたらしい弾が俺と修也を指差しながら怒鳴ってくる。
仕方ないので修也と顔を見合わせタイミングを揃えて言う。

「可愛けりやなんでもいい」

「未発達の肢体にしか劣情を抱けません」

「お前らのほうが最悪じゃね！？」

え、そうか？いやいや、修也の回答はともかくとして俺のは遥か
にまじだろう。弾の理論で行くとお前はジャイ ンの母ちゃんでも
いいということに……ならないか。

「ちよっとー。いつまでバカ話してんのよーっ。待ちくたびれたん
だけどー？」

「ん、おい。あっちの人たち痺れを切らしてんぞ」

「ああ、そうだった。こんな思春期男子にありがちなトークしてる
場合じゃなかった」

いや話し始めたのはお前だろうと内心ツツコんでいると、当の弾はなにやらポケットをこそこそさせて何かを取り出した。ええつと… 割り箸？

「肝試しは二人一組のペアで行う。そのペアを決めるのがこの俺お手製のクジだ。同じ番号のやつ同士で組め。反論は認めん。決まった奴からさつさと入っていってくれ。んじゃまず智哉、引け」

ずいっと差し出された割り箸の束。ここはあえて一番端のを選択。思いっきり速く引いて摩擦熱で弾を苦しめる。

「熱っ！ てめこのやるっ。… まあいい、十三番か。よし、次は楓だ」
「……分かったわ」

何故だろう。楓が何か不機嫌そうなんだけど。なんかこう近寄りがたいオーラが出てる。こんなときの楓には近づかないのが一番だな。

「おし、引いたな。楓は……お、十三番だ。すげえ」

嘘だーッ！ なんでよりによってこのタイミングでペアになるんだよ！

「ということだ智哉と楓はペアだな。んじゃとつと行って来い」

ほい、と弾から懐中電灯を手渡される。……しょうがない。ここまできたら覚悟を決めるか…。

「楓、行くぞ」

「……分かってるわよ」

相も変わらず何処となく不機嫌そうな楓に軽く脅えながら、俺と楓は病院の中に踏み込んだ。

「…行ったか」

「ええ、そのようです」

智哉と楓が病院の中に消えるのを確認した弾は、残ったクジをま

『誤魔化す理由が「作りすぎたから」なんてのでまかり通る訳がないだろう！』

『でもなんで智哉はそれを信じるんだよ！バカなのかわざとなのかはつきりしやがれ！十中八九素で気付いてないんだろうけど！』

あちこちから湧き上がる男子の怨嗟の声。すでに女性陣は数メートル離れている。

だがそんなことにも気付いていない男性陣。そのリーダー格である弾は燃えていた。

「絶対にくつつけてやる……！覚悟しろよ……智哉……楓……！」

第37話 『変態』のワンランク上って『変人』だと思っ(後書き)

今回無駄に長ッ！

という訳で、どうも作者です。

なんとなくノリではじめてみた過去編(?)的なもの。意外と指が進まないもんですね。

もう少し短く収まるかな、とっていたのだけれど、なんか長くなってしまった。

それよりもまた無駄にキャラを増やしてしまった。どうやって收拾をつけよう。

それ以前にこの過去編(?)の終わり方はどうしよう…

いくつも悩みを抱えたままではあるが、とりあえずは、もう間近に迫っている学校のテストを何とかしたいと思います!!

それでは、さいなら

第38話 吃驚し過ぎて死んだときって死因なんて書かれるんだろ (前書き)

ウヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ
ヤヒヤヒヤヒヤ

アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハ

グヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘ
ヘヘヘヘヘヘヘ

クカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカ
カカカカカカカカカカカカカカカカ

……すみません……

第38話 吃驚し過ぎて死んだときって死因なんて書かれるんだろ

病院がつぶれたのはここ数年のことらしいので内装はまだ綺麗かと思っていたが、そうでもなかった。

あちこちに投げ捨てられたスナック菓子の袋。タバコの吸い殻が詰め込まれた発泡酒の空き缶。壁にはスプレーでカラフルに絵が描かれている（何気に上手い）。

これはあれだな。きつと悪ぶっているお兄さん方が溜まり場として使っていたりするのだろう。しかしその人たちはここで何をしていたのか。待合室に並べられていたと思われる椅子は一つ残らず壊れている。窓ガラスだって割られていないものの方が少ない。患者を運ぶためであろうストレッチャーがここまで運ばれてきていて、尚且つ破壊されている。もう何がしたかったのか皆目見当も付かない。

建物の中はほぼ真っ暗。今見た光景も懐中電灯で照らせる範囲でのもので、実際はもっと酷かったりするのかもしれない。

とりあえず、足元には気をつけよう。なんか変なものが落ちてたりしないか不安だし。

見取り図を確認……って、思いつきりペンで『順路』って書いてるぞ。しかも油性だし。いいのかコレ。

ルートは色々巡って四階の院長室にある名簿に名前を書いて戻ってくるのか。詳しい説明まで壁に書いてるけどマジでいいんですかね。

まあいい。とりあえずさっさとクリアしまおうぜ、と振り返って楓に言おうと？

ん？あれ、気のせいかな。いやいや、でもちゃんと感覚はあるから間違いでも錯覚でもないんだろう。でもやっぱり……何で？

「あのお………楓さん？」

「……なに、文句でもあるの？」

いや別に文句って程でもないけど、ただ純粹に疑問に思ったただけであってですね。

……なにゆえシャツの端っこを掴まんでいらっしやるんですか、アナタは？

原因は分からんでもないんだけど、なんか認め辛い。理由は若干猫背気味になつて俯き加減になりながら見上げてくる楓の目だ。軽く潤んでるくせに睨んでいるように見える。まるで自分より年上のいじめっ子に挑む少年みたいな目をしている。

その視線にやや居た堪れなくなったので目を逸らし、

「まあ…暗いし危ないからな。安全対策としてはいいんじゃないか？」

「……いまいち意味が分からないんだけど、言いたいことがあるならハッキリいいなさい。余計に腹立つから」

「…このチキンが」
「殺すわよ」

ひいっ！視線が射殺さんばかりの鋭さを持ったもの変わった！なんだよう、ハッキリ言えっていったのはそっちじゃんかよ。

「…もついいわ。ほら、さっさと行きましょ」

そう言いながらぐいぐいと俺の背中を押す楓。いつも通りに見えるが背中を押す手がやや震えているのがなんとなく分かる。ホントに怖いんだろうというのが分かった。

「……ほら」

軽く振り返って左手を差し出す。

「掴むんだつたらこつちの方がいいだろ。それで怖いってんなら引き返してもいいぞ」

「べ、別に。このくらい平気よ」

強気な発言をしつつもすっかりと手を握ってくる楓に苦笑しつつ、俺はその小さな手を引いて歩き出した。

…いやあ、まさか楓が怖がりだったとは思わなかったな。しかもこんなにプルプル震えちゃって。ぷぷつ。肝試しが終わったらこれ

をネタに思いつきりからかって

「ふんっ！」

「おぎゅっ!?!」

肘が肝臓レバーに突き刺さった……………ぐはっ。

「…なんだろう、ちよつとイラッとした」

「奇遇ね、鈴ちゃん。私もよ」

丁度智哉と楓がをつないだ頃、廃病院の外で鈴と柚葉がぼそりと呟いた。なんとという勘の良さ。

「む。恋する女センサーが発動したということは、中で智哉と楓がなにかしらしたということだな。よし、そのまま上手いこといつちまえ！」

なにやら初耳の名称を当然のように口にする弾。すでに彼の半径五メートルに女性はいない。実はメスだったりする犬のポマですら近づいていない。むしろ警戒して唸っている。

と、そんな中、ふと鈴が声を上げる。

「あれ、弾さん？ 吊り橋効果って、怖いと思う気持ちを恋心と勘違いしちゃうことを言うんだよね？」

「まあざっくりと言えはそうだな」

そう返された鈴は少し何かを考えると、徐に呟く。

「なら、この作戦は上手くいかないね」

「!?!? ど、どういうことだ、鈴ちゃん!?!」

「うん。楓さんともかくとして、お兄ちゃんは吊り橋効果にはならないと思う。お兄ちゃんはバカで、鈍感で、唐変木で、Hで、節操なしで、優しく、かつこよくて、いざという時頼りになって、夜な夜なえっちいゲームをこっそりやってるような人だけど、一つ

だけ取り柄があるの」

なんか途中で軽く惚気られたような気がするが、話を聞いている人たちはそこは気にせず鈴の言葉を聞き続ける。というか毎晩工口いゲームやってるのバシってますよお兄さん。

「それはね……お兄ちゃん、怖がらないの」

「……………へ？」

話を聞いていた全員がぼかんとする。しばらくきよとんとするが、早めに復活した何人かが「どゆこと？」と聞いてくるので鈴は続ける。

「去年の夏休みくらいにね、お父さんが夏だからって理由でT U T A Y A から大量のホラー作品を借りてきたの。それを家族全員で連続で観ることになって、雰囲気を出すために部屋も暗くして冷房の温度も低くして。ほとんど一日中ぶっ続けて観たの」

怖いのが苦手な何人かは想像しただけで「うっ……」と顔を歪ませる。怖いならなんで肝試しに来たんだ。

「借りてきたのは外国のスプラッタ系から日本の怪談系までいろいろあってね、普通ならどれか怖がるよね。実際私とお母さんなんか震えちゃってさ」

でも……、鈴は続ける。

「お兄ちゃん、どれを見ても何の反応もしないの。画面の中で殺人鬼のチェインソーが女の人のお腹を裂いて　　が千切れて

が飛び出して　　になっても、鏡から出てきた幽霊

が何人も　　にしても、顔色一つ変えなかつたんだ」

「……………」

話を聞いていた全員が押し黙る。尚、沈黙した理由は智哉が云々ではなく鈴の言った内容があまりにもアレだったためである。

もう一つ付け加えるならその時、篁家父はグロシーンを見て爆笑していた。意味が分からな過ぎる。

ともあれ。話が終わったのが分かった弾は今聞いた話を改めて頭の中で思い返し、

「つまりは、楓はともかく智哉は肝試し程度じゃ怖がらない、と」
「うん」

「これでもし楓が怖がりだったりしたら、今回のことでさらに好感度は上がることになるかも、と」

「…うん」

「そして、智哉はやっぱいつもどおりでそれに気付かなくて、そのせいで楓のアピールは空回りして、俺らはその光景に軽く同情しつつもそれ以上に怨嗟を募らせることになる、と」

「……へえ、そんなことになってるんだ…」

背後に黒いオーラを出現させる鈴。その足元で四つんばいになって激しく落ち込んでいる男性陣。そのそばで、

「うう…どうしてそんなに鈍感なの、トモちゃん…小さい頃から私や鈴ちゃんがあんなにアタックしてきたのに気付いてくれないなんて…」

「…それが原因なのでは？」

「え？」

「小さい頃からアタックされ続けたせいで、女性とはそういうものだと思っ込んでしまったのでは？」

「………」

「………」

「うわあああああ！しまったああああああつ！…！」

柚葉と修也が会話しているその近くで、

「わう」

犬のポマが、あきれた様に小さく鳴いた。

「はっ！」

「ふえっ！？ な、なに！？どうしたの？」

「いや…なんか今、俺のトップシークレットがあっさりぶっちゃけられて、その上軽く流されたような気がする…」

「どうでもいいわよそんなのっ！」

顔を真つ赤にした楓に怒鳴られる。いやいやマジで。何か一度自分という人間を見つめ直さなきゃいけないような気になったんだって。どうでもいいけど。

何はともあれさっさとこれを終わらせなきゃいけない気がする。

今いるのが二階の廊下で目的地の院長室が四階。さくつと進むとしますか。

「んじゃ、行くぞ」

「わ、分かつ ひっ!？」

おずおずと楓が一步踏み出した瞬間、その頭上を作り物の生首が通り過ぎていく。なんてタイミングだ。

こんな風にあいつらが仕掛けたであろう仕掛けが発動するたびに楓はかなりビビる。怖がりつてのは本当らしい。

それはいいんだけどさ。

できれば…その…驚くたびに腕に抱きつくのは、止めていただきたいんですが。…くそう、楓のくせに柔らかいじゃねえかよ。

ああ、そういや前にもこんなことあったっけな。いつだったか親父が大量のホラー映画を借りてきた時、怖い場面になるたびに隣に座ってた鈴がしがみついてきて、鈴のくせにやわらかくて、動揺を顔に出さないようにするのに必死だったな。おかげで映画全然楽しめなかったけど。

しかし…鈴も楓も胸ないな。いやあるにはあるんだけど柚葉と比べると無いに等しいし。目測だと六倍はあるし。本当に神様は不公平だと思いました、まる。

そんなことを考えながらサクサク進む。時折襲ってくるトラップはほとんどが意表をついて驚かせるものばかりなので、どっしり構えていれたいした事はない。むしろ、その一つ一つに律儀にびく

ついで、その度に抱きついてくる楓の方が気になる。めっちゃくちゃ心臓バクバクいつてるよ。気付かれないといいけど。

四階へと向かう階段へと差し掛かる。ここの階段はどこも塗装だからノリウムだかかはげてて真っ黒いのがむき出しになっていて、転んだりしたら危ない。というのに楓は俺の腕をぎゅっと抱きしめて軽く及び腰になって歩いていてかなり危ないと思う。俺の理性的な意味も含め。

大体さ、俺の周りの女の子は無防備すぎると思うんだよ。風呂上の鈴なんてシャツとパンツだけでうるちよろするし、柚葉はなんでもあんな小さめのシャツを着るんだよ。そしてなんでいつも腕を組んできやがるんだ。

今の楓だつてそうだったの。いくら小さいからって全く無いつて訳じゃないんだぞ？なのにこんなに抱きつきやがって、そこら辺の男なら襲い掛かってもおかしくないんだぞ？

俺なら大丈夫だ。小さい頃から鈴や柚葉でそういうのには耐性ができてるし、女の子とそういうことをするのは双方の合意の上しかありえない、って思ってるからな。コレ絶対。

一つの扉の前で立ち止まる。扉の上には『院長室』と書かれたプレートが設置されている。目的地に到着したらしい。扉を開ける。

真っ赤だった。

「きゃあ!」

楓が飛び上がった俺に抱きつく。うん、気持ちは分かるよ。だって部屋中に真っ赤な液体がぶちまけられてるもん。流石にこれは俺でもビビった。

え?じゃあ何で声を上げないかって?そりゃ、俺が声を出すより早く、楓が抱き着いてきたからだよ。腕に、とかじゃなく完全に体に手を回して。ムニユってしたりいい匂いがしたりして恐怖心なんてどっか吹っ飛んでいっちゃったよ。

「ほら落ち着けて。よく見る、これペンキだぞ。臭いもするし」
ぶるぶると震えている楓にできるだけ優しく話しかける。という

が早く離れてくれ。早くしないと俺の息子がオーバードライブ。

「え……、あ、本当だ」

分かってくれたようで体から手を離す。助かった反面、ちょっと残念のような気もする。

それはさておき。目的の名簿はペンキの被害を逃れた机の上にはぽんと置いてあったので、備え付けのペンでさらさらと名前を書く。

「これで……よし、と」

道のりは短かったが、まあそれなりに面白かった。そう思ったのは楓も同じようで、自然と顔をあわせて笑い合い

と、どこからともなく不気味で陰気で、されどテンポはいい暗めの曲が聞こえてくる。

「うおあつ!?!」

「ひゃい!?!」

二人して飛び上がった。

「何だ!?!いきなり『世にも 妙な物語』のテーマソングが あ、俺の携帯だ」

「アンタぶつ飛ばすわよ?!」

いや違うんだって。だって俺の携帯の着信音は大体アニソンだし。こんな不気味な音流すわけがないって。つか誰からだよ?……親父からのメールでした。

えっと、なにになに? 『そろそろゴールした頃合いかな、と思ったのでメールしました。俺の作った音楽、楽しんでくれたかな?』か……タイミングがばっちり過ぎて怖いし、曲作ったって何よ、とか言いたいことはあるんだけども。なにはともあれ、せーの、

「あんのクソ親父イイイイイイイイ!!」

「まったく、人騒がせなんだから」

「どうもすいません」

先ほどの世にも奇妙な着信音のせいで楓はややご立腹のようだ。ぶんぶん怒りながら先に部屋を出て行ってしまふ。俺は適当に謝りながらそれを追う。

「……………」

「……………」

二人の間に会話は無い。先に行く楓は怒ってますよアピールだろうし、俺に至ってはなんとなくという理由でだ。こつこつ時は何も喋らないのが俺の流儀だったりする。

…ふと。本当にふつとだけど、行きとは違い誰もいない左隣が、なんとなく寂しく感じた。

「……………ねえ」

「ん？なんだ」

いきなり話しかけられた動揺を出さないようにしながら返事をす。三階へと続く階段の手前で立ち止まると、楓は振り返ってこちらを向く。

「最後のはちょっとアレだったけど、それまでは、そこそこ面白かったわよ」

いや面白かったって、あんたずっと震えながら俺にしがみついていただけじゃなか。まあいいか。本人がそう思ってるなら。

「そうか。で？」

「…で？ つてなによ？」

「それくらいのことなら歩きながらでも言えるだろ。わざわざ立ち止まったってことは、まだなんかあるんだろ？」

「うつ……………普段はありえないくらいに鈍いのに、変なときに限って鋭いんだから」

なにやら楓が苛立たしげに唸っている。おいおい、俺は鈍くはないぜ。と言うとなんか主人公っぽいよな。自分のことをごくごく平凡な人間だと言っくらいに主人公フラグが立ちそう。そして

そのままあれよあれよと言う間に摩訶不思議ワールドへ、なーんてのは御免なんで、俺はあえて言う。俺は鈍い人間だぜ。

「ほれほれ、ぼやいてないで言ってみろ」

「くっ……」

楓は苦しげに呻くと、俯いて「あー」だの「うー」だの言ってるやらモジモジすると、顔を上げてきつとこちらを睨む。その顔はやや赤かった。色々なんですさ。

「だから…その…あ、あ…あ…!」

「カオ シ?」

「違うわよっ。だから…その…ね、あ、あ…」

どうしたってんだよ一体。さっきから「あ」としか言えてないぞ。どんなことだろうとばっと言えるのが楓のいいところのはずだろ。常々見習いたいと思っていたのに。

「あ…あ、あ」

「あ?」

「あ、ありがとうっ!」

先程よりもさらに顔を赤くして、楓はそう言った。

「……………はい?」

「だから、ありがとうっって言ったの!手を繋いでくれたこととか、いろいろありがとっ!」

いやあのそんな風に怒鳴られたら感謝されてる気がしないんですけど。

ていうか、

「…ぷっ」

それだけのことを言うために、あんなに恥ずかしがってたのかよ。そう思うと、ついつい噴き出してしまった。

「な、何笑ってるのよ、バカ!」

ふん、とそっぽを向く楓。ああ、やっぱり怒っちゃったか。

「まったく、コイツはいつもつんけんしてるくせに、たまーに、
「可愛いんだよなあ」

「ふえっ!?!」

あ、やべ。つい口に出しちゃった。あらら、楓ったら顔が真っ赤じゃん。

「な、なにバカなこと言ってるのよ!?!ほら!さっさと帰るわよ」「顔を赤くしたまま、なんでもないように振舞う楓に、また小さく笑ってしまう。今度は気付かれなかった。

その時だった。

「あっ…!」

楓が足を滑らした。それも、階段に差し掛かる手前で。当然のように、物理法則だか慣性だかに従い、楓の体は階段へと落ちていく。その顔は何が起こっているか理解できていないようで。その姿がまるでスローモーションのように見えて、

「楓ッ!?!」

咄嗟に出る前に、こちらに伸ばされた手をつかめた自分を褒めてやりたい。

けど、踏ん張りが足りなかったらしく引き止めれない。おまけに俺の体までもが引つ張られて、俺の体までもが宙に投げ出される。

「きゃああああああああ!」

「くっ!」

俺にできる事といたら、ようやく事態を理解できたらしく悲鳴を上げる楓を胸に抱きかかえることだけだった。

「ん…うん?」

背中から小さな楓の声が聞こえる。どうやら気がついたようだ。

「お目覚めですか、お姫様」

「ふえ…?」

気障っぽい台詞で覚醒を促す。色々と説明しないといけないこともあるしな。

「あれ、智哉?私、どうして…って何よこれ!」

現状を確認できたらしい楓がじたばたと暴れだす。ちよ、おま、危な。

「とりあえず落ち着け。ちゃんと説明するから」

「それよりもまず降ろしなさいよ！　痛っ！」

右足を俺にぶつけた楓は苦しそうに言う。あーもう、だから暴れるなって言ったのに。

今現在、楓は俺におぶられていたりする。理由は、

「お前は階段から落ちたの。で、その時に運悪く足を捻りました、以上」

「え？…ああ、そういえば私階段から…ちょっと待って。アンタも一緒じゃなかった？」

「まあな。悪いな、止めれなくて。ギリギリで庇おうとしたんだけどそれも失敗した。本当にスマン」

「別にいい、っていうか、アンタの方は大丈夫なの？怪我とかしてない？」

「俺は平気。意外と頑丈だった」

「そっか…」

「ならよかった…」と言って安堵のため息を漏らす楓。自分は怪我したつてのに、他人の心配するとか、良い人だな、コイツ。

俺の中で楓に対する好感度が上昇する。大した意味はないけど。

「私の足、どんな感じだった…って、分かるわけないか」

「ああ、本当に軽く捻っただけだ。安静にしてれば月曜までには良くなるよ。最も、今変に酷使すれば悪化する可能性もあるから、降ろさないよ」

「…スゴい。どうしてそんなの分かるの？」

「両親ともに医大を出てるからな。そっち系の知識はある程度持つてる」

「え！？医大！？」

「うん。二人が出合ったのもそこでらしいよ。母さんは元産婦人科医なんだって。俺を生んだのを機にやめたらしいけど」

「ふうん。……あれ、龍一おじさんさんって働いてないわよね。アンタの家の収入って何？」

「え〜と確か、親父が株で儲けたり、親父がたまに一週間ほどいなくなっただと思っただらごっすり札束持って帰ってきたり、親父がどっかの大学で講義したりして稼いでる。ああ見えて親父教員免許持ってたんだぜ」

「アンタん家が分からない……」

安心しろ。俺もよく分からない。分かりたくもないとも言っつ。

そんな感じで適当に雑談をする。丁度二階の廊下を歩いていると、楓が言う。

「ねえ、ひとつ聞いていい？その…鈴ちゃんのこと」

「別にいいけど」

「もちろん、話しづらい事だったら言わなくても え、いいの？」

お前から聞いてきたくせに、何を言っているんだよ。

「んで、なんだ？スリーサイズなら聞かないでやってくれ。可哀想だから」

「…なんで妹のスリーサイズ知ってるのよ、変態」

自己申告して来るんだよ。ウチの義妹は羞恥心大切なものをどっかに置いてきちまったみたいなんだ。

「そうじゃなくて、その…鈴ちゃんが、家族になった理由、みたいな」

「…あー」

そついやいつも義理義妹と言いつつも、理由とかがって話したことなかったっけ。

「…やっぱり、話したくないことだったりする？」

「いや、そんなことはないんだけど。一応本人に断った方がいいよ
うな…ま、いいや。メンドいし」

後ろで楓が「面倒って…」とあきれたように呟いたのは無視する。

「そつだな…まず第一に、鈴は父さんと母さんどちらかの連れ子、とかではない。家族の誰とも血は繋がってない」

「……………」

「さつき母さんが元産婦人科医だったのは話したろ。俺を産んで、育児に専念したいからって理由で止めたんだって。んで、止める直前に受け持った女の人がいたらしくてさ、その人、付き合ってた男に子どもができた途端に逃げられたらしい。それでかなり大きなショックを受けたらしくて、もともと体も弱かったみたいで、出産すると同時に亡くなったらしい」

実際はもうちょいドロドロとしたお話なんだけど、頑張ってる程度丸くしてみた。

「さらに悪いことにその女の人は両親もいなかったらしい。親戚も少ない。じゃあ子どもをどうするって話になって、施設に入れるくらいならウチが引き取って母さんが言いだして、なんやかんやで篁鈴の完成ってことらしい」

「……………」

できる限り軽めに話したつもりなのに、楓は絶句している。まあ確かに、そんな簡単な話じゃないよな、コレ。

そのまましばらく無言が続き、

「アンタ達も色々大変なのね」

「そう言われても、俺たちは全然気にしてないからな。両親からしたら鈴は大事な娘だろうし、俺にとっても大切な家族だから」

一階への階段を下りながら言う。

……… 実際はそんな風にあっさり割り切れるわけもなく、ちょっとした問題もあつたりしたのだが言わない。ここからは流石に鈴を一緒にしないと話せない。

微妙な空気になったまますすたと進む。するとまた楓が、

「ねえ」

「今度は何だ？」

「このままみんなのところに行ったら、また騒がれるんじゃない？」

「……………」

言われてみればそうだな。基本的に騒がしいやつらだし、うざい

くらいにからかわれるかもしれないな。

とは言っても、楓を降ろすわけにもいかないしな…。

「じゃあ選択肢だ。1・お姫様だっこに変える。2・普通のだっこにチェンジ。3・肩車にする。4・現状維持。さあどれがいい？」
「4に決まってるでしょ！ていうか1から3の選択肢ふざけてんじやないの!？」

ありやバレちゃった。他のもやってみたかったんだけどな。い
いか。今でも十分役得だし。

「でも大丈夫だろ。あいつら基本バカだけど、説明すれば分かって
くれる奴らだって」

「…それもそうね」

よし。楓が納得してくれたところでさくさく行くか。

『あいつらは基本バカだけど、説明すれば分かってくれる奴らだっ
て』

そう思ってた時期が、僕にもありました。

「いよっしやあー!! 作戦成功だー!!」

「これで、もうこれ以上シャーペンやら鉛筆やらを折らなくて済む
ぜー!!」

「でも何だろう。この胸の中のモヤモヤは。俺は一体コレをどこに
ぶつければいいんだろう…?」

「いやあああああああ!? 嘘よ! こんなの嘘よっ!」

「あんなバカみたいなの作戦が成功するなんて、なにかの間違いよ!
「それより楓が羨ましいっつー!!」

ナニコレ? 男女入り乱れての大騒ぎ。大部分が叫び、残りのメン
バーはもれなく何かに絶望したような顔をして真っ白に燃え尽きて
いる。正直ご近所から通報されないか心配だ。

「兄さん、ちょっとお話しようか…?」

額に青筋浮かべた鈴がにこやかな笑みを浮かべて尋ねてくる。そ

こら辺の男なら一瞬で惚れそうな笑顔だが、気をつける。目が一切笑っていない。こいつが俺を“兄さん”と呼ぶときはマジギレしている時なのだ。

「何でそんなことになってるのか、ちゃんと説明してくれるよね？」

「これまた最上の笑顔を顔に貼り付けた柚葉。気のせいかな、背後に『ゴゴゴゴゴゴゴゴ……！』って文字が見える。」

説明か……。説明って言われても……。いいや、ざっくりまとめちゃうか。

「色々あって……（足が）痛くて上手く歩けなっというからおぶることになった」

「……………」
「あれ、何か全員ぼかんとしてる。一体全体どうしたって」

「『Cまでイッたのかー！！？』」
「うおっ！？」

なんかいきなりハモッて叫びだした。なんて言ったのか俺は上手く聞き取れなっただけ、後ろの楓がものすごく狼狽しているようなのできつと変なことだったのだろう。

「うわあああん！トモちゃん汚されちゃったよお！！」

「……こうなったら、兄さんを殺して私も……！」

なんか失礼なことを言ってる人と物騒なことを呟ってる人がいる。できれば関わりたくないんだけど、残念ながら家族とほぼ家族の方でした。

「Cって……私とコイツが！？バ、バツカじゃないの！？」

……………お前ら全員、とりあえず落ち着け……

……………説明中（同時に強制的に沈静化）……………

説明が終わると、

「ちょっと、楓大丈夫なの？」

「階段から落ちたなんて…他のところも怪我したりしてないの？」

「頭とか打ってないよね？」

「というか何故お前は無傷なんだ」

「階段から落ちてたいしたダメージ無いとかスゲえ」

「咄嗟に庇ったって…それが主人公体質の力か」

楓は俺の背中に乗ったままクラスメイトの女子に心配されている。こいつはなんだかんだで面倒見がいい奴なのでクラスでの人気は高い。そして男子どもは少しくらい俺の体の心配をしるよ。まあ問題は無いんだけどさ。

それからしばらくして、

「二人とも、今日はこんなことになっちまって、ホントにゴメンな」
発案者であり一応この集まりのリーダー的な立場にいた弾が、代
表して頭を下げてくる。楓の怪我のことでそれなりに責任を感じて
いるらしい。いやいや、お前には一切責任は無いだろう。俺たちの
不注意が原因なんだし。

「俺らのことは気にすんな。幸い、楓の足も大事には至らなかった
し」

「そうそう。だから私たちは気にしないで、残りの人たちも肝試し
を楽しんできなさいよ」

あんなにみんなノリノリだったんだ。きつととても楽しみだった
んだろう。俺たちのせいでみんなが楽しめなくなるのは心苦しい。
そう思ってたの発言だったのだが、

「……………」
何故だろう、みんなが気まずそうに目を逸らしました。おいどう
した。こっち向けよ。

「い、いや、その、あれだ」

妙にどもりながら弾が話し出す。つかお前汗掻き過ぎだろ。

「楓怪我しちゃったじゃん？もしかしかしたらまた同じことが起き
ないとも限らない。だから…とりあえず、今日のところは解散しよ
うかと…」

「……………」

今度は俺と楓が何も言わなく、いや、言えなくなってしまう。弾
…みんな……

「なんか、ゴメンな。俺たちのせいで……」

「うん…本当にごめん……」

「いやいやいや、いいんだって。こつちこそあれだ、お前たちで中
が安全か確かめた、みたいなことになって悪いな」

そんな風に考えて…みんなが目を逸らしたのも罪悪感からなんだ
な。そんなこと気にしなくていいのに……。

感動で軽く視界が潤んできた俺は、それを悟られないように、今
できるとびきりの笑顔でみんなに向き直る。

「今日はこんなことになっちゃったけど…またいつか、みんなでこ
んな風に騒ごうな」

俺のこの一言で、肝試しはお開きとなった。

まあ、この言葉が叶うことはないんだろうけどさ

「…こんなもんだな」

そう言つてトモヤはグラスに残っていたジュースを一気に煽った。
同じように俺も酒を飲みながら思考する。

トモヤのような《渡り人》。どういう訳か別の世界からこの世界
へとやってきた人間。何故彼らがこの世界へ来てしまったのかはま
だ説明されていない。当人達すらも分かっていないのだから当然か。

《渡り人》という現象が起こり始めたのは大体千年前。それ以来
今日まで、何人も異世界人がこの世界へとやってきた。

彼らは当然元の世界へと帰りたいが。けれど、どうやってもそ

れは叶わなかった。

そのことに絶望し、あるいはまったくの別のことが原因で、自ら命を絶つ者もいた。この世界の暮らしに適応できず命を落とした者もいた。帰ることを諦めこの世界で天寿を全うした者もいた。終わり方は違うが、少なくとも彼らは元の世界に帰ろうとあがいた。

けれど、目の前の少年はそんな素振りは僅かも見せない。今話を聞いたがとても楽しそうな世界だった。彼は本当に帰るのを諦めたのだろうか。あるいは……。

「トモヤ……アンタ、随分と楽しそうな生活してたのね……」

「うおっ?! エルナ!? お前寝たんじゃ……つかフィナとアリスとシルフィアまで起きてるし! 止めてっ! なんで俺の体を抑えるの!?!」
「すぐ隣であんな話をされたらいやでも目が覚めるわよ……。それよりも、アンタには聞きたいことがあるのよ……」

あーあ。トモヤの奴、まーたやられてるよ。それでも可哀想だと思えないのは、気がつけないあいつの鈍さが原因だと分かりきっているから。つかあの話聞く限り、アイツに惚れてる女はもう……三人はいるな。うわー、羨ましい妬ましい。ちよつと軽く消し去ってやりたい。まあ、俺には愛すべき妻がいるから問題ないけど。

……あいつが元の世界に戻りたいかは俺が気にすることじゃない。それはあいつと、もつとあいつの近くににいる奴らが決めること。俺みたいなおっさんは、一步離れたところから支えてやればいい。

だからとりあえず、

「正直になにかを吐かせたいときには、酒の力に頼るのが一番だぞ

」

「おいっ、酔っ払い! 何言っつてやがんだこら!」

「……………」

「え、ちよつと待つてくださいエルナさん。落ち着いて。ね、落ち着こう。とりあえずその手に持った酒瓶を置いて、それからゆっくり俺と話し合　おぶっ!?!」

口に瓶口を突っ込まれ、ぐびぐびと無理やり飲まされていくトモ

ヤ。瓶の中身が空になるまで飲まされ、瓶を抜かれるとともに首を落とす。そんなトモヤに、女の子達が詰め寄る。

「トモヤ、ハッキリと答えて欲しいんだけど。その……前の世界でさ、付き合ってた女の子とか」

あんな風に顔を赤くした女の子にあんなこと質問されるとは、男冥利に尽きるな。

ただ惜しむべきはトモヤが完全にダウンしていることだな。なんだあいつ、酒に弱かったのか？こればかりは体質だか仕方ないが、もったいないなあ、このおいしさが分からないなん　ん？トモヤの顔が徐々にながらなっていつてる。目元は髪で隠れてうまく見えないな。大丈夫なのか？

あん？今、キューピーンって感じで目が光ったような　？

おかしい。

何がおかしいかって言うと、昨夜ユアン達に前の世界の話をしからの記憶がない。一体どうしたんだ俺は。なんかエルナ達に詰め寄せられたような気もするが、かなり曖昧だ。

おかしいといえばエルナ達も変なんだよ。俺を見た途端おかしくなるっていうか。エルナは俺を見ると顔を真っ赤にして逃げ出すし、フィナも俺を見た瞬間顔を赤くして俺と顔をあわせようとしない。アリスはやはり顔を赤くして頭から湯気を出すし、シルフィアに至っては顔を赤くする前に気絶してしまった。いや本気で一体どうした。

事情を知ってそんなユアンに聞いても、「酒を飲んだら人格が変わるっていうか、お前は未恐ろしい奴だな。とりあえず、俺の娘の前では酒を飲むなよ？」と、よく分からない言葉を貰った。

ということは俺は昨日酒を飲んだのだろうか。いやでも一切記憶が無いし。仮に酒を飲んでいたとしても、それではエルナ達のあの態度を説明できない。

うーん、謎だ。

第38話 吃驚し過ぎて死んだときって死因なんて書かれるんだろ(後書き)

あつるえー？おつかしいなあー？

初投稿から一年たつてると思ったらそこからさらに一ヶ月もたつて
るよー？

……ちよつとマジでヤベえなこれは。こんな調子だと完結まで何年
かかると思つてんだよ。

ポケモンでいえばまだ一つ目のバッジを手に入れたつて辺りだぞ。

マジでヤバイ……………ま、いつか。

第39話 不法侵入はダメだよ（前書き）

あ……ああ……ぐふっ……

第39話 不法侵入はダメだよ

夜、というか深夜。俺はベッドに寝転がりながら本を読んでいた。開いている本の数は五冊。以前シルフィアから貰った本と、その内容で分からなかったことが詳しく載っている本を何冊か図書館から引っ張り出してきた。

一冊の本を読みながら、ちよくちよく別の本に目を通すというのは中々に時間がかかるもので、夕食の後から今までかかっても半分しか読めていない。

けれど、時間をかけた甲斐もあって結構面白いことが分かった。^{オバツ}古戦器ってさ、作られた時期によって性能に差があるらしいんだよ。初期に作られた古戦器は、なんていうかお試的な感じで作られたせいで能力とかに偏りがあるらしい。んで、その試作の反省を生かして作られたのが後期のもので、その力は初期のものを遥かに凌ぐらしい。

後期に作られた古戦器にはもう一つ特徴があって、引き起こす現象や形状は別の世界、つまりは俺が前にいた世界の様々な神話や伝承にある武具を参考にされていて、その名前も付けられているらしい。

これまでそれなりの数の本を読んできたが、どこかの伝承に“飛鳥”という日本刀があるというのを見たことがない。故に、俺の《飛鳥》は初期に作られたものだと思う。

正直助かった。だってさ、神話とかに出てくる武器と同じ名前の武器を持つてるってさ、なんていうか…イタくない？中二的な感じがして恥ずかしいじゃん。

コンコン。扉が叩かれる。

ん？誰か来た？こんな夜更けに一体誰が。ここの世界の人たちは基本早寝のはずだけど…。

「どーぞー」

とりあえず体を起こしてから招き入れる。ドアノブが回され扉がゆっくりと開いていく。その向こうにいたのは…アリス？パジャマ姿のアリスが申し訳なさそうに立っていた。

「何か用か？」

「あ、えつとね…」

「ああ待て。その前に中に入れ。いつまでも廊下じゃ寒いだろ」

「うん。分かった」

部屋に入り扉を閉めるとアリスはとことこと歩き、俺の隣へ腰掛けた。少し前は俺と顔を合わせるだけで頭から湯気を噴き出したりして話すこともままならないこともあったが、今では大分元に戻ってきている。

「それで、どうしたんだ？」

「ちよつと眠れなくて」

眠れない？そついやこいつ、昼間ランとリンと一緒に昼寝してたつ。昼寝したせいで夜眠れないとか。

「子どもだな」

「怒るよっ」

いつも通りのやりとり。そしていつも通りに「悪い悪い」と言いつつ頭を撫でてやると、「ふにゃあ…」と間の抜けた声を漏らす。

「つまり、眠れないから眠くなるまで俺とお話でもしよう」と

「うん。扉から明かりが漏れてたからきつと起きてると思って」

なるほど。周りの人がみんな寝てしまったのか。大体分かった。

さてどうしよう。このまま読書を継続したいけど、アリスを帰すのもなんだし。かと言って話の種も見つからない。はてさてどうしたもんか……………よし。

「じゃあ城の中でも探検してみようか」

「どうしてそんな考えにたどり着いたの!？」

「だってただ喋ってても眠くなんかなんないだろうし。それに、夜の城ってなんかワクワクしないか？」

「む。言われてみればそんな気がしないでもないかもしれない」

「よく分からんが肯定と受け取った。それじゃ、行くぞ」

そう言って右手にランプ、左手にアリスの手を掴み、俺は部屋を出た。

しかし、探検するとはいったものの、城の構造は大体把握しているし、今更何処に行こうかとも思う。どっかに隠し通路とか無いもんかね。ゆつたりまったり廊下を歩きながら考える。

廊下はそれなりに明るい。両脇の壁に等間隔で蝋燭が付けられているからだ。風が吹いているわけでもないのに炎が揺れ、それに応じて影も揺らめく。見ようによっては怖いとも思えるし、幻想的ともいえた。だからどうって訳じゃないけど。

「ねー、どこに行くのー？」

繋いだ手をぶんぶん振り回しながらアリスが聞いてくる。そうだな…。

「隠し部屋とか地下へ続く階段とかあれば、面白いんだけどなー」

「ん〜っと、隠し部屋とかは知らないけど、地下室の場所なら知ってるよ」

「え、マジ？」

「うん。この前ランに教えてもらったんだ。こつちだよ」
腕を引つ張られるままに進む。

なるほど。こういうのは大人より子供の方が知ってたりするんだな。暇なときに俺たちと同じように探検ごっこかしてて偶然見つけたんだらう。ありがとうラン、明日会ったら、いの一番組にハグしてあげよう。

階段を下り、たどり着いたのは一階。そこからまた歩き、エントランスからは丁度真逆の位置に来る。そこには確かに、さらに下に行くための階段があった。

「スゲえ。マジでこんなのあんのかよ。この先に何があるのか知ってる？」

「扉があったよ。鍵がかかって開けられなかったけど」

完璧だ。人目につかないところにひっそりとある地下への階段。

その先にある鍵のかかった扉。最高じゃないっすか。ヤベえよ冒険の始まりだよ。

「よし行こう」

「え、でも鍵が…」

「なんとかする。具体的には蹴破る」

「そんなことしたらダメだよっ！怒られるよっ」

大丈夫だ。ロマンを求めた、って言えばきつとユアンは許してくれる。その代わりリアさんとおばさんからはしこたま怒られるだろうけど。

わーわー騒ぎながら俺に注意してくるアリスに「蹴破るのは最後の手段だ」と七割本気の言葉を言っただけで宥めると、「最後までしなさいよ」と言いながらも収まってくれた。

というかこんなに騒いで誰か起きてきたりしないか一瞬不安を感じながらも、特に気にすることなく階段を下りる。流石にここまで蠟燭の火も点いていなかったもので、一つ一つ点けながら。

やがてそれらしき扉の前に着く。他のところにある扉よりもやや古めかしく、なんとなく脆そうだ。本当に蹴破るか。

「……………」
隣のアリスから胡乱な目で見られたので、この考えはいったん置いておくことにする。

しかし南京錠か。しかもそれなりのゴツイ。当たり前ながら鍵なんかあるわけがないし、ぶっ壊すのも骨が折れそうだ。こんなことなら部屋から《飛鳥》持って来ればよかった。メンドイしもうこうなったら…

「……………トモヤ？」

考える。考えるんだ俺。「やったらタダじゃおかないよ？」って露骨に語っている目で見ってくるアリスが怖いからって訳じゃないけど、蹴破らないでこの扉を開ける方法を考える……………！

はっ！俺の頭の上にピコーンと豆電球が光る。え、古い？ごめんなさい。

とりあえずランプのカバーを開け、火元を剥き出しにし南京錠を熱する。横でアリスが驚いているが無視。しばらく熱し続け、赤みが全体に行き届いたところで火を放す。ランプを持っていないほうの手を近づけ、熱が伝わってくる辺りで止める。そして、イメージ。この南京錠が凍りつくようにイメージを固める。すると、

バキィイツ！と音を立てて南京錠に罫が入る。軽くチョップすれば簡単に壊れた。

「わ！わ！すごい！一体どうやったの！」

興奮したアリスが身を乗り出して聞いてくる。俺も漫画とかで見てもおぼろげにしか知らないの、「加熱したものを急激に冷やすとその物体は壊れやすくなるんだよ」と適当に教えた。

「？」

全く理解できていないようだった。それもそうか。

過程はどうあれ、扉の鍵を破壊することは成功した。後は後日、どこからか同じような鍵を見繕ってこっそりつけておけば完全犯罪の出来上がりだ。

「それじゃ、失礼します」

扉を開ける。まあ当然のように真っ暗だったので入り口近くに置いてあった使いかけの蠟燭に着火し、続けて部屋にある他の蠟燭にも火を移していく。

オレンジ色の灯りで照らされた部屋の中は、一言で言うなら『こちやごちや』していた。

子どもが書いたであろう下手くそな絵。根元から折れて柄しか残っていない剣。なぜかある自転車のサドル、e t c …。なんかそこから辺にあるものを片っ端から放り込んだようか感じがする。実際そうなのだろう。物置的な役割を持っている部屋だったのか。

「うわー、きたない…」

ものが乱雑に置かれている棚を指でなぞったアリスが呟く。確かに、白かった指が真っ黒になるほど埃がこびりついている。長年使われていないだけあって、溜まった埃の量も尋常じゃないようだ。

しかしまあ、見れば見るほどがっかりしてくる。地下室という魅惑の響きに期待していた分、残念な感じが半端ない。これはあれかね、謎は謎のままにしておいた方がいいと神様が言ってるのかね。

「……ん？」

ふと、幾つも詰まれた木箱の隙間に、きらりと光るものがあつた気がした。勘違いじゃないか、どうせ見つけても大した物じゃないんだろうなとも思いつつ、それでも手を伸ばして掴む。

「……わお」

「なにそれ、すごい！キレイ！」

アリスの言うとおり、それはとてもキレイな腕輪だった。

金色にキラキラ光って、所々に赤い宝石がはめ込まれているデザイン。細かい修飾がこれを作った人物の技量の高さを表している。ちよつと派手なような気もするが、それを補うほどに美しい。

てかコレ、マジで金でできてんじゃないの？とすればこの赤い宝石はルビーとか。鑑定なんか出来るわけもないから分かんが、なんかそんな気がする。

「いいなー。ねえ、ちよつと貸して」

「もうちよつと待って。もう少し見ていたい。……お、割れた？」
弄くつているとききなり半分に割れてしまった。壊したのかと一瞬焦ったが、そんな音はしなかったし、断面が規則的な形をしていることからそういう細工になっていたのだろう。こうやって腕にはめるんだな。

右手首に合わせ元に戻すようにすると、パチンと音がしてくつつく。おおピツタリだ。

「あー！勝手に付けてる！」

「ごめんごめん。すぐに貸すから」

軽く謝りつつ腕輪を外そうとする。……あれ？なんだ、外れない？それに今宝石のところが光ったような

一瞬、視界が暗転した。気がつく俺は、ビルの壁面に立つ

ていた。

「……………、は、あ？」

状況が理解できない。僅かに言葉を搾り出すのがやっとだった。いやいや待て待てちよつと待て。とりあえず落ち着くんだけ、俺。とりあえずは落ちついたときや人間どんな状況でもベストな行動が取れるはずだ。よくしよし落ち着いた。もう大丈夫だ。

まずは現状確認。第一に、ここはどこだろうか。

右を見る。遙か遠くにアスファルトの道路が縦に見えた。左を見る。視界の下を這って伸びるビルの壁の先に青空が見える。ぐるりと見渡す。高層ビルが立ち並ぶ都市部、ただし人っ子一人いない。

うん、違和感しかないね！

分かった、これは夢だ。というより他に何かあると？また別の世界に来ちまったとでも考えればいいのか。そんなのは俺の精神衛生上嫌だ。流石の俺でもそんなに頻繁に世界を移動したら参っちゃうよ。その点、これが夢だとすれば、問題は俺の精神構造だけになるので非常に安心できる。

あ、どっかで見た光景だなんて思ってたら、これ黒崎 護の精神世界そのまんまじゃん。なんと、俺は深層心理で黒崎さん家の長男に憧れていたというのか。夢に見るくらいだし。ならばやるべきことは一つ。せーの、

「斬ッ！」

……………。世界が死んだ。

「やれやれ、お主は一体何をしておるのじゃ？」

「！？」

突如背後から掛けられた声に、咄嗟に振り向き……………固まった。そこにいたのは少女だった。

年齢は十歳前後だろうか。金色の瞳に長い金髪。白いレースの付いたゴスロリ服を着ている。大分使い回された表現ではあるが、『まるでお人形のよう』という表現がピッタリな少女だった。

違う、少女の外見などどうでも…いやよくない。可愛いじゃん。めっさ可愛いじゃん。それだけで十分じゃないか。やつほー！美少女サイコー！

「お主、なにやら表情が気持ち悪くなっておるぞ」

お主、だって！きゃっほー！年寄り口調だ！さすが俺の夢。マニアックなところを突いてきやがる！

いいよね？コレ夢なんだし、×××とか×××してもいいんだよね！？

「…なにやら悪寒がしたので言っておくが、これは夢ではないぞ」

「まじでか」

「まじじゃ、まじ」

うっわー、夢じゃないのか。やべえ、俺さつきかなりキモいこと考えてた。夢の中だから別にいいかって欲望の赴くままに下品なことを考えてた。ちょっと反省。

「反省は後回しだ。とりあえずその小さいの、この状況を説明しろ」

スイッチを切り替えちよっちマジモード。今の俺は普段とは一味違うぜ。

「態度の変わり様が激しすぎて気持ち悪いの。まあよい、話が早いのはいいことじゃ。まず、端的に言えばここはお主の心中、心象風景というやつじゃの」

「心象風景って…俺の心の中ってどっかの死神代行と同じなのか？」

「それは違う。この風景はお主の中にある心象風景のイメージを借りたものじゃ。おぬしの本当の心象風景は…これじゃ」

少女がパチンと指を鳴らすと、世界ががらりとその姿を変える。

今度の風景は海辺。足元には砂浜、目の前には広大な海。後ろを向くと鬱蒼と生い茂る森林。空は青空のくせに太陽はなく、代わり

にデツカイ満月が浮かんでいる。

「なんか、案外普通だな。もつとへんてこりんな場所かと思ってた」
「確かに、空の月を除いて別段おかしな所は見当たらないの」

「きつと俺の心がキレイってことだな。この広い海は俺の度量の大きさを表しているに違いない」

「…いや、この海はどうやら他のものを表しているようじゃぞ」

「なに？」

「お主の、欲望の量じゃな」

「……………」

落ち込んだ。なんか生きてるのが申し訳なくなってきた。本気ですいませんでした。

「うむ、追いつきを掛けるようで悪いが、ワシの経験上まともな人間であればあるほど、その心象世界は珍妙なものになっているものじゃ」

「……………その心は？」

「つまりお主の精神は普通ではない、ようは異常じゃ」

トドメを刺された。やばい、マジ泣きしそう…。

「まあいいんだけどね」

「その立ち直りの早さが、すでにおかしいの」

「気にしな…い。目の前のロリっ子がなんか呟いてるけど気にしな…い。」

「そうそう、色々あって忘れてたけど、お前は何者なんだ？ タイミング的にあの腕輪の妖精さんか？」

「今更そこを気にするのか…。妖精かどうかという質問には、当たらずとも遠からずと答えよう」

「……………」

真つ直ぐに少女の目を見る。嘘は言っていないみたいだな。

はあ、とため息を吐く。この状況に、そしてこんな突然の出来事になれ始めた自分に、どうしたらいいのか分からない。

何でこんなことになっているのか、俺はここから出ることができ

るのか。手がかりは目の前にいるこの少女が握っている。

「単刀直入に聞く。俺はこの世界から出ることができなのか？」

「ほほう。これはまた随分せっかちじゃのう。そういうのは嫌いじゃないぞ」

「いいから、質問に答えろ」

「出るも何も、ここはお主の心の中。出入りはお主の自由のはずじや」

「それが本当なら俺はとっくにここからいなくなってるんだよ」

「まあ、今はワシがお主をここに留めておるからの」

「さっさと帰せ」

「そう急ぐでない。…ちよっと付き合え」

それだけ言うと、少女は体の向きを変え森の中へ入っていく。得体の知れないやつと言っているとおりにするのは嫌だったが、他にどうしようもない。しばらく悩んで、俺はその背中を追った。

それなりの時間は経っていたが、身長之差もあってか、あっさりと追いつくことができた。

「さて、お主の疑問に答えよう」

歩きながら少女は言う。

「お主がつけたその腕輪。あれは古戦器オーバーツじゃ」

「名前は？古戦器オーバーツなら、名前があるはずだ」

「…名なぞ無い。ひっそりと作られ、人目に晒されることの無かった小物じゃからの」

ふーん。名前が無い…か。そういうのってどんな気持ちなんだろう。物心ついた時から名前があった俺にはさっぱりわかんないや。

「この腕輪の能力は至って単純。腕輪をつけた者の願いを叶える、といったものじゃ。一回だけじゃがの」

「願いを？」

「そうじゃ。例えば世界を征服したいと言っても構わんのじゃぞ？一応は古戦器オーバーツの端くれ。一騎当千の力を与えることも可能じゃ」

「別に世界に興味なんてないし」

しかし…願いか…。

そつと隣の少女を見る。

歩くだけでしゃらしゃらと靡く金の髪。ややツリ目がちだが大きな瞳。ふつくらとした丸い頬。艶やかな赤い唇。フリフリの服のせいでよく分からないが、体型はやはり年相応に未発達なのだろう。

……………ごくろり。

「……………言うておくが、ワシに対しての疚しい願いは叶えんぞ？」

「な、何を言ってるのやら？俺がそんな事を考える訳がないじゃないか」

「そつか……………」

疑うような目で見られる。本当に違うんだ。まだ具体的なことは何も考えてない……………言い訳にもならないか。

どれ、ここらで真面目に願い事でも考えてみるか。

消去法でいくと、まず世界、金、名声、女とかはいららないな。こつういのは自分の手に入れてこそ価値があるんだ。飯にだつて困つてない。更なる力が欲しいなんて俺のキャラじゃない。

じゃあ後一体何がある？いくつか思い浮かぶけどどれも下らないものばつかだし。こんな機会滅多にないんだから有効に使わないとやっぱあれだよな、普通なら叶うはずのない願いとかなだよな。なんか…なんかはないか？

なんか出せ……………搾り出せ……………脳みそから捻り出せ俺……………

「……………あ……………」

あつたわ、一つ。普通なら絶対に叶わないけど、割と本気の願い事。

「願いが決まったのか？」

「おう。決まった決まった。これしか無いって程の願いだ」

「ほう。どんなものじゃ？富か？女か？」

「その事に関してはすでに自分の中で終わつてる。そんなんじゃない」

「では一体何が欲しいのじゃ？世界がいららない、金がいららない、女

がいらぬ。これ以外に何を望むと？」

「翼」

「……………は？」

「翼、翼が欲しい。あの大空に羽ばたけるような翼を」

「…頭は大丈夫か？」

「俺の精神構造についてはさっきお前が言ってただろ」

「…ワシの頭が痛くなってきたわ」

ぐりぐりとこめかみをほぐすように揉む少女。何だよ、俺は結構真面目に考えて答えたんぞ。そりゃ確かにちよっとおかしいとは俺も思っけどさ。

しばらくぐりぐりと指を動かし、やがて少女は疲れたように口を動かした。

「一応、理由を聞いておこうか」

「いやさ、俺の間、なんやかんやあつて空高くから地上に向かつて落下したんだよね。幸い無傷で済んだんだけどさ」

「無傷で済むのならいらぬじゃろうに」

「いやいや。そんな時助かったのは、不思議な湖のお陰なんだって。

流石にもうスカイダイビングすることは無いと思うけど、備えあれば憂いなし、みたいな。以上、説明終わり」

「……………ふう」

説明を聞き終わると、少女は表情を一変させた。冷たく、全てを拒絶するような。その表情はもとの顔立ちと相まって、彼女に芸術品のような美しさを持たせていた。

美しすぎて、触れること、近づくことすら憚れる様な、そんな雰囲気、俺は何も言えなかった。言うことが出来なかった。

「先ほど、願いを叶えると言ったな。あれは嘘じゃ」

「…嘘？」

かろつじて、少女の言葉に反応する。ここまで緊張したのはいつ以来だろうか。出来ることなら今すぐ逃げ出したいが、少女の言い知れぬ気迫にそれすら叶わぬ。

「嘘というよりも餌と言った方が正しいかもしれぬ。ワシの問いに、醜い欲望を曝け出して答えたらアウト。疑って適当な願いを言ってもアウトなのじゃ」

「仮にそう言ったとしたら？」

「死ぬ」

あつさりと言われた答えに一瞬怯む。マズい。答えた。答えてしまった。彼女の問いに。

俺の答えは、一体どっちだった…？

「そう固まるな。本来なら、願いを言った時点で自動で命を奪う筈じゃ。そうならないということは、お主の願いはどちらでもなかったという事じゃ」

「…どういうことだよ」

「そう答えを急ぐな。…着いたの」

「……………ッ!？」

気がつくとも目の前に建物があった。それなりにデカイ建物。その扉の前に俺たちは立っていた。少女との会話に集中しすぎて気付かなかった。

「ほれ、入るぞ」

「…ふざけんな、こんな訳の分からない所に入れるかよ」

「安心せい。この空間にあるものは、ワシを除き全てお主の中のものじゃ」

言うだけ言うと少女はまた勝手に進んで、建物の中に入っていく。またしばらく悩んだが、やはりどうしようもないので、俺も扉を開けて入った。

建物の中は、分かりやすく言うと図書館だった。大量の本棚がいくつも立ち並び、そこにギッシリと本が詰め込まれている。二階もあったが、どういう訳かその本棚は空っぽだった。

俺はその光景に戸惑いながらも少女を探す。……………いた。少女は本棚から一冊の本を抜き取り、ペラペラと捲っていた。

「おい、ここは一体なんなんだ？少なくとも俺はこんな場所知らん

ぞ

離しかけた俺をちらりと横目で見、少女は読んでいた本を閉じると元の場所に戻した。

「ここはお主の記憶じゃ」

「記憶？」

「そう。お主が忘れている記憶から思い出したくも無い記憶まで。あらゆるお主の記憶がここにはある。この本の言葉を引用するなら『意味記憶』と『エピソード記憶』が本となっているということじゃな」

いや別に俺に思い出したくない記憶なんて無いと思うけど。忘れてる記憶は大量にあるだろうけどな。

ていうかちよっと待って。その単語が出るってことは、さっきお前が読んでた本って……やっぱり』とある 術の禁書目録』の一卷ですか。

「うわこれ中身まで完璧じゃん。俺ここまで記憶力は良くなかったと思うけど」

「そんなことは関係ないんじゃないよ。一度見たり聞いたりしたものは必ず脳裏に焼きつく。ようはそれを思い出せるかどうかなのじゃよ」なるほど。よく分からないが分かった。

「それにしてもその歳にしては中々に記憶が多い。特に意味記憶じゃ。たくさん知識があるのはいいことじゃ。じゃが……ああいうのはどうかと思うぞ」

少女が珍しくも、いや出会ったのはちよつと前なのだがそんなのはどうでもいい。とにかく少女がやや頬を赤くしながらどこかを指差す。そんな顔をすることを意外に思いながらその方向を見ると、

「ぶっ！！」

な、なんかピンク色の暖簾があつて、大きく「18禁」と書かれていて、他のところとは仕切りで分けられていた。

「い、いや、分かるぞ。お主も年頃の男じゃし、ああゆうのに興味が尽きぬのも分かる。しかし……あそこまで記憶の量が多いのは……」

た、確かに仕切られている面積はかなり大きいけどさ、きつとあれだよ、二階と同じで中身はすつかすかなんだよきつと。そう…信じたい。身に覚えが無いとは言いつれぬからちよつと困るけど。「そういえばお主、先ほどから何度かワシの事をいかがわしい目で見ているの。こんな貧相な体をそんな風に見れるとは、お主…」

「あ、あー！あれはなんだー！」

汚物を見るような目で見られかけたので、咄嗟にあらぬ方向を指差す。誤魔化し方が小学生以下のような気もするが警沢は言っていない。たとえ何も無かつたって、そこから話題を広げてこの場であつた事をなかつたことにするんだ！

そう思つたのだが、

「……おう？」

マジで気になるものを見つけてしまった。

それは鳥かご。銀色の鳥かごが天井からぶら下げられている。中には鳥が一羽おり、鳴きもせずただこちらをじつと見つめていた。あの鳥…多分燕だな。

「なんだアレ…？」

「何って…お主は何を言つておるのじゃ？」

驚いたような声に思わず「は？」と問の抜けた声を漏らすと、少女はわずかに目を見開くと、早足で鳥かごの方へと進みながら「さっきの話の続きじゃ」と言ってくる。

「お主がワシに言つた『翼が欲しい』という願いは、欲に満ちたものでなければその場しのぎで言つた虚言でもない。つまり、真剣に考えた心からの純粋な願いだということじゃ」

「それがどうしたよ」

「ワシはそんな答えを、長い時間待ち続けた」

鳥かごの中に手を入れながら少女は語彙を強める。燕はそんな少女に驚きもせず、伸ばされた指先を優しく噛んだ。

「過去にも、何度かこの腕輪を付けた者がいた。だがその全てが、その願いととも散つていったのじゃ」

「なんでそいつらは死んだんだよ」

「相応しくなかったからじゃよ。お主、古戦器オーバーツを発動させるには何が必要か知っているか？」

「知らん」

「真っ直ぐな想いじゃ。正しいとか間違っているとか、善とか悪とか、そんな下らんことは関係ない。純粹で真っ直ぐな想いを持つ者だけが、古戦器オーバーツの能力を扱うことが出来る」

「……………」

その言葉で、理解できることがあった。

過去に二回、俺は《飛鳥》を発動できたことがあった。まあ一回目は微妙だったけど、それはさておき。確かに二回とも、その時は俺の心に強い思いがあった気がする。一回目は怒り。二回目は守りたいという想い。どっちもガラじゃないな。

「分かるだろう。欲望に満ちた人間や脅えて嘘をつくような人間に、そんな想いが抱けるはずが無い」

「そりゃそうだな」

「だがお前は違う。条件を満たしている。故に、ワシはおぬしの願いを叶えたいのじゃが……」

そこで少女は鳥かごに目を向け、

「今回のお主の願いは、ワシが叶えるまでも無いようじゃ」

「……どゆこと？」

「お主は尋ねてばかりじゃの。まあよい、千年以上待ちに待ったワシを扱えるものじゃし、多少の無能さは目を瞑ろう」

無能って何だこら。知らないことは悪いことじゃないだろう。

「逆に言えば千年以上待ったのじゃ、一度くらい譲っても構わん。

ワシは今回多少のサポートをするだけじゃ」

「さつきからお前は何を言ってるんだ。説明しろ」

いい加減痺れを切らしたので多少強い口調で言つと、少女はやれやれといった風に肩を竦めた。なんか腹立つな。

「簡単に言えば、お主にはとうに翼がある。ただそれを引き出せな

いだけなのじゃ」

「…どうやって引き出せばいい」

「こやつをここから出してやればよい」

ぺしぺしと少女は鳥かごを叩く。こやつって、その鳥？ ならさつさとかごを開けて…あれ？ 開けれない。というより開けるところが見つかからない。

「そんな簡単なことではないに決まっているだろう。名を呼べ。そうすればこやつはそこから出られる」

「名前？ そんなの分かる訳がないだろ」

「いいや、お主はこやつの名を知っておる。それを導く程度の脳みそはあるはずじゃ。考えろ」

少女は言うだけ言って後は口をつぐむ。随分と投げやりだな。

さて、この子のお名前を当てろってか。難しいな。今までの人生で、少なくとも俺が覚えている限りでは、俺は燕に名前をつけたことはない筈だし、周りの誰かが飼っていたという記憶もない。そんな単純なことではないんだらうけど。

ぶつちやけると、一つだけ心当たりがある。かなり条件は満たしているし、ぴったりだと思っけど、いいのかな。チャンスは一度だけとかじゃないといいんだけど。

「……飛鳥？」

ぼそりと呟く。すると鳥かごがわずかに発光したと思うと、次の瞬間には跡形もなく消えており、燕は素早く羽を広げ、建物の屋根の辺りを飛びまわっている。

「意外に早かったの。ワシが思っていたより脳みそは詰まっているようじゃ」

「どんなもんだい」

無駄に胸を張って威張ると、少女に可哀想な目で見られた。

「飛ぶ鳥と書いて飛鳥。故にあやつは、ああやって飛んでいるのが正しい姿なのじゃよ」

元気に飛び回る燕、いや飛鳥を見て、どことなく羨ましそうな声

で呟く少女。そしてすつと手を上げると、そこに急降下してきた飛鳥がとまった。

「名とはその者の存在と概念を表しているといっても過言ではない。よってこやつのは概念は飛ぶ、ということじゃ。その概念をワシの力でお主と繋げる」

「あー、悪いが日本語で頼む」

「ようはお主は飛べるようになるということじゃ。説明するより実際にやってみた方が手っ取り早い。いくぞ、3、2、1」

カウントしながら、少女が飛鳥を両手で包み込む。いや、ちょっと待、

「0」

小さな声が耳に届くと同時に、背中に妙な感触があった。振り向きたい。でも振り向きたくもない。一瞬考え、結局振り向くことにした。

「……うっそお」

青かった。隣の芝生が、じゃなくて、翼が青かった。修飾語をつけるなら、俺の背中から生えている翼が青かった。

「あれ。おかしいのう。真っ白な翼にしてやろうと思ったのじゃが」
やめる。真っ白い翼とか、天使みたいで恥ずかしいわ。つか確信犯か。

「これで、飛べるのか？」

「飛べるぞ。ここでは無理じゃがの。目覚めたら試してみるがよい。念じれば翼は出てくるからの」

「分かった」

話を聞きながら色々試してみて気付いたんだけどさ、この翼、直に背中から生えてるわけじゃないんだな。微妙に間があって、そこからはさつと現れる。あと羽根が抜けました。ちよつとひんやりしてます。

短い説明を終えると、少女はこちらに向き直り真面目な顔になる。その顔を見て俺も姿勢を正す。

「……古戦器には名前がある。そして、中にはワシらのように意思を持ったものがある。苦しいが、一つの生き物と言えなくもない」

いつの間にか場所を少女の頭の上に移していた飛鳥も、じっと俺を見つめている。

「だから頼む。ワシらの事を、せめて『道具』とは見ないでくれな
いか……？」

「少しだけ悲しさが混じった、その縋るような視線に、俺はふっと
微笑んだ。」

「一つだけ、いいか」

「……なんじゃ？」

「確かにお前らには意思がある。そして飛鳥には名前がある。でも
な、俺はお前の名前を知らないんだ」

「だから、それは……」

「名前がないんだろ？でも、そんなの簡単な話だ。名前がないなら
考えて付ければいい。というか、もう考えたから、勝手につけるぞ」

俺は少女の前にそとと膝き、ぽんと頭に手を置く。

「今日からお前の名前は、ツキだ」

「ツキ……、月？」

「そうだ。この世界に来て、空の月見た瞬間に思ったんだ。お前の
髪と目と同じ色だった。だから、ツキ」

「…………………ぷっ、ははは、はははははははははははははははは」

「うお、何かいきなり笑い出しやがった。なんだよ、ネーミングセ
ンス悪いか？ 別のがいいかな？」

「……流石に、単純すぎるのではないか？」

ひとしきり笑うと、笑いすぎて出てきた涙を拭いながらツキが聞
いてくる。

「いいんだよ、名前なんかシンプルで。飛鳥だって飛ぶ鳥とかその
まんまじゃ 痛たたたたっ！？やめろ飛鳥！つつくなゴメンって

！」
俺の言葉が気に障ったらしく、飛鳥はツキの上から嘴でつついて

くる。謝ったら止めてくれた。名前のこと、気にしてるんですね。

「とにかく。…嫌か？ツキって名前」

「…いいや、嫌ではない。むしろ気に入ったぞ。よし、今日からワシは『ツキ』じゃ」

そう言つて無邪気に微笑むツキは、もとが出来過ぎているだけであつて、物凄く可愛かつた。

その笑顔を作つたのが俺だと思つと、なんだか無性に嬉しくなり、思わず小さく微笑んだ。

「あつ…」

ん？なんだ？俺の顔を見た途端、ツキの顔が急に赤くなりだしたぞ。なんかそのまま俺から顔を背けるし。

まさかこれは…！

…俺の笑顔、そんなにキモかつたですかね？

ですよー。キャラ的に合わないもん。小さく微笑むとか、もつとカッコいい人がやつたら様になるんだろうけど、俺がやつてもそんな風にならないだろうし。ウケ狙い程度にしかならないよね。

「と、とにかくじゃ！ いい加減目覚めんと外が朝になつてしまふぞ！」

妙に慌てた感じのツキが言う。え、ちよつと待つて。この時間と外の時間つて連動してんの？ てつきり、ここでどんなに経つても向こうに戻れば一瞬だった、的なもんだとばかり。やべー、結構時間経つてるよ。きつとアリス滅茶苦茶心配してるよ。

「分かつた。それじゃあ俺戻るわ」

「うむ。では」

ツキが俺に向かつて手をかざすと、俺の体が光の粒になつて少しずつ消えていく。完全に消えるまでもうちよいあるな。

「また、ここに來れる？」

「当たり前じゃ。ここは元々お主の世界じゃ。おぬしが自由に來れないでどうする」

「そりゃそうか。んじゃ、また來るよ」

「…その時は、空を飛んだ感想でも聞かせてくれ」

「ああ。ここから出たら、すぐに飛んでやる」

「そうこう話しているうちに、俺の体も大分小さくなってきた。」

「そろそろだな」

「分かっておるわ、そんなこと。あー、それでじゃな…こほん」
「？」

しきりにそわそわしたと思ったら、咳払いを一つ。そして、

「主よ。ワシらはいつでも主の中におるからな」

「あ、」

その言葉に何返す前に、俺の口は消えてしまう。最後に見えたのは、照れくさそうに微笑むツキの顔だった。

「モヤ！トモヤ！」

「…ん、あ…」

「トモヤ!？」

目を覚ますと、目の前に泣きつ面のアリスがいた。どうやらずっと俺を心配して呼びかけてくれていたらしい。嬉しさと申し訳なさが交ぜになった気持ちになる。

「あ、動いちゃダメだよ！いきなり倒れたんだからおとなしくしないで！」

「いや、もう大丈夫だから。心配すんな」

アリスの狼狽っぷりから察するに、精神世界に行っている間の俺の体は傍から見てもよほど危険らしい。これは行く時は夜眠るときだな。下手に昼間に行くとんでもない事になりかねん。

「……ホントに？ホントにもう大丈夫なの？」

心配そうな声で聞き返してくるアリスの顔は涙でぬれていて、軽い罪悪感を覚えたが、それ以上に涙目で見上げてくるアリスを可愛いと思う俺はダメだと思う。

まだ多少ぐずっているアリスを落ち着けるため頭を撫でながら、

こんなに俺のことを心配してくれたアリスに何かしてあげたいと考える。

あ、丁度良いのがあるじゃん。

「大丈夫だって。心配してくれてありがとな。そのお礼といっちゃなんだけどさ、」

「うん？」

「俺と一緒に、楽しいことしようぜ」

「ぶっ！」

うおっ！いきなり噴き出しやがった。一体どうしたんだ。俺は一緒に空を飛ばう、って意味で言ったのに。あ、他の人たちには分からないか。

「た、楽しいことって！その、それ、もしかして…い、今夜だし！それでその、私全然詳しくないから！だから！」

なんだなんだ、アリスのテンパリ具合が尋常じゃねえぞ。顔を真っ赤にして手をぶんぶんと振り回しながら意味の分からないことを口走っている。

しばらく経っても収まらないので、俺自身限界なせいもあり、俺はアリスを強引に抱き上げた。お姫様だっこで。

「ひゃっ！？ト、トモヤ!？」

相変わらずテンパった口調で話すアリスを軽く無視して、俺は部屋から飛び出した。蝋燭の灯りは凍らせて消しました。

夜の城の廊下を全力で駆け抜ける。久しぶりの全力疾走で軽く息が乱れたが、それでも目的の俺の部屋に到着する。そのままの勢いで窓を開けバルコニーに出る。

冷たい夜風が頬を撫でるのを感じながら、俺は目を閉じる。

「トモヤ？」

アリスの不思議そうな声。どうやら落ち着いたらしい。そう考えながら、俺は念じる。出る、と。

「…うわぁ…！」

アリスの感嘆の声。そして背中に感じるこの感触。本当に翼が出

たらしい。

これで、飛べる。飛べないかもしれないとは思わなかった。だって俺は、飛鳥とツキを信じているから。

「アリス、飛ぶぞっ！」

「え、ちよつと待ってつてきやあああああ！」

返事を待たず手すりに足をかけ、一気に飛び出す。一瞬の浮遊感の後、ふわりと引つ張られるような感覚がしたと思うと、落下が止まる。つまりは宙に浮いている。

やった。空を飛べた。嬉しすぎて声が出ない。ライト兄弟も空を飛べたときはこんな気持ちだったんだろうか。

とそこで、腕の中で目を硬く瞑りながらぶるぶると震えているアリスに気がつく。

「大丈夫だよアリス。怖くないから目を開けてごらん」

努めて優しい声をかけると、アリスは少しだけ目を開き、続けてかっと思を見開いた。

「嘘…なんで…どうして飛んでるの？それにトモヤ、その羽…」

「細かいことは気にすんなって。それより、今は夜空の散歩を楽しもうぜ」

「絶対にそれは細かいことじゃないと思うけど…うん！」

笑顔になるアリス。それを見て俺も笑顔になる。笑いあいながら、空を飛ぶ。上昇も下降も俺の思い通り。宙返りだってムーンサルトだっってお手の物さ！

「楽しいな！」

「楽しいね！」

笑いあった。

滑らかにバルコニーに着地するとともに翼を消す。出来るだけ静かに窓を開け部屋に入り、ベッドにアリスを寝かせる。別にやましい事をしようって訳じゃない。飛んでるうちに気付いたらアリスが

寝てしまっていたのだ。もともと眠れないから俺のところに来たんだし。

「くう……すう……」

おうおう、よく眠っておるわ。寝顔を見るとつい悪戯をしたくなってしまうぐらいしょうもない俺は、とりあえず頬をつついた。

「んにゅ……うう……」

おお、ぶにぶに。柔らかい。摘まんで伸ばしてみる。よく伸びるな。

「んむう……こゃ」

ぺし。眠ったままのはずなのに的確に俺の手を叩いてくる。しかし、一度やられただけで諦める俺ではない。次はここだ。えい。

「……あう……んっ」

くにくにとアリスの獣耳を弄くる。すげえ、ふわふわしてて触つてると楽しい。他にも爪で軽く引つかいたり色々してみよ。

「むにゅ……あ………にゃふふふ」

あらあら、幸せそうな顔しちゃって。一体どんな夢を見てるのかしら。あまりいじり過ぎて、起こしちゃうのも可哀想だし、そろそろ止めとくか。

嬉しそうに寝ながら笑うアリスにシーツをちゃんと掛けてあげて、俺はソファに寝転がる。今日の俺の寝床はここだ。

あ、そうだ。寝る前に。

右手に付いた金色の腕輪を根の前に持ってきて、

「ありがとうな、飛鳥、ツキ。お陰ですっごく楽しかった」

お礼を言った。こういうのはきちんとしておきたいよな。

『うむ。どういたしましてじゃ』

あ、そのままでも喋れたんですね。

第39話 不法侵入はダメだよ（後書き）

……かゆ……つま……

第40話 出来れば説明は一度で済ませたい(前書き)

おかしいな。

今回は特に話が進んだりすることはない普通の話のはずだったのに、なんか地味に一万字超えてやがる。

そして気付いた。

俺は執筆するのが遅いんじゃない。一文字も書かない日が何日もあるからダメなんだ。

という事で、明日から本気出す。

第40話 出来れば説明は一度で済ませたい

昨夜、不思議な腕輪をつけてその中にいた少女と会話したり、な
んやかんやで空を飛んだりと、中々にファンタジーな経験をした俺
だったが、よくよく考えてみると、今更ファンタジーもクソもない
と言うことに気がついた。

まず第一に、ここすでに異世界だし。魔法があるって事を含めて
この世界そのものがもう十分ファンタジーだ。

というか俺もそろそろファンタジーになってきたと思う。今まで
飛行機にも乗ったことのない俺の、人生初フライトは生身だったと
か。しかも羽を生やして。笑えてくるぜ。

ちくしょう。俺の身の回りのファンタジーは親父だけで一杯一杯
だったのに。一体いつから俺もあっち側の人間になっちまったんだ
！まあ確実にこの世界に来てからだと思うけど。

この世界に来てまだあまり時間は経っていないけど、思い返せば
色んなことがあったな。

……………あれ？女の子を助けるか、摩訶不思議生命体と戦った
記憶しかないぞ？

何をしてるんだ俺は！せつかく異世界に来ちゃったんだから、も
っとやることがあるだろう！例えばドラゴンとか妖精さんとか…ど
っちも会ったな。魔法は…バリバリ使えるし。伝説の強い武器とか
…それらしいのは持つてるな。

じゃあ後一体何がある？ファンタジー系のライトノベルの主人公
は異世界でどんなことをしてたっけ。思い出せ俺！あんなにたくさ
ん読んだじゃないか！新刊の発売日にはチャリをすっ飛ばして買い
にいつて、学校でも授業そっちのけで本を読んだじゃないか！

ああ、そうだ。女の子とラブコメするか、なんかデツカい悪の組
織とバトルしてたな。

とりあえず悪の組織とバトルとかマジ勘弁。そして主人公爆発

しろ。

「つかさあ、普通に考えてあり得なくね？あんな風に何人も女の子に好かれるとか。どうやるのか教えてくださいなさい本気で。」

でもま、しょうがないのかな？主人公達ってカッコいいし。ヒーローっていうのかな。巨大な悪に敢然と立ち向かい、そして勝利する。そりゃ女の子たちも惚れるさ。いやーすごいスゴい。俺にはとても真似できないよ。キャラじゃないし柄じゃない。俺がなれるのは、初期登場時は主人公のライバル的な存在なのに、終盤では完全に追い越されて戦闘の解説役になってしまう、ぶっちゃければベータのポジションが精々だよ。クリンはあれ、中盤からは完全に戦いで役に立ってないよね。なんで敵だった人を奥さんに貰って、しかも子供作ってんだよ。羨ましいにも程がある。

ふう、まあいい。ここで ラゴンボールキャラを扱き下ろしても仕方ない。俺が言いたいのは、チガどのタイミングで 天を身籠ったのかってことで……あれ？違う？

とりあえず、閑話休題。

とにかく、色んなものをとにかくとして、今まで思ったことを全て置いて、最終的に現実として何を言いたいのかというと、

「おい、ちゃんと聞いているのかトモヤ！」

「すいませんっ！」

俺は今、ユアンに説教されてます。正座で。

内容は当然昨日の夜のこと。こんなに金ピカな腕輪が目立たないわけがないので、朝食の時にユアンに尋ねられたのでさらっと答えるところ、こんなことになりました。ちなみにこの後、エルナたちからも説教を貰う予定です。

「まったく、地下室の南京錠を壊したのはいいとして、そこで偶然古戦器を見つけたとか、ふざけてんのか」

「はい、すみません」

鍵を壊したのは本当にどうでもいいらしい。あくまで説教内容は偶然見つけた腕輪を無用心につけたことのみです。

「まあ、城の中にどんなものがあるのかきちんと把握していなかった。こつちにも多少の非があるからあまり強いことは言えないな。とにかく、どんなものか調べるから一旦その腕輪外せ」

「いや…あのお…」

思ったよりも説教が短かったことは嬉しいのだけど、その差し出された手に困っちゃうんだよ。

「どうした？出し渋るならもうちよい説教してやってもいいが」

「そうじゃなくて、この腕輪なんだけど…」

「なんだ？ハッキリ言え」

「外れません」

「あ？」

「というか、外れないんですよコレ」

「…はあ？どうゆうことだ？」

「いやあの、俺も良く分からないんだけど。この腕輪の中にいるツキってやつが言うにはさ、この腕輪を俺から取るには、腕を切り落とすか俺が死んでからじゃないと無理らしいんだよ」

「……………」

説明を聞いたユアンは、すつつつごくいい笑顔になると、

「おい、誰か斧持ってきてくれー」

「待て待て待て待て！」

「大丈夫だって。何も首を落とすわけじゃない。ちょっとお前の腕を真ん中から切断するだけだ」

「やめてー！お願いだからやめてー！」

「ごたごたばたばた。俺とユアンが騒いでいると、

『なんじゃ、うるさいのう』

右腕に付いた腕輪の赤い宝石部分がチカチカと点滅し、同時に童女の声が発せられる。この会話方法はどうも慣れない。自分の手首から声がするってなんかイヤじゃね？

「…お前が、ツキってのか？」

おお、いきなりのことに動じないなんて、さすが王様だ。関係な

いかな？

『そうじゃ。まあその名前は昨日主に貰ったばかりじゃがの』

「そんなことはどうでもいい。簡潔に聞く。お前は『呪具』ではないんだな？」

『ワシをあんな汚物と一緒にするな』

いえーい。相変わらずの俺の置き去りっぷりになんか涙出そう。

でも泣かない。男が泣いたってキモいだけだし。

「質問です。『呪具』ってなんですか？」

「呪具は、言ってしまうえば古戦器に近いが、その実は限りなく遠いものだ」

なにその論理的思考（？）。俺の低スペックな脳みそでは理解に時間がかかるよ。

『古戦器が特殊な力を持たせるために作られたものだとすれば、呪具は何の変哲もない道具に特異な力が宿ったもののことを言う。力が宿る原因は、人間などの負の感情じゃ』

「何十人もの人を切り刻んだ剣とか、罪人の首を落とし続けた首斬り斧とかがそうなりやすいな」

『他にも、人が殺される直前まで持っていた人形やネックレスなんかもなりやすいと聞く』

「力の元が負の感情だけに、当然持ってもいい結果にはなんねえ。

そのものに宿った感情に心と体を操られるのがオチだ。注意しろよ」

『まあ、物に力を宿らせるほどの深く濃い感情など、そうそう出るものでもないから、普段はあまり気にせずともよい』

「だが、ある所にはあるからな。今回みたいに、そこら辺に落ちてるものをほいほい拾ったりするなよ？」

「はい」

ユアンとツキのダブル先生による講義を聞き終え、大体のことは頭に入った。

ようはあれだろ。いわくつきの刀とか、夜になると髪が伸びる日本人形とかそんな類のことってことか。あーやだやだ呪いとかが。お

つかないわー。そんなもん頼まれたって近づくもんか。

「とりあえず俺からはもう終わるが、もうこんなバカなことはするんじゃないぞ？」

「うーす」

「よしよし。じゃあ次はアイツらにみっちり怒られてこい」

「……………」

ニヤニヤと笑いながら言うユアンに軽くイラツとするが、でも行かなくちゃならない。行かないと後々怖いし。

……………とりあえずユアンの秘蔵の工口本の隠し場所をリアさんにチクってやるか。

「アンタはさー、ホントにさー、全く…何考えてんの？」

「……………」

エルナ達からによる説教は、こう、がつつり怒るようなものではなく、『呆れてものも言えない』という視線をひたすらぶつけられながらチマチマとお小言をいただくという、非常に精神にダメージのいくものであった。

「トモヤはいつもいつも…もうすこし考えて行動した方がいいと思う」

「そうですね。子どもじゃないんですから、気になるものをすぐ触ったりしようとしなくてください」

「はい、すみません」

へこへここと謝る俺。傍から見たらきつと情けないんだろうなあ…。どうでもいいけど。

あ、アリスはいません。ランとリンと一緒に、例の部屋を見に行ってます。クレアも付き添ってる。お目付け役らしい。俺みたいに変なものを拾ったりしないようにね。

「んで、今回はどんな不思議アイテムを見つけたのよ。説明しなさい」

「あ、はい。えーつとですね、この腕輪なんですけど、これつけてから、なんやかんやあってこんなの出るようになりました」

座ったまま翼をだす。この翼、俺が『出る』って思えばあっさり出てくれるみたい。便利だね。

「うわ…」

「……………スゴい」

「キレイですね…」

おお、女性陣からの評価が高いな。コレはうまくやれば早めに説教終わらせるかも。

「これで飛んだり出来るんだけど、飛んでみたい人ー？」

言った瞬間、エルナ、シルフィアの手がピシッ拳がる。よし、後は上手く事を運ぶだけ…。

「それじゃあ飛んでみようか。順番はどっちからに「待って」「する？」」

俺の言葉に割り込んできたのはフィナだった。フィナは俺を、と
いうか翼と腕輪をじっと見て、

「本当に飛べるの？危なかったりするかもしれないし、腕輪をつけただけで翼が生えるのはおかしい」

「む、言われてみれば」

「そうですね」

くっ、フィナめ。流石元研究員なだけあって鋭い。不安定な事象を追求するのは性ということか。でも、大丈夫。

「心配すんなって。昨日アリスを抱えて飛んだときは何の問題もなかったし」

『（ピクッ）』

「それに腕輪をつけただけで翼が出るようになった訳じゃない。ツキに出るようになしてもらったんだよ」

『（ピクピクッ）』

「ということ、百聞は一見にしかず。論より証拠。一回俺が飛んで見せるからそれを見て」

言いながら俺は立ち上がり、

次の瞬間には取り押さえられていた。彼女達に三人がかりで。

……何その連携。打ち合わせとかしてないよね。どんだけ息合ってるんですか。

軽い現実逃避をしながら、じわじわと来る背中の痛みに耐えていると、

「聞きたいことは二つ。一つ目、アリスを抱えて飛んだってのはどういうことか。二つ目、ツキって誰か。正直に答えなさい」

馬乗りになったエルナがキツイ目で問いかけてくる。見ると右側を押さえているフィナと左側を押さえているシルフィアも同じような目をしていた。どうでもいいけど女の子が男の上に馬乗りとかまズくない？というか身動きが取れないように押さえつけられてるって、男として情けない。ま、いいや。抵抗は無意味だし。

「え〜っと、一つ目はあれだ。飛べるようになって妙にテンションが上がったから、アリスを抱っこして部屋の窓から飛び降りた」

「抱っこ？」

「そ、お姫様抱っこ」

ギギギギギギギギイッ！

詳細に説明した途端、なにやら得体の知れない方法で体を締め上げられる。めちゃくちゃ痛い……。

「ふ〜ん。随分と楽しそうなことやってるじゃない……！」

やはりキレ気味なエルナ。なんだ？飛ぶときに誘ってくれなかったことに怒ってるのか？だからこれから飛ばうぜ、って言ってるのに。

「二つ目は？」

「ああ、ツキってのはその部屋で見つけた腕輪の中にいた子でさ、名前がないって言うから俺がつけた」

「……女の子？」

「え、そうだけ『ま・た・女・か・！』うえ！？」

三人が叫ぶ。エルナはともかく無口なフィナとおとなしいシルフィアが叫ぶなんて…一体どうしたんだよ。

「また女の子!?! いい加減にしなさいよ! この女こまし^{すけ}!」

「何考えてるの? そんなに女の子に囲まれていたいなの?」

「大概にしてください! もう十分でしょう!」

おぶえ、ちよ、エルナ襟掴んで首ガクガクすんの止めて。フィナお前腕ひしぎなんてどこで覚えた。シルフィア待つてその関節はそっちには曲がらな、って嘘だる曲がつてるヤバい方に曲がつてるう!?

三方向から繰り出される地獄の責め苦に、痛みを訴える余裕もなくだだやられている俺だったが、不意に動きが止まった。見れば三人とも手を緩め、何故か表情を曇らせている。

どうしたのかと思っていると、

「トモヤつてさ、やっぱり可愛い女の子が好きなの?」

と、いきなり過ぎる質問がエルナから投げかけられた。戸惑う俺に、エルナはさらに続ける。

「可愛くて、優しくて、何でも出来て。そんな女の子がタイプなの?」

どこことなく、悲しそうなエルナの声。そんな声は聞きたくない。出来ることならいつものように元気一杯の明るいエルナにしてあげたいけど、原因が分からない。こんな時ほど自分のバカさ加減が嫌になってくる。

「いいや、もう。バカはバカなりに、正直な気持ちを言うまでだ。」

「確かに、そんな子がいたら好きになるかもな」

「……………」

「……………」

「俺が好きになるのはな、いい女なんだ」

「いい、女?」

「そ。外見とか内面とか色々基準があるんだけどな。でもさ、」

一旦言葉を切り、見つめてくるエルナの顔を見ながらその紅い髪をくしゃりと撫でる。

「エルナは十分、いい女だと思うよ」

「……………っ！……………っ！……………っ！……………」

あれ？笑いながら言ったら、エルナの顔が真っ赤になっていく。怒った？おかしいな、褒めたはずなんだけど。そして左右からどす黒いプレッシャーを感じるのとはなぜ？

「ア、アンタは…いきなり、何言っのよーっ！」

「へばっ！？」

顔をトマトのような色にしたエルナが叫び、俺は殴られた。

いや、殴ったというのは少し語弊がある。拳で殴ったのではなく、あるうことか、恐ろしいことに、使われたのは肘鉄であった。しかも、馬乗り状態からそのまま飛び上がり、体重と勢いを一点に集中させたものである。エルナはそんなに体重はないだろうし、飛び上がった距離もたいした事はないが、何せエルナの腕は細く、当然肘も小さい。小さなその一点に集約された力は、普段のその細腕の何処から出るんだと思うような力を遙かに上回っており、それを叩き込まれた（しかも鳩尾。狙ってないよね？）俺は、ごく当たり前のように、気絶した。

「… てなことがあったんだ」

「うむ。死んでくれんか」

「なんでっ！？」

「……………ふん」

ツキにそっぽを向かれました。おいおいどうなってんだよ？俺はただ今日あったことを説明しただけじゃんか。

時刻は夜。場所は俺の精神^{なか}世界。今日も一日が終わり、後は寝るだけとなったので布団に入ると同時にここに来た。

図書館で記憶の本を読みながらツキに今日あったこと、具体的に

は気絶させられて目覚めた後、ユアンやおばさん監視の下実際に飛んでみたり、飛びたいという女性陣を抱えて飛び回ったことを話しただけなのに。全く、女心というのは理解不能だぜ。

「…当たり前じゃ。主が女心を僅かでも分かってやることが出来れば、あの娘たちも報われるじゃろっに」

「ん？なんか言ったかツキ」

「何も言つとらんぞ」

そうか、と呟きまた本に目を落とす。話をしている機嫌を損ねたといっても、あくまで目的は本を読むこと。雑談はついでだ。その中で何があるうと大したことじゃない。少ししたら元通りだ。

「……………」

「……………」

雑談を止めてしまったのでお互い無言。そしてこの場には他に人がいないので静かなもんだ。聞こえるのはそれぞれが本の頁を捲る音ぐらいだ。

仮面ライダーの本を読んでいると、俺の意味記憶についての本を読んでいるツキが話しかけてきた。

「のう主よ」

「なんだ？」

「この七つの傷を持つ男はほぼ毎回上半身の服を破いておるのじゃが、次の回には戻っているのはなんでじゃ？」

「そこを気にしたら負けだよ」

「では戦闘時の声が異常に高いのは何故じゃ？」

「演出だ」

「そうか」

ぺらり。ぺらり。ぺらり。

「のう主よ」

「なんだ？」

「何故この男はいつも海パンしか身につけておらんのじゃ？」

「変態だからな」

「主とこの男ではどちらが変態なのじゃ？」

「俺とその刑事では変態のベクトルが違うんだ」

「そうか」

ぺらり。ぺらり。ぺらり。

「のう主よ」

「なんだ？」

「2014年にこの兵器は完成するのか？」

「個人的には完成して欲しいな」

「このファーストとかいう娘は結局なんなのじゃ？」

「俺はセカンド派だからよく知らん」

「そうか」

ぺらり。ぺらり。ぺらり。

「のう主よ」

「なんだ？」

「この少年の周りでは、人が死にすぎなのではないか？」

「推理モノだからしょうがないんだよ」

「探偵や警察にヒントを示すときの声がわざとらし過ぎるのじゃが

「？」

「演出だからしかたない」

「そうか」

ぺらり。ぺらり。ぺろり。あ、間違えた。

「のう主よ」

「なんだ？」

「この青狸は子守りロボットにしてはスペックが高くないか？」

「きつと22世紀は赤ん坊もレベル高いんだよ」

「【どくさいスイッチ】や【地球はいばくだん】…物騒ではない

か？」

「きつと孫が魔改造したんだよ」

「そうか」

ぺらり。ぺらり。ぺらり。

「の主よ」

「なんだ？」

「どうしてこの娘は葱を持って踊っておるのじゃ？」

「キヤラ付けた」

「髪の色が緑なのはおかしくないか？」

「それもキヤラ付けた。というかそれくらいならこの世界にもいるんじゃないか、異世界だし。見たことないけど」

「そうか」

ぺらり。ぺらり。ぺら

「主よ、そろそろちゃんと寝ないと寝不足になるぞ」

「え、もうそんな時間か？」

「大体午前3時くらいかの」

「うわマジで。全然眠くないから気付かなかった」

「ここでは眠くなったりすることはないぞ。睡眠欲は外の海の一部じゃし」

「言われてみれば。んじゃもう帰るわ。またな」

「うむ。また会おう」

そう言って手を振って、俺はそこから消えた。

戻ったらめちやくちや眠かった。

城に仕えるメイドの朝は早い。

朝5時には起床。素早く身支度を整え、五時半には集合して点呼を取る。

全員いることを確認したら、朝食。それが終わったら城全体の清掃を行う。一時間ほどかけ、ある程度キレイにしたところで終わり、それぞれの仕事に入る。これがこの城に仕えるメイドの日課だ。

以前このことを話した時トモヤ様は「うへー、何そのスケジュール。俺には守れないよ」と言っていた。小さい頃から繰り返し返してきた私はもうなんて事はないのだが、やはり他からすれば辛いことなのかもしれない。

そんな事を考えながら、私　クレア・エスリークは朝日が射しこむ城の廊下を歩いていった。向かう場所は私の主、トモヤ様の部屋。あの人の専属メイドになってから、毎朝彼を起こしに行くことが日課に追加された。まあ彼は寝起きがとてもいいので大した苦にはならないが。

先ほどトモヤ様を私の主と言ったが、別にトモヤ様からお給料を頂いているわけではない。お給料は他のメイドたちと同様リアさんというかユアン様から頂いている。主とお給料を頂く人が別というのはおかしいことだが、特に問題もないので誰も何も言わない。

ユアン様は義姉であるメイラさんを助けてくれたお礼といていた。他にもメイラさんの裁判に乱入した罪を帳消しにしたりと、気が良くてカッコいいとメイドたちの間で評判になっている。

メイドたちの間では（既婚者や年配者を除く）ユアン様とトモヤ様のどちらがカッコいいかと常に論議されていたりする。もうすでに結婚しているユアン様か、好きになっただとしてもライバルが多くしかも気付けてもらえないトモヤ様。どちらがいいかという議題である。

なんでもトモヤ様は日頃から場内を歩き回っており、すれ違うメイドに笑顔で挨拶して軽く話したり、大荷物を持って困っているメイドがいたらさり気なく助けて何も言わずに去っていったりしているらしい。

……………なんだろう。不覚にも苛立ってしまった。

主人に対してこんなことを思ってしまうとはメイド失格だ。自分をきつく戒める。

……………でもまた女の子と関わりを持ったらしい。なんでも例の部屋で見つけた腕輪の中にいたらしい。意味が分からない。けれ

どなんとなくモヤモヤするのでメイドたちとの事を彼女達にそれとなく話してしまおう。

そんなことを考えながら、目的の部屋のドアをノックする。

「起きて下さい。朝ですよ」

それなりに大きな声で言うが、返事はない。いつもの事だ。

「失礼します」

扉を開けて中に入る。見ればいつものようにシーツを体に巻きつけながら気持ち良さそうに寝ている姿があった。

「……………」

……この少年に仕えるようになってから、増えた日課がもう一つある。それは、

「……かぁ……………んう……………ふう……………」

「……………つっ!」

トモヤ様の寝顔を観察することである。

いや、普通に考えて変なのは分かっている。悪趣味だし気持ち悪いのだから重々承知だ。けれど、そんなのを無視してもいいくらいの価値が、この寝顔にはあると思う。

トモヤ様は普段子どもっぽいのが大人びているのか分からない。凜とした顔で難しそうな本を読んでいるかと思えば、寄ってきたラウン様やリン様をまるで兄のような眼で見つめ、次の瞬間には同じように無邪気な笑顔で遊んでいる。その様子は見ていて飽きない。実際私と彼女たちは、気付けばその横顔をじっと目で追っている事がある。ふつと我に返ると猛烈に恥ずかしくなってしまうが。

そんなトモヤ様だが、寝ているときの表情はまさに子ども。お昼寝をしている時のあのなんとも言えない幸福そうな表情そのものだ。こう言ったら嫌がると思うが、正直とても可愛い。

出来ることなら延々と見ていたいが、私はメイド、職務を全うしなければいけない。

「トモヤ様、起きて下さい。もう朝ですよ」

肩に手を置いて揺さぶる。が、起きない。おかしい。いつもなら

こうした途端飛び起きるのに。

不思議に思いながらも、起こすために揺さぶる手を強くする。

「起きて下さい。お目覚めの時間ですよ」

「んあ……あ……」

トモヤ様は顔を僅かにしかめて顔を振ると、私の腕をがしつと驚
掴みにし、思い切り引つ張る。

「え、ちよつと待ってくだ　！」

予想外の行動だったのと、思った以上の腕力に、私は抵抗できず
にそのまま引かれ、

「くふう」

「へ……？」

ぼすんと、トモヤ様の腕の中に納まった。

え……つと……これは、一体……？

も、もしや、これは俗に言う『お誘い』というやつなのでは……？
トモヤ様だつて年頃の男性。やはりそういうことをしたいと思つて
いてもおかしくはない。ああでも、他にも女性はあるのにどうして
私を選んでくれたのだろうか。いや決して嫌という訳ではない。メ
イドとしては主人の要望には出来るだけ応えなければいけないし、
それを抜きにしても個人的にはむしろ……。

「あ、あの……トモヤ様……」

いきなりのことだったので多少言葉がどもってしまふ。が、それ
でも意を決して顔を上げる。

「くあ……すう……」

眠っていた。いつものように、気持ち良さそうに。

「……………」

言葉も出なかった。高鳴っていた鼓動も一瞬でいつものペースに
戻った。

これはあれですか。私は抱き枕ということですか。起きたら枕を
抱きしめていたということがあるけれど、私はその代わりというこ
とですか。寝ぼけて無意識にやったことで、そこにはトモヤ様の意

思や感情なんて微塵も無いということですか。私の乙女心を返してください。

やや不機嫌になりながら、とりあえずこの状態から抜け出そうとする。と、

「うう…ん」

ぎゅ、と。抱きしめられた。

いきなりのこと過ぎてまた声が出ない。自分のことながら動揺しすぎだ。そんな間もトモヤ様は私を抱く腕を強くし、髪に顔を埋めて幸せそうな声を漏らしている。

心臓の鼓動が早くなる。さつきとは比べ物にならない。直接耳で聞こえるトモヤ様の鼓動の二倍は早いと思う。つまりは、動悸の音が耳に届く程に密着しているということだ。その事に気付きさらに鼓動は早くなる。

そして

「……きゅっ……」

目の前が真っ白になった。

その後。

他の誰かが見に来る前になんとか意識を取り戻すことが出来た私は、名残惜しさを振り払いながらも起き上がり、赤くなっているであろう顔を冷ましてから改めてトモヤ様を起こした。

いつもより遅くなったことを疑問に思った数人からどうしたのかと聞かれたが、いつもより起こすのに時間がかかってしまった、と誤魔化した。実際トモヤ様もとても眠そうにしていたので特に追求されることも無かった。

とりあえず。

今朝のことは私の心の奥底に、そっと仕舞っておくことにした。

第40話 出来れば説明は一度で済ませたい（後書き）

……………夏休みが、終わった…

この休み中にしたことといえば、家に引きこもるか、家族と出かけるか、本屋に小説を買いに行くくらい。

……………灰色の青春過ぎるわあああああああああああああああ
あ！

もう少しくらい、充実した生活を送りたい！

これから頑張りたい！

じゃあねっ！

ところでみんな。何のアニメのどのキャラのこと言ってるか、分かった？

第41話 考察、考慮、思慮（前書き）

作風が安定しないッ！

…というのが目下の悩みですハイ。

いろんな方が書いた小説を読みまくったせいで、どうも書体はその人のものにひかれてしまっんですよねえ…

そのくせまともに再現できず、相変わらず下手だし。

ともかく、今話は合間合間に時間を入れてしまったので、多少文体が歪になってしまっているかもしれせん（最早自分では分かりません）

何卒、ご容赦下さひ

第41話 考察、考慮、思慮

「落ちるところまで落ちたら、あとは登るだけ」というセリフを、どこかの誰かさんが言っていたような気がする。

初めて聞いたときは「おお、なるほろ」と思ったが、すぐに「いや違うだろ」と考え直した。

落ちるところまで、ということとは底辺にいるってこと。もう下がることは無いから登るだけというのも間違っていない。けれど、その『登る』ことが大変なんだと思う。

例えば、悪い事をして世間での評判が最低になったとしよう。そしてそうなったやつが、それを遥かに上回るほどのいい事をしたとして、そいつの風評は最高になるだろうか。

まあ当然、否である。最低になつたら、もう元の場所には戻れない。世界の危機を救うくらいの事をしてようやく普通になれるってもんだ。底辺から這い上がったって言う人がいるけど、ありや嘘だね。その程度、まだまだ最低とはいえない。人より少しばかり不幸だったっただけだ。

しかし、だ。最低というのはそんなに悪いことなのだろうか。最悪ではないだけマシだろう。むしろ周りからの評価が最低だというなら、それが分かっているならもう人の目とかを気にしなくて済む様になるのではないだろうか。他の人の視線を気にして何も出来ないくらいなら、いつその事色々振り切つて最低な人間になればいいのではないだろうか。

そんなどうでもいいことを適当に考えながら、今日も今日とて自分の中に潜り本を読んでいる俺であった。

人生で必要なことは全て仮面ライダーで学んだ、と言つても過言ではない俺だが、実はスーパー戦隊シリーズも好きだったりする。あの熱血加減というか、諦めないど根性というか、そういうアツい感じのものが割りと好きだったり。

そんなこんなで、ぱらぱらとスーパー戦隊についての本を読み耽る。でも集中しすぎて時間を忘れるなんて事が無いようにしたい。今朝だつてクレアが俺を起こすのに手間取ったつて言つてたし。自重自重。

まあそれはさておき、こうして読み返すと、昔には昔の、最近のには最近の良さというものがある。昔は結構流血表現があつたりしたんだけど、最近じゃめつきり減つた。ピーチーエーだか教育委員会だか青少年健全育成云々とか、そこら辺の規制によって自粛しているらしい。別に血が無ければ面白くないなどと猟奇じみたことは言わない。いろんな制限とかがあつても面白い番組を作れる東映さんはスゴいと思う。

「……お」

ふと目に留まつたのはとある戦隊のとある色の得意技。中々に使い勝手がよさそうだし、なにより面白そう。

でもなー、出来るわけないんだよなー。実際には無理つて分かる。現実に出ることと出来ないことの区別がつくようになったら大人だと思う。どうでもいいけど。

あー、でもやっぱりやつてみたいな、コレ。何とかできないかな？ここ異世界だし。魔法があるならこれも出来るつて。

「という訳で、ツキ」

「なんじゃ？」

俺の向かいでこれまた本を読んでいたツキが顔を上げてこちらを見る。今読んでいる本は、キツネとイノシシの双子の愉快痛快な珍道中についての本だつた。懐かしいな。

それは置いて、

「叶えて欲しい願ひがあるんだけど」

「ごくごく軽い口調で言う俺に、ツキは鋭い目を向けてくる。

「主、本気で言つておるのか。冗談にしては質が悪いぞ」

「冗談なんかじゃない」

「余計に悪い！分かつているじゃろ、ここでワシに願ひを言うこと

が、どうということかは分かっておる筈じゃ！」

「どうということか。どうということだっけ？」

ああそうだ。テストみたいなものだっけか。言う願いが、心からのものであるか否か。そうだったのならその願いは叶う。実際、俺の翼が欲しいって願いは叶ったし。

けれど、もしそうじゃなかったら 死ぬ。うん。簡単でいいね。でも、死ぬのは嫌だ。絶対嫌だ。俺にとって、死ぬことは最悪だ。死んだらそれで終わり。美味しいものも食えない。欲しいものを得ることも出来ない。情眠をむさぼることも出来ない。面白い本を読むことも出来ない。みんなで笑い合う事も出来ない。死んだらもう何も無い。何も出来ない。そんなの嫌だ。

それでも、嫌だ嫌だと叫んでも喚いても訴えても、いずれは死んでしまう。俺は生きているんだから、そのうち死んでいく。それが明日か来週か来月から来年かウン十年後かは分からないし、知りたくない。でも必ず絶対に必然に避けようもなく逃れようもなくその時はやってくるだろう。

終わりが必ず最悪だと分かりきっているこの人生に、一体どれほどの価値があるのだろう。どんな意味があるのだろう。

なんて事を考えてから、俺は、

「
願いを、言った。」

そして

次の日、俺は城の廊下の角で息を潜めて隠れていた。漫画だと『こそこそ』って擬音が付きそうな感じで。

もとの世界なら下手すれば通報されかねない程怪しげな行動をしているのには訳がある。さしもの俺も理由なしにこんな奇行に走るほどバカじゃない。

人が来るのを待っているのだ。別に指定があったりはしないが、

誰でも良いという訳でもない。仕事の最中のメイドさんには迷惑になつてしまうので、それ以外。有り体に言えば俺が親しくしているメンバーの誰かが来てくれれば嬉しい。

………お！来ました。来たのは…アリスだった。なにやら楽しそうに鼻歌を歌っている。歩調もスキップのそれに近いテンポだし、なにか良い事でもあつたのかな？

だがしかし。俺だつて嬉しいことがあつたんだよ！この気持ちをみんなに伝えるために、いざ！

曲がり角から飛び出した俺はいかにも、ずっと走つてました、的な雰囲気を出しつつ、息を切らせ（る振りをし）ながらアリスへと近づいていく。

「ふんふん あ、トモヤ。どうしたのそんなに急いで？」

「ゴメン、アリス！今ちよつと余裕無いんだ！」

のんきな声で話しかけてきたアリスに適当な言葉を返し、横を駆け抜ける。そのまま走つて先にある角を曲がり、流れるようにターンしてたつた今通つた通路を覗き込む。うむ。自分で言うのもなんだが今の動きは無駄に洗練された無駄の無い無駄な動き、というやつだな。

さて。予想通り、取り残されたアリスはポカンとしている。首を傾げて『なんだつたんだろ？』とか考えているんだろつきつと。

だが、これで終わりではない。そう…俺のターンはまだ終わっていない！

タツタツタ…、と廊下の方から足音が聞こえてくる。その音に気付いたアリスが振り向き…固まった。

その人物とは！？

次回に続く！

………いや嘘ですけどね。

そこまで引つ張るようなことでもないし。端的に言つと、な、なんと、走つてきたのは俺と全く同じ姿をした奴だったのだ！。なんだつてー。どうということだー。

その俺と瓜二つな男は、いきなりすることに硬直しているアリスに
駆け寄り、

「今、こんな顔をした奴がここへ来なかったか!？」

「ふえ?!え、えつと…!」

「バツカモーン!そいつがルンだ!」

「誰その人!？」

至極真つ当な疑問を叫ぶアリスを尻目に男は再び走り出す。そして俺がいる角を曲がると同時に、

「「イエーイ!」」

パシンツ、とハイタッチ。

いやー、さっきのやり取りはどうしても一遍やってみたくてさー。あ、別にコレをやるためだけにこういうのを出来るようになったわけじゃないよ。ふつと思いついたんだよねー。流石俺。

ふむ、楽しくてテンションが多少おかしなことになっているな。どれどれ、この湧き上がる熱いリビドー（意味はよく知らん）に思考を任せ、意味もなく一人語りでもしてみよう。

俺、『分け身の術』が出来るようになりました。

分身じゃないよ、分け身だよ。拘りって大事だと思う。念じれば俺の背後からヌルツと出現するようになってる。原理?仕組み?そんなもんは知らん。多分ツキが頑張ってくれたんだと思う。

材料というか原料というか、素は俺の魔力らしい。生み出した分身の質と量は反比例するらしく、質を優先すれば生み出せる数は限られるし、数を優先すれば性能は落ちるらしい。まあ基が俺だから大した期待はできないけどな。

一定のダメージを受けるか、俺が念じれば消えます。ボフン、と音を立てて白い煙となって消えます。設定って大事だと思う。

自我はある程度有るようで、結構自由に行動できる。どうやら俺の言うことは聞くようになってるっぽい。野郎を思い通りにしても何にも面白くないけどな。記憶は俺のをコピーしているようだ。お陰で打ち合わせがしやすかった。

しかし…俺の外見を完全にコピーしたという話だが、俺はこんな
に濁った目をしているだろうか？見ているだけでイライラしてくる
というか…殴りたい。なんとなくそう思った。

おっと、ようやく脳がさっきの出来事を認識できたらしく、アリ
スが騒ぎ出している。仕方ない。誰かが来る前に説明して落ち着か
せるか。

ほら行くぞ、『俺』。

「で、今回のことについて、なにか言いたい事はあるか？」

「……面白そうだったからやった。反省も後悔もしている気がしな
いでもないことがあることは否定できないことも無きにしても非ずだ
ったりするかも」

「ワケ分かんねえよっ！」

うん。俺も分かんない。適当に曖昧に出来そうな単語を並べただ
けだし。

さて、今回も早速ユアンにバレてしまった。理由は俺が分身を消
さないままアリスの説得に行ったこと。俺が二人いるのをに驚いて
騒がれ、大人しくさせる前に声を聞いてやってきたメイドさんたち
に見つかり、当然のようにユアンに報告された。そしてそのままお
説教ルート一直線。

「……んだよー。別にいいじゃんかよー。俺が羽生やそうが増えよ
うがさー」

「開き直りやがったな…。確かにそうなんだけどよ、それでもさ、
やっぱり心配はするじゃねえか。それが出来るようになって、お前
の体になにか起こったりするんじゃないかって」

「うぐう」

何も言い返せなかった。だよねえ。心配するよねえ。俺だってエ
ルナ達が何か力を得たりしたら、何よりも先に体などに問題がない
かを心配すると思う。だって、元気でいて欲しいから。大事な人に

はいつも元気でいて欲しいから。

「……気にするなつて。どこも問題ないし。むしろこんなことが出来る様になつたんだぜ、スゴいだろ？」

笑いながら分身を出す。背後からニユルリと現れるのは中々に不気味だと思つ。

「うお、ホントに増えやがった。マジでそっくりだな。見分けが付かない」

ふははは。そうだろうそうだろう。完璧にクリソツだからな。上手く使えば完全犯罪だつて可能だろう。やる気は微塵もないけど。と、そこで扉がノックされる。入ってきたのはエルナ達だつた。

「失礼しまーす。…うわ、本当に増えてる」

「…なんか、妙な気分」

「うー、何度見ても慣れないなー」

「トモヤさんつて不思議ですね」

…なに？あの動物園の爬虫類コーナーに来た女子グループみたい
な反応。地味に傷つくんだけど。というか例え方が雑だな俺。どう
でもいいけど。

「…さあいきなりですが問題です。本物の俺はどちらでしょう？」
分身と声を合わせて言う。同じ俺だけあつて息もピッタリだ。微
塵も嬉しくないけど。

『こつち』

「…うえ？」

四人が同時に同じ方を指差す。え…つと、

「…ざ、残念だったな。そつちはハズレだ」

「嘘ね」

「間違いない」

「落ち着いて見れば分かるよ」

「簡単ですよね」

くっ、ならば！

「…」「…」じゃあ今度は四人だ。さあ、当ててみる！」「…」

『これ』

「ぐはっ」

ま、また…また当てられた。何故だ…なーぜー？

あ、あれかな？分身が不完全とか。どこかに決定的な違いがあるとか。

「いや、俺が見たところでは完全に瓜二つだが」

ん、ユアンがそう言うなら間違いないんだろうけど。じゃあなんで見破られんのさ。こうなったら意地だ。十人。

『これ』はい正解。まだまだ、二十人。

『これ』また正解。諦めないよ、三十人。

『…これ』またまた正解。ネバーギブアップ、四十「待て待てもう止める！」

さらに増えようとしたらユアンに止められた。やや慥然としながら理由を聞くところだが、すぐに気付いた。完全に定員オーバーだった。部屋一杯に俺と同じ顔。…おえっ、気分悪くなってきた。とりあえず一人だけ残して他は消す。ポフン。視界は真っ白になった。白煙が晴れたのを見計らい、分身が一瞬で消えたのに驚いているようなエルナ達に話しかける。

「なんで本物の俺が分かったの？分身の出来は結構自信あつんだけど」

俺が設定したわけじゃないけど。ツキはかなり頑張ってたんだよ？そのせいで今は寝てるけど。…腕輪の中って眠れるんだ。いや、俺の中か。

「えー、何でって言われても…ねえ」

「なんとなく、としか…」

「あやふやなんだけど、妙にハッキリ分かるって言うか…」

「外見はそっくりなんですけど、どこか違うんですよ…」

うーん、と唸る四人。いやいや、そんなシツクスセンスで分かったら対策の立てようがないじゃん。

なんともいえないやるせない気分になっていると、がちやりと

扉が開き、ランとリン、それちクリアが入ってきた。

「トモヤー、ここにいるー？　って、なんか増えてる？！」

「お姉ちゃん？何が増えて　ひゃー!?」

「これは……分裂でもしたのでしょうか？」

人をプラナリアみたいに言わないで欲しい。割とどうでもいいけど。

三人は二人いる俺の間で何回か視線を往復させ、そのまま一直線に『俺』へと向かってくる。…キミらもか。

「ねえねえ、なんでトモヤが二人いるのっ」

「また、なにかしたんですか？」

「学習、という言葉をご存知ですか？」

「いやあの、うん、まあ、色々あったんだよ」

矢継ぎ早に問いかけてくる三人に適当なことを言いながら考える。なんでこの三人も本物が分かったのか。

うーん、謎だ。

少し経って、頭を悩ませる人数はやや増えた。

順に行くと、俺、ユアン、エルナ、フィナ、アリス、シルフィア、ラン、リン、クレア、そしてリアさんにおばさんだ。最後の二人は後から一緒にやってきて、二人とも俺の本体を見分けることはできなかった。

分からなかったのはユアンとリアさんとおばさん。本人の俺は除くとして、残った彼女らは何度やっても何人になっても本当の俺が分かったのだ。最後のところがなんかカツコいい気がする。

安直に考えれば年齢が関係しているのかも思えるが、仮にそうだとっても詳しい原理が分かんない。理由が分からなければ対策も立てれず改良も出来ない。イコール、この能力を面白いことに使えない、ということになる。それはイヤだ。

でもま、流石に年はないだろう、ということ、今は『分かった

組』と『分かんない組』に分かれて、あれやこれやと論議している。俺は当事者でどちらでもないのだから特に何もせず、ついさつき目覚めたらしいツキと適当に話している。

「それにしても、あんなにあっさり正体を見破られるとはな」

「まあ、絶対に見破れないという訳でもないからな。いくら主の魔力を固めて作ったとはいえ、言ってしまうばただの人形。詳しく調べれば分かることじゃ」

「アイツらは見ただけ分かってたけど」

「それは…」

「全く………どういふことなんだろうな。分かるやつになんか法則でもあるのかね？」

「あー………その事なんじゃが……」

「ん、何？分かったの？」

「うむ。それについて話したいから、皆を呼んでくれんか」

「ああ、いいよ。おーい、ちょっと来てー」

呼びかける。なんだなんだ、と言いながらみんな俺のところに集まってきた。

「それではまず……誰か、主の耳を塞いでくれんか」

「は？何言ってるんツキ」

『詳しい理由は言えんが……頼む』

真剣なその口調に、戸惑いながらも従うことにした。

とりあえず、俺を除くメンバーでジャンケン。負けた人が俺の耳を塞ぐ、ということになった。

結果、

「……やった」

負けに負けたのはフィナだった。最後のジャンケンで決め手となったチヨキを誇らしげに掲げ、ほんのり嬉しそうである。いや、負けたのになんで？

背後に回ったフィナが俺の耳を塞ぐ。何も聞こえないからか他の感覚が鋭敏になり、触れているフィアの手の感触がよく分かる。ひ

んやりしていて柔らかい。くそう、何故触れているのが顔なんだ。もっとじっくり触りたい。これが終わったら手を握らせてもらおう。

『さて、主に耳を塞いでもらったのには理由がある』

「一体どういうことだ？ トモヤに聞かれたらまずい話なのか？」

『まずいというか困るといっつか、微妙なところじゃの』

お、どうも話し始めたらしいな。どんなこと話してんだろ。大して気にならないぜ。

「じゃあ分かったのか。こいつらが本物のトモヤを見分けられた理由が」

『そうじゃ。というか、お主もおおよその見当はついておるのじゃろう？ この面子を見て、思うところが無い筈がないじゃろう』

なにやらユアンがきよきよると分かったメンバーを見渡し、すごい速度で首と手を振りながら何か喚いている。

「いやいやいやないない。それはないうん絶対にない。仮にそうだとしてもならこのメンバーに俺の娘がいるのはおかしいだろ」
『なにもおかしいことはない。お主の娘もそうであっただけのことじゃ』

「待て待て。簡単に言うけどそれは父親にとって割りと、いやかなり重大なことだぜ？ そんな簡単に決め付けないでくれよ」

『ならば他にどうやって説明するつもりなのじゃ？ 他に共通点はないじゃろう。どんなに信じられないことでも、最後に残ったことが真実なのじゃ』

「何そのカツコいいセリフ。いやそんなことはいいんだ。でも……いや……ぬう……」

なんだろう。ユアンが物凄く葛藤しているように見える。一体どんな事をツキと話してるんだ？ かなり気になる。気になるといえば俺の本体を見つけたメンバーが妙にあわあわしてるのも気になるんだけど。何がどうなってるのよホントに。

「……………分かった。認める。そういうことなんだろうなきつと。でもどうしてそれが今回のことに繋がるんだ？」

『ワシが知るわけないじやろう、そんなこと』

「おい、無責任すぎるだろ」

『責任はこんな願いを言った主にある。そもそも一目見ただけで分かるなんておかしいのじや。そんな簡単に見切られるような組み立てをした覚えはない。これはあり得ない事に無理に理由をつけただけ。もしかしたらこのことは全く関係ないかもしれぬ』

「だがもし理由があるならこれ、ということか。まあその辺りのことはこれから調べていこうぜ。どうせトモヤなら放っておいても該当者増やしていくだろうし」

『腹立たしいことにその通りじやろうな。釈然とせぬがの。ああ、もう主を離していいぞ』

お、耳が自由になった。いやー、助かった。何故かちょっと前から耳を押さえるフィナの力がどんどん強くなってきて、あやうく頭パーンっていくんじゃないかと冷や冷やしたぜ。

「それで、分かったのか？」

「ああ、これつきやないつてのが出てきたぜ」

「へえ、そんなのがあったのか。んじや、教えてくれ」

『ダメじや』

「何故に？ 俺のことだろう」

『お主の事だからこそじや。ワシらからは言わぬ。自分で気付け』
どこことなくツキが冷たい感じがするのはなんでなんだろうね。

ぼく分かんないや。分身が見抜かれた理由含め。ううむ。自分で気づけ、とな……………。

..... 考えんのめんどくせつ。

いいやもう。そのうち分かるさ。だつて生きてるんだもん。いずれ死ぬつて言つても、今はまだ生きてるんだから。価値なんか知らない。そんなもん後からついてくる。だからそんな生と死について哲学ぶつて考える時間があったら、今を、素晴らしく生きるべきだ。

なんてことを、中学二年生の時に考えました。今思えば、すごく恥ずかしいです、まる。

第41話 考察、考慮、思慮（後書き）

ふはははははは！どうだ、下らなかつただろう！
どうせ次もこんなもんだ。期待するなよっ！

……いい加減ストーリー進めないとなあ……

第42話 拘りは人それぞれ（前書き）

ラン
ラン
ルー

第42話 拘りは人それぞれ

スパッツとはいいものだ。

あの独特の光沢。触ったときの滑らかさ。そしてなによりあの張り付くような密着具合。女の子のほっそりとした足の輪郭がはっきり分かり、もう見ているだけで満足できる。

別に足が細くなければ嫌だという訳でもない。太い足、というかむっちりとした足でもそれはそれでいいものだ。なんと書いても食い込むのだ。あの僅かな凹には眼を惹かれ心を魅かれてしまう。

あの色もいい。黒というのが男心を撥る。陽光に照らされ黒光りするのを見ているだけで思い残すことがなくなってしまう。

足のラインとともにお尻のラインも浮かび上がるのもいい。もう普通にエロい。どんなに言葉を尽くしても駆使しても表現できないのだから、もうただ単純に一言「エロい」としてしまっただ方がいいだろう。

俺は見たことはないが、あれはパンツの柄が浮き出ることがあるらしい。まさに神が生み出した至高の一品といえる。まあ柄といっても縞パンや水玉などのレースがないパンツなら浮かび上がったらしのないのだろうが。

あとあれだ、破ける。破くものの代名詞といったらストッキングだが、スパッツはその次に破きたい。ストッキングは全体的に破きたいが、スパッツは局部的に破きたい。破いてしまっただらもう使えなくなってしまうのが些かもつたいないが、それを補って余りあるほどの価値がある。

黒以外にも、白や紺といった色もあるらしいが、それは………
それでありだと思う。

ブルマとはいいものだ。

近頃めつきり目にするのもなくなってしまうました。それが残念でなりません。

どうしてみんなブルマをそういう目で見るのでしょうか。あれは本来体操着のほずです。確かに露出は他の物に比べて多いけれど気にすることはないだろう。十数年前まで実際に学校で体操服に採用されていたのだから。

やはり間違ったイメージが世の中に強く根付いてしまったのが問題なんだろう。

かく言う俺も、ブルマは大好きです。剥き出しになった太ももが眩しいです。どうしてもみんな穿かなくなってしまったんだ。悔しくてなりません。十数年前、当たり前のように見れていた男達が羨ましい妬ましい。

くそつ。体操服だという決まりさえあればみんな穿いてくれるのにつ。普段は控えめで物静かなあの子が、体育の時間恥ずかしそうに裾を押さえながらモジモジしているのが見られるのにつ。ああ、文化系の女の子の太ももは白くて綺麗なんだろうなあ……日焼けした肌もいいけども。

肌を覆う面積が少ないんだよね。それだけじゃなく、上の体操服の裾で半分以上隠れたりすると破壊力は遥かに増す。吐血するレベルで。

世の中の変態さんの中には被つたり自分で穿いたりする剛の者がいるらしい。うん、片っ端から剥がしてやろうか。爪とか顔とか生皮とか頭皮とか魂とか。

あれは女の子が穿くからこそ殺傷能力が出るのだ。野郎が身につけたところで見ているこつちが嫌悪感と嘔吐感と倦怠感を抱くだけ。ブルマは生地が厚いので破いたりするのはそれなりに労力があるのであまりお勧めはしない。が、代わりにノーパンで穿くという神業が可能だ。ショーツと面積が変わらないので気付かれることは無いだろう。そのままずらして（以下省略）ことも可能だ。

なにはともあれこのブルマ、まさに人類の叡智が生み出した宝具といったも過言ではないだろう。むしろ足りなくらいである。

短パンとはいいものだ。

前述した二つ、スパッツとブルマに比べてエロさが足りないらしいが、断じてそんなことはない。そんなことを言うのは世に無数に蔓延る三流の変態どもだ。

直接的なエロティシズムも悪いものではない。むしろ素晴らしい大好きだ。しかし、それだけで終わっているようではそいつはまだまだぬるい。何もエロくない。健全、もしくは全く無関係なものから派生してエロを見つけてこそ一流の仲間入りが出来るのだ。腐女子と呼ばれる人種が転がる鉛筆を見ただけでカップリングを妄想できるように、我々も柔軟な発想で自由な妄想をしていくべきなのだと俺は思う。

話を戻す、一見特に問題がなさそうに見える短パン。目に見えるほどラインを浮き上がらせているわけでもなければ取り立てて肌を晒しているわけでもない。どこがエロいのだという人もいるかもしれない。だが、短パンには短パンの、それこそスパッツやブルマを上回るほどの良さがある。

それは　チラリズムだ。

短パンはスパッツやブルマほど女性の肌に密着しない。ということとは、女性の肌との間に隙間があるということになる。それに加え、さつきも言ったように短パンは一見するだけでは防御率の高いものだ。故にそれを装着している女性は油断する。「短パンを穿いているのだから問題ない」と。

以上のことを踏まえると、男が、いや漢がすべきことは一つ。覗け。バレないように覗け。バレないように、されど臆することなく。短パンの内部にある樂園パンツを覗け。運がよければノーパンかもしれないぞ。その場合、そのことは誰にも言わずそっと胸の内に秘め、継続して見続ける。まあバレたらよくて村八分。悪くて通報だから気をつける。

以上、俺の体操着への情熱の一部である。本当なら上の方についても語りたいが、今は涙を吞んで割愛させてもらう。いやまあどうでもいいけど。

「……………変な夢を見た」

あくる日の昼下がり。昼寝から目覚めた俺はかなり嫌な気分だった。

夢の内容というのが、俺がどこかの壇上に立ち、そこで体操服の下のほうについて熱く語っているというなんともふざけたものだった。いやまあ言っていることは確かに俺の自論だったので弁解することはないが。それを夢の中とはいえ大衆の前で語るのはどうよ。欲求不満なのかな俺？

太陽の傾きから推測するに寝ていた時間はおおよそ二時間。寝過ぎたような寝足りないような微妙な感じ。このままいい感じにだらけてもいいが、今日はなんとなく起きていたいと思ったので目覚まし代わりに城内を徘徊したいと思う。散策でも探検でもいいが目的も意思もやる気もなく歩き回るだけなので徘徊でいいだろう。やる気がないので寝癖を直すのも不精した俺は、若干寝ぼけている体を引き摺りながら部屋から出た。

「どうしてこうなった…」

はあああああ…、と深いため息を肺活量が許す限り吐く。限界まで出し切って音が掠れてきた辺りのため息を止め、現実逃避をする暇もなく現実を直視させられる。

「それでは、王様ゲーム、はじめーるぞーっ！」

「おーっ！」

何そのテンションついていけません。

現状がよく分かってない人（俺）のために、客観的観点から見た一連の流れをフローチャートを用いて説明しよう。

部屋を出る エルナ達に捕まる どこかの部屋に引き込まれ雑誌を突きつけられる 載っていることを説明する 王様ゲームに強い関心 脚色・虚偽・蛇足をふんだんに盛り込んだ説明 実際にやつ

てみよう どこからかユアンが現れ参入 あれよあれよという間に準備完了。さあ、ゲームを始めよう 今こそ。

これは……最初の選択肢をミスったな。あそこで部屋を出ないを選択していればこんなことにはならなかったのに……。それからのことはほとんど強制イベントだったからな。

「おら、次はお前の番だ」

ずい、と突き出された手から反射的にくじを引いてから自らの失敗を悟る。しくった。くじを引かずに参加せず傍観していればよかったんだ。参加しない旨を告げて壁際に立っているクレアもいることだし、俺もそうすればよかったんだ……！

「よし。全員引いたな。それじゃ………」

『王様だーれだ！』

ホントなんで皆ノリノリなんですか？王様ゲームの何処にそんな心踊る要素があったんですか。こういうゲームが物珍しいのはわかるけどさ。

…もーいいや。流されるだけ流されてやる。俺は王様ではなかったのでぐるりと周りを見渡す。

「ふはははは！俺が王様だ！」

職業：国王のおっさんが高笑いしていた。見ていてとても痛々しい。俺以外の参加者が落ち込んでいるのだがそんなに王様になりたかったのか。

「それで、命令の方だが……」

『王』と書かれたくじを指で弄りながらニヤニヤするユアン。油断してはいけない。コイツは俺並にトチ狂ったことを言い出すことがある。

「六番が、三番の、耳を甘噛みする！」

スパアンツ！ と突然現れたりアさんがユアンの頭を引っ叩いた。「アナタは…自分がこの国の頂点にいる人間だと自覚しているのですか………！」

般若も真っ青な形相で静かに怒る。悲しいかなその怒りの矛先に

いる男は頭を抑えながら床を転がって悶絶中。今の言葉を聞いていたか怪しい。

しかしまたバカげた命令を出してきやがったな。これはあれか。説明のときの例え話でそつち系のことばかり出しすぎたせいか。まあ合コンではこんなノリもあるだろうから別にいいんだけどさ。いいんだけどさ！

俺が六番つてのはどんな嫌がらせかなあ……！

さて。まあこうしても仕方ない。説明の際「王様の命令は絶対だから」と何度も言ったのだ。きつと皆分かってくれる。精々腹パンがいいところだろう。くじを皆に見えるようにしながら三番の人を探す。

「ふえっ!?!」

三番はリンだった。うわあ……やり辛いな。他の奴ならやり易いという訳ではないけども。あとその他周りの方々をお願いしたい。『テメエ……まさかホントにやる気じゃあ……ねエだろうな……?』的な視線やめて。体に穴が開きそう。

……あ、はい。やりますよ？やるに決まってるんじゃないですか。こんな「王様の命令だから仕方ないじゃないか」って立派な大義名分があるんだぜ？ここでやらなきゃ男が廃るってもんよ。幼女の耳を合法的に甘噛み出来るチャンスなんて一生に一度有るか無いかだし。

「という訳だ。恨むならアホなことを言ったユアンを恨め」

「ほ、ほほほ本当にやるんですきやあ!?!」

リンはパタパタと手を振り回しながらテンパっていたが軽く無視し、パクリと耳を啜える。やや固めの上半分の部分を唇で食む。そのままややわやわと動かしてみたり。

「ひゃ……ん……あ……や、あ……」

リンの口から漏れる弱弱しい声。……あれ？なんだろう、この胸の奥から湧き上がってくる感覚は。有り体に言うとゾクゾクする。やべエ。

『……………』
この光景を見ている人達から物凄くドス黒いオーラが出ているのでそろそろ止めようと思ひ、最後にカリッと噛んでみる。

「~~~~~っつっ!!」

あら。リンの体がビクビクツと震えたかと思うとパタリと倒れてしまった。そんなに痛かったのか。地味に反省しながらリンをちやんと座らせ、俺も元の場所に戻る。

「……まあ、その…なんだ。俺がちよつと調子に乗ってた気がする。すまなかつた」

頭を下げる。だつて皆が目からビーム出そうとしてんじゃないか。つてぐらい睨んで来るんだもん。怖かつたのさ。

「…まあいい。変な命令した俺も悪かつた。気を取り直してもう一回だ」

仕切ちなおすようにユアンが言いくじを回収。じゃらじゃらとかき混ぜて分からないようにした後、再度皆に配る。

「いいな。んじゃ、せーの…」

『王様だ〜れだ』

……………。

「あ、私です」

王様はシルフィアだつた。ふう、助かつた。これならそんなに変な命令は出ないだろうキャラ的に。いやまあ最近ブレ気味ではあるんだけどさ。それでも他の面子よりはマシだろう。

「えつとそれじゃあ…七番さん、私の肩を揉んで下さい」

ほらスゴくまとも。これならこれ以上場の空気がマイナス方向に傾くことは無いだろう。

「うえーい。七番です」

安心しながら挙手する俺。流石に今回は誰も文句を言つたりは

『……………チツ』

「おい誰だ今舌打ちしたの。何だ？何が不満なんだオイ」

くそ、一斉に顔背けやがって。全員犯人てことにすんぞ。

「まったく、何が不満なんだろうね全く。肩揉みなんてなんてことないだろう。おばあちゃん想いの孫だつてやるじゃないか。まあお小遣い目当ての孫もおじいちゃんにしたりするけど。」

「俺はだるかつたんでやろうとしなかつたけど、会う度にやらされるんだよなあ。離れて住んでるから会いに行ったり向こうから来たりしない限りやることは無いけど、それでもめんどくさかつたな。」

「だがそのお陰で俺の肩揉みスキルは高レベルだ。だつて下手だと拳骨とかデコピン喰らうんだぜ？さしもの俺もそれなりに頑張つたわ。」

「んじゃ、揉みまーす」

「はい、お願いします」

シルフィアの後ろに立つて言う。……あれ？今のセリフ聞き様によつてはかなり変態なのでは？どうでもいいか。

前にある細っこい肩に手を置き、ゆっくりと動かす。

「おろ？案外凝つてるんだな」

「ええ……うん……どうしてかは……あふ、分からないんですけど……んっ」

うむ。台詞の節々に入る声が俺の煩惱を激しく刺激するけどもそれは一旦横に置いて。シルフィアは肩凝りが酷いのか。なんでだろな。

……ああ胸か『（ヒュンツ！）』「危なっ！？」

さつきまで俺が立っていた場所の背後の壁にありえない速度で飛んできた五本のくじがぶつかると。あのままだつたら危険だつた。最低三本は顔面コースだつた。

『……………チツ』

「またか。だが今度は分かるぞ。今くじを持って無いやつが犯人だつてユアン以外全員かよ」

「うわ、バレたとなつたら開き直つて睨んできやつた。いやいや今回は俺は無罪だろう。何も喋つてないんだから。そっちが勝手に深読みしただけですよー！。」

五人と目力で戦いながら肩揉みを続け、こんなもんでいいかな？と思つた辺りで止める。

「はい終わり。どうだ？楽になったか」

「ええ、とつても。ありがとうございました」

いいってことよ、と返し、繰り出される足掛けやスタンプを華麗にかわしたりかわせなかつたりしながら席に戻る。足がジンジンするぜ。

それからまたくじ引き。投げられたくじはクレアが拾い集めてくれていた。お疲れ様です。

さて、三回目。一回くらいは王様になりたい。最低限酷い目には遭いたくない。

「…アタシが王様よ」

王のくじを見せながら不敵に笑うエルナ。コイツ…確実に俺を狙ってやがる。だが、甘い。当たる確立は七分の一。そうそう引き当てられるわけが無い。

「それじゃあ、四番はトモヤをぶん殴りなさい」

「おいバカ待て名指しは流石にダメもるすあつ?!」
嬉々としたアリスに頬を殴られた。

……………泣いてもいいよね？

殴られたところを生み出した氷で冷やししながら、軽く涙目で「名指しはダメ」ということを説明。悪いとは思っていたのかエルナとアリスは謝ってくれた。うむ、許そう。

それからゲームは続いた。

ユアンがおばさんに抱きついたり、ランがデコピンされたり、俺とユアンが本気で殴り合ったり、エルナがしっぺされたり、俺が城の外周を十周させられたりした。

……気のせいかな、俺とユアンだけ酷い目にあってる気がする。過ぎたことだしどうでもいいけど。

何度目かになるくじ引き。心なしかぼろぼろのユアンの声。

「せーの」

『王様だーれだ』

「私」

小さくくじを掲げたのはフィナ。表情が読めない分、何を言い出すか分かったもんじゃやない。

しばらく悩んだ末、フィナは小さく呟いた

「じゃあトモヤはこれから先、引いたくじの番号を皆に見せること」
なん……だと……？」

くっ、上手い。この場で終わることではなく、次へと繋がる一手。今回は何も無くとも、次から俺が苦しくなる。他の面子も番号が分からないやつよりは確実にわかる俺を狙うだろう。なんという……そんなフィナは俺のことが嫌いか！

だが、その命令には決定的な穴がある！

「残念だが、その命令は無効だ、フィナ。名前ではなく番号で「じやあ二番」……残念だが俺は二番じゃ「一番だ」「三番よ」「四番だよ」「五番です」「六番よ」「七番です」お前ら俺が嫌いなのか！」
二番と書かれたくじを叩きつける。てかコイツら全員グルだろ……今の息の合いつぶり普通じゃねえぞ。

ジロジロと周りを睨んでいると、横合いから伸びてきたユアンの手がくじを回収。じゃらじゃらとかき回す。

今の流れから見ても、他の全員が俺に命令を聞かせようとしているのは明らかだ。どんなことをさせられるか分かったもんじゃやない。故に、俺はここで絶対に王を引かなければならない。

差し出される手。手の中には八本のくじ。最初に引けてる事が……上等じゃねえか。

眼前にあるくじ。その一本を見て見切り見極める。そしてゆっくりと手を伸ばし

「（コンコン）失礼します。ラン様リン様、お勉強のお時間です。講師の方がお待ちになっていま ヒィッ！」

しまった。いきなりこのことにヤバイ目つきそのままに入ってきた

メイドさんを見てしまった。いやー驚かせちゃったな。失敗失敗。「えー」だの「うー」だの言っただけでぶーたれるランとリンだったが、またいきなり現れたリアさんに諭されて渋々と、部屋に来たメイドさんに連れられて出て行った。

「さて、二人いなくなつたから二本抜いてつと。んじゃ、王様ゲーム続行「残念ですがユアン様、政務の方が溜まっておりますので」「えー、しょうがねえな……じゃあ後一回やったら終わるか」

全員がくじを引いた。これで……これで、全てが決まる！

「せーの」

『王様だーれだ！』

……………。

「……やはり最後は、本当の王の俺の下に来るといふことだな」

ニヤリと笑つたユアンは、俺を意味ありげに見る。俺は軽く毒づいて五番のくじを投げる。

「ほう、五番か……」

ニヤニヤと笑いながら腕組みして何かを考えるユアン。しばらく思考し、決まったらしく居住まいを正す。

「では命令だ。まず、五番が」

やはりか。だがそれでどうする？俺が何をすればいいんだ？どっしり構えてどんな命令が来ても動じないようにする俺。

だがそんな俺の覚悟を、この男は容易く壊した。

「一番、二番、三番、四番の順で、一日デートする！」

……………、は？

ギ、ギ、ギ、と固まった首をどうにか回す。やはり彼女達も固まっているようで、ポロリと手からくじが落ちる。

くじを見る。

一番がエルナ。

二番がシルフィア。

三番がフィナ。

四番がアリス。

.....あー、その、はい、とりあえず

どうしたもんかなあ.....。

第42話 拘りは人それぞれ（後書き）

すみません。前書き、トチ狂いました。

まあそれは置いて、王様ゲーム、です

作者はやったことありません。やりたいです、女子を交えてやりた
いです。まあそれはどうでもいいとして。

マズいっす。ヤバいっす。なにがピンチかって言うと、学校のテス
トです。無理無理、さっぱり分かんない。授業をロクに聞いてない
俺に分かる訳が無いだろう。俺にとって授業時間は寝るかラノベを
読むか近くの男子とバカ話をする時間なのです。

あー、イカン。テストの事を考えると鬱になってきた。……もうダ
メだ、死のう。

それではみなさん、さようなら。

第43話 初体験（やらしくはない）（前書き）

最近、アニメを見ていない。

小説しか読んでいない。

たまーに読んでいる本のアニメ版を見ると違和感がある。やはり字面と動く絵では受ける印象が違うのだろう。

まあ小説もアニメもどっちも好きだからいいけどね！

第43話 初体験（やらしくはない）

どんなことでも、初めてというのは緊張するものだ。

人は過去の経験を生かして生きていく。故に前例が無いものというのは恐怖心からか好奇心からか、どうしても緊張してしまう。いくら脳内でシミュレートしても先達からのアドバイスを聞いたとしても、こればかりは仕方ない。

けれど緊張するというのは決して悪いことではないはずだ。緊張している間は少なくとも油断することは無いし、緊張を少しでも和らげるために入念に用意することも出来る。

だがどんなに事前に準備していても不測の事態というのは得てして起こってしまうものである。全く世の中というのはままならない。

そんな時、慌ててしまうのは一番の悪手だ。落ち着いて深呼吸。それから冷静に対処するのが一番いい。大抵の問題は熱いコーヒーを一杯飲む間に解決するといったのは誰だったか。

あれ？でも別に初めてじゃなくても緊張するよな。思えば小学校の頃、遠足の前日というのはえらく緊張したものだ。もちろん良い意味で。ワクワクドキドキ。楽しみで楽しみで眠れなくて、でも親に言われてベッドに入って、そしたら気付いたら朝だった、ってことは定番だよな。

逆に緊張しなかったこともある。高校生活初日、周りの皆は新しい環境に馴染めるかどうか不安な反面、少なからず何かしらの期待があつたはずだ。でも俺はそんなことは無かった。中学の卒業式も高校の入学式も大した差はなかった。そんな俺を見て周りのやつらは「枯れてるな」と評した。俺もそう思った。

……ん？待つてくれ。それじゃあまるで俺が潤っていた時期があったみたいじゃないか。潤沢になる余地が僅かでもあるみたいじゃないか。どうでもいいけど。

そんなことはさておいて、何が言いたいかというと、初体験であ

る。

　篁智哉、何気に人生初デートである。

　…緊張して悪いか。緊張するに決まってるだろうが。昨日は良く眠れなかったし、今だって手に変な汗かいてるし！

　それにしても、初めてのデートが王様ゲームの命令ってどうなんだろ。いやでも、初デートは初デートだし。

　前の世界で女性と二人きりで出かけることはあったけど、あれはあれだ。鈴とはおつかいだし、柚葉とはあくまでデートの練習だし、ノーカウントでいいだろう。

　何が違うってワケじゃない。女の子と二人きりで街を歩いて色々するってのは変わらないけど、なんかこう…「デートする」って意識があるから無性に緊張するんです。どうしましょう。

　いやさ、でもさ。相手はエルナだぜ？よくよく考えると緊張する必要が無い気がしてきた。なにせこの世界に来てから一番長く一緒に居たんだから、個人的にはもう家族も同然といってもいいくらいだ。

　家族とお出^{デート}かけする。ほら、気にすることは無いだろう？

　考えに考えた末、そんな結論に至った俺は大きく息を吐いて後ろの石像に体を預けた。

　昨日やった王様ゲームの最後の命令によって四日連続で別々の女性とデートすることになった俺（ここだけ抜粋すると俺かなりのリア充だな。あくまでここだけ見れば、だけど）。そのデートは発案者というか命令者のユアンによって色々条件を付けられた。

　面倒くさいことにデートは待ち合わせをすることになってしまった。ということ、十数分前に俺が先行して城を出、街の中にあるこの国の創始者を象った石像で待っているというこの状況。非常にメンドクさい。いいじゃん、一緒に出ればいいじゃん。「これもデートの醍醐味だ」とかなんとか言っちゃってくれやがってあの野郎サプライズもあるから楽しみにな、って弾ける笑顔で言ってたのもキモかったぜ。

後、丁度いいから、とよく分からない理由で元々着ていた服を返してもらった。いや、正確には着ていた服にそっくりに作った服を貰ったというべきか。着てた服は穴だらけだったり血まみれだったりでもう着れないらしいく、ユアンの好意でそっくりな服を作ってくれることになった。

スゴいね。着心地抜群だよ。いい生地使ってるっぽい。メイドインチャイナの前のやつより数段質は上がってるね。つか前の世界の裁縫技術を真似るってとんだだけですか。

しかも、この服を縫うときに特別な手順と手法を用いたらしく、この服一つで複数の魔法陣を描いており、その効果で防御力上昇・各環境への適応・汚れがつきにくい・油汚れが落ちやすい・シワにならない・色落ちしない、などといった非常に便利な効果が付けられた……らしい。詳しいことは分からぬ。

しかし暇だ。すぐ暇だ。何もすることが無くて手持ち無沙汰だ。周りには同じように待ち合わせをしていると思いき人達が男女合わせて数人居るが、その人達も退屈そうにしている。周囲には暇をつぶせそうな建物がいくつもあるものの、少しでも離れている間に待ち人が来る可能性もあるので却下。

あまりにもやることがないので空を見上げて雲を数えることにする。……うわ、千切れ雲多いな。

「……………お待たせ」

カウン트가三桁に届くかという頃になって、聞き慣れた声が耳に入る。雲の数えるのに集中し過ぎてた。雲の境目が曖昧すぎたのが悪い。……おりよ？ 気付かなかったけどなんか周りがザワザワしてるな。ま、いいか。長く固定していたせいで固くなった首を動かし前を見て、

「……………」

絶句した。開いた口が塞がらなくなるという体験を人生で初めて

経験した。

何があつたかといえ、何が問題かといえ、それはエルナの服装だった。

赤系統の色をしたキャミソールっぽいシャツを重ね着して、下はデニムっぽいミニスカート。なんとまあ、俺からしたら普通の格好をしていた。

いや、それだけならいいんだ。それだけだったら懐かしいと僅かな感傷に浸ってそれで終わりだった。でも、そんな服装をしているエルナが…

「な、なに見てるのよ…」

着慣れない服を着ているせいなのか、はたまた普段より肌色の面積が広くなる服装をしているせいなのか、やや頬を赤くしているエルナ。その姿は…なんというか…

……………くそつ、カワイイじゃねえか。ありがとうございます！

さてはユアンが言ったサプライズってこのことだな！あの野郎、粋なことしやがって！帰ったら本気でお礼を言おう。

あ。ひよつとして周囲がざわざわしてるのってエルナのせいか？そうであつてもおかしくない。今のエルナはそれほどの魅力があるのだから。…………あ、連れ添ってるカップルの男がこつち見てて彼女に頼引つ張られてる。やはりか。

ふむ、とりあえずもう一度エルナをつま先から頭のとっ辺までじっくり見てみよう。…………うん、いいね。

「ちよつと、何さつきからじろじろ見てんのよ。…もしかして、どこか変だった？」

きよろきよろと自分の格好を見渡す。やっぱり着た事の無い服を着るとするのは不安なのだろうか。

「ああいや、大丈夫だ。どこも変じゃない」

「ホント？なんか周りもちらちら見てくるし…やっぱり変なんじゃない…」

落ち着かなさそうにしているエルナに、「あー、違う違う」と苦

笑しながら、

「エルナがカワイイから、周りの人達は見惚れてんだよ」

「ひゃいつ!?!」

ボフンツ!と擬音がつきそうな勢いで顔を赤くした。ん? 一体どうしたんだ? …… って、

「…………… おうふ」

なーに言っちゃってんだよオレ。やっべえ、ついつい口が滑って本音が。

だがここで動揺を顔に出せばこの場の空気がギクシャクするのは自明の理。敢えてポーカーフェイスで『ん? なにか?』って感じで乗りきろう。

「…………… ホントに?」

先程よりはマシになったものの、まだ顔が赤いままのエルナは照れたように見上げてくる。俺はその頭に手をのせ、セットしてきたであろう髪が崩れないように優しく撫でた。

「本当だ。キレイだよ、エルナ」

「…………… あ、ありがとう」

さらに顔を赤くして俯くエルナに苦笑しながら、その手を引いて歩き出す。折角のデートなのだから色々見て歩きたいし、なにより後ろの方で今のやり取りを見ていた人達のいろんな感情が混じった視線に耐えられなかった。

…………… 嗚呼、自殺したい。悶絶死で。

デートの定番といったら三つある。定番というからには当たり前すぎてインパクトはあまり無いだろうけど、やはり定番というのは外れないものだ。

しかしここは異世界。定番の一種の映画は技術が足りないだろう。向こうから色んなものがよくちよく流れてきているらしいので、探せばフィルムの一つや二つ、映写機の一台中くらいはあるかもしれ

ないが、とりあえずはデートで手軽に楽しめるようなものではないだろう。

一種の内、ボウリングやバツティングセンターなどを含むアミューズメント施設もまた除外。そもそもそんなスポーツがあるかどうかすら危うい。他にもサッカーとか野球とか。まあスポーツにはあまり関心は無いのでなくても構わないのだが。

故に、初めてのデートであるし、やるからには相手の女性を楽しませたいという妙な義務感を抱いている俺が選んだのは三種の内の最後の一つ、尤も無難ともいえる選択、シヨツピング。というかウインドウシヨツピングだった。

ということ、わたわたとあつた後、なんとか平静を取り戻したエルナとともに、

「あ、これ可愛いわね」

「えー、そうかー？」

「アンタね、こういう時は頷いておくもんなのよ」

「そんなもんなの？」

「そんなもんなの」

こんな感じ。

ぶらぶらとしながら店を覗き込んで感想を言い合う。そしてたまにある屋台で適当な食いもんを買ったり買わなかったり。美味そうだった買う。金に問題はない。軍資金はあらかじめユアンに渡されている。この金を出すためにリアさんから晩酌を一本減らされたユアンに黙祷。

「~~~~~」

楽しそうに鼻歌なんか歌っているエルナ。何処と無く浮き足立った様子で俺の前を歩いている。動きにあわせてぶらぶら揺れるポニーテール。引っ張ってみようか。いややめよう。以前妹の髪を引っ張ったときに豪く怒られたっけ。曰く「痛くするのはいいけど髪を引っ張るのはやめて」。おかしいだろ。

やはり女の人にとって髪は大事なものだろうか。男からしたら、

少なくともオレにとっては、髪なんて放つとけば伸びてきて適当なタイミングで適当に切つとけばいいもの、というイメージしかない。俺の価値観なんてどうでもいいけど。

とりあえず、女性にとって髪は大事なもの。ご多分に漏れずエルナもそうなのだろう。ツヤツヤしてるし。手をかけてるんだろう。

ふむ。……………。よし。

「エルナ、こつち」

「え？ちよ、ちよっと…？」

困惑するエルナの手を引き、直前に発見していた店に入る。店員のお姉さんの「いらっしや〜い」という声を聞きながら、目当てのブツを探す。

入ったのは雑貨店。女の子の子供の小物が一杯あるような店。多分ここならあるだろう。陳列棚をチェックしていく。

「ねえ… なんなのよ一体…」

あ。エルナの手掴んだままだった。慌ててぱつと離す。「あ…」残念そうな声が聞こえたけど、気のせいだろう。え〜っと、多分ここらだと思っただけど……………。お。見つけ。

「なにそれ？」

棚から取り上げた物を見てエルナが聞いてくる。いやいや、これはどう見たって、

「リボンだよ。髪留めとも言う。お前へのプレゼント」

「……………。え？」

きよとんとするエルナ。面白かったので破顔。

「折角のデートなんだ。彼女にプレゼントの一つぐらいしてもバチは当たらないだろ」

「彼女って……………！」

顔を真っ赤にして俯かれた。恥ずかしいのか？俺も言ってるだけじゃない。顔が赤い。恥ずかしいのか？俺も言ってるだけじゃない。

赤くなつて動かないエルナの手を引いてカウンターへ。レジにいるお姉さんの微笑ましいものを見るような視線に耐えながら会計を

終える。

「んじゃこれはこのまま」

お姉さんから受け取ったリボンを流れ作業でエルナに渡す。エルナもおおずおおずとしながら受け取ってくれた。

「気に入ったらつけてくれや」

「……うん。ありがとう」

顔を綻ばせるエルナを見て、買ってよかったと再確認。

ふんふん。今のオレは気分がいい。ちよつと調子に乗るか。

「なんなら、今リボンつけてやるうか？」

「ええっ！？い、いいわよそんなの……」

「遠慮すんなつて。あ、ども。さ、座つて座つて」

話の流れから察してか、どこからともなく椅子を二脚用意してくれたお姉さんにお礼をいい、エルナの膝をあれこれしてさくつと座らせる。その時に手からリボンを抜き取るのを忘れずに。

「はいはい。じゃあ始めます」

「あれ！？いつの間に椅子に座つて……リボンも無い！？」

何か騒いでるのをスルーして、とりあえず今髪を結んでいるゴムひもを解く。バサツと波打つように広がる紅い髪。ふわつと漂ってきたいい匂いにくらつとするが微塵も表に出さないことに成功するんぐ、こうなるとただ結うだけじゃ味気ないな……ん？肩を叩かれ振り返るとお姉さんが櫛を渡してくれた。ありがとうございます。お姉さん、空気というより心読んでるんじゃないですか？

気を取り直して。

優しく丁寧に、一房ずつ髪を手にとつては櫛を通していく。やはり手入れを怠っていないのだろう。引つかかたりしない。触り心地もいい。こういうと変に誤解されるかもしれないが、女性の髪というのは誰のでも触り心地はいいもんだ。昔から、鈴と喧嘩した時は、大体風呂上りの鈴が部屋にやってきて黙つて櫛とドライヤーを差し出し、対する俺も黙つてそれを受け取り髪を梳いてやって、それで仲直り、というのが定例になっていた。お陰で髪を梳くスキル

は中々のものになっていたり。

黙って俺のされるがままになっているエルナだが、やはり恥ずかしいのか時たまもぞもぞと体を動かしている。可愛いもんだな。

さて、あらかた櫛を通し終えたところで手を止め、今度はリボンを持ち髪を結ぶ。最後の結び目をきゅっとしたタイミングでやはりお姉さんが鏡を持ち出してきてエルナに見えるようにしてくれた。お姉さんマジぱねえ。

「……………」

「ふふん。どうだ。自信作だぜ」

「……………ちゃんと出来てるのが意外」

なにおう、と文句を言おうとしたけれど、リボンに手をやって柔らかな温かい笑みを浮かべているエルナを見ると、なんだかどうでもよくなつて。

ポンと頭に手を置き、

「よく似合ってるよ」

「……………ありがとう」

どういたしまして、とぶっきらぼうに告げられたお礼に笑顔で返事をすると、「ふん！」とそっぽを向かれた。でもやや赤くなつてしまっている頬は丸見えなので意味はないだろうが。

そっぽ向きながらもどうしようもなく口元が緩んでしまっている彼女を見て、俺は人生初デートの成功を悟ったのだった。

第43話 初体験（やらしくはない）（後書き）

みなさん、声優さんはお好きですか？ ボクは大好きです。

NO.1は水樹奈々さんです。異論は認めん。

演じてるキャラがみんないい子です。歌も最高です。総合評価で満点です。むしろランク付けすることも点数をつけることも愚かしいこと思えてきます。

個人的にはキリスト様やブツダ様よりも、オレは水樹奈々さまを神として崇めたい。むしろすでに崇めている。

みんな、水樹奈々さんを好きになろう！

第44話 Second day(前書き)

こーんかーいはー、みーじーかーいーよー。
ゴメンねっ！

第44話 Second day

懐かしい夢を見た。前の世界の思い出だった。

それで思い出したのだが、昨日散々初デートとか言っていたが、一回だけデートと思しき事をしたことがありました。

いやでも、あれはデートといえるのだろうか？相手は八歳の女の子だったし……待ってくれ。勘違いしないでくれ。決して疚しい気持ちがあつた訳ではない。成り行きでそうなたただけだし。しかも最終的にはロシアン・マフィアに銃で狙われる羽目になつたし。ファミリーのボスの娘とは思わなかつたぜ。出来れば最初に言つて欲しかつた。

そのファミリーで内部抗争があつて、反抗勢力の手から逃れるためにやってきたお嬢様と、何の因果か近所の商店街を散歩することになつた俺。そこで現れる刺客達。向けられる銃口。少女を庇いながら必死に逃げる俺。いやー、あれは危なかつたな。最後足撃たれて絶体絶命だつたし。あそこで親父が偶然通りがかつてなきや、母さんからのお使いで金物屋さんに研いで貰つたばかりだつた柳葉包丁を持っていなきや、完全に頭ぶち抜かれて死んでたね。というか包丁で銃弾ぶつた切るとか親父マジ何者。

あの子元気かな。今頃どうしてんのかな？今度会うときはピロシキ作つてくれるって約束したっけ。本当に懐かしい。中三の時期の修学旅行の次に印象深い出来事だつたぜ。別れ際にキスされて（頬に）俺が女性陣に殺されかけるといふイベントさえなければいい思い出だつたのに。

今日も今日とて、街の広場の銅像に寄りかかりながら人を待つ俺は故郷の事を思い出して軽くセンチメンタルな気分になっていたりする。三秒で元に戻つたけど。

ふむ。今日はシルフィアだっけか。今回もまた現代風ファッションに身を包んだ状態で来てくれるのだろうか。

期待していいはずだ。あのユアンが外すとは思えない。昨晚全力でお礼を言った後、これからも任せろ的なコメントを頂いたし。

ああでも不安だ。ここから城まではそれなりに距離がある。ここまで来る途中で暴漢に襲われたりしないだろうか。危惧していることは向こうも同じでしょうで、ここまで来る間そこかしこに明らかに訓練を受けた動きをしている人がいた。恐らく兵士の人だろう。それでも心配は拭えない。監視の目にいくつか穴があったのを見つけた。勘のいい奴ならそれに気付く筈。やはり心配だ。

一度不安になると際限がない。なんかもう最終的には魔王とかドラゴンとかが来て攫われてしまうんじゃないだろうかってところまで考えが行き着いてしまった。

だから、「トモヤさん」と声を上げながら向こうから走ってきたシルフィアに気付いて一番最初に感じたのは多大な安堵感だった。安心して安堵して、もう衝動的にシルフィアに抱きつきそうになっただけど、流石にそれはと自粛した。

軽く深呼吸して精神状態を平常運行に回復させ、そういえばと思いで服装チェック。

ファンシーなウサギが描かれた暗色のTシャツにハーフパンツ。思っていたよりも普通だった。もっとキワモノだったりしたら嬉しいな……と一瞬考えたりしたが、まああまり破壊力がないもので安心した。

しかし、その考えはすぐに撤回されることになった。

考えが甘かった。……足りなかったというべきか？そもそも服に破壊力是要らなかったんだ。シルフィアには標準装備で破壊力バツグンのモノがあつたじゃないか……！

というか、近づいてくるにつれて気付いたけど、あのシャツちょっと小さいんじゃない？体格的には合ってるんだろっけど、一部分が規格外なせいでピチピチだ。見る、道行く男共を。二度見、もしくは三度見してるぞ。唾然としてるから声をかけられるようなことはないけど。

一通りの男の視線を集めてから、シルフィアは俺の前に辿り着いた。

「お待たせしました、トモヤさん」

「おう。まあそんなに待つてないけどな」

社交辞令である。こっちの世界で通じるかは知らんけど。

「それで、ですね。その…えつと…」

やや赤くなりながらちらちらと俺に視線をやるシルフィア。落ち着かないように視線を彷徨わせながら度々自分の体を見下ろしている。ああ、これは俺でも分かった。

「似合ってるよ、シルフィア」

「本当ですか!？」

一転してばあつと表情を明るくする。そこまで嬉しいか。

「えへへ、トモヤさんに褒めてもらえるなんて、ちよつと無理した甲斐がありました」

「無理?なんかしたの?」

「はい。何でしたっけ、確か『ぶらじゃー』というのを着けることになったんですけど…ちよつとキツくて」

なん……………だと……………?

そこまでの存在感を遺憾なく発揮していながら、それでもまだ抑えられている? 一体本気になったらどれだけの被害をもたらすというのだ……………くわばらくわばら。

「まいいや。とりあえず、行こうか」

「はい!」

うん、元気のいい返事だ。軽く笑いながら俺たちは歩き出した。

十数分ぐらいかな? 適当に歩き回りながら雑談をする。

歩いている場所は昨日エルナと歩いた通りとは違う。デートするついでにこの街を色々見て回りたいなーと思いついて。四回もあるんだし。

そついう訳でふらふら。足の向くまま気の向くまま。気になる店があつたら軽く覗いたりしながらも歩き続ける。

すると、

「うえええええん！お母さーん！」

と。通りの向こう側から大きな泣き声が聞こえてきた。

「迷子でしょうか？」

「十中八九そうだろう」

心配そうなシルフィア。そうだな

.....よし。

「（泣いてるの女の子みたいだし）行ってみようか」

「.....トモヤさん、変なこと考えませんでした？」

聞こえない振りをして小走り。

.....野郎を助けてなんになるって言うんだ。こついうのを乗り越えて男の子は大き

くなっていくんです。

じとつとしたシルフィアの視線に耐えつつ通りを進む。そこにはやはり、おさげの少女がいた。歳は五歳くらいか？なんかの店の前でわんわん泣きじゃくっている。周りの大人は見て見ぬ振り。大人つて汚い。

駆け寄るとするが、俺よりも先に少女のところにとどり着いた人影が。シルフィアだった。

しゃがみこんで女の子の目線に高さを合わせつつ、頭を撫でたりしてあやししながら事情を聞いている。突っ立って見ているのもあれなのでつてこ駆け寄った。

丁度話を聞き終えたらしく、シルフィアは少女の頭を撫でながら困った顔で言ってくる。

「道を歩いている途中でお母さんとはぐれてしまったそうなんです
いやまあ大体は予想ついてたよ。とりあえず少女を安心させるために俺もしゃがんで目線を合わせる。」

「お母さんに会いたいか？」

「.....うん」

ちよつとずるい質問だったな。返事は決まっていたし。微笑みながら俺も少女の頭に手をのせる。

「だったら泣き止め。一緒に探してやるからさ」

わしゃわしゃと多少強引に手を動かす。ぐわんぐわん頭を揺らさせ、少女は小さく笑った。

少女のお母さんはあっさり見つかった。

向こうも探していたみたいで、少女を肩車しながら通りを練り歩いていたらあつちから慌てて走ってきた。

何度も頭を下げる母親と手を繋ぎながらぶんぶんと手を振る少女に小さく振り返す。

「良かったですね。お母さんが見つかった」

「そうだな」

「……お母さん、か……」

ぼつりと呟くのが聞こえ、ちらりと横を見やる。そこにはいつまでも手を振る少女を優しげな、しかしそれだけではない感情が入り混じった目で見つめているシルフィアの姿が。

その感情の名はきつと、羨望。

もしかしたら違うのかもしれない。ただあの娘の姿に昔の自分の影を重ねているのかもしれない。だとしても、どこかに憧れの念はあるのだから。

あー、めんどくせ。

「…ふんっ」

「ひゃっ!?!ト、トモヤさん!?!なにするんですか!?!」

しみりしていたシルフィアの頭を鷲掴みにし、先ほどの少女にしたようにがんが揺さぶる。さっきまでの空気は綺麗に霧散した。「あうう…いきなりひどいです」

目を回しながら抗議してくるシルフィアを見てとりあえずはもういいかなと判断。視界が回復した頃を見計らってポケットからある

ものを取り出す。

「はい、あげる」

「へ？あ、あの…」

シルフィアはいきなり差し出されたもの　紫色のヘアピンに戸惑っている。

「うりゃ」

「え…ッ、きゃ…！」

迷子の親探しの最中、シルフィアの目を盗んでこっそりと購入したヘアピンで、顔の左半分を隠すように垂らされた髪を留め、そのアメジストのような左目が出るようにする。シルフィアは一瞬呆気にとられたが、すぐさま何が起こったのか把握し慌てて左目を手で隠す。

「トモヤさん！何を…」

「もういいだろ。隠さなくて」

「え……？」

ぼりぼりと後頭部をかきながら、

「あの森じゃともかく、ここらへんじゃ目の色が左右別々なんて珍しいことじゃない。むしろ俺の黒い目のほうが目立つ」

「で、でも…」

「それに言ったら？もしシルフィアになんかあったら、俺が守ってやるって」

「ッ…！」

少しずつ潤んでいく右の目。俺はそつと左の目を隠す手をどける。同じように潤む瞳を見つめながら、

「何度でも言う。俺が守ってやる。だから…もう悲しい顔なんかすんな」

「……っ……っ……は、はいい」

ぼろぼろと大粒の涙をこぼしだす。あーあー言ってる傍から。

でもいつか、と思う。これは悲しい涙なんかじゃなく、きつと真逆のものだから。

よく、涙は枯れたとか言う人がいるけど、それはダメだろ。

悲しい涙は枯れてもいいけど、嬉し涙は枯れさせちゃいけない。

迷子の子どものように泣くシルフィアを泣き虫、とからかいながら、俺は満面の笑みだった。

だって、俺がつけたヘアピンは外されることはなかったんだ。

それはこの女の子が、また一步、前に進んだ証拠だと思う。

第44話 Second day (後書き)

語るべき事などない。

第45話 二度目の次は三度目だ(前書き)

ふう……最近ヤバいぜ……

マンガを読んで小説を読んでアニメを見てゲームをやっつて。なんだかんだしていたらいつの間にか凄レベルアップを果たしていた……なんと、今までよりも多くの属性に寛容になってしまったんだぜ！

……………どうでもいいよね。

第45話 二度目の次は三度目だ

また向こうの世界の夢を見た。ホームシックなのだろうか。

とは言ってもめっちゃくちゃ小さい頃の、多分五歳くらい頃の事だったと思う。よく覚えてたな俺。

色褪せていて詳しいことは分かんないけど、俺と鈴と柚葉、それに名前も覚えていない女の子。四人で鬼ごっこしたり蝶々を追いかけたりして遊んだ。

女の子とは偶然会ったんだっけ。何か寂しそうにしている、子ども心にも何かしてあげたいと思って誘った筈だ。日が暮れて、鈴も柚葉も先に帰って、それでもお別れしたくないから俺とその子はいつまでも遊んでいた。

でもいつしか女の子のお迎えが来て、行かなくちゃなくなつて。泣きながらさよならした。

うーん、別れ際になんか約束した気がするんだけど……憶えてないなあ……。

こつちに来て結構経つけど、あつちの方はどうなってるのかな……皆元気にやってるのかな……俺は元気です。

親父は心配ないだろ。あの人の生命力だか免疫力ならエボラだろうがエイズだろうがガンだろうが白血病だろうが、しばらく寝れば治るだろうし。

心配なのは母さんと鈴だ。母さんはショックを受けても親父がいい感じにフォローしてくれるだろうから大丈夫とは思っけど、やっぱり鈴がな……あいつお兄ちゃん子だし、塞ぎ込んでたりしたらどうしよう。まあそこは家族の絆ってやつを信じるか。

学校とかは、そこまで交友関係は広くないし。一部のメンバーも強いやつらばっかだからそこまで引きずることもないだろう。

もしかしたら葬式とかしちやっただかもしれない。遺影に仕える写真なんか撮ってたっけか。式にはやっぱいいちゃんとはあちゃん

も来たのかな。父方の二人は技術力を買われて某国の特殊工作班で講師まがいのことしてるし、母方の方はヒマラヤ山脈の中腹で遭難者の救助やってるからそう簡単にはこれないと思うけど、あの二人はこの親にしてこの子あり、つてのを見事に体現してるから案外すぐに来るかも。最悪ヘリかジェット機をジャックするかもしれない。怖い怖い。

以上。今日は雲がないなー、と考えながらぼけっとしている俺の回想でした。

ふはー、と息を吐いて、目を背けていた現実に目を向けて、はー、とため息をつく。

何でかって言うと、周りからメツチャ見られている。自意識過剰ってワケじゃない。実際にこっち指差してひそひそ話している方たちが何人かいるし。

聞こえてきた声から判断するに、どうも俺が女の子をとつかえひつかえしているという噂があるらしい。そりやまあ二日連続でここで待ち合わせて、相手が別々っていうんだからそう思われても仕方ないか。

しかし、落ち着かない。この英雄を見るような敵を見るようなゴミを見るような視線の波は嫌になる。ヤメテ見ないで。プレッシャーに弱いんです俺。

時間が経つにつれて、なんかどんどんかったるくなってるって、もうどうでもいいやーって感じになりかけていたら、ようやっとフイナがてくてく歩いてきた。

ふむ。水色のオフショルダーに白いプリーツスカートか……肩と太ももが目眩しいぜツ！

「お待たせ」

てこてこと寄ってきたフイナは周囲からの視線に気付いているのかいないのか、いつも通りの無表情。とりあえず「おう」と返事を返すとそこどころりと一回転する。

「?何してんのフイナ」

分からず聞くと、再びぐるりと一回転し、

「似合う?」

ああ、なるほど。服が合ってるか聞きたかったのか。

「似合ってる似合ってる。超カワイイよ」

とりあえずは本心を包み隠さず暴露すると、少しだけ嬉しそうに顔を綻ばせた。

「それじゃ、行くう」

待ちきれないといった風に俺の手を引っ張るフィナ。慌てて足を動かすが、それに釣られて笑ってしまう。

そうだよな。フィナがこんなに楽しみにしてくれてたんだ。俺も思いつきり楽しんでませないと悪いしな。

おし！周りの目なんか気にしないで、思いつきり行くぞ！

……まあ、世の中そんな上手く行かないワケでして。

あれからしばらく歩き、フィナのお腹から可愛い音が鳴った。辺りでお昼にしようということになった。顔を赤くしたフィナに殴られたけど気にしない。

ジャンケンの結果、俺が買い物、フィナが場所取りということになったので、最寄のベンチにフィナを座らせ適当に屋台を巡って食いもんを調達したとこまではよかった。

でも、戻ってきてチャライ男数人に絡まれているフィナを発見してからが問題だ。

うーん、どうしよう。殴りかかるにも俺の手は今食べ物で一杯だし。どうする俺？

あ、そうだ。こういう時のために分け身の術を習得したんじゃないか。んじゃとりあえず一人…いや二人出して、食料を持たせて…よし！それじゃあ今「いいじゃん、ちょっとくらいさ」とか言いながらフィナの腕を掴もうとしている男に、

「おらあつー！」

「ぶぼつ！？」

しまった。勢いあまって顔面にドロップキックしてしまった。あ
ちやー。男、面白いくらい転がっていったよ。

「タカちゃん！？…テメエ、よくもやりやがったな！」

「すいません、間違えました」

「どういう間違いだ！」

いや、間違いつていうかその場のノリつていうか…なんていうん
だろうなこついうの。

「とりあえず……えい」

「モグツ！？」

「ジユンくん！？お前いきなりなにしてんがあつ！？」

目の前の男の顔に膝蹴りを叩き込み、吼えてきた男にヘッドバツ
ト。三人もやられて流石に黙っちゃ入れないのか残りの男が拳を構
えて殴りかかってくるが、

「（ガシツ）ちよつと君たち、何してるのかなー？」

にこやかな笑みを携えた街の衛兵と思われる人達に肩をつかまれ
て停止を余儀なくされる。そのままいい感じに関節を決められて連
行。俺がのしたやつらは引き摺っていく。

「ご協力感謝します」

敬礼に敬礼で返し衛兵の皆さんを見送り、改めてフィナを見る。
良かった。特に乱暴とかはされなかつたみたいだ。

「ゴメンな。俺が離れてたせいで嫌な思いさせちまつて」

フィナの隣に座つて分身から預けていた飯を受け取り、御役御免
となった分身を消す。見ていた犬連れのおじいさんがぎょつとして
いたが無視した。

「別に。あんまり強引じゃなかつたし。…でも」

そこまで言つて、フィナはむすつとする。何か思い出したのだろ
うか。

「何か言われたの？」

「…あの人達、トモヤのことを『女をとつかえひつかえする最低男』だつて…」

んー、噂通りっちゃ噂通りだな。そう思われても仕方がないことにしてるんだけど。

「ま、あながち間違いじゃないし。いいたい奴には言わせとけば「違つっ！」……フィナ…？」

割り込むように叫ばれたことに一瞬唖然とし、ぼつりと名前を呼ぶとフィナは昂ぶった感情を沈めるように深呼吸する。

「…トモヤは最低なんかじゃない」

「……………」

…なんかじゅん、てきた。嬉しいよ。俺のために怒ってくれるなんて。

妙にほっこりしながら、とりあえずは買ってきた野菜入りのクレープを渡す。まず食って落ち着け、見たいな感じで。

受け取ったフィナはゆつくりと、小さな口でちまちま食っていく。それを確認してから俺も大口を開けてクレープにかぶりついた。

もっさもっさ咀嚼していると、食べる手を休めたフィナが呟く。

「トモヤは最低なんかじゃない。トモヤは私をあそこから連れ出してくれた」

……ああ、やっぱりこういうのは嬉しいな。

「…別に俺は、最低でも構わないけどな」

「どうして？」

「最低だろつとなんだろつと、お前たちと一緒にいられるのには変わらないからな」

「……………」

「だから、フィナもあんまり気にするなよ。むくれたままだと、可愛い顔が台無しだぜ」

「かわ……ッ!？」

顔真っ赤にして俯いちゃって、ほんとかワイイなく。反応が楽しいお陰で、こっちも本音を暴露する甲斐があるってもんだな。

しばらくしてフィナの赤面は収まったけど、それでも俺たちは何を話すでもなく、何をするでもなく、ただそこに座り続けた。やがて辺りが橙色に染まり始めた頃、俺たちはようやく腰を上げ、城への帰路をたどった。

……………さて、明日で　　最後だ。

第45話 二度目の次は三度目だ（後書き）

今期のアニメが面白すぎて小説を書くのが遅い

アニメをとるか小説をとるか……悩みどころだぜ

いや、さらに積みゲーもある………

……仕方がない、睡眠と勉強の時間を削るか……世知辛いな

第46話 最終日(前書き)

やっほー。作者くんだよ。

つい先日、この作品でたまーにやってる現代の話をやってほしいという意見があったんだが
どうしよじっ？

まあそこそこは作者であることからの気分しだいということぞ

第46話 最終日

大きく鼻で吸い込んだ空気の匂い。口に流れ込んできた空気の味。肌で感じる空気の感触。目で見える空気の色。そのどれをとっても昨日とは違っていた。まあごく僅かなもので普通ならば気付かない。俺はその理由と原因を知ってるから分かるのだが。

実は今日、この街には国の兵士がほとんどいないのだ。市中を見る兵だけでなく城の護衛のための兵も含め、みんなそろってこの街を出ていて、国王のユアンもついて行ってたりする。

始まりは十数日前、レパーラ北東にある峡谷で怪しげな施設が見つかったとの報せが入ったらしい。調査のために数人の兵を向かわせたが、連絡が途絶えた。何かアクシデントがあったとも考え、さらに人数を増やし再度向かわせたがまたも連絡がなくなつた。いよいよ事態を重く見たユアンは武装した一個小隊を送った。が、またしても音信不通に。

合計で32人の犠牲者（あくまで予想）が出たとなつてはいつまでも椅子にふんぞり返ってる訳にはいかない、とユアン自ら指揮を取り、兵達の生死の確認と謎の施設の破壊のために今朝早く出発した。僅かでも戦力の足しになるかと思つて一緒にいこうかと持ちかけたのだが、断られた。

曰く、「これは俺たちの問題だ。お前が首を突っ込むことじゃねえ。お前はお前で自分の日常を過ごせばいい。大体明日もデートだろ。こんなことしないで明日に備えてさっさと寝ろ」とのこと。確かにそうだな、と思つたので、とりあえずその言い草は無いだろと脛を蹴り上げて部屋に帰った。

「……………ッ！」

物思いにふけながら爪を弄くつてたら、ついささくれを剥き損ねてしまった。ぷくつと膨らんだ血に顔をしかめながら、とりあえずは傷口を凍らせて止血する。

氷の魔法は便利だ。こんな風にちっこい傷口を絆創膏代わりに塞いだりできる。傷に雑菌が入ったりする心配が無くて助かる。最初は冷たさを我慢する必要があったけど、今では冷たくない氷を作れるようになった。役に立つのか？気付いたら使えなくなってた水や風の魔法よりは役に立つだろうからいいけどさ。

そっぴや街の兵士が少ないって事は昨日みたいにかままれたら自分達で何とかしないとイケなくなるのか。いざとなったら冷凍ビームだな。出せるかは知らんけど。

「トモヤーツ！」

お。向こうからアリスが元気一杯に走ってきた。元気があるのはいいんだけど、そんな風到大声で名前を呼ばないで。周りから「あんな小さい子と…」的な視線が突き刺さる。

ホットパーカーにショートパンツ、そして黒いニーソ。絶対領域が眩しくて、目を焼かれること覚悟で凝視していたらあつという間に目の前に来た。足速いなコイツ。

「ねえねえ、どう？似合ってる？」

目をキラキラさせながら尋ねてくるアリス。着た事の無いもの着れてテンション上がってるのか？

「ああ、とつてもカワイイよ」

「えへへー」

満面の笑み。輝いて見える。眩しい…このコ眩しいよ！ヤメテ！そんな顔見せないで！俺みたいな薄汚れた人間からしたらその笑顔は眩しすぎる！

あ、よく見たら服のすそから尻尾が出てる。ぶんぶんと振り回してるから嬉しいのか。愛らしいので頭を撫でる。

「あうー」

顔を蕩けさせ始めたので、調子に乗って耳をいじりながら首のあたりも撫でてやる。

「はうー、ダメだよトモヤーツ」

陽だまりに置いたバターみたいに蕩けきった笑顔。反応が面白か

ったので尻尾をもふもふしながらお腹をさすろうとし 止めた。
周囲からの冷たい視線！温度はもう絶対零度！俺にはそこまで低温は出せない。

そこに立つてるのが居た堪れなくなったので、ふにゃふにゃになったアリスを引っ張って一目散に退散した。

「あー、ワンちゃん！」

それなりに人通りのある道を歩いていると、隣にいたアリスが走り出した。向かったのは前から来ていた優しいお姉さんとその手にもたれたリードに繋がれている犬。詳しくないから種類は分からないがとりあえず撫で心地はよさそうだ。

アリスは楽しそうに犬を撫でながらお姉さんと歓談している。一瞬で仲良くなったな。スゴいぜ。

そこそこ動物好きな俺も混ぜてもらおうと近づき、
「ウー、バウッ！」

吼えられた。さっきまでアリスに撫でられてあんなに気持ちよさそうだったのに、今では歯を剥き出しにして威嚇してきやがる。

くそっ、いつもこうだ。初対面の動物は必ずといつていいほど俺に敵愾心を向けてきやがる。俺が一体何をした。

お姉さんとアリスが必死になだめているが犬っころは威嚇をやめない。むしろ二人を俺から庇う様な位置に移動している。

……はっ！上等だ。犬畜生が俺に歯向かった事、後悔させてやらあっ……！

「ガウッ！」

「……え〜っつと、あんな子と付き合っつて、アナタも大変ね」

「あ、あははは……はあ」

アリスとお姉さんの小さな会話は、犬とガチンコ勝負を繰り広げている俺には聞こえなかった。

「くうくん、くうくん」

俺（勝者）の足元で犬（敗者）が腹を見せて服従のポーズを見せている。「よしよし、愛いやつめ」といいながら撫でる。

「
」

勝負が終わったとき、気付いたらアリスとお姉さんはちよつと離れたところにあるいい感じの外カフェでドリンクを飲みながら談笑していた。犬と本気で戦う男は相当にアレだったのか、道行く人達も心なしか俺たちの半径十メートルには近づかないようにしているように思える。

「……………別に、悲しくなんかないし。」

「くうくん」

お前だけが味方だ、犬。

微妙な顔をしたお姉さんと俺に忠誠を誓うと言ってくれた犬に別れを告げ、そろそろどっかで飯でも食うかとアリスと会話しながら歩いていると、偶然到った広場でお祭りのイベントが開催されているのを発見した。屋台やら出店やらが所狭しと立ち並んでいて、少し離れたここからでもかなりの熱気を感じることが出来る。

「うお、スゴいなアリス」

「おじさん、たこ焼きふたつください！」

「気がついたらすでに注文してた」

「あいよ！お嬢ちゃんカワイイからサービスだ！」

「わー！ありがと！」

「あ、これ代金です」

「毎度あり！」

今時珍しい気風がいいおじさんからたっぷりおまけして貰ったた

「こやきを持って、屋台から離れる。」

「はぶっつっつっつっつ」

「そんなに慌てて食うな。たこ焼きは逃げない。あ、まじで美味しい」

「本当だね！」

「全部食うの早いよ」

あつという間に食い尽くしたアリスが物欲しそうにこちらを見てきたので、食わせてやると思わせて自分が食うというのを立て続けにやってやった。涙目でぽかぽか叩かれまくったが痛くない。

「もういいもん！こうなったらトモヤの財布が空になるまで食べまっくつてやるもん！」

「金の出所はユアンの懐なんだが。あ、おい待て」

言うや否や走り出すアリス。お金を持ってないのに注文ばかりするもんだから急いで追いかけて支払う。そしてまた勝手に注文しているアリスを発見し商品を持って追いかける。

このやり取りはいい加減めんどくさくなった俺がパタパタ走り回るガキを捕まえて拳骨を落とすまで続いた。

「うー…まだじんじんするう…もう！女の子にこんなことするなんて酷い！」

殴られた箇所を冷やしながらアリスが憤慨する。ちなみに冷やすのに使ってるのは俺が創った氷の塊。

「うるへー。悪いのはお前だが。大体女として見てもらいたいなら、もうちょい体にメリハリを」

「うん？」

「なんでもないっす。はい」

能面のような張り付いた笑みを向けられてはビビらざるを得まい。

「……………そんな事分かってるよ。どうやったら大きくなるんだろ…」

「ん？何か言ったか？」

「なんにもっ！」

自分の胸元に手をやりながら落ち込んでいる時点で粗方の事は察せるんだけどな。大丈夫。そういうのにも需要はあるから。言ったら殴られるから黙ってるけど。

「ふう、ほとんど食い終わってたな」

暴走したアリスが買い漁ったものはかなりの量があり、持ち運ぶのに分身を四体も作る羽目になった。周りの人達はぎよつとしてたけど。

「そうだねー、最後に甘いものでも食べたいね」

「食いすぎだバカ。太るぞ」

「……………」

「太って胸が大きくなっても意味が無いだろ」

「にゃっ!?!?そ、そんな事思ってたない!」

狼狽していてバレバレなアリスちゃんは放っておいて、甘いものか、と考える。まあ、悪くない。

「ん〜、おお。おいアリス、アイスでも食うか?」

「食べる!…!じゃなくて、ほ、ホントに体のことなんか気にしてないんだよ?」

言い訳は聞き流し、とりあえずは食べるそうなので買いに行く。何味がいい?

「ストロベリー!」

あいよ。

ぱぱっと買ってきたコーンアイスをぱくつきながら、ふらふらと街中を散策する。

「甘くておいしいね」

「そうだな。……ふむ、材料さえあれば俺も作れそうだな」

「ホント!?!?」

「ああ、今度厨房借りてみようか」

「うん!」

早くも楽しみみなのか鼻歌を歌い始めたアリス。尻尾も千切れんばかりに振り回してるし。上手くいくかどうか分からないし、失敗したらどうしようかと今から不安になってきた。

それにしても、

「へいへい、アリスちゃんよ」

「どうしたのトモヤ、いきなり変な口調になって」

「なんとなく。それよか、何か獣耳生えてる人とすれ違う割合が増えてる気がするんだけど」

「ああ、それはこの辺りがこーぎょーを盛んに行ってるからだよ。

獣人は普通の人より力が強いからね、こーいうところでは重宝されるんだよ」

へー。俺としてはアリスがそんな難しい事を知ってるのに驚いてるけど。

変なところに感心していると、最後のコーンのひとかけらを飲み込んだアリスがなにやらもじもじし始めた。

ははん、さては…

「アリス、トモヤってくけど、おトイレじゃないからね」………「完封されてしまった。しかも至極冷静に。地味にシヨックだ…」

「まったく、トモヤはホントにトモヤだね！」

どういう意味やねん。

「私はね、トモヤは獣人である私の事をどう思ってるのか聞きたかったの！」

「え、アリスのこと？うん……可愛い女の子に愛らしい耳と尻尾がついてて二倍お得、みたいな」

「か、かわっ!？」

凄い勢いで顔に血液を集めた彼女は、ぶんぶん顔と顔を振り、

「……あゝもうっ! ホントにトモヤはトモヤだねっ」
だからどういう意味やねん。

アリスの質問の意味が分からず首を捻っていると、見かねたアリスが、

「だからね、トモヤが

ッ!?」

何かを言いかけたアリスが血相を変えて空を仰ぐ。周りの獣人の人達も反応に僅かな差異はあれどほぼ全員が警戒するように空を見ている。

つられるようにして俺も上を見て、何かを見つめる。

太陽を背にしているようでよくは分からないが、目を凝らすと徐々にその輪郭が大きくなっていくのが分かった。鳥かと思っただが、違う。でも他にどんなものがあんな高くまでいけるのか。

「!?」

姿をよく見ようとした瞬間、俺は何かを感じた。

それが何かを確かめる間もなく、ほとんど反射的に、いや本能的に、アリスを庇うように押し倒す。

ヒュンツ、という何か空を切るような音が聞こえてきたような気がしたが定かではない。その次の瞬間、およそ刹那より短いであろう間隔の後、ここからほんの百メートルも離れては居ないだろうという場所に何か「落ちた」。

ドオオオオオオオオオオオオ　　!!という爆砕音と、そ

れに見合った巨大な衝撃が一带に広がる。

建物が崩れる音。地面に亀裂が走る音。その場に居た多くの人の悲鳴。俺の腕の中のアリスの震えがやけに大きく感じた。

数秒後、破壊の音が鳴り止んだのを感じて、おずおずと俺は顔を上げる。

記憶にあるほんのちよつと前までの光景とは違いすぎることに愕然とする。その時、何か聞こえた気がして俺は何か落ちた場所に目を向けた。

銀色。

其れしか認識できなくなるほどに輝かんばかりの白銀の毛並みをもった狼が、そこには佇んでいた。

周囲の破壊の爪痕と、倒れ伏している人達をまるで気にした風も無く、その銀の狼は、

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！」
天に向かって咆哮した。

第46話 最終日（後書き）

急展開乙

展開がまあまあだなと思う

次はバトル回になるので、

みんな、期待すんなよ！（戦闘描写に）

第47話 激戦(前書き)

.....
やっぱり微妙。

第47話 激戦

(ヤバイな…こいつ)

本能がそう警告してきている。最近本能大活躍だな。出来ればもうちょい早く働いてここに来ない様にして欲しかったけど。

ま、なっちまったもんは仕方ないか。

とりあえず、いつまでもアリスを押し倒してるわけにはいかないので体を起こす。視線を釘付けにして動かないアリスに手を差し伸べながら俺も目の前の障害に目を向ける。

その銀色の狼は何をするわけでもなく、きよろきよろと辺りを見回し、時折鼻を鳴らしている。明確な目的があるかどうかは不明慮だが、今起きた被害は着地したときの副産物で狙ったものではないというのは分かった。どうでもいいけど。

何が目的なのか、狼は騒ぎを聞きつけてぞろぞろとやってきた野次馬には目もくれず、相も変わらず何かを探すような動作を繰り返している。

「なに…あれ…」

ようやく立ち上がったアリスが搾り出すように呟いた。んなもんこっちが知りたいよ。

注意深く狼を見ていた俺はふと、違和を一つ見つけた。狼は耳の先から尻尾まで見事な白銀の毛に覆われているのだが、一点だけ、赤い点があつた。それは全長十メートルはくだらないであろうこの巨狼の額にあり、俺はそれに見覚えがあつた。二回は見た。

記憶力にはあまり自信は無いが、それでも二回も見ていれば見間違えるわけも無いだろう。そもそもあの赤い珠に関してはあまりいい思いではない。どっちも死にかけた。

つまりは、少なくともあの狼は無害ではないってことになる。

「……アリス」

俺は小さな声で背後に呼びかけた。

「…なに？」

「ちよつくらひとつ走りして、城の俺の部屋から《飛鳥》を取ってきてくれないか。お前の足なら十分もかからないだろ」

「ええっ!？」

おいバカ変な声出すな。あの狼さんに利かれたらどうするんだって、あー、眼が合っちゃったよ。

その鋭い目に見据えられ萎縮しそうになるが、なんとか持ち堪える。何の反応も示さなければ、興味を失ってまたさっきのような行動に戻るだろう。

「グルルル…」

あれ？なんであのイヌ属は俺を見て唸ってんの？

え？もしかしていつもの動物に嫌われるスキル、あの馬鹿でかいのにも効いてんの？おいおいふざけんよコラ。誰だ俺にこんなめんどくさい呪いかけたの。出て来いやボッコボコにしてやんよ。

おおっと、ついいつもの癖で現実逃避してた。危ない危ない。目の前の奴はそんなことしててなんとかできる奴じゃないだろうし。

こうなると、確実に《飛鳥》は必要だな。俺が今までピンチを切り抜けてこれたのってほとんどアレのお陰だし。

「ほら、早く行ってくれ。俺はしばらく狼君とじゃれていくから」
「で、でも…」

「頼む。あれが無いとやられちまうかもしれないんだ」
「ええっと……………うう……………わ、分かった！」

くるりと反転して駆け出すアリスの背中に、できるだけ早くねぐ、と声をかけ、改めて狼を見る。今度は若干の害意込みで。

「ガルル…」

野生の勘だからで敏感に感じ取ったのか、先程よりも警戒の度合いを引き上げたようだ。

さて、ただ待っているというのは性に合わないんで、適当にこっちから仕掛けることにする。狼が俺に注意を向けているのに気付いた人達が素早い動作で負傷者を運んでいく。狼の視線が向かうこと

も合ったが、その時は俺が僅かに体を動かして注意を引いた。

とりあえずは周りに負傷者はいなくなった辺りで、周囲を取り囲む野次馬を押しつけて重装備に身を包んだ騎士がやってきた。いや遅いよ。けどいいか。

「なあ騎士さん。来て早速で悪いんだけどさ、近くに居る人達の誘導、お願いできる？」

「君は何を言ってるんだ！ここは我々に任せて早く逃げ」

肩に手をかけようとしてくる騎士の動きを感じ、背中から青い翼を出現させる。驚いた騎士は後ずさりし、野次馬もざわざわしだが、どうでもいい。

「すまねえな、騎士さん。俺はちょっと用事があるんだ」

僅かに浮き上がり、両の手に剣の形をした氷を出現させる。騒ぎがさらにでかくなつたようだが気にしない。狼は完全に臨戦態勢。足に力を込め、いつでも飛びかかれる様な体制になっている。

今更だが、俺が変な行動さえしなければ、この場はもう少しマシになっていただろうな、と考える。だがそれは詮無き事。言い換えれば、どうでもいい。物心ついた時から威嚇してくる動物にはこうやって対応してきたんだ。

さらに体に力を込める。ぐつと前のめりになり、そして

剣を投げ捨て、翼も消し、そして全力で横に跳んだ。ごろごろと地面を転がると同時に、さっきまで立っていた場所に狼の爪が食い込む。

当たり前だろ。真つ向からぶつかるわけが無いだろう。こんだけサイズの違う相手にそんなバカな真似はしないさ。

横たわつたままの体を起こし、態勢を立て直す前に直感的につんめるようにして前に跳んだ。体が宙に浮いている間に、今の今までいた位置を何かを通り過ぎそのまま正面にある建物にぶつかり破壊した。

勘頼みで跳んだため体制が整っているわけも無く、無様に地面にぶつかる。

『主よ！無事か！？』

「いててて…おおツキ、久しぶりに声を聞いた気がするぜ」

『デート中に他の女と会話するわけにもいかぬじゃろう。って、そんなことはどうでもいいのじゃ。怪我はないのか？』

「おうよ。そこそこ頑丈だからな…。」

粉塵が舞う建物に開いた穴の中から悠々と出てきた狼を視認し、ツキとの会話もそこに切り上げて次の行動に出る。

目の前にバカでっかい氷塊を創る。形状は階段。それを駆け上がり建物の屋根の上に乗る。騎士たちの手際が悪いせいでまだ野次馬がいるんだよ。巻き込まれて死なれでもしたら寝覚めが悪いから予防線だ。

幸い、ここらは建物の高さはほぼ等しいし間隔も狭い。十分に跳んで渡れる距離である。

『主っ！』

ツキの声が聞こえるとともに、下に居たはずの狼が音も無く同じ舞台に着地していた。とりあえずはこれで下の奴らは大丈夫なはず。俺が下手をしなければ怪我をしないだろうし、さっさと避難してくればもつと大規模な戦いが出来る。

もう少し時間を稼ごうと欲張り、翼を出して大きく飛翔した。高さはおよそ二十メートル。これで少しは

『危険じゃ、逃げろっ！』

「へ？」

聞こえてきた叫びに一瞬呆ける。そんな俺の前に気付いたら狼がいて、ヤバいと思う暇も無く振りかぶられた脚によって地表に叩きつけられた。

「……っ！！？」

声にならない叫びとともに落下していく。そのまま一軒の建物の屋根にぶつかり、勢いのままそこをぶち破った。

「うっ、痛ってえ……野郎……上等だ！！」

もうもうと立ち昇る砂煙を裂き、次々と氷の剣を持った分身が建

物から飛び出し、悠然と構えていた狼に飛び掛っていった。

俺と巨狼との戦いは終始狼の優勢で進んでいく。俺がどうにかして繰り出した攻めの手を、相手はいとも簡単に無力化する。

百に限りなく近いであろう分身たちの特攻も、それによって稼いだ時間で生み出した相当に頑強な大槍も、どうにかして見つけ出した死角に地面から氷柱を生やしてぶつけても、弱点のはずの額の赤玉に一点集中して攻撃しても、その全てが一瞬で一蹴されてしまった。

けれど俺だって負けてはいない。この短い時間の中で確実に進化している。

なんと、ひたすらに狼の爪を避けまくっていたら、何かの拍子にバク転することが出来たのだ。地味に感動。今まではやろうかやろうかと考えながらも面倒くさくてやらなかったし。

回避スキルが上がった事で、ごく僅かだが余裕のようなものが生まれた。狼の拳動も少しずつだが目で捉えられるようになってきた。速度も、追いつくことは出来はしないけれど、大体の上限は掴めた。攻撃の威力は速さ×臂力なのではつきりとは分からないが、臂力だけなら把握した。こいつはどうも速度を重視しているらしく、攻撃もスピードを載せた一撃がほとんどだ。距離を置けば置くほど、結果として与えられる攻撃力は大きくなる。

俺の脳みそは、一瞬でも気を緩めればお陀仏しかねないこの状況下で多くのことを導き出していた。

もちろん、俺が生き残っているのは自分の能力のお陰だけという訳ではない。

先日渡され今も着ている衣服。特別な製法で紡がれた糸を限定的な手順を踏み作り上げたというこれは、幾つかの効果を持っていて、その中には確か防御力上昇という一体どんな場面で活用されるのかさっぱり不明だったものがあつたのだが、今これがすっごい役に立

つてる。飛んでいる時に殴りつけられ落下したのを皮切りに、何度か近くの建造物に叩きつけられてはぶち破っているのだが、それが痛くない。二階に突っ込み玄関の扉を開けて出てくる、なんてふざけたことをする余裕もあった。まあその後すぐ跳びかかられて慌てて逃げただけだ。

色々な条件が重なり合っただけにか生を手繰り寄せている俺。現在は分身を十数体出現させながら戦闘を行っている。分身一人一人には何かしらの武器の形をした氷を持たせてある。

分身一人作り出すのに、大体一立方メートルの氷塊を作り出すのと同じくらいの魔力がいる。つまりは、全快状態の俺が出せる分身の最大数は………何体だろ？四桁ぐらいかな。

一気に全力で作回数で攻めるというのも悪くないが、自分と瓜二つのやつらが狼の腕の一振り次第で次々と消えていく光景は見ていてあまり気持ちのいいものではなかったため止めた。

という訳で、最低五人で気をひき、残りの散った面子で遠距離から地道に攻撃する、という戦法をとっている。

本当なら拳銃とかボウガンとか欲しかったんだけど流石に無理なので、適当に役割だけは果たせるよう作った弓矢を持たせている。弓矢の扱い方なら多少は知っている。前に親父が撃つのを見たことがある。あの時は三百メートル離れたのだ真ん中に命中させていた。その真似は無理だが、まあ十メートルぐらいの距離なら標的もでかいし外すことはない。当たっても毛皮が固いのか刺さらないのが難点だが。

「……ふう」

銀狼の前で踏ん張っていた分身たちが消されたのを見て、思わず息を吐く。囃役がやられたんじゃあ、弓兵が消されるのも時間の問題か。ままならないなあ。

思わず再度息を吐くと同時に、最後の分身が消滅したのを感じる。目の前に敵が居なくなったらアイツが何をするかは分からない。もしかしたら俺と戦うのに飽きて町のほうに行ってしまうかもしれない。

それだけは避けたい。ただでさえこの辺りだけでぼろぼろなんだ。街の中央部に行かれたらさらに被害が広がってしまうだろう。

もつ少し。アリスが《飛鳥》を持ってきてくれるまでの辛抱だ、と自らに言い聞かせ、身を隠していた場所から出ようとし、不意に頭上に影が射した。

「ッ！」

背中に冷水を浴びせられたような冷たさを感じ、何も考えないまま全力で前方に跳んだ。

瞬間、轟音が地面を揺るがす。隠れていた場所が大きく抉られその真ん中に銀狼が降り立つ。あとちよつとでも遅かったらぐちゃぐちゃになってただろうな、と冷や汗を流す。

恐らくは、臭い。あいつはどう見てもイヌ科。嗅覚は鋭いのだろう。臭いで俺の居場所を探り奇襲を仕掛けたってわけね。

じりじりと距離をとる。彼我の距離があればあるほど彼奴の攻撃の威力は上がるわけだが、代わりに俺もアイツをじっくり見ることが出来る。見ずに避けることも勘で動けばなんとかかなりそうな気がするもののやはりしつかりと判断して避けたい。

その姿が一瞬ブレた様に見えたと同時にバツクステップ。ほとんど影しか見えないが一直線に迫ってくるものが目に映り、大きく上体を逸らす。そうして開いた空間を狼の鋭い爪が通り過ぎていく。

そのままの勢いで連続してバク転して距離を開ける。バク転はついさつき出来るようになったばかりなのでうまくいくかどうか不安だった。

避けは出来る。逃げも出来る。でも勝つことは出来ない。ああもう、じれったい。さっさと帰ってくれないかなコイツ。無理な相談だろうけどさ。

瞬きをするような時間でまた掻き消える狼。だが一直線に攻めては来ず辺りを飛び交っている。こっちを攪乱しようというのか。ちよつとは頭を使ってきたな。面倒なことに。

ならば、俺は半径約百メートル内において、地面壁面建物の屋根

問わず、あちこちに小さな氷を設置する。

パキパキパキパキ、と四方八方から氷の碎ける音が聞こえてくる。連続してなり続ける音にくらくらしそうになるが、碎ける音が徐々に近づいているのに気付き、翼を展開して一気に飛翔する。

翼を出している間、背中の肩甲骨の辺りに妙な違和感が生じる。以前クレアに見てもらったら丁度その辺りが翼の付け根に当たる部分らしい。翼の稼働は頭で思い描くだけで十分。だが、最も速く鋭く飛ぶにはそれでは不足。その違和感を違和感のまま受け入れ、その感覚を元から自らの体にある感覚だとし、そして翼を使って飛ぶ。そうして初めて最高速度で空を駆けることが出来る。

直線で飛ぶと下から跳び上がってきたあいつに叩き落されるので大きく弧を描くようにして旋回。何回か跳んで来た狼からの攻撃は当たらずに済んだ。

そのまま狼の周囲をひゅんひゅん飛び回る。イメージは夏の夜に纏わりついてくる蚊。狼は猫パンチで叩こうとしてくるが効果は無い。そのままフラストレーションを溜め込んでしまえ。

その時、遠くから走ってくる小柄な影を発見する。もしかしたくてもアリスだった。

「トモヤー！持ってきたよー！」

叫びながら手に持った《飛鳥》をぶんぶん振り回す。やめる落としたらどうするんだ。

まあいい。とりあえずは全力で今出せる最硬の氷で狼を困つ。受け取るまで邪魔はさせない。

しゅたつと着地。そのままアリスに向かって走る。

「はいこれ！」

「よし。ありがとな！」

手渡された《飛鳥》。その石拵えの黒い鞘を握るとひんやりとした感触に幾分か落ち着く。アリスに下がってるように言い渡し、改めて狼の方を見る。すでに氷はかなり削られている。破られるのは時間の問題か。

深呼吸して精神統一。そして刃を抜き、すぐに戻した。

「ツキよ」

『なんじゃ主』

「どうすればこいつは発動するんだっけか」

『言ったじゃろう。古戦器オーパーツを使うには強い想いが必要じゃ。善悪も

正負も美醜も関係ない。ただ純粋な想いがあればよい』

「想い、ねえ……」

『あるはずじゃ。主ならば必ず』

ふむ、と僅かに考える。その時間が惜しいとも思うが、こつゆうのは落ち着いた方がいいもんだ。

少しだけ考え、俺は氷を噛み砕いている狼の方ではなく、言い付け通りに建物の陰に隠れているアリスの方を見た。

「アリス、聞きたいことがあるんだが……いいか」

「……？う、うん」

いきなりのことに戸惑いながらも頷いてくれた。なら、

「今日俺とデートして、楽しかったか？」

「え……」

「楽しかったか？」

繰り返して聞くと、悩むように俯き、

「……うん。楽しかったよ」

しっかりと答えてくれた。続けて問いかける。

「俺と話して、楽しかったか？」

「……うん」

「俺とあちこち歩いて、楽しかったか？」

「うん」

「俺と笑い合って、楽しかったか？」

「うん！」

「……そうか」

一つずつ問いに答えてくれる。その答えを聞くごとに、俺の中で確かな思いがふくらんでいく。

もう十分だと判断した俺は、アリスに背を向け、もう体の半分を氷から引きずり出している巨狼と目を合わせた。

「俺も、アリスとデートして楽しかった。…だから」

体を揺すりながら徐々に穴を広げていく銀狼。それを見ながら、体の前で《飛鳥》を水平に構える。

「こんなやつさつさと倒して、デートの続きをしよう！」

完全に自由になった狼が咆えるとともに刃を引き抜いた。その刀身は確かに光り輝いていた。

第47話 激戦(後書き)

100点満点中54点ってところだな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9284/>

The different world

2011年11月20日19時49分発行